
バカとキセキと真・恋姫†無双

和尚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとキセキと真・恋姫†無双

【Nコード】

N4487T

【作者名】

和尚

【あらすじ】

『バカとテストと召喚獣』と『真・恋姫†無双』のクロスオーバーです。

不慮の（？）事故により、『真・恋姫†無双』の世界に飛ばされてしまった明久達。古代中国を舞台に、三国志世界の壮絶な戦いに巻き込まれていく……………はずだったんですが、時代や世界が変わったくらいじゃ、彼らのバカは止められない。バトルもシリアスも死亡フラグも……………お構いなしに突っ走る！！

いろんな意味で行く末が心配なこの外史、はたして無事に終わるのか！？

「それは物語が？ それとも僕の命が？」 by主人公

……未熟者の拙い文章ですが、暇つぶしにでもどうぞ。

第1話 バカとワープと流れ星（前書き）

初見の方は初めまして。『バカ恋』でごひいきにしていたただいた方はお久しぶりです。和尚です。ようやく帰ってきました。な、長かった……。

本作品は『バカテス』と『真・恋姫』のクロスです。

前作・『バカとキセキと恋姫＋無双』とのつながりは特にありません。

基本バカ、時々シリアスで行きます。その他、基本方針は『バカ恋』と変わりません。

あと……忙しさがパないので、更新は前よりは遅くなるかも……。

ブランクが長いので、内容的にも若干不安ですが……生暖かい目で見守っていただければと。

では……どうぞ。

バカとキセキと真・恋姫＋無双、はじまります。

第1話 バカとワープと流れ星

夏の終わり。残暑……と言っているくらいの時期。

セミ達の大合唱もそろそろ終わり、季節の移ろいを感じ始めるころ。まだまだ熱いけど……そんなもの気にならないくらいに、吹き抜ける風は爽快だ。

部屋の中にこもっていることがバカバカしくなるくらいのに、そんな晴天の日に……

「……何が楽しくて、こんなせまつ苦しい教室で妖怪ババアにこき使われてるんだか……」

「……あんたらは本当に、年長者に対しての敬意ってもんを知らないねえ……」

敬意？ 何それ、おいしいの？

……とまあ、僕こと……吉井明久の心の声だったりする。

ここは文月学園。

テストの成績によって強さが変わる『召喚獣』を使って戦う、『試験召喚システム』というものを導入している試験校だ。

その高等部第2学年の、最下級と呼ばれる『Fクラス』に……在籍クラスでもあるこの教室の床に、僕は綿の少ない座布団を敷いて座っていた。

教室にいるのは、僕だけではない。

僕の左には、鬘のような赤髪を逆立てた、野生的な風貌の男。こいつは坂本雄二、一応このクラスの代表で、最優秀成績生徒。

さらにその向こうに、性へのおくなき探究心で学園にその名をとどろかせる、ムツツリー二こと土屋康太、そして学園にその名を知らぬものなしの稀代の美少女・木下秀吉と続く。

そして僕の右側には、ポニーテールと強気な目、そしてスレンダーな体が特徴の美少女・島田美波、そして……プロポーションに成績、そして料理の腕……どれをとっても殺人級の美少女・姫路瑞希さんが座っている。

そして最後に……僕ら全員の視線の先に……今日ここに僕らを呼び寄せた張本人であり、一応『試験召喚システムの開発者』……つてことになっている、この文月学園の学園長……藤堂力丸の姿があった。うん、今日もキモイですね。

「待ちな、何だいその『ホントは他の誰かが作ってます』と思われそうな紹介文は」

「え、違ってますか？」

「正真正銘私が開発したシステムだよクソジャリ。まったく……こんな利発そうな雰囲気を見て、どこに疑う要素があるっていうんだい？」

「理髪？　今の会話でどこに美容院が出てくるんでしょうか？」

「字が違つんだよ、ったく……本当に話していて疲れるガキだね」

ため息混じりに言ってくる、妖怪一步手前の老婆。

まあ、その都市で痴呆にもならず、この学園の運営をこなしてる手腕は買っつけれど（といつても、経営は他に任せて自分は研究ばかりやってるって話だけど）、とりあえず……

「で？ 俺達は今度は何でここに呼び出されたんだ、ババア？」

と、面倒くさそうな雄二の声。

このババア、帰ろうとしていた僕ら6人を呼びとめ、なんかやつてもらいたいことがあるとか何とかでこのクラスに居残らせているのだ。何で？

……なんか、怒られるようなことやったっけ？ 今日はいよいよ、異端審問会から逃げる過程で窓ガラス数枚割つたのと……

あ、もしかして……鉄人の補習食らって腹が立ったから、どっかの部屋にかけてあった学園長の肖像画（自筆）にヒゲとちょんまげを落書きした拳句、ムツツリー二に頼んでラミネート加工してもらって男子更衣室に飾つたのがばれたとか……？ バカな、完璧に隠蔽したはずなのに……

「……なんだか、凄まじいことを誰かが考えてる気配がするんだけどね……まあいい、本題に入るつか」

すると学園長は、話し始めた。

「今日はね、あんた達に召喚獣の新システムの試運転を頼みたいと思つたんだよ」

「……え……！？」

聴いた瞬間、僕ら全員の顔が引きつる。

そりゃそうだ。夏休み明け……同じように『試運転』という名目でこのババアに付き合わされた思い出は、まだ僕らの記憶に新しいのだから。

あの時は酷かった。何せ……自分の心の中の『本音』をバカ正直にしゃべっちゃうなんていうとんでもない設定の召喚獣（しかも消せない）のせいで、僕らはてんてこまいで……うつつ、思い出しただけでも、ため息が出てきそうだった。

ちなみにその後、ババア自身もきっちりしつぺ返しは食らってたりするのである（僕らの意思をそのまま反映した召喚獣の逆襲という形で）。

と、僕らのやる気名下げなムードを察したのだろうか、ババアは、

「大丈夫だよジャリ共、今回ののは違うよ、ああいう設定じゃないし、そもそもしゃべらない、普通の召喚獣だからね」

「……つまりババア、前ははやっぱり『しゃべる召喚獣だ』ってことを承知した上で俺達に試運転をさせてたんだな？」

「……………さて、本題に入るよ」

待てコラ、勝手に話を進めるな。

全く……大人ってどうしてこう勝手なんだろう？

まあ、そういうわけで……『試運転』と名がつく以上、僕らはそれを引き受けるつもりはない。ババアは大丈夫だと言うけれど、信用しろって方が無理だ。

そっいうわけだから、今回はきっちり断ろう。こっちに何も非はないんだから、向こうも強制はできないはずだ。

「報酬は、そうだね……」

「おいババア、勝手に進めんな。悪いが俺達はこの話……」

「補習の回数を減らしてやるってのはどうだい？」

「……やりますっ！！！！」

前言撤回！ 僕らの学園長は最高のババアだっ！

「そう思うなら呼称も改めなクソジャリ。まったく……まあいいや、始めるよ。その代わり……潰してやる補習の分の勉強は、きっちり自学自習でカバーするんだよ、いいね？」

「Yes sir！！」

とりあえず元気よく返事。うんうん、これはいい気分だね！

けど……不安もあるな……。

何せ、教育者の立場にあるババアが『補習を潰してやる』なんて言ってきたんだ。……それだけ、大変な内容……ってことになるよな……一体、何させられるんだろう？

それと釣り合うだけのテスト項目があるんだろうけど……予想がつかない。

まあ、女子も一緒にいるんだし、あまり物騒なのはないと思うけど……

「それじゃ始めるよ。今回も、姫路以外の5人でやってもらうからね」

と、ババア。姫路さんの召喚獣は点数が高いから、試運転には向いてないんだ。

残念そうな顔で姫路さんが一步後ずさったのを確認して、

「まあ……全員気になってるだろうから、先に今回のテスト項目を説明しとこうかね。今回の試運転は……『NPC』の戦闘動作確認さね」

「NPC? 『ノンプレイヤーキャラクター』か?」

「そうさ、試召戦争に彩りを持たせられるかと思ってね、セツトアップしてみたんだ」

NPCってたしか……RPGとかに必ずある、コンピュータがオートで操作するキャラのことだよな? 敵モンスターとか、格闘ゲームの対戦相手とかの……あれを、試召戦争にも応用してみよう、と考えたのか、このババア。

なるほど……面白いかもしれない。それに、それなら……僕達に何か被害がある……ってわけでもなさそうだ。

聞けば、そのNPCを無限に発生させて、それらと僕達の召喚獣を……ちょうど、時代劇や戦隊ヒーローの殺陣みたいにして戦わせるのが今回のテスト項目らしい。その際に、学園の管理コンピュータにかかる負荷を調べるんだとか。

NPCの駆動性はかなり低くしてあって、無双じみたバトルもできるとか言っし……なんか面白そう。学園長にしては、これはいいことを思いついてくれたもんだよ。

「学園長、それは暴走してわしらに襲い掛かってくる可能性というのはないのかの?」

「その点は特にきっちりチェックしたよ。それに、いつも通り召喚獣は物に触れない設定になってるから、そこは安心しといいいさね」

「なら安心ね、じゃ、始めましょっか」

「そうさね。じゃ、全員召喚しな」

「ん？ 今回はババアもここで見てるのか？」

と、そのままパイプ椅子（鉄人が持ち込んだ）にどっこいしょと腰掛けたババアに雄二が問いかける。

たしかに、前回ババアは……システムを通してモニタリングするって、部屋を出ていったんだっけ。……まあ、クレームを避けるためかもしれないけど。

それが今回は部屋に残ってる……ってことは……

「ああ、今回のプログラミングは何も問題ないし、なるべく近くで見たいからね」

「……前のプログラミングに問題があるとわかっていた……と自白してくれているように聞こえるんだが？」

「さあ始めるよ、全員とつと召喚しな！」

大人ってやっぱり汚い。

まあ、ともかく……今回は特に危険も何もなさそうなので、全員一緒に……おなじみのあのセリフを述べる。

「『『サモン試獣召喚』ッー！』」

その時、異変は起こった。

バチバチッ、バチバチバチッ

ん、何だコレ？

唱えたのに、なぜか召喚獣は出てこなくて……

代わりに……周囲に展開された召喚フィールドが何だかバチバチ
いつて、火花なんか飛び散らせてる。……何コレ？

……こんなの始めて見るんだけど……大丈夫なの？

「心配いらないよ、召喚と同時にNPCも出てくるように設定した
んだ。これはそのせいで、サーバに負荷がかかってるだけさ」

あ、そうなんだ。ならいいか。

サーバに負荷がかかってるだけなら……ちょっとローディングが
時間かかるだけだろう。ちよつとめんどくさくはあるけど……まあ、
待ってみよう。

！ そついえば……気になったんだけど……

「ババア長、NPCって、どんなのが出てくるんですか？」

「無限バトル形式ってことは……ザコ兵士的な見た目なのか？」

と、僕と雄二の素朴な質問に、ババア長の答えは……

「ああ、それかい？ 暫定的にだけど、あんた達2人の召喚獣の姿
に、戦国時代の足軽の装備をプラスしたものにしているよ。ぴった

りだろう？」

「「オイ教育者!!」」

何だその新手のいじめみたいなのはっ!?

じゃあ何か!?! あんたはこれから、その2人(僕と雄二)を含む僕ら5人に、僕と雄二の姿をした足軽軍団を大量虐殺させる気だったのか!?! なんて陰湿な!

イメージしてみる。足軽装備の僕の召喚獣(オート操作)を、改造学ランに身を包んだ僕の召喚獣が(マニュアル操作)、木刀を一閃させて葬り去っていく光景……。

さながらそれは、僕(本物)VSドッペルゲンガー軍団…….なんておぞましい。無双シーンだったのに、これでもかってくらいに爽快感とは無縁だ。

っていうか、足軽装備って…….オリジナルの僕らの装備より上等じゃないか!?! 屈辱感半端じゃないぞ!

疲れた様子の僕と雄二を尻目に…….なぜか美波はやる気満々で準備体操なんか始めた。…….どうしてターゲットが僕だってわかった瞬間にそんなやる気出すのさ…….

それにしても……

バチバチッ、バチバチバチッ

…….一向にバチバチが収まらないんですけど…….?

さすがに、僕も、僕以外のメンバーも『おかしい』と思い始めたらしく、不穏な空気になる。

無理もない。ローディングとはいえ、長すぎだ。

バチバチ……バチバチ……

「おいババア、本当に大丈夫なんだろうな？」

「……大丈夫だよ、静かに待ってな」

「……不自然な間が」

バチバチバチバチバチバチ……！

「あ、あの……全然何も起こらないんですけど……いや、別のことは起こってるんですけど……」

「あ、あんまりこういうこと聞きたくないんですけど……ホントに大丈夫なんですよ、学園長先生？」

バチバチバチバチバチバチバチバチ……！！

「ちょっとババア長！　いくらなんでもおかしいでしょコレ！？
さっきからバチバチしか聞こえてこないですよ！　NPCどころか
召喚獣すら出てこないし！」

「ああもつづるさいねえ！！　こついうことを事前に感知するため
の試運転だろうに！」

「今ワシらがいけにえじやと公言されたように聞こえたのじゃが！
？」

「てめえ開き直ってんじゃねえぞババア！！！」

と、次の瞬間、

バツシイイイイイイイイイイイイツ！！！！！！

「「「わああああああああああ！！？」「」「」

ひとときわ大きい音が響いたのと同時に……教室全体に雷が落ちた
ような超ド級の衝撃が僕らを襲い……

……直後、全てが一変した。

衝撃に耐え切れず目を瞑った僕が、再び目を開けると……

そこには……

「……………は？」

見渡す限りの……荒野が広がっていた。

……………いや、荒野って？

え、だって僕、今まで教室に……あ、そうか。これは召喚システムの異常で召喚フィールドに映し出されてるだけの、ただのバーチャル……

……でもないみたいだ。風とか感じるし……足元の土や草の感触もある。

つまり……正真正銘の屋外、ってことか……。

……………で、でもそれだと……

……………今のバチバチで僕、どこから知らないところにワープした、ってことになっちゃうんだけど……

な……………

「何なんだよ一体いいいいいいいい
？」

ツツツ！！

その絶叫が荒野に響き渡る……数十秒前、

「……！！流れ星……？」「」

それぞれ全く別の場所にいる……後に英傑として乱世に名をはせる、とある3人の美少女達が……偶然か、はたまた運命か、全く同時に真昼の空を見上げ、

……その空を翔る、いくつもの流れ星を目にしていたそう……

バカとキセキと真・恋姫十無双……始まり始まり
(ぱちぱちぱち)

第1話 バカとワープと流れ星（後書き）

やっぱりギャグを入れるタイミングとか、内容とか……カンが戻るまでにしばらくかかりそうです。

しかも、なんか導入部分だけで終わっちゃった……次の話も、可能な限り早く投稿したいです。

あ、それと……皆様に1つ質問など。

この『真・バカ恋』、前作『バカ恋』から、だいぶ書式を変えてみました。会話文とか、なるべく間を空けるようにして、読みやすく……っていう意図なんです。前のは、ギッチギチにつまっていた印象があるので。

で、この変えた書き方なんですけど……かえって読みにくくなってたりしませんかね？

もしそういうことがあったらご指摘ください。様子を見て、直したいと思います。

ではまあ、この辺で。和尚でした。

第2話 川と少女と運命の出会い（前書き）

第2話を更新します。

明久が出会うのは……この人。
どうぞ。

第2話 川と少女と運命の出会い

悠然と広がる、広大な大地。

ちらほらと見られる草花が、適度な彩をそえてくれている。

ふっ……人間なんて、この大自然に比べたら、本当にちっぽけな存在なんだなあ……

……なんて、現実逃避してても何も始まらないね。うん、わかってた。

ったく……今度は一体何が起こったんだ……？

ババアの実験に付き合わされて、いつものごとく失敗して……気がついたらこんなよくわからない場所にいて……と。

……あらためて見直してみても、わかることが1つもないな……。

そもそもここ、どこなんだろ？ 文月学園どころか…東京都ですらない気がする。っていうか、見渡す限りここまで何も無い荒野って、現代日本にあるんだろうか？

いやそれより……僕は間違いなく『文月学園』っていう学校の……れっきとした建物の中にいたっていうのに……なんでいきなり外？

……何かの超常現象で、ワープした……？ いやいやいやいやいやいやいや、そんな、SFじゃあるまいし。

けどまあ……何か考えてた所で、状況が変わるわけでもなさそうだ……。

となると今は、良くも悪くも、このただっ広い荒野に一人ぼっち……
……っていうこの状況をどうにかして変化させないといけないわけだ。

あても何もないけど、とりあえず、動いてみるしかなさそうだな
……歩こ。

「はあ……」

どこにともなく歩きながら……僕は、自分が持っている装備を今一度確認した。

まず……通学カバン。帰宅するつもりで用意してたから、教科書以外は全部入ってる。

何、置き勉？ デフォでしょ。

他にもカバンの中には、携帯電話とか、まとめて買ったばかりのルーズリーフとか……ああ、この際だから文房具一気に新調したんだっけ。僕の学校生活を支えてくれた新旧文房具さん達が仲良く入ってた。

あとは……購買部で残り物だったから安くしてもらった焼きそばパンと、お菓子と……姉さんにもらったカロリー イト……か。

それに、音楽プレイヤーと携帯ゲーム機、その他色々。……サバイバルに役立ちそうなものは……あんまりないな。

ちなみにケータイは……圏外……か。

はあ……まあとにかく、どこか電波が届くところまで出られれば……なんとかなるだろう。幸いバッテリーはかなりあるし、こんな状況なら……救急車読んだって許されるはずだ。

ともかく、それまでの辛抱……ん？

と、ここで僕の視界に……あるものが飛び込んできた。
それは……

「川、か……」

都会じゃ見られないような、信じられないくらい澄み渡った川だ。
……なんだか新鮮な気分になるけど……感激してる時じゃないんだよね。とりあえず……水分補給だけさせてもらおうかな。ちょうど……飲み物の類だけは持ってたし。

「……ごくつ……ふう……ま、生水は危ないって言うけど……なんとかなるよね」

姫路さんの料理に比べれば、川の水のバクテリア軍団なんてかわいいもんだ。

さて……せっかくだし、この川に沿っていつてみようかな。

インダス文明しかり、メソポタミア文明しかり……水源って言うのは、人が住んだり、何かの施設を作るには欠かせないものだ。うまくすれば、集落か……水力発電所なんかが見つかるかもしれない。

……なに、もつといい例えはなかったのかって？ 知らん。

それに、川にそってあるいていけば、飲み水には困らないしね！
これでこの先何もなくても、1週間は大丈夫……と。
うーん、僕ってついてるなあ！

S i d e ???

何で……なんで、こんなことになっちゃうの……？

管輅ちゃんが占いで言ってた『流星に乗って天の御使いがあらわれ、この乱世を沈めるであろう』……っていう占い。私はその言葉を……1日だって忘れたことはなかった。

え？ 『沈める』じゃなくて『鎮める』？ あ、間違った。
と、ともかく……そんな時に、私は見た。

真昼の空を切り裂いて……流れ星が落ちてくるのを。
それを見て……ぴんと来た。『来た！』って！

あ、いや、いまの『来た』はそういうひらめきのな『来た』じゃなくて、その……なんていうか、天の御使い様が、っていう意味で……ってそんなことはおいといて、

ともかく、今日の……お昼過ぎだったかな？ 流れ星が落ちたところ目指して、私は……愛紗ちゃん、鈴々ちゃんと一緒に走り出した。

そして、現場に行くつもりだったんだけど……

……まさか、2人とはぐれるなんて……

しかも、こんなうっそうとした森に迷い込むなんて……

しかもしかも、夜になっちゃうなんて……

しかもしかも、

「おう姉ちゃん、金目のもの置いていきな」

「へっへっへ、逆らわない方が身のためだぜえ？」

……盗賊さんにかまれちゃうなんて……

ど、どどどどどうしよう！？ 私戦えないし……だからって、
ずっと歩いてきて疲れちゃったから、逃げられるかどうか微妙だ
し……

……でも、迷ってても仕方ないよね。

第一、私……金目のものなんて持ってないもん。あるのはせいぜ
い、この剣だけ……でも、この剣だけは絶対に渡せない！ これは
……これから絶対に必要になるんだもん！
だから……ここで諦めるわけにはいかないっ！！

そう思って私は、素早く後ろを向いて全力で逃げ出し……あれ？
れ？

「おいお前、そっち川だぞ？」

ホントだ、川だ。

いつの間にか私は、川を背にして立っていたらしい。つまり……

追い詰められてたつてことだ。

「ま、まさか……最初からこうするつもりで、私を川岸に追い立てたんですかっ!？」

「いや、お前最初からここにいただろ」

「……気づいてなかったのか？」

あれ、そうでしたっけ？

何でだろ、盗賊さんたちが私を見るその目に、少しだけ……残念そうな成分が混ざったような気がした。

ええと……なんか、別の意味でも逃げ出したい……。

と、とにかく……状況は依然として最悪なんだから……一刻も早く逃げなくちゃ！

べ、別に現実逃避とかじゃないんだからねっ！

とりあえず逃げよう……ってああ、後ろ川なんだった。
じゃあ右……も左も、正面も盗賊さんに囲まれてるね。

「……あれ、もしかして私、囲まれてた？」

「「「今頃!？」」「」」

再び盗賊さんたちの目が哀れみに光る。ええと……どうすれば……?
…?

と、ともかく逃げ出さなくちゃいけないんだから……こ、こつな
ったら、川に飛び込んででも……！

……なんて私が考えた、その時、

びちゃっ

「「「ん?」「」」

視界の隅で……何か動いたような気がした。

えっと……多分、気のせいじゃないと思う。盗賊の皆さんも、そんな感じの反応示して、全員でそっちの方見てたし。

今逃げ出せば逃げられたかもしれないけど……あいにくと私も、それが気になってあたりを見回してた。

ていうか、今の音、どこから（びちゃっ）あ、また聞こえた。

すると、また視界の隅で何か動いた。

今度は……なんか、川岸の……泥が積み重なったあたりが動いたような気が……

と、次の瞬間、

グバァッ!!

「「「!?!?」「」」

泥の中から……何かが出てきた……って、え!?!? な、何!?!?
いきなり盛り上がった泥の塊……それを押しのけるようにして現れたのは……人!?!?

「オ、オ、オ、オオ……」

人！？ 人なのアレ！？ 怖っ！！

全身泥まみれで……人の言葉話してないし……しかも、所々に赤い……なんかこう、血みたいなのついてるしっ！ 怖すぎ！！

しかも、漂ってくるこのすっぱい匂いは……え！？ ふ、腐臭！？

「ヴオオオオオオオオオアアア！！！！」

「「「ひひひひひひっ！！！！」」」

ずざざ　　っ、とまあ引いていく盗賊さん達。わかります！

だって怖いもん！！

ちょ……ど、どうしょ！？ 変な声出すし、動きぎこちないし、アレ絶対人じゃないって！！　っていうか、え！？　こ……こっち近づいてきてる！？

や、やばいよこれどう考えても！　たたたた、助けて愛紗ちゃん！　鈴々ちゃん！

「ああああああアニキ、どうしやすか！？　ば、ば、ば、化け物ですぜっ！？」

「み、見りゃわかるってんだよ！　あ、あんなもん相手にしてられるか！　その女が食われてるうちに逃げるぞ！」

えゝ！？　何それ！？

食べられるの！？　私食べられちゃうの！？　ちょっ……聞いてないよ！？

ああああでも化け物（仮）さんこっち来てるしっ！　盗賊さんたち一目散に逃げてるしっ！　信憑性7割増しだよおっ！！

「す……すまねえお嬢ちゃん、恨まねえでくれ！」
「そのー……来世は、もう少しいい頭に生まれるといいな！」
「大丈夫だ！　今より悪くなることなんてねえよ！（いい笑顔）」
「ちよっ……ちよつとお！　せめて救いようのある捨て台詞選んでくださいよー！」

何でだろう……今正に命の危機だつていうのに、私の目には別の理由で涙がいつぱいに……うつつ、これが世の中の不条理なのかな……？

「ウウウウ……」
「ひいっ！？」

とか言ってる間に来たあつ！？
しかも川のほとりのぬかるみに足を取られてすっ転んじゃう私……
ああもうついてないっ！　おしり痛いっ！

そして、目の前には……

「ヴアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」
「いやああああああああ　　っ！！！」

直後……その緊迫した状況に拍車をかけるように、空に大っきな雷が走った。

化け物（仮）さんの、泥まみれの体……大きな目……口と思しき部位……こびりついた血（多分）……何本もの角……それらを浮かび上がらせる、青白い稲光。

それらの恐ろしい光景に……私は、意識を保っていられなくなつた。

不思議なもので、自分の意識がなくなっていくのが……ゆっくり、
そしてはつきりと感じ取れた。そしてそれがはつきりわかるがゆえ
に……逆につらい。

できることなら……寝てる間に、痛みもなく、食べられたい、な
……。

（ああ……ごめんね、愛紗ちゃん……鈴々ちゃん……私、ここまで
みたい……）

薄れ行く意識の中、最後に私の耳に残ったのは……

「アアアアアあああ
っ！！」
何なんだよもお

……化け物（仮）さん……意外と、声、かわいい……？（がくっ）

S i d e 明久

「アアアアアあああ
っ！！」
何なんだよもお

不幸だ……。

『幻想殺し』とか別に持っていないのに不幸だ……。

川を見つけてラッキー、みたいなことを言ってたのもつかの間、上流から流れてきたらしい、おいしそうな果物を取ろうと身を乗り出したら……つるつと滑って川に落ちた、なんていう大失態を犯してしまった僕。

……だって……美味しそうだったんです。

ともかく、そのままひたすら流されて（川上に向かって歩いてたのに！）、なぜか途中から流れが速くなって……気がついたら泥の中。

……思い出せないけど、流されている間に何かあったらしい。

で……泥まみれで、川岸に打ち上げられてた……ってわけだ。

……しかし、なんかホントに色々あったらしいな。

そこら中についてる泥はともかく……枝とか木片とかが何本も髪に、生け花のごとくさくつと刺さってる。頭には刺さってないからいいけど……これ、角みたいに見えるよ。

しかも、とろろとした果実の果汁らしき赤い液体がべつとりとついている……血か、ってくらいにべつとり。っていつかこれ……ザク口の一種かな？

そんなわけで、今の僕の姿は……旗から見たら結構グロッキーな感じだろう。

……おまけに……雨まで降ってきた。

まあ、飲み水になるし、泥を洗い流せるからいいけど……

それでも、全身泥まみれでびしょびしょのこの状態は……ほっと一息つけるほどいい状態じゃないな……。これ、早く洗わないと染みになるよ……。

幸い、一緒に流されてきたバックの中身は……バック自体が防水タイプだったおかげで無事だ。まあ……不幸中の幸い、かな。

と、そこまで考えて……僕はようやく、目の前に倒れている『誰か』に気づいた。

「……………？ この娘……誰？」

知らない……女の子が倒れていた。

気を失ってるみたいだ。僕が近寄っても……さらに、その身にガングラン雨が降り注いでるのに……身じろぎ一つしない。

そういえば……さっ何かギャーギャー騒がしかったっけ……てつきり野生動物が自己主張してるもんだとばかり思ってたけど……何かあったのかな？

それにこの娘……

……よく見たら……すっごくかわいいし……

「うう……んっ……」

あ、なんだか濡れた体が温まってきたような……って何考えてるんだ僕！ こんな時に……ひっこめ煩惱！ ムツツリー二じゃないんだから！

ともかく……この娘、このままにはしとけないな……ちようど向こうの方に、雨をしのげそうな岩陰がある。泥で服が汚れちゃうのは後で謝るとして、運ぼう。

S i d e ? ? ?

「…………知らない天井だ」

実際にそうだったし…………なんか、言わなきゃいけない気がした。
あ、いや、違うね。天井っていうか…………岩だもん。

あれ？ たしか私、気を失って…………化け物（仮）さんに食べられ
たんじゃ…………？

そう思い出した私が、思わず上体を起こしたその時、

ごんっ！！

「「いだっ！？」」

何かに思いつきり頭をぶつけた。

いや、今の何！？ 体を起こした瞬間に、おでこに『ごん！』っ
て…………。うう、痛い…………お星様見えたよお…………。

あれ？ っていうか、今声聞こえた…………？ もしかして私、人に
ぶつかったの！？ 誰に！？

痛みをこらえて、また体を起こして…………

「ごんっ!! (2回目)」

「いだあっ!?!」

また!?

え、ちよっ……ホントに何なの!?

そして誰!? 私と同時に声が聞こえたから、今ぶつかったのやっぱり人だよな!? なんだろ、すごく気が合いそうな、仲良くなれそうな気がするよ!? (ダメな意味で)

その痛みも何とか乗り切って、今度はさすがに慎重に……

すると、おでこへの衝撃のかわりに、私の目に飛び込んできたのは……知らない男の人だった。

第一印象は……

……おでこが赤い。そして涙目。

あ、ぶつかったのこの人だ……ってそんなことはどうでもよくて、

あらためて第一印象は……中性的、っていうのかな? 男にも女にも見える、かわいい系の顔。……声が低めだったから、多分男の子だ。

服は……何だか着心地がよさそうな、見たこともない意匠の服だ。色は、黒と紺色。

(……………この人、誰だろう……………?)

S i d e 明久

(……………この人、誰だろう……………?)

痛む額を押さえ、今しがた意識を取り戻した女の子の顔を見ながら……………僕は思った。

しかし、偶然(多分)とはいえ、起き上がるタイミングと覗き込むタイミングがここまで見事にかぶるとは……………おかげで目がちよつとチカチカする。うっ、いたた……………

とりあえず、よかった……………怪我とかもないし……………短時間とはいえ雨の中にさらされてたわけだけど……………どこも、何ともないみたいだ。そして、目を覚ますなり騒がれる……………なんてこともなくてよかった。

そこにいたって、僕はようやく彼女をじっくりと見る事ができた。

さっき言ったとおりのかわいい顔に……………桃色の長い髪。ただ、髪色は……………姫路さんのそれよりも濃いかな。

身長は……………座ってるからわかりにくいけど、僕と同じくらい?

服は……………なんていうか、RPGのキャラとかが着てそうな感じの……………コスプレ?

そして、何より目を引くのが……………

……あきらかに姫路さんクラスか、下手すればそれ以上の、その胸……。

うわ……こんな状況で不謹慎かもだけど……すごい。

ちなみに今僕は、上着とYシャツとネクタイを干して、上半身はシャツ一枚の状態。下半身は……さすがにズボン履いてる。女の子の前だし。

と、

「えっと、その……あなたが、あの化け物さんから私を助けてくれたんですか？」

「は？ 化け物？」

え、そんなのいたの？ このへんそんなの出るの！？
いやでも、そんなのいなかったけどな……。

「で、でも……この岩場まで連れてきてくれたのは、あなた？」

「あ、うん。化け物はちょっとわかんないけど……一応、まあ」

「あ、ありがとうございます！ おかげで雨をしのげてるし、化け物さんも……」

だから何なの、その『化け物』って？

気になることではあったけど……女の子の顔がぱあっと喜びに輝いてかわいさ3割増しなので、気にならなかったり。

まあともかく……お礼を言ってくれてるみたいだし、そこは素直に受け取るところか。

あ、それより……助けたお礼、ってわけじゃないけど……ついで

だ、ここどこか教えてもらいたいな。

そう思って、彼女に聞こうとしたその時、

彼女の口から……不思議な言葉を聴いた。

「あ、ごめんなさい。私……劉備っていいですよ！
姓は劉、名は備、字は玄德！ よろしくおねがいますね！」

……

は？

第3話 異世界と天然と天の御使い（前書き）

第3話を更新します。

また何か、明久と劉備がバカやらかす予感……。

第3話 異世界と天然と天の御使い

Side 明久

この女の子から話を聞いて、色々とわかったことがあった。
けど……わからないことが倍くらいに増えた。

いや、僕の理解力不足とかじゃないよ！？ 断じて！

だってこの娘……自分のこと『劉備』だって言い出すんだよ？

劉備って言ったら……三国志のあの劉備でしょ？ それをこの娘
『自分ですー』とか言って来るんだもん……何コレ？

魅力的と言っついていい、彼女のプリティフェイスに見とれそうにな
ってた僕だけ……その電波発言に、そりゃ煩惱なんか引っ込んじ
やったよ、僕は。

けど彼女は、『なんちゃって！』とか言ってくれる様子とかは全
然なくて……むしろさらにわけのわかんなくなることを説明してく
れたりする。

それによると……

・この世界は、いくつもの国々が戦いを繰り返す乱世である。
・自分は2人の仲間とともに、この世界を平和にするために立ち上
がった。

・その『2人の仲間』の名前は、『関羽』と『張飛』である。

……………何て言ったらいいの、僕？

そんなことを説明してくれた劉備ちゃんは……今、僕の隣で一緒に歩いている。

旅は道連れ世は情け……ってことで、2人でこの森を抜けるべく歩いてるところ。

もう少し休んでから行かない？ って誘ったんだけど……彼女いわく、『このあたりは盗賊なんかも出るから、見つかる前に抜けたほうがいい』とのこと。

……化け物に続いて、盗賊までいるのか、このへん……。

ちなみに劉備ちゃん、歩き始める前に……『何かお礼がしたい』って言って、泥まみれになった僕の上着を洗ってくれた。

なんか、そこらへんに生えてる草をとってきたかと思うと、その草のエキスを染み出させた水で洗ってたっけ。なんでも、その草は汚れが落ちやすくなる薬草だとか。

何そのおばあちゃんの知恵袋的なのは？ とか思ってたんだけど、洗いあがったら驚くほど泥がきれいに落ちてたからびっくり。いやあ、感謝感謝。

でもまあ……感謝はいいけど、そろそろホントにここがどこなのか知りたいな……なんて思ってたその時、

「桃香さまあ っ！」

「桃香おねーちゃん！」

……？ 前方から何か来ましたが。

と、その声に反応したらしい劉備ちゃん、はつとしたように前を見て……

「あつ……よかったあ！ 愛紗ちゃんに鈴々ちゃんだあ！ おーい！」

そう叫んで、前方から駆け寄ってくる2人のもとに走っていった。……えっと、知り合い？
目を凝らしてみた感じ……走ってきてるのは、2人の女の子みただけ。

1人は、流れるような黒髪をサイドテールでまとめた……またとびつきの美少女。

劉備ちゃんに負けないくらいのバストサイズに……凛としたたずまい。強気そうな目元で……なんか、またコスプレっぽい服に身を包んでいる。

もう1人は、橙色の短めの髪の、ちっちゃな女の子。

こっちにむかって元気いっぱい手をぶんぶん振ってて、いかにも元気っ子って感じだとわかる。服は……デザインはだいたい違うけど、やっぱりコスプレっぽい。

そして、彼女達のいでたちに決定的な違和感を加えている要素が1つ。

……2人とも……武装しとる。

しかも、黒髪の娘の方は、龍の飾りがついた長刀を、オレンジのちびっ子の方は…… 3mはあるつかという長さの槍を。

……もしかしてあの武器、三国志ゲームで見た『青竜偃月刀』と蛇矛だぼうじゃ……？

……ってことは、あの2人は……『関羽』と『張飛』……？

つまり、つまり……

こ、ここって……三国志の武将が女の子になってるパラレルワールド……！？

「なるほど……旅の御仁、礼を言わせていただき。我が義姉を助けていただき、かたじけない」
「なのだ」

ぺこり × 2

関羽さんと張飛ちゃん（自己紹介済み）のおじぎに、僕も一応返しておく。

いや、別に助けた……ってほどのことでもないけど。っていうか、雨の中で一人放置しておくとか……それが雄二じゃない限り……それこそ外道つてもんだし。

「うん、ホントにありがとね、明久君」

そういつて劉備ちゃん、につこりと100万ドルの笑顔。
なるほど、底抜けに明るく優しく、前向きな性格と見た。

いやいやこちらこそ、この世界（……）っていう表現で間違つてないんだろ、悲しきかな）に来て初めて出会った人が、こんなかわいい……もとい、こんな優しい人でよかったよ、ホント。

「そういえば……明久君って迷子なんだよね？」

「あー、うん……最も情けない言い方で言うとな」

境遇を考えると、そう呼ばれるのは納得いかないんだけどね。
全くあのババア……またとんでもないことに生徒を巻き込みやがつて……くそつ、戻ったら教育委員会で問題にして絶対更迭してやる！

すると、

「じゃあさ……しばらく、私達と一緒にいかない？　行くあてもないんでしょ？」

と、劉備ちゃん。え……いいの？

それは願ってもないや。正直、この世界のこと何にもわかんないし……一時的にでも、案内役になってくれる人と一緒、っていうのは心強い。

横を見てみると……関羽さんと張飛ちゃんも、反対は特になにみないだ。

僕の表情から了承を読み取ったらしい劉備ちゃんは、『よかった

！』と言つように手をうつと、

「えへへ……旅は人数が多い方が楽しいし、御使い様を探すのも楽になるよね！」

……ん？

えつと……今のはどういうこと？

『ミツカイスアマ』を探すって……人探しでもしてるのかな？

すると、関羽さんが僕の頭上の『？』に気づいたらしく、説明してくれた。

聞けば……何でも、今、都では……管輅とかいう占い師が予言した『流星に乗って天の御使いが現れ、乱世を鎮めるであろう』って
という言葉が広く知られてるんだとか。

……何それ？

えつと……つまりあれか？

この戦国時代を、ウ　トラマンよろしく空からやってくるスーパーヒーローが終結させて、平和な世界を築き上げるだろう……って
こと？　何だそのうさんくさいの……

聞きようによつては、1999年の某大予言レベルのアレな話だけど……関羽さん、超真顔である。マジっすか……。

そして劉備ちゃんたちは、その流星がこの近くに落ちたのを見て、
天の御使いとやらを探しに来たらしい。

いや、そんな……流星って、あれは普通に隕石とか人工衛星とか

が大気圏で燃えてるだけで、人が乗ってくるとかありえないから……って、言ってもムダか。

もしホントに流星で来るとしたら、それこそウル ラマンだ。

「でもお姉ちゃん、昨日流れ星が落ちてから、だいぶ時間が経っちゃったのだ」

「あう……そーだよなー……。ごめん、私のはぐれたりしたせいで……」

「そんな……桃香様がご自分を責められるようなことは……」

とか思ってる間に、3人で話進めてるし……僕、入り込む隙なし。

「んー、ともかく、一応行ってみようよ、あっちだから。もう居なくなっても、何か手がかりとかあるかもしれないし……明久君、ちよつと寄り道だけど……いいかな？」

と、聞いてくる。それはもちろん構わないけど……でも……

「いいけど……行っても誰もいないと思うよ？ その『御使い』さんも」

「えー、明久君までそういうこと言うのー？」

「いやいや、そうじゃなくて……」

だつてさあ……

「僕、その『あっち』から川伝いに歩いてきたんだけど……誰とも会わなかったよ？」

「え、ホント？」

「うん。えつとね……多分、ここから10km……あ、いや、20里くらい先から」

たしか、中国の1里は500mだったはず。

「20里といえますと……ちょうど、流星が落ちたあたりですね」

「あ、そうなんだ？ でも……誰もいなかったよ？」

「お兄ちゃん、ホントに誰とも会わなかったの？」

「うん、聞いた感じ……ちょうど同じころ、同じあたりを歩いてたと思うけど……そんな人とはすれ違いもしなかったなあ……開けた場所だし、間違いないよ」

「そっか……ちょうど流星が落ちたあたりから歩いてきたのに、誰もいなかったんだ……」

目に見えて落胆する劉備ちゃん。

そういうこと。残念だけど……何かの間違いみたいだね。そんな『天の御使い』なんて大げさな感じの人とは、会いもしなかったもん。

と、劉備ちゃんがため息をついて、僕がそれを申し訳なさそうに見ていた……その時、

「……ちょっと待ってください、桃香さま」

関羽さんが……何かに気づいたように言った。どうしたの？
僕ら3人の視線を受けながら関羽さんは、

「桃香様、お気付きになりませんか？ この者……明久殿は、ちょうど向こうの……流星が落ちたあたりから歩いてきたのでしょうか？」

「え、うん。でも……誰にも会わなかったんだよね？」

「いえ、そうなのですがね……つまりですよ？ 明久殿は、ちょうど都合よくその『流星が落ちたあたり』にいたにも関わらず、誰も見なかった……のです。この意味が？」

「……………あ！」

と、劉備ちゃん……何かに気づいたように言っただかと思うと、関羽さんはうんうんと頷くような仕草をして、

「ええ、そういうことです。明久殿が、御使い様に会えるはずがありません。何せ……」

「そっか……あの流れ星は、天の御使い様とは特に何も関係ない、ただの偶然の流れ星だったんだね……」

「何でそうなるんですかっ!？」

関羽さん、なぜかシャウト。……？ 劉備ちゃん、何かへんなこと言ってた？

「いいですか!？ この明久殿は、ちょうど昨日、ちょうど流星が落下した時間、ちょうど流星が落下した地点にいて、そして他の誰をも見ていないのですよ!？」

「？ それはさっき聞いたのだ？」

「少しだけ黙っている鈴々! ……ですから！ 仮に天の御使い様が降臨されていたとして……明久殿がそういった状況になる理由は1つでしょう!」

……………さっきから関羽さん、何言ってるんだろっ？

だからそれは、その流れ星が勘違いだった……ってだけのことでしょ？ 『天の御使い』なんて、いるわけないし。

っていうか、そんな状況があったとしたら、それってまるで……

「やだなー愛紗ちゃんったら！ 同じ時間に同じ場所にいるのに会えないなんて、それじゃまるで、明久君自身が天の御使い様……みたい……じゃ……えっ？」

ぱちくり

そこにいたって……『ようやく気づいたか』とでも言いたげな関係羽さんのため息。

そして劉備ちゃんは……ぎこちない動きで僕の方を振り返ると……

「……………御使い様？」

「は？」

僕の方を指差しながら、そんなことを……って……えゝ！？

「いやいやいやいやいやいやいや！　ちょ、何いきなり！？」
「だって〜！　それしか考えられないじゃん！　明久君が『御使い様』なんでしょ！？」

いや、何言ってるんのさつきから、ホントに！

何でも……劉備ちゃん達が探してた『天の御使い』が僕だとか何とか……いや、どうしてそういう展開になってるの！？
どう考えても違うでしょ！　僕ただの高校生だよ！？

……って何度も説明したんだけど……劉備ちゃん、変なところで頑固。聞いてくれない。

「だって、明久君『ちょうど流星が落ちたあたり』から来たんでしょ？　それに、私と会うまで誰とも会ってないっていうし、おまけに『気づいたらこの世界にいた』っていうし……もう、そうとしか考えられないじゃない！」

「……そうとしか考えられない割には、随分思考が遠回りしたようでしたが」

「あ、あはは……まあ、それは置いといて、ね？」

ため息混じりに関羽さんがつつこんだセリフを流して、劉備ちゃんが続ける。

「それにその服！　黒く染められてるのになんかキラキラきらめいてるし……どう見ても普通の素材じゃないし……これが噂の『天の羽衣』ってやつだよね！？」

「いや、これただの合成繊維！ 日光を反射して化学物質がテカッてるだけ！」

「『こうせいせんい剛聖戦衣』、ですか……？ うつむ……雄雄しい名前ですね……」

「字違うー！」

こんな感じでさっきから平行線。うつ……きりないよ……。

すると……劉備ちゃんも同じことを考えたのか……唐突に、こんなことを言い出した。

「じゃあ……試してみよう。明久君が、『天の御使い様』かどうか」「へ？ 試す？」

「どうやって試すのだ？」

「桃香さま……何か考えが？」

突然の提案に、きよんとする僕と張飛ちゃんに、思案顔になる関羽さん。

いやあの……試すって何？ 痛いのかやだよ？

「簡単だよ？ 私が今からする質問に、答えてくれればいいから」

え、そんなんでいいの？

それで何がわかるのか、いまいち見当がつかないんだけど……まあ、それで気が済むなら。どのみち、僕が『天の御使い』なわけないんだからね。やってみますか。

すると劉備ちゃん、僕の返事を待たずに、

「じゃあ第1問！ 愛紗ちゃんの武器の重さは？ 5秒以内！」

「えっ！？」

せ、制限時間あるの！？ しかも5秒！？ 短っ！

ええと……確か三国志だと、関羽の青竜偃月刀の重さは……

「20kg……じゃなかった、この時代だと……82斤！」

「第2問！ 私たち3人が乱世を戦い抜く誓いをかわした場所はどこ？」

「えっと……桃園！」

「第3問！ 鈴々ちゃんの武器『蛇矛』の名前の由来は！？」

「ええと……刃の部分が蛇みたいに蛇行してるから！」

「第4問！ 私の持つてる剣の名前は！？」

「えっと、劉備だからたしか……せ、『靖王伝家』！」

「最終問題！ 私の特技は！？」

「えっと……草鞋^{わらじ}作り！」

そして、一瞬の間を置いて、

「やっぱり明久君が天の御使い様なんだね！」

「なんでそうなるの！？」

今のタイム ヨックで何がわかったと！？

「だって明久君、今の質問の答え、私達が明久君に説明してもいな

いことなのに、全部あてちゃったじゃん！ 千里眼を持ってるっていう天の御使い様じゃなきゃ不可能だよ！」

ああ、しまった、そういうことか！

つまり……知りもしないはずの知識を知ってることで、『天の御使い』の証明にしようと考えたわけだ！

5秒っていう制限時間を付けたのも、焦らせて八百長回答を出させないため……くっ、劉備ちゃん……のほほんとしてるわりに、抜け目がない！

この事実……関羽さんや張飛ちゃんまで、完全に納得しちゃってるし……悪い意味で。こ、これもう、説得無理かも……？

そして……『勝った』とでも言いたげな、どや顔の劉備ちゃん。何もしなくても十分すぎるほどに自己主張している胸を、えっへんと張って……いや違うんです、これはその……年頃の青少年としては、あの2つのふくらみに目が行くのはどうしても自然なことだと思うんです。

ともかく、その劉備ちゃんは、

「と、いうわけで……これからよろしくね、ご主人様！」

「いやだからそんな……って『ご主人様』！？」

なんか呼び方変わった！？

いや、その呼び方自体はすごく魅力的って言えばそうなんだけど……何いきなり！？

「だって、私達の指導者になってもらうんだもん、当然だよ」

「し……指導者あ！？」

「そゆこと！これからよろしくね、ご主人様」

そして……にっこり。

邪気のないその顔は……『本気だよ』と、僕に対して残酷なま
での事実を突きつけていたり……

いや……ちよっと……

ど、どういふことコレ……いやむしろどうなるのコレ……！？

第3話 異世界と天然と天の御使い（後書き）

やはりこのおバカ2人、思考が似過ぎ……まあ、劉備のほうは抜け目が無いですが。

書きやすいようなそうでもないような……

ともかく、『天の御使い』認定されてしまった明久でした。

だいたいこんな感じのペースでの更新になると思います。
ご了承ください。

ではこの辺で。和尚でした。

第4話 賊と初陣と召喚獣（前書き）

今回はバトル……というか、何というか……
いよいよ明久が『アレ』を使います。

ではどうぞ。第4話です。

第4話 賊と初陣と召喚獣

Side 明久

結局あの後、僕は桃香たちの誤解を解くこともできないまま、今に至る。相変わらず呼び方は『ご主人様』だし……。

あ、そうそう、呼び方といえば……さっき彼女達から『真名でいい』って言われた。

……真名って何？ ってなもんだっただけ……聞けば、『自分が認めた人だけに呼ばせる特別な名前』なんだそうだ。

さっきから呼び合ってる『桃香』『愛紗』『鈴々』ってのがこれにあたるらしく……もし無断で呼んだら、その瞬間斬られても文句言えないものなんだとか。……怖っ。

当然だけど、僕には真名も字あだなもない。

真名はもちろんだし……『字』ってたしか、座右の銘みたいな感じの別称だよな？ 某錬金術師の『鋼』とか、某海賊の『麦わら』とか。そんなの、僕にはない。

……一瞬、『観察処分者』ってワードが頭をよぎった自分が憎い。ということ、彼女達の好きなように呼んでもらうことに……した結果がこれだよ。

「もうご主人様、そんな顔しないで、もっと前向いて明るくしてよ
うよ？」

「そうですとも。我々の主が、そんなことでどうするのです、ご主

人様？」

「お兄ちゃん、『てんのみつかい』なんですよ？ もっと堂々とするのだ！」

「だーからそれ、誤解なんだってば……」

と、その時、

「ぞ、賊だああ つ！！」

「「「！！？」」」

いきなりそんな声が響き渡ったかと思うと、カンカンカンカン……と鐘の音が響き、町の人たちが端からパニックになって逃げ出していく。え、何！？ 何なの！？

通行人の会話（ハイテンポ）に聞き耳立ててみると……近くに根城を構えてる盗賊の一団がいて、そいつらが攻めてきたとか何とか聞こえてきた。マジ！？

すると……愛紗がそれに対して素早い反応を見せる。獲物を手に駆け出した。

場慣れしているのか……はたまた正義感が強いのか……いや、両方かな。

「お2人とも避難しててください！ 鈴々、行くぞ！」

「応なのだ！」

「え……ちょ、ちょっと!？」

そんな僕のセリフを聞くことなく、2人とも駆け出していった。
い、いや……何やってんの!? 行ってく……と、盗賊だよ!?

逃げない! すると、今度は後ろから桃香が上着を引っ張ってきた。

「ちょ、桃香!？」

「大丈夫だよご主人様! 2人とも強いから、盗賊なんて目じゃないよ!」

いやそんなこと言われても!

そりゃまあ、パラレルワールドとはいえ『あの関羽』と『あの張飛』なんだし、強いんだろっとは思っけど……それでも、気にするなっつてのは無理だ。

盗賊っていうからには人数多いんだろうし、武器だって持つてるだろう。町の自警団と協力するとしても、女の子に任せていい任務じゃないと思う。

……それに……

「……………(じーっ…………)」

「……? え、えっと……ご、ご主人様? わ、私の顔に何かついてる?」

きょとんとする桃香。

……『三国志』だとそれなりに強いはずの劉備さんが、ここではこれだし……。

天然丸出しでのほほんとした雰囲気の彼女からは……覇気とか感じない。全然。

っていつかさつき自分で『私弱いから』とか言ってたし……明らかに、守られる側の存在だとわかる。

愛紗達が強いのはいいとしても、絶対誰か、この娘をそばで見えてあげる存在が必要だと思うんだけど……って、あれ？　もしかしてそれ僕？　え、押し付けられた？

「と……ともかくご主人様、盗賊さんたちを追い返すのは愛紗ちゃんたちに任せて、私達は安全な場所に行こう？　もし巻き込まれたら、その方が迷惑かけちゃうよ」

「そ、そうだね……それに、町の人たち逃がさないと……先導しようか」

「うん！」

慣れてる……のかな？

桃香はてきぱき動き……町の人たちを、盗賊の魔の手が及ばないであろうところまで先導していた。僕や、町の他の若い人たちと協力して。

しかし……今更だけど、ホントに異世界だなあ……。

盗賊が攻めてきて、しかも武器はピストルとかじゃない……剣とか弓矢で、それを愛紗達が迎え撃って……やれやれ、現代っ子にやきつい……

……それに、もう一つ、きついことがある。

町のあちこちに……盗賊の攻撃で傷を負ったと思しき人や……中

には、それで死んでしまった人なんかもいたことだ。

グロテスクな映像は……試召戦争や映画のDVDとかで結構見たけど……やっぱり本物は重みが違う……正直、何度か吐きそうになった。

それをこらえてがんばっていると……町の人たちの避難がほぼ終わった。

……と、思ったら、

「え、あれ！？ ちよっ……桃香、どこ行くの！？」

全部終わって、あとは僕達が逃げるだけ……って段階になったと思ったら、なぜかいきなり桃香が、戦場になってる地区に向かって走り出そうとしてた。

慌てて引き止める僕。

「だ、だってその……」

「『だって』……何？」

「あ……愛紗ちゃんたちが心配で……」

いや、結局あんたも心配なんかい！ いやまあ、普通そうだけど。

や、でも、あんたがさっき『大丈夫だ』って言ってたんでしょーが！ っていうか、向こうは戦闘区域なんだから危険だよ！？ 賊とかいたらどうすんの！？ ってかいるよ！

そんなところに巻き込まれたら、それこそ愛紗達に迷惑かかるんじゃない！？

「だ、大丈夫だよ！ 愛紗ちゃん達なら……もう盗賊さん全部倒しちゃってるはずだよ！ だから……ね？」

「『ね?』じゃなくて! ていうか桃香言ってること滅茶苦茶でしょ! 大丈夫だと思うんなら見に行く必要ないじゃない!」

何だかんだ言っただけで心配らしい。その気持ちはよくわかる。

わかるけど……それにしたって危険すぎる。僕らは戦えないんだから……ここはやっぱり、僕らは避難すべきだ。

「だってだって、愛紗ちゃん達を放っておくなんて、私の方が落ち着かないよ!」

「でももし盗賊とかに見つかって巻き込まれたらどうするの!?! 危ないでしょ!」

「大丈夫だよ、愛紗ちゃんたちがもっつつけて……」

「それはさっき聞いた!」

「じゃ、せめて応援! 応援ならいいでしょ? ね?」

「いやなんでそんなところに思考が行くのさ! 問題ありすぎだよ色々!」

と、その時、

「『……………え!?!』」

Side 愛紗

「はあああああ つ!?!」

「うりやりやりやりや

っ！！」

「ぎゃあああああ　　っ！！」

「くそっ……こいつら強え！」

くやしそうな盗賊共の声が耳に届くと……恐れをなした盗賊たちが、一旦まとまって距離をとった。けん制の目的で……私と鈴々はそれをにらみつけ、武器を構えなおす。

ふう……もう何十人斬ったことだろうか。数えてなどいないが……もうだいぶ数を減らせたはずだ。

しかし……一向に攻撃が止む気配がない。全く……一体どれだけの人数で攻めてきたのだ？　数えていないとはいえ……鈴々と二人で100は倒したぞ？

その時、

「動くなあ！！」

「「！？」」

突如として響いた盗賊の声を聞き、戦っていた者達が動きを止める。

声のした方にめをやると……っ！！

「動くなお前ら、この女がどうなってもいいのか！」

賊の1人が……逃げ遅れたと思しき、村人の女性を後ろから羽交い絞めにし、刃を突きつけていた。っ……人質か！

「こいつの命が惜しけりや……金目のものと食料をありったけ用意

しろ！」

「おう、でかしたぞお前！」

「くっ……卑怯者め……！」

人質ができたことで余裕が生まれたのだろう、盗賊たちの顔に下卑た笑みが浮かぶ。

それでも、一応警戒はしているのか……不用意にこちらに近づいてくることはないが。

しかし、まずいな……人質がいては、ろくに動けん。このまま押し切れば、殲滅は無理でも、追いつくくらいならできたであろうものを……

金品と食料……十分に奥歯をかみ締める略奪行為だが……それ以上を用給しないあたり、奴らにもそれほどの余裕はないのだろう。実際に、人数もだいぶ減ったのだ。

「おら早くしろ！ この女がどうなってもいいのか！」

とはいえ、このままみすみす略奪を許すなど……

右を見てみるが……鈴々も、何も案などはないようだ。くっ、どうすれば……！？

と、その時、

カラカラカラ……

「「「？」「」」

裏路地の方から……からからと音を立てて、何かが盗賊たちのほうに向かつていった。それに……全員の視線が集中する。

あれは……乳母車？

そのまま転がって、盗賊の、ちょうど人質を抱えている男の下へ……つてまずい！

どこから誰が転がしてしまったのか知らんが、下手を打てばもう1人人質ができてしまう……しかもそれが無抵抗の赤子となっては……最悪だ！

「？ 何だこりや？」

と、私達の目の前で……盗賊がしつかりと女を抱え込みながら、乳母車を覗き込んだ……その時、

ヒュン、バキィツ！！

「ぐがあっ！？」

「「「！！？」」「」」

乳母車の籠の中から、突如として何かが飛び出し……男の顔面を痛打した。

その拍子に人質が開放されたかと思うと……その『何か』は人質の女性を持ち上げるように抱え……すたこらさつさとこちらに逃げ

てきた。な……何だ！？

驚きつつも、女性の保護のためにその『何か』に近寄る私達。

自らも『わけがわからない』と言いたげな女性を持ち上げている
その正体は……

……ご主人……様……？

S i d e 明久

いいえ、召喚獣です。

衆人環視の中……ベビーカーから飛び出して盗賊のおっさんを昏倒させた僕の召喚獣は、きっちり人質の女性を救出することに成功。うん、ミッションコンプリート。

……とまあ、そんな光景を物陰に隠れて見ていた僕と桃香でした。

しかしびっくりしたなあ……まさか、この世界で『召喚獣』が使えるなんて……一体全体、何でなのかとはさっぱりわからないけど……

あの時実は、

『いやなんでそんなところに思考が行くのさ！ 問題ありすぎだよ色

々！』

『……行くのさ！ 問題……』

『……のさ！ もんだい……』

『……さ！ もん……』

『さもん』

『サモン』

……で、『^{サモン}試獣召喚』。あらやだ偶然。

とまあ……そんな感じで、僕が『召喚獣』を呼び出すためのキーワード『試獣召喚』が発動。

どうやら『召喚』が可能だったこの世界で、僕ははからずもキーワードを口に……こいつを呼び出してしまったわけだ。

そりゃびつくりしたけど……この状況下でこいつが使えるってわかったのはラッキーだ。何せ……やってるのは盗賊との戦闘行為なんだからね。

で……人質の場面に遭遇して、たまたま見つけたベビーカーを使つて……あとは略。

そして、

「かかれえ

っ！」

後顧の憂いがなくなった所で、愛紗&鈴々、そして自警団の皆さんが総攻撃。

あーあ、人質作戦なんて死亡フラグ立てるから……盗賊さんたち、怒りで武力3割増しの愛紗達にきっちり制圧されちゃいました。

……で、その後、僕と桃香も愛紗達に見つかって……当然のごとく『何やってるんですか!』って怒られた。……義姉とご主人様相手でも容赦ないのね……。

そして、一通り雷を落とすと……今度は、愛紗と鈴々の興味は、当然ながらこいつに向いた。

「すると……この『小さなご主人様』は、ご主人様が天の神通力を使って生み出した、ご主人様の分身のようなものなのですか?」

「あーまあ、だいたい捻じ曲がってるけど……詳しいこと話すとややこしくなるから……それでいいや。……ってあ痛っ、鈴々つねらないで、それ僕と感覚共有してるから」
「にゃ? あ、ごめんなのだ」

なにやら使い魔的な解釈が入っちゃったけど……まあいいか。『召喚獣』はあくまで科学とオカルトの産物なんだけど、説明すると長いし、ろくに説明できないし。

ともあれ……どうにかこの村に迫っていた危機は回避できたわけだけ……

……人命救助のためとはいえ、不用意にこんな『召喚獣』なんていうオーバーテクノロジーを見せちゃったことにより……僕はますます『天の御使い』あつかいされることになっちゃいましたとさ。村の人たちまで、村の危機を救ってくれた愛紗たちと合わせて、その愛紗たちを率いているっていう（本人の僕は散々否定したんだけど）僕を、愛紗たちと合わせて『救世主』とかいってあがめ始める始末だし……。

愛紗達にいたっては……もう、仮面 イダーとかウルト マンとかを見る5歳児の目になってるし……

こ、こんなはずじゃ……僕の逃げ道が、どんどんなくなっていく……っ!?

第4話 賊と初陣と召喚獣（後書き）

ギャグが少なめになっちゃいましたが、とりあえず。
初陣？終了です。

次話で第一章は終了の予定です。

ではこれで、和尚でした。

第5話 本音とフランドと桃香の思い（前書き）

今回で第一章、終了となります。

どうぞ。

第5話 本音とブランドと桃香の思い

S i d e 明久

「はぁ……」

ため息しか出てこない。

誰になんと言われようとため息しか出てこない。頑として。
というかむしろ、わけもわからないうちにスーパヒーロー扱い
されてるこの状況下……ため息以外の何を出せと？

「もう……そんな顔しないでよ、ご主人様！」

テーブルの向かいに座ってる桃香から、のほほんとした声がか
けられるけど、何の慰めにもならない。当然ながら。

「なんていうか……エ ア初号機のパイロットの気持ちかわかるな

……」

「は？」

「あ、いや、こつちの話……」

シ ジ君……望まずして表舞台に立たされるっていうのは、こん
なにづらいんだね……。ヒーローにあこがれてる全国の子供は何も
わかってないんだな、って思うよ。

……なんて心の中で思いを吐露してみたところで誰も助けしてくれ
ないから、そろそろ現実に戻ろうか。

僕は今、とある食堂の二階、その個室で……桃香、愛紗、鈴々と一緒にご飯を食べてるところだ。

町の人たちが『守ってくれたお礼です』とか言ってくれて、ここでの食事代はチャラになってる。なので……ってわけじゃないけど、僕らはお腹いっぱい、遠慮なく食えることができていた。

……食べたらずしは気がまぎれるかな……なんて思ったんだけど、そんなことはなくて。

むしろ……食事の最中も僕に向けられる、桃香達の好奇の視線で気が滅入ってたり。

「はあ……」

「もー……ご主人様、ため息つきすぎだよ？」

「あんまりため息ばかりついてると、気が滅入っちゃうのだ」

「大丈夫大丈夫、もう既にシャレになんないあたりまで滅入ってるから」

「いえ、それは明らかに大丈夫という表現を使うべきではないと……」

励まそうとしてくれるのは嬉しい。

ただ……事態の收拾にはならないから嬉しくない。だって……さつき僕を大々的に『天の御使いです！』って祭り上げてくれやがったの、彼女達だもんね。

そんなんじゃない、って、何回も言ったのに……。

……そんな空気の中、料理の皿が一通り空になったあたりで、

「ねえ……ご主人様、そろそろ……本題に入ろうと思うんだけど……」

桃香が、そんな感じで切り出してきた。……本題？
その言葉に、愛紗と鈴々も顔がまじめなものになった……気がする。

「えっと、さ……ご主人様、さつきから見てる感じ、その……『天の御使い』様って祭り上げられるの……嫌、だったりする？」

「うん」

「あ、そこ即答なんだ……」

そりやもう。だって全然違うもん。
ちよっと困ったような顔になった（気がする）桃香だけど、

「でもでも、ご主人様はホントに天の世界から来たんでしょ？ さつきもあんな神通力使ってたし……」

神通力で。

だから召喚獣は科学技術で……って、言ってもわかんないか。

「天っていうか……まあ、こことは違う世界から来たっていうのはあつてるけど……」

「じゃあ、全然問題ないんじゃない？ ちょっと呼び方が違うだけでしょ？」

「その呼び方が一番の問題なんだってば……」

意外と頑固に食い下がってくる桃香に、またしてもため息が出た。人のよさとか、甘さとかはあるみたいだけど……だからって気が弱かったりするわけでもないのが彼女である。したたかっているか

……意外と強情？

けど……だからって僕も、ここでひくわけには行かないわけで。

「だからさ……この際『天』とかいう呼称云々についてはもう置いとくとして……僕はそんな、こう……英雄じみた感じの名前が付けられるような感じの存在じゃ、全然ないんだって。異世界人っていうても、普通の一般人なんだよ」

それなのに、そんないかにもな感じの呼称で呼ばれても、名前負けもいいとこだ。

……っていうか……ここまで連れてきてもらって、さらに守ってもらってなんだけど……僕みたいのを祭り上げても、むしろ桃香達のほうが迷惑でしょ？

いくら異世界人とはいえ、戦えもしないし頭もよくない、ただの高校生なんだから。

そこまで言う……なぜか、桃香達がちょっと沈んだ面持ちになった。

「その……そういわれると、申し上げにくいのですが……」

おずおずと口を開く愛紗。

いや、事実なんだから普通に言ってくれていいのに……と思ってたら……愛紗の口から出てきたのは、予想とは違う回答だった。

「……実のところ……我々は、あなたが『天の御使い』であるかというところは……本当は問題ではないのです」

「え？」

？ どういうこと？

目に見えて『？』な顔になっているであろう僕に、なぜか申し訳なさそうな感じの顔のままの桃香達。

「えつとね……天の国から来たご主人様が知ってるかどうかかわかないけど……この大陸は今、すごく大変な状況にあるの」

「中央・地方を問わず、役人の間では賄賂が横行し……都市によっては、理不尽なほどの重税や兵役を民に課すところも、珍しくはありません。ほとんどの民は、その日その日を生きていくのに精一杯で……希望などとても持てない状態です」

「盗賊なんかもいっぱいいて、どこもかしこもあればーだいなのだ。さつきもほら、町が盗賊に襲われたでしょ？」

「あー……なんか、ざっと聞いただけでもすごく大変そうだね」

僕からしたら……完全に歴史もしくはファンタジー漫画の世界だ。盗賊だの重税だの、現代日本じゃ考えられないことばかり。

賄賂は……まあ、一部残ってるみたいだけど。嘆かわしいことに。

「取り締まろうにも……今の腐敗・疲弊しきつた『漢王朝』に、その力はありません」

「もうこの大陸は、根底からボロボロなの……」

「うんうん」

なるほど、大変だ。

「……ここからが本題です。私たち3人が……この乱世を鎮め、太平の世を築くために立ち上がった……ということは、以前にお話ししましたね？」

「うん。それは聞いた。立派な目標だよね」

つまり……今の世の中を変えて、人々を救ってやろうと思って立ち上がった……と。

なんか言葉にすると中二病的な響きが付きまとう気がするけど……生半可な覚悟で掲げられる目標じゃない。現代っ子の僕でもわかる。

……でも、それがどうかしたの？

「いかに大望を持っていても……われらが今持つ力は、微々たるものです」

「あー……まあ、3人だもんね」

「あ、いえ、人数もそうなのですが……我々にはこれから先、この大陸を変えるだけの力を付ける上で……決定的に欠落しているものがあるのです。わかりですか？」

ん……何だろ？

人数やお金なんかは当然だから、ここで求められてる答えとは違うんだろっし……

となると、うーん……こういう下克上系ストーリーでは……あ、これかな？

「フラグ……とか？」

「……は？」「……」

違うか。うーん……当たらずとも遠からずだと思ったんだけど……じゃあ……うーん、他には……

「変身ベルト……異世界転生……いや、思い切って特殊能力？ 絶

対遵守な左目……ゴムゴムの実……103000冊……リリカルマジカル……あ、でもそれにはまず妖精その他との出会い（魔法少女的な意味での）が何らかの形で……」

「あー……ちょ、ちよつと待ってご主人様？ 何だかその……ご主人様に考えてもらっても永遠に出てこないような気がしてきたんだけど……」

なぜか疲れた様子の桃香が、思案中の僕を止め……ようとした所でひらめいた。

「そうか、デ ノートだ！」

「あ、もう私言っちゃうねご主人様！ 私達にはほら、実績がないの！」

新世界の神になる！ ……ってあれ？ 僕は一体何を考えてたんだっけ？

いやそれよりも、桃香が今答え言ってたな……『実績』？

「うん、実績。ほら……私達、3人とも平民だし……名声とか、そういうの何もないの」

「そんな、どこの馬の骨ともわからない者のところに……いかに大望を掲げたとしても、人は集まりません」

あー、まあそうだよな……。

いきなり『大陸救うぞー！』とか『民を助けるぞー！』とか言った所で、最悪『戯言』で済まされるし。

「一応鈴々達、行く先々で山賊退治とかやってたけど……それでも、その近くでちょびつと評判がよくなるくらいなのだ……」

「本来ならば、そういったものは、それなりの年月をかけて積み上げていくべきものなのですが……もはや、我々にはその時間すらありません」

「……だから、私達は……」

そこまで聞いて……僕にもようやく、彼女達が言いたいことがわかった。

つまりは、彼女達は……これから1つの『勢力』をつくり、それを拡大して力を付けたい。この大陸を巻き込んだ戦いに、名乗りを上げられるくらいに。

けど……それを作るだけの名声やら何やらを、正攻法で作り上げるには……何もかも不足すぎる。身分は普通に平民だし、女の子だからなめられやすい。

おまけに……これからまもなく戦乱の世が来ることを考えると、時間もない。

そう考えた桃香達が狙ったのは……現代社会ではまず通用しない、ある裏技。

「……つまり、『天の御使い』の名前と、それについてくる名声を利用しよう、と……」

「………うん……」

なるほど、ね……謎が解けた。

つまり彼女達がほしかったのは……『天の御使い』である（とさ
れてる）僕自身じゃなくて……僕について回るであろう、風評だっ
たわけだ。

そういう、なんかこう……神懸かった感じのありがたそうなもの
を祭り神輿にすれば……わりと信心深いこの時代の人たちの心を、
手っ取り早く集められる。

僕に求めているのは……そのためのブランドロゴ、ってわけだ。

見ると……桃香達はそろって、気まずそうと言つか……申し訳な
さそうな顔。

無理もない……かな。正面きって、僕自身に『あなたのことを利
用させて下さい』って言うてるのと同じだったし……今の。

そしておそらく……それを説明する前に僕が承諾でもしようもの
なら、その流れで何も話さずに、僕を利用していくつもりだったん
だろう。意外としたたかだな、やっぱし。

……まあ、僕が人並みには小心者かつ、頑固で心配性だったおか
げで、そうはならなかったけど。

「都合のいい話かもしれないけど……私達には、そうするより他に、
方法がないの」

……それでも、桃香達の決意、というか主張は揺るがないらしい。
後ろめたい雰囲気が強引に吹っ切ると、桃香は僕の目を真っ正面

から見据えて、

「ご主人様の気持ちとか、尊厳とか……そういうの全部ないがしろにしちゃう頼みだっているのはわかってるし、それをわかって頼む私達って……酷い奴だと思う。謝っても謝りきれないと思う。でも……それでも私達……今この時も苦しんでる人達を救いたい！」

「……………っ!？」

「だから……だからご主人様！　こんな身勝手に見苦しい私達に……力を貸してください！」

そう言うなり桃香は、テーブルに頭ぶつけそうな勢いで頭を垂れてくる。必死だ。

なんか、低姿勢に見えちゃうけど……桃香の言葉には、決意が満ち溢れていた。

そしてそれゆえに……説得力もあり、心を突き動かすものがあった。なんていうか、有無を言わさぬ……っていうアレかな？

実を言うと、僕は……何を言われても断るつもりだった。

だってそうじゃん。天の御使いだか何だか知らないけど……学級委員長もやったことない僕に、そんな大層な役割勤まるはずないもん。メッキどころか、氣ぐるみだよ。

……………それなのに、

気づいたら……僕は、こんな言葉を、彼女にかけていた。

「……………知らないよ？　僕みたいなのをマスコットにして……後で、

後悔しても」

「……………え……………」

あーあ、何言ってるんだろっね、僕。物語か何かの主人公にでもなっただけかな？

こんなこと言っただけ……………あとですごく困ることになるの、バカでもわかるだろうに。

……………どうやら、僕のバカは……………そこらのバカとはレベルが違うと見た。

「僕はさ、正直……………この世界のこととか、何にもわかんないよ？戦えもしないし……………頭も悪い。字も読めないし……………はつきり言っただけ足手まといになる自信、超ある」

そんな僕の演説(?)を、ぼけーとした表情で見ている桃香達だったけど……………次第に、僕が言っただけの意味がわかってきたらしい。

徐々に、その顔に赤みがさしてきて……………

そして、僕の最後の一言を皮切りに、

「それでもいいんなら……………ま、僕みたいなただのバカでよかったら、使ってみれば？」

「……………ご主人様……………ありがとう!!」 『まずこつと』って何なのかはわからないけど!」

天然っぽいセリフとともに、その顔が……満面の笑みに変わったのだった。

やれやれ……我ながら、何というかこう……芝居っぽいことしちゃったなあ。

しかもその上、こんな約束までして……この先どうなることやら。

……まあでも、

「これから……よろしくね、ご主人様！」

……ま、この笑顔が泣き顔に変わるよりかマシかな、なーんて主人公的なことを考えてみちやったり。
すると、

「にゃ？　それで結局……お兄ちゃんは仲間になるのか？」
「……」

……あらま。

約一名理解してなかった。

これから鈴々の前で、わかりにくい感じのセリフは極力控えようかな……なんてことを考えながら……僕はひとまず、結構大きな対談が終わったことに、一息ついていた。

しっかし……ははっ、とんでもないことに巻き込まれちゃったな

あ……僕。

これから……どうなるんだか。ははっ、なんか笑えてくる。

この、自然とこみ上げてくる笑いの意味を……場の空気から開放され、冷静になった僕が気づくのは……もうちょっと後の話だったりする。

いやホント……勢いって怖いよね。

第5話 本音とブランドと桃香の思い（後書き）

さて、あらためて仲間になった明久たちでした。
ちなみに、設定上『桃園の誓い』はもう桃香達で済ませちゃってる
ので、書いてません。期待してた人すいません。

これからどうなりますか……次回、新章突入です。

それと……今更出すけど、自分この間、『真・恋姫†無双 萌将伝』
買いました。

ただいまプレイ中です。面白いです。まだ序盤ですが。

ではこの辺で。和尚でした。

第6話 誤解と山賊と三羽鳥（前書き）

さて、

公孫贇さんの出番を予想していた皆さん、すいません。ちょっと反れます。

今回から……ちょっと都合上、原作とは違う展開を歩んでいきます。公孫贇さん、もうちょい出番待ってね。

原作知ってる方は、タイトルで気付くでしょうが……今回登場する武將の皆さんは……あの娘とあの娘とあの娘です。では、どうぞ。

第6話 誤解と山賊と三羽鳥

Side 明久

……いやホント、勢いって怖い。

「……はあ……」

「あー……ご主人様、疲れたの？」

「……うん……色々……」

「は？」

心が疲れてる……なんて言ったら笑われるか怒られるか……
けどまあ、ここ数日の僕の心労は尋常じゃないわけで……それに
立派に耐え切ってるだけでも褒めてほしいわけで……

……えっと、状況説明。

初陣を勝利で飾った僕ら『天の御使いの一行』は……

……いや、このユニット名やめようって言ったんだよ？ 死ぬほど
ど恥ずかしいから。言っただけだね？ この娘たち……変なところ
で強情だったんです。

教祖様よろしく村の人たちに祭り上げられた後、なんかお礼金と
食料までもらって……僕らは次の目的地へ向けて旅立ったのでした。

今現在……よくわかんない山道を歩いてるとこ。

「はー……」

「ご主人様、ご辛抱を。もうまもなく、次の村が見えてくるはずですよ」

（あー……いや、別に肉体的疲労で参ってるわけじゃないんだけど……）

心労ですとか、色々後悔してますとか……そういうことを言うわけにもいけないので……詳しいことは言わず、黙って歩く。

いや、でも肉体的な疲労もあるっちゃあるけどね。RPGだと、ノンストップで勇者さんは知らせて大陸横断するとかザラだけど……まさにそんな感じの僕が、今朝から移動した距離は……せいぜい10kmちょい。けっこう足、酷使してる。

おまけに、村と村の間では……寝泊り手段は野宿。

いや、野宿自体は……まあ、つらくないことはないけど……村でもらった毛布とかあるし、焚き火で暖も取れるから、どうにかなってるかな。

……それよりもそのー……年頃の青少年の近くに、桃香とか愛紗みたいな、煩惱をガンガン刺激してくれるナイスバディな女の子を寝かせてることに、大いに問題がある気がするといいますが……。正直、気になって……寝付くまでにすこぶる時間がかかる。

え、鈴々？ いや、彼女に関しては別に何も……なんで？

ともかく……僕は今、この先どうなっていくのかっていうことに、言いしれぬ不安を抱えているわけなのですよ……。はあ……。

何回目かもわからないため息をついていると……

「……………ん……………」

いきなり愛紗が立ち止まった。

そして、きよろきよろあたりを見回してる。　？　どうしたの？

「？　愛紗ちゃん……………どうかした？」

「……………お気をつけください、桃香様、ご主人様。複数の視線を感じます」

「「え!?!」」

「にゃ？」

緊張感をはらませた愛紗の声に、ドキッとする。いや……………無理ないよね？

「し、視線って……………まさか……………山賊とか？」

「……………どうでしょう……………それにしても、数が少ないような……………」

「敵なら、鈴々たちがぶっ飛ばしてやるのだ!」

言うのが早いか、蛇矛をぶんぶん振り回す鈴々。……………まあ、頼もしいか。

が……………その視線の主とやらは……………一向に姿を見せる気配がない。……………逆に不気味だな……………一体、何なんだ？　山賊の罠か何かか？　だとしたら……………うかつに動くことも控えなきゃだけど……………。

ともかく、万が一に備えて……………僕も『召喚獣』を呼び出そうとしたその時、

『さ、山賊だあ

っ！！ 山賊が出たあ

っ！！』

「「「え！？」「」

なんかすつごく遠くの方から、そんな声が聞こえた。

と、次の瞬間……

ガサガサッ！
x 3

「うええ！？」

近くの茂みから、突如として3つの人影が姿を現した。な……何
だいきなり！？

びつくりしながらも、僕たちがよく見ると……3人共、同じ年く
らいの女の子だった。

おそらく……さつき愛紗が言ってた『視線』の主であろう、この
女の子達は……今の声によほどびつくりしたのか、茂みから飛び出
るやいなや、3人で何か話している。

「うあちゃー、しもた！ はずれやった！」

「あうう、本命はあっちの道だったのー！」

「山賊の一味がこの道を通りがかるという情報はガセだったか……
くそっ！」

「「「……………?」」」

……………僕らに見つかつてゐるのにも気づかずに。

「なんやねんもうっ！　せつかくええ情報が手に入って、村に来る前に待ち伏せかまして、山賊連中一網打尽にしよ思つとつたんに……」

「朝から張り込んでて、ようやく怪しい4人組が通りがかつたと思つたのに、とんだ無駄足だったの……」

「くっ……………真桜！　沙和！　とにかく今はごちゃごちゃ言つてゐる時じゃない！　あの4人はこの際放つておいて、早く向こつ……」

「あの……」

「「「……………ん?」」」

と、そろそろしびれ切らしたっぽい桃香が、おそろおそろ声かけると……………なんかすつかり3人の世界に入つていた彼女達が、ようやく反応した。

まず、視線を自分達に注目させている僕らを。

次に、すつかり茂みから露出しちやつてゐる自分達を。

その状況を見て……………顔を見合わせると、

「……………あー……………ええっと……………」

「ほな、こちらはこれで……………」

「待たんか！」

何事もなくその場を去ろうとしたところを、愛紗に見事に阻止されていた。

3人中2人が『あちゃー』な顔をしているところに、ずんずんと容赦なく近づき、

「何なんだ一体貴様ら？ 影からこそそ人を見張った上、怪しいだの何だのと……」

「うっ、いや、その……それは……私たちは別に……」

最前列（僕達から見て）に立っていた、銀色の髪の娘が……愛紗のじろりと、いやむしろ『ぎろり』とした視線に若干ひるみつつ、どうにか受け答えしようとしている。

が……愛紗の彼女達に対しての認識が『不審者』に固定されているのは明らか。言葉を選んでいいのか、はたまた単に気まずいのか……しどろもどろだ。

すると、その後ろにいた、紫の髪の娘と、薄茶色の髪の娘がフオーを、

「あー、ちょ、ちょい待ちおねーさん？ あのあれ……うちらほら、別になんも怪しないで？ あんたさんらを山賊や思て影からこそこそ見張ってたりしてへんで別に？」

「そ……そうなの！ 油断してるとこに奇襲かけようとか、もうちよつと進めば事前に作つといた畏にひつかかるなーとか、武器持つてる2人は強そうだから風ちゃんにまかせちゃおうとか、そんなこと全然これっぽっちも思っていないから警戒しないでなの！」

……しようとして、盛大に自爆していた。
てか、畏仕掛けてたの！？ あぶなっ！

「「「……………」」」

「……………?」

周囲に『（^^;）』で『?』な空気を漂わせている2人が、たつたいまやかしたドジ（しかも気づいてない）に……僕ら4人プラス、銀髪の……比較的まともそうな娘は、絶句しているよりほかになかったのは、仕方ないはず。

あー……つまり君ら、僕らを山賊か何かと勘違いして、この先の村に襲いに来る前に、ここで一網打尽にしちゃおうと思ってたわけだ？なるほど……気配を殺して（愛紗に見つかってたけど）見張ってたのはそのためか。

すると、銀髪の娘がはつと気づいたような表情になって、

「っ…………それより今は向こうの救援に行かないと……真桜、沙和、行くぞ！」

「うえっ、な、風、ちょ、待…………」

「ああんっ、お洋服が伸びちゃうのー！」

「え、あ、ちょ…………お、お前達!？」

「旅のお方、勘違いしてしまって大変失礼しました！急ぐので失礼しますっ!」

銀髪の娘は、しゅばつと一礼して詫びを入れると、傍にいる2人の腕を引っつかんで……凄まじい速さで走っていった。横の2人を、半ば引きずるような形にして。

まだ何か言ってるらしいその声からドップラー効果を感じ取りつつ……僕らだけがぽーんと取り残されたのであった。

…………えっと…………何コレ？

Side ???

ぐうつ……不覚だった……っ！

全く見当違いな人物を山賊だと思ってつけ回し、他の地点での襲撃を見逃してしまうとは……私としたことが……っ！

い、いや……今はそれを悔やむよりも、今起こっている事態を何とかするのが先だ！

あの方々には、一応詫びは入れておいたし……開き直りに聞こえるかも知れないが、今優先すべきはこっちだからな……一刻も早く、現場に！

林の中を、真桜と沙和を急かしながら失踪していくと……見えた、山賊の一味だ！

旅人の一団か……いや違う！あれは村への物資を運んできた商隊か！だとしたらなおさら奪われるわけには行かないぞ！

「へっへっへ……運がいいぜ、まさかこんなに食料をつんだ馬車が通りかかるとはな」

「ああ、金目のものもかなりあるぜ、こりやしばらくは遊んで暮らせるな」

「させるかあっ……！」

怒号とともに……私は勢いそのままに茂みから飛び出す。

驚く山賊共の視線がこちらに向くより先に……私の拳が一気に2

人まとめて殴り飛ばす。吹き飛んだ2人は……とんだ先にいた数人の仲間を巻き込んで木叩きつけられた。

「よっしゃ間に合ったあ！ それ以上好き勝手させへんで！」

「とつと尻尾巻いて帰りやがれなのー！」

私の横をすり抜けるように、真桜と沙和も駆けつける。

それぞれ獲物を手に、まだ困惑気味の山賊たちに飛びかかり……体勢を立て直す前になぎはらっていった。

無論、私も黙ってはいない。拳と蹴りを主体にした連撃で、向かってくる山賊を沈めていく。私達の村を……荒らされてたまるものか！

「お……おい、何なんだこの3人、女のくせに……強えぞ！」

「は、半分以上がもう……くそつ、こうなりや逃げるが勝ちだ！」

と、そんな会話が聞こえた方を見ると……列の端の方にいた山賊たちが、もてるだけの荷物を持ち、荷車を引いて逃げていくようにしていた。……っ、させんっ！

私は腰を落とし、拳を構え……意識を集中させる。

すぐに……私の拳に、空気がうねるような音とともに『気』が収束し始めた。

「あかん、逃げられる！ 風、『気弾』ぶちこんだれ！」

「言われなくても……はあああつー！」

ギュウウウウン……ドウンー！

「うぐおあつ!!」

私の拳から放たれた『気』の弾丸……その名の通りの『気弾』が炸裂し、逃げていくうちの男の1人を昏倒させた。

続けて数発放ち……合計4人ほどを沈めたが……まだ何人かが逃げ延びている。

しかも……使えるものとしては希少な『気』を使った技を目の当たりにしたせいだろう……恐ろしさを顔に表し、逃げ足を加速させていた。くっ、厄介な……!

そのせいでだいぶ距離が開いたな……この距離で当たるか……? ダメもとで私が再度、気を集中しようとしたその時、

「そこまでだ、この恥知らず共めが!」

「な、何だてめえ……っ!?!」

「……っ? なぜ、ここに……」

山賊のみならず、後ろから見ていた私までもが目を見張るその先には……

先ほど、私達3人が、山賊だと勘違いしてしまった4人のうちの1人……流の装飾があらわれた長刀を手にした、黒髪の女性がいる。

逃げようとする山賊たちの前に立ちはだかり……仁王立ちをしている。

「何だてめえ女! そどこかねえとぶっ殺すぞ!」

「下衆の言葉になど聞く耳持たんな。貴様らこそ……我が刃の餌食となりたくなければ、奪ったものをおいてここを去れ!」

「あんだとコラア! なめてつとてめえも一緒に持って帰るぞコラ

ア！」

口々に汚い言葉を浴びせかける山賊達だが……この時、私は気弾を装填することも忘れて、その女性のたたずまいに見入っていた。……遠めに見ただけでわかる。あの人の……底知れない實力に、だ。

さきほど隠れて見ていた時から……妙に胸騒ぎのようなものはあったのだが……臨戦態勢に入ったその姿を見て、ようやく気づけた。あの人から……とてつもなく強力な威圧感を感じる。それこそ……私達以上の。

そして、その証拠とでも言うように、

「はああああああああ　　っ！！」
「っ！っ！ぎゃああああああ　　っ！！」

襲い掛かってきた山賊たちを……長刀をうならせ、いとも簡単に切り伏せた。

は、速い……それでいて力強く、正確な太刀筋……。距離があるせいもあるかもしれないが……目で追うのがやっとだった。

と、今度は後ろから……

「うにゃにゃにゃにゃにゃあ　　っ！！」
「っ！？」

声に驚いて私が振り向くと……そこには、黒髪の女性と同じく……先ほどの一団にいた、橙色の髪の、我々よりも年下に見える小さな少女が……身の丈の倍ほどもあるつかという長槍を振り回し、山賊たちを宙に舞わせていた。見た目に反して何という怪力……。

「うにやにやにやああああ　　っ！　村の人達と、襲われた隊の人達と、あとついでにお前達に間違われた鈴々達の分なのだあ　　っ……！」

「な……なんだそりゃああっ！？」
「ま、前2つはともかく、最後の知らねえぞ！？」

……私怨というか、八つ当たりが少々入っている。
あー……すまん、それ、我々のせいだ。とぼつちりが行ってしまったか。

「あと、お腹減ったのだあ　　っ……！」
「……知るかあああああ　　っ（泣）……！」

……さらに脈絡がなくなった気が。
不覚にも盗賊に同情しそうになった。

真桜と沙和、そして私も……その光景にあっけにとられていたが、すぐに気を持ち直して戦いに加わる。なぜ加勢してくれているのか、いや、そもそも何者なのかもわからんが……とりあえず、これは好機だ！

「よっしゃ、沙和、風、なんかよーわからんけど、一気にやったる……！」
「了解なの……！」

「ああ！ 旅のお方、その……助太刀感謝します！」

「気にするな、どの道このような外道はほうつてはおけん」

「困った時はお互い様なのだ！」

それから数分が経った頃には……山賊たちは全員倒され、物資も全て、無事に取り戻されていた。

S i d e 明久

愛紗たちと、謎の少女A、B、Cが山賊さん達をちょうど殲滅し終わったところ、

僕ら一行は、『お礼がしたい』とかいう銀髪の娘の提案で、彼女達の村まで案内されてきていた。

まあ……どの道ここ来るつもりだったんだし……いいよね。

で、どうやら彼女達が3人で借りてるらしい借家に案内された僕らは、遠慮なくそこに上がらせてもらい、靴を脱いでくつろいでいた。

結構広いな。ワンルームだけど……小学校の教室くらいはありそうだ。

「さて……先ほどはありがとうございました。おかげで、村の大切な物資を守ることができました」

「せやね、ホンマおおきにな」

「ありがとうなのー」

並んで座ってそう言うてくる三人娘に、愛紗が代表して『気にしないでくれ』と返す。

……鈴々はともかく……僕と桃香は、隠れてバトル終わるの待つてただけだったけど。

話してくる彼女たち、3人共、自己紹介は終わっている。

まず一番右の、薄めの茶色の髪を三つ編みにしたの彼女、名前は于禁。

丸メガネとそばかすが特徴で、まだ幼さの残る顔つきだ。

腰には、武器である2振りの剣。二刀流か。さっきもそれで戦ってたっけ。

そして……僕の気のせいか……ちょっと露出多いけど、どこことなくデザインの服が現代っぽく見える……かも？　しゃべり方とかノリも、現代の女子高生っぽいし……。

次に真ん中の、紫色の髪の彼女。名前は李典。

何よりも先に、服がすごい。下は作業着風のズボンとベルトなのに……上は、ビキニ水着みたいの1枚だけっていうけしからん状態しかも、愛紗クラスの巨乳だからもろに目が行……ちょっ、眼福つてレベル超えてるんだけど……どうにかならない!?

そして、古代中国なのになぜか関西弁……って、ここはつつこむべきなんだろうか？

極め付けに……武器が……ドリル!?　え、ちょ、何で!?!　ここ古代中国だよな!?!

さ、最後に……、短め……と思いきや長い三編みがある銀髪の娘。名前は楽進。

性格はすつこくまじめで、前の2人のストッパー兼管理役、って

感じ。

褐色の肌のあちこちに……戦いによるものなのか……すごくたくさん
さんの傷痕が見て取れる。なんか、こつ……すごい。目つきも鋭い
し。

武器は手甲で、どうやら徒手空拳で戦うらしいんだけど……すごい
いのはその技。さっき、その……僕の目が間違ってなければ……
エネルギー弾出してませんでした？

なんかもう、どこからどう気にしていいやら……って感じの3人
また、妙なのと知り合ったもんだな……。

「するとあなた方は……諸国を旅して回っているのですか？」

と、楽進。

戦場ではすごく雄雄しい感じがあつたけど、こうしてみると、案
外普通の女の子だ。

「うん。まあ、ここ通つたのは、ほとんどたまたまですけど」

「ふーん……けどなんや、難儀やね？ 何もこんな物騒なご時勢に、
旅なんてせんでもええやろに……さっき見た感じやと、関羽さんや
張飛嬢ちゃんくらい強かったら、いくらでも仕官先あるんちゃうの
？」

「うっん、鈴々たちは、こんなご時勢だから旅してるのだ！」

「？ 何か、目的があつて旅してる、ってことなのー？」

と、メガネの奥の目をきょとんとさせる于禁。他2人もそんな感
じだ。

その質問を受けて……何やら桃香がにやりと笑うと、『よくぞ聞
いてくれました！』っていう雰囲気になって、胸をそらして……

……ん？

何だ、何かいやな予感が……僕の頭の中でアラートが鳴ってるぞ！？

僕は頭をフル回転させて考え……桃香の口が開きかけると同時に、それに気づいた。ま、まずいつ！！

「えへへっ、よくぞ聞いてくれました！ 私達ね、何を隠そう、ここにいる天……」

「桃香ちよつとこつち来てっ！！」

「のみつか……あえええええっ！？ ちょ……ご主人様！？」

どどどどど……ばたん！

強引に桃香の腕を引っ張ると、そのまま扉から家の外に出てさらに家の裏にまで一気に連れて行く。ま……間に合ったっ！！

家の中は多分『』……？』』』な雰囲気になってるだろうけど……気にしてられるか！！

「ど、どうしたのご主人様！？ い、いきなり走り出して……」

「と……桃香……た、単刀直入に言うね？ あ、あのさ……僕の『天の御使い』ってステータス、絶対他の人に言わないで！ お願い！！」

「え？ 何で？」

きょんととして『？』な桃香。

や、そりゃそうだよな。桃香達は思いっきり、僕のそのステータ

ス利用しようとしてんだもん。名乗ってナンボだよね。

けど……ちゃんと理由が、そしていくつがある。

僕が注目されたくないのはもちろんだけど……それ以上に、真っ向からそんなうさんくさいプロフィール語って、余計に警戒されたり、否定的な目で見られるのを防ぐためだ。

だって、天の御使いだよ？ そんな、現代日本で『俺、ウルトラマンに変身できるから。マジで』っていうのとさしてかわらないよ？ そんなのバカ正直に語ってみた所で、鼻で笑われるケースの方が多いだろう。愛紗たちと最初に訪れた村なんてのは、むしろ珍しいケースだと言っている。

けどまあ……僕も『名前を貸す^{ブランド}』ことを引き受けた身だし……ごまかしごまかしはさせてもらうとしても、名乗り全面禁止とかはさすがにしないけどね。

名乗るとしたら、しかるべきタイミングを見計らって……ってこと。じゃなきゃ、効果もありがたみも十分には発揮できないからね。最初っから『ひかえおろう！』の印籠出す黄門様とかいないでしょ？

それをどうにか説明すると……どうにか桃香もわかってくれたらしかった。ふう、クリア。さて……愛紗と鈴々にも注意しとかないとな……。

そう思いつつ、僕が家の中に戻ると……

「やーごめんごめん、ちょっと桃香に急ぎの用事があったね？」

「おーお帰りあんさん。天の御使い様ってホントなん？」

ずこおっ!!

李典の口から極めてナチュラルに飛び出した言葉に、僕は顔面から床につこんだ。

ちよ、今何て言った!? 何で!? Why!?

驚いて顔を上げる僕の視界に……今のヘッドスライディングにあぜんとする楽進、于禁、李典の3人が映り、

その奥に……につこりと笑う、愛紗と鈴々。

く……口止め……ここ来る前にしとくべきだった……っ!

結局その後、どうにか僕はそれ以上の噂の拡大の阻止と、愛紗たちへの事情説明&口止めを完了させることができましたけども……はあ、村来て早々、調子狂いっぱなしだなあ……。

さ、先が、思いやられる……。

第6話 誤解と山賊と三羽鳥（後書き）

と、いうわけで、出てきたのは……三羽鳥こと、于禁・李典・樂進でした。

本来蜀ルートでは戦場くらいしか接点が無い彼女らですが……そんなぞんざいな扱い許しません。

さーて、どう暴れさせようかな……

ではこのへんで、和尚でした。

第7話 襲撃と名乗りとギャリック砲（前書き）

……えー……

オリジナル展開に入っただと思っただら、なんじゃこのタイトルは？
って方、

多いかと思いますが……まあ、読んでください。

ちなみに今回は戦闘パートです。……戦争って感じはほぼ皆無なんです。あいかわらずノリと勢いで突っ走っております。

第7話、どうぞ。

第7話 襲撃と名乗りとギャリック砲

S i d e 明久

僕らが楽進たちの村に到着してから、数日が経った。

どこぞのモトラドに乗る旅人よろしく、村にはせいぜい3日くらいしか滞在するつもりなかったんだけど……山賊との戦いを通して、楽進や李典、于禁とも知り合えた……っていうのが、ちょっと大きかったのか……予定よりも、割と長いことこの村にいる。

旅人生活で、他人との付き合いが希薄だと……たまーにできるこういう仲って、離れたくなるものらしいな。

物資防衛のお礼ってことで、無料で提供してもらえた空き家に滞在しつつ……何でも屋よろしく仕事の手伝いなんかをしながら、僕は日々を過ごしていた。

楽進達や、ほかの村の人達ともすっかり仲良くなって……よかつたらそのままこの村に住まないか？　なんて時々誘われたりする。まあ……いい加減に出発しなきゃいけないから、断ってるけど……。

……そんな、ある日。事件は……突然に起きた。

……この前の山賊たちよりもさらに大きな、いやむしろ、この村にとってこれまでで最大規模だという盗賊の一団が……村に直接攻めてきたのである。

てんやわんやの大騒ぎになっている村の中。

そんな中……場所を楽進の家（広い）に移し、僕達は即席の陣営をつくり、主要人物を集めて作戦会議みたいなものを行っていた。

ちなみに、この村の村長とか、そういうお偉方の人達は……もう何ヶ月も前に逃げたしちゃったらしい。なんて無責任な。

そういうわけで……実質今は、自治会みたいな感じでやりくりされてたらしいんだけど……その中で防衛担当である、楽進、于禁、李典の3人が、この会議の中心になる。

で、そこに……村の自警団の人と……ついでに（？）僕と愛紗と桃香と鈴々。

「偵察に出した仲間の報告だと……山賊たちの数は、数百人はくだらないらしい」

と、重々しく口を開いたのは……楽進。

その両隣、いつものほほんとしてる于禁と李典も、今回ばかりは思案顔だ。

「それに対して……われらの兵力は、せいぜいその半分がいいところ、か……」

「うー、さすがに厳しいの……」

「畏ありつたけ張っても、正直厳しいで、これ……」

聞くとところによると……盗賊たちの到着はおよそ1刻後とか。1刻……現実世界の単位に直すと……確か、2時間くらいだ。

どこから攻めてくるかはわかってるらしいから……それまでに設備を整えて、正面から迎え撃つらしい。小細工を弄してどうにかなる数じゃないんだとか。

……ホントに切羽詰まってるな……。

李典のトラップで少しは削れるかもしれないけど……逆に怒らせちゃったら元も子もないし……うーん、これま難しい。

すると、会議のさなか……楽進が、ふと僕らの方を見て言った。

「みつか……じゃなくて、明久殿。あなた方は、今のうちに、むらの裏にある山道から逃げてください。これ以上……巻き込むわけには行きません」

目を真っ直ぐ見て言うてくる楽進。

まあ……彼女のまじめな性格を考えれば、当然の配慮だろう。

最初の出会いが、そもそも『山賊に間違えた』ってやつだったんだっけ。

それだけでも、失礼だった、と思ってた相手に……あろうことが、山賊の撃退まで手伝ってもらった結果となったわけだから。楽進、ちよっぴり僕らに対して遠慮気味。

や、別に結果的に襲われなかったし、罠にも引つかからなかったから、別に僕らの方は全然気にしてないんだけどね……？

そんな感じで、楽進は僕達にも、今のうちに避難するように指示してきたんだけど……

……僕達のもとの目的が目的だし、そうでなくても愛紗と鈴々、それに桃香は『そういう性格』なわけで。

「いや……楽進殿、我々もここに残って戦おう」
「……な……っ!？」

目に見えてびつくりしてる3人。

しかし……愛紗たちは、さも『当然』とでも言いたげに堂々と構えている。

ま……当然か。彼女達、こういう現実を無視できなくて立ち上がったんだもんね。

「な……何を言っているんですか!？ このままここにいたら危険です!」

「この前とは規模がちゃうねんて! いくらなんでもあかんよ!」
「気持ちは嬉しいけど、ここは避難してなの!」

口々にそう言ってきてくれるけど……そのくらいで意見を変えるほど、桃香達は単純じゃない。……御使い云々の一件で、僕はいやと言っただけを思い知ってる。

どうにか説き伏せようとしていた楽進たちも……最後にはしぶしぶ折れた。

結局、愛紗と鈴々は……楽進たちと強力し、自警団を率いて戦う小隊長……っという感じのポジションに落ち着いた。

……で問題は、残る2人のポジション。
や、ぶっちゃけ、僕と桃香なだけだね？

「ご主人様、桃香様、お2人は危険ですので、後方で下がって待っていてください」

「えー! でも、私達も何か手伝いたいよー!」

「んー……まあ、確かに怖いけど……武器運んだりとか、雑用系の仕事なら……」

最初の戦いでもそうだったけど……愛紗達が戦ってるのを知って後方で待ってるのって、落ち着かないわけで……何か仕事割り振ってくれた方が、ぶっちゃけ気が楽。

そう、桃香と僕は言い張ったんだけど……頑として許してくれない。雰囲気はもう、戦場だもん、愛紗。

「前線付近は、流れ矢が飛んでくる危険があります。お聞き分けてください」

「そうですね。我々武人なら、流れ矢程度叩き落せますが……体つきなどから判断させていただく限り、武に優れている……とは言えない様子。ここはお下がりを」

うっ、鋭い……っていうか、矢、叩き落とせるの君達？　すごいね？

そして楽進……体見ただけでそんなことわかるんだ？　重ねてすごい。

そう説かれつつも、僕と桃香がどうにか食い下がっていると……

「た……大変だ！　予想より早く、盗賊共が襲ってきやがった！」

「……っ！？」「」

いきなり飛び込んできた伝令の人の口から、そんな言葉が。……
ってマジ！？

「くっ……まずい、今すぐ配置につかねば！　鈴々！」

「真桜、沙和、私達も行くぞ！」

「あ、あの……私達は……」

「ですから桃香様たちは下がっていてください！」

愛紗、一喝。もう、雰囲気が戦場ですね。

まあ、仕方ないか。迷惑かけてもあれだし……と、僕が諦めて一歩下がるけど、桃香はまだいい足りないらしく、食い下がる。

「でもでも、私、愛紗ちゃん達に任せて待ってるだけなんて……」

「っ……ですからここは……」

「我々に任せてください！」

と、痺れを切らしたらしい愛紗と楽進が、強硬手段よろしく……突き飛ばした。

……なぜか、桃香じゃなく……僕を。

「いや僕何も言っただけであつ！？」

「ごん！！」

僕が後頭部を床（木造）に強打する音

いだあっ！？　何で！？　何で僕なの！？

落ちかけている意識の中で……慌てる桃香の声と、走り去っていく愛紗たちの足音。ああ、人が悶絶してるそばで、けっこう重要なシーンが進行していく……。

家には……やはり落ち着かない様子の桃香と、痙攣気味にふるふると震えている僕が残されただけで、

しばらくして……やはりというか、

「……やっぱり……落ち着いてなんて、いられない……ほっとけないよ!」

そんな声が聞こえたあとに、すたすたと去っていく足音。多分、雑用その他の手伝いにいったんだろう。やれやれ……『ほっとけない』か……桃香らしい、優しい考えだなあ。

……けど、

「……僕の方は、ほっといていいの……桃、香……（ガクッ）」

ちよつとだけ、涙が出た。

「くっ……こうまで数が多いとは……」
「ああ……いい加減、厄介だな……」

簡易的に整えた陣営で、私と関羽殿は談義を交わしていた。

大通りに作った5つの防衛線のうち、3つ目までを突破されてしまった状態。

しかも、最後の1つは、資材も時間も足りなかったがゆえに未完成のものだし……このままでは押し切られて、村の中への進行を許してしまいかねない……！

しかし、どうにかしようにも……正直、数の暴力が相手ではいかんとも……

「ほ……報告！ 4つ目の防衛線が突破されました！」

「……っ！」

「く……まずいな……！」

横にいる関羽殿も、顔をしかめる。

これで残るは、ほとんど未完成の5つめのみ……これ以上は本気でまずい！

沙和と張飛殿が前線に出ているが……さすがに兵の差がある。全て抑えきることはできず、いくつかの部隊がすり抜けたようだ。

こうなれば……真桜を呼び戻し、私と関羽殿で当たるしかないな……。
と、そう思ったその時……

「愛紗ちゃん、楽進ちゃん！」

「……っ!？」

「と、桃香様!？」

通りの向こうから……手を振って、申し訳なさそうにしつつ……走ってくる劉備殿が見えた。なっ……何でここにっ!？

ここは危険だと、（明久殿を）突き飛ばしてまでわからせたというのに……

横にいる関羽殿も、息を呑んでいた。

くっ……その優しい心根は賞賛に値するものだろうが……「ここで
ははっきり言って邪魔だ、今度は縛ってでも安全なところに……

……その時、そのさらに背後に……信じられないものが見えた。

「なっ……!」

「と……桃香様、う……後ろっ!」

「愛紗ちゃ……え？ 後ろって……えええっ!？」

驚く劉備殿の後ろから走ってくるのは……なんと、まだ防衛線で
食い止めているはずの盗賊たちの一団だった。バカな、なぜ村の中
にっ!？

まさか……別働隊か!？ 本隊をおとりに少数で内部に潜入し、
内部から突き崩すための……くそっ、やられた! こしやくなまね
を……

いや、今はそれよりも、劉備殿が危ない!

劉備殿を守ろうと、関羽殿はすでに駆け出していたが……到底間
に合わないだろう。距離に差がありすぎる……たどり着く前に、劉

備殿に賊の凶刃が届いてしまう。

ここは私が気弾で……しかし、この距離であたるか!?

しかし、ダメで元々……私が拳を構えようとしたその時、

「だあああらつつつしゃあああああ

っ!!!」

ひゅるるる……ドゴォン!!!!

「「「!!?」」」

そんな声とともに、どこからか……特大の荷車が宙を舞って飛来し、劉備殿に迫ってきていた盗賊達に真上から直撃した。な……何だあ!?

当然、盗賊たちは荷車に押しつぶされて全滅……と、思いきや、1人運よく生き残っていた。端の方にいたために……直撃を免れたようだ。

と、そこに……

「ライダー・キック!!」

「ぶげらっ!」

土煙の中から飛来した吉井殿のとび蹴りが炸裂し、その賊を昏倒

させる。

ま、まさか……今の荷車は吉井殿が！？　その細腕で……どうやって！？

いやそんなことより……なぜ吉井殿までこんなところに！？
当然ながら、私のみならず……関羽殿や劉備殿も、驚いていた。

「ご、ご主人様あ！？」

「ぜー……ぜー……どうも！　意味もなく昏倒させられた拳句、愛紗たちをほっとけなくて駆け出した桃香にまでほっとかれた吉井明久、ただいま参上！」

「「「あうっ！」「」」

ぐさっ

×3

い、今のセリフに胸が痛い……

関羽殿と劉備殿も同様の反応をみせていたが……すぐに関羽殿が立ち直り、劉備殿と吉井殿を見据えて怒鳴りつける。

「お……お2人ともなぜこのようなところに！？　危険ですから楽進たちの家にいるようにと申し上げたでしょう！？」

「あう、ごめんね愛紗ちゃん……でも……」

「何言ってるんの愛紗！？　あそこ余計危険だったでしょーが！」

「「「え？」「」」

劉備殿のセリフをさえぎって発せられた吉井殿の言葉に……我ら一同、目を丸くする。

危険……だった、とは？

「だからね……」

S i d e 明久

はい、ここから僕の回想始まります。一同、注目！

一応、言いつけどおりに家でじっとしてた……というか、愛紗と楽進による脳震とうが思いのほか深刻で、動けなかった僕は、楽進の家で自然治癒を待っていた。

しかし……その時、どうやら本隊とは別に村に潜入していたらしい別働隊が表で暴れだしたのが聞こえてきて、やばいどうしょコレ？　とか思ってたわけ。

その後、どうにか回復した僕は……このまま家の中にも殺されるな、と思つて外に出た。家の中にいたら、襲われたとき退路ないし。

でもつて、召喚獣を呼び出した後……今みたいに重いもの片っ端から投げつけて、賊を一掃したのでした。幸いザコばっかだったし、まとまつたたからなんとかなった。

それにその途中、資材取りに来たらしい李典たちが合流して加勢してくれたしね。

その際、李典に召喚獣見られちゃったけど……うまくはぐらかしてここまで来た。

はい、回想終わり。時間軸戻しまーす。

「と、いうわけで、家にいる方が危険でした。以上」

「も、申し訳ありません……浅慮でした……」

「あ、いや別にそういう意味で言ってるわけじゃないんだけど……」

ため息はつきつつも、楽進や愛紗をねぎらってそう言っておく。

ちなみに、今も僕の肩にちょこんと乗っかっている僕の召喚獣に聞
しては……『後で説明するから勘弁して』って言つといた。

と、

「愛紗ー！ ごめん、もう防衛線無理なのだ！」

「最後の1つも突破されちゃったのー！」

「あかんわ風！ 関羽さんも！ 修繕まにあわへん！」

前線から、負傷した兵士の皆さんを引き連れて戻ってきた鈴々た
ちが合流。本人達はいたいした怪我ないみたいだけど……

しかも……超凶報もってきた。うわ……マジっすか？ 防衛ライ
ンやられたって？

すると、それを裏付けるように……その後ろの方に、砂煙を上げ
て走ってくる盗賊の一団が見えた。しかも……数多っ！？ ちょ……
…これ本気でまずくない！？

愛紗も、楽進も、齒軋りをしてそれをにらみつけている。

自警団、あと兵力30%くらいかな……のこりは傷兵ばっかだし、
戦力としては期待できない。愛紗達が全員戦線に加わっても、正直

厳しいんだろうな……。

けど、ここで逃げたら村は壊滅。食料も金品も、何もかも奪われる。

まあ……殺されるよりかは、マシかもしれないけど……。

「あ、愛紗ちゃん……ど、どうにかならないの！？ このまま負けちゃうなんて、村を守れないなんて……あんまりにも……」

「……お気持ちはわかりますが、桃香様……何もかもが圧倒的に不足しています。これ以上は、いくらなんでも……防衛しつつ、村人を逃がすしか……」

「そんな……」

泣きそうな桃香をなんとかさとしつつ、愛紗は兵達に戦闘準備をさせる。

……桃香の言うことはもっともだけど……正直、実行は無理と言わざるを得ない。

だって、盗賊たちがここまでくるまで……もう残り十数分だろう。その間に新たに防御壁や、一発逆転の攻撃手段なんか、用意できるわけ……けほっ、ないし。

やっぱりここは……けほっ。愛紗のいうとおり、逃げるしか……げほげほっ！？

……って何ださつきから？　なんか、けむい………ん？

見ると……周囲に、何やら白い煙が立ち込めていた。………何だこれ？　煙幕？　まさか……賊の別働隊が奇襲を？

の袋ありつたけ集めて！ 今すぐ！」

そして、数分後。

混乱しつつも……兵を動員し、小麦粉の袋は集まった。
新品のものもあるけど……去年から使わないまま、捨てることも
もったいなくてできずに古くなっちゃったっていうのが結構多くあ
ったので、結構な数が集まった。

よし……これだけあれば、足りるだろう。上手くいくかもしれな
い。

一応、愛紗たちは兵に指示を出し……盗賊たちの迎撃用に陣を組
んで待ち構えている。

できれば……僕の作戦が上手くいって、この陣形使わないで終わ
らせたいけど……。

でも……やってみなきゃわかんないし、保険ってことで！

「吉井殿！ 前方に敵確認、後3分もしないうちにここまで来ます
！」

「っ……ご主人様、やはり後方に下がられた方が……」

「大丈夫、この作戦が失敗したらきちんと下がるから、ね？」

「は、はい……」

愛紗を納得させて……さあ、いよいよ作戦開始だ！

「試獣召喚――！」
サモン

ポンッ！

僕の召喚獣登場

呪文を唱え、召喚獣を呼び出す。

その際、幾何学模様の光と、突如現れたちっちゃい僕に、風たちを含む兵達のほとんどが驚いてたけど……無視。じゃ、いくよ！

「いくよ楽進、せーの……そーれえっ！！」

「了解です、はあああっ！！」

どひゅんっ！！
投げる

僕の召喚獣が思いつきり小麦粉の袋を

ひゅるるる……
でいく

小麦粉の袋が盗賊の皆さんの所に飛ん

ばしゅっ！！
弾を放つ

楽進がその袋に当たるようにエネルギー

ばふおんっ！！

楽進のエネルギー弾が袋を直撃して爆砕

……で、当然のごとく、中身の小麦粉が周囲に飛び散ってカオスなことに。

「どわああっ！？ な、何だぁ！？」

「け、けむいつ！？ しかも前見えねーっ！？」

よし成功！

小麦粉煙幕のせいで盗賊の皆さんの速度が落ち、さらに前が見えないために、見方同士で前後衝突する音なんかも聞こえてきた。この調子っ！

「せいっ！」

「はあっ！」

「そいやっ！」

「はああっ！」

これを繰り返し、同じ要領で、ちょっとだけ着弾地点をずらしながら、楽進と僕（の召喚獣）で小麦粉煙幕を打ち込んでいく。

ほどなくして……大通り全体が真っ白な煙に覆われた。

「く、くそ……け、けむいつ……！」

「い、息が、苦し……！」

「なっ、ナメたまねしやがって……！」

そんな苦悶と怒号の声が、盗賊さん達のほうから聞こえてくる。

さて……ここまでが準備段階。

これだけだと、単に足を鈍らせて時間を稼ぎ、戦闘開始をちょっと遅くしただけだ……残念ながら、本当の目的はまだこれからなんだなあ、これが。

今、大通りは……こちらから追い風だっていうことと、両側に家々が並ぶこともあって……宙を舞う小麦粉が充満。数メートル先がやつと見えるくらい。

盗賊団の皆さんは……全体がその小麦粉濃霧の中にいる。うん、理想的な状況だ。

さて、と……仕上げだ。

僕は合図して……横にいる于禁から、赤々と燃える火がとまった薪を受け取った。

そしてそれを、僕の召喚獣に持たせて、投擲の体勢をとらせる。

……さて、わかったんじゃないかな。僕が何をするつもりか……

「よっしゃあ、うなれ僕のギャリック砲!!」

せめてもの演出にと、某野菜宇宙人の王子の決めポーズをとりながら、僕の召喚獣が燃える薪を勢いよく投げつけた。低角で、なるべく遠くに。

そして、その薪の火が、小麦粉スモークの端にまで差し掛かった瞬間、

シュボツッ!!

その端から勢いよく火の手が上がり……盗賊たちのいる方向に向かって、凄まじい速さで勢いを増しながら、灼熱の爆炎が突進していく。

ドゴオオオオオオオン！！！！

「「「！！！！？」」」

町の人達も、盗賊たちも……皆が一樣に、これ以上ないくらいの驚愕を浮かべた。

僕が今起こした……『粉塵爆発』に。

はい注目。知ってるかどうか知らないけど、空气中に可燃性の粉塵が充満した状態で火を起こすと、それが次々に引火・燃焼し、大爆発を起こす……その現象を『粉塵爆発』と呼びます。

その爆発的な炎に包まれ、盗賊たちが次々に吹き飛んでいく。

結果的に……街道全体が、数秒間だけ火の海になり……そこにさしかかっていた盗賊達がほとんど全滅した。

お、思った以上に威力高いな……前に見た映画の知識が役にたった……。

こ、これで、とりあえず盗賊連中、兵力的にも精神的にも結構な打撃になったな……なんて、僕がちよっとだけ安心して、あとは愛紗達に任せて下がるうとしたその時、

……予定外のこと起きた。

……いや、起こしやがった。……愛紗が。

下がろうとする僕をなぜか引きとめ、軍の最前線に連れて行く。
わけもわからないまま連れて行かれた僕の眼前に……爆発から運
よく生き残りつつも、あまりの超常現象を目の前にして戦意喪失気
味の盗賊さん達が映った。

……そして……僕は、そこにいたって、ようやく悟った。

愛紗が……何をするつもりなのか。

失敗は……3つだ。

1つ目……こんなトリッキーな策を、愛紗達がいるそばで、かつ
衆人環視の状況下で実行してしまったこと。

2つ目……粉塵爆発は、全体が一気に爆発するのではなく……引
火した端っことから、高速で燃え広がるように、炎がほとばしって
く見た目をとっていること。

見方によっては……僕の手元から炎がほとばしったみたいに見える。
る。

そして3つ目……調子こいて、ベータなポーズなんかとったこ
と。

気づいた時にはもう遅い。愛紗の演説が始まっていた。

「見たか下郎共！ わが主、吉井明久様の神通力『ぎやりつくほう』を！」

「ぐ、ぐふっ……な、何なんだ今のは……！？ お前ら、一体……！？」

盗賊の1人がそう言った所で、愛紗が僕にしかわからない程度に不適に笑う。

「ええい静まれ静まれいつ！ この『召喚獣』が目に入らぬか！」
「あ、愛紗！？ ちょっと待……」

しかし、手遅れ。

「こちらにおわすお方をどなたと心得る！？ 恐れ多くも、乱世を鎮めんがために天より舞い降りし『天の御使い』、吉井明久様にあらせられるぞ！」

言っちゃったあ

っ！！？

しかもこんな大々的に！ ちょ、どこの水戸黄門！？

おそらくとつさに思いついたんだろうけど……愛紗の演出センスが本気で憎い。

ばかんとしている、盗賊および民衆の皆さん。やばい、この後の展開が目に見える。

で、次の瞬間、

「一同！ 御使い様の御前である……！ 図が高い、控えおろっ
ッ！」

「は、ははあ

っ！」

一瞬後、全員土下座。村人、盗賊問わず。

気分はどこぞの副将軍。でも全然嬉しくない。

や、やつちゃった……『粉塵爆発』なんて超常現象見せてる分、
前の村なんかよりよっぽど洒落にならない事態に……っ！

今や僕は、摩訶不思議な神通力で、たった1人で盗賊の大量に殲滅し、残る者達の戦意を喪失させて村を救ったスーパーヒーローって位置づけになってしまった。

この先……多分、普通の生活送れない。少なくとも、この村にいる間は。

どうして……こんなことに……っ（号泣）！！

第7話 襲撃と名乗りとギャリック砲（後書き）

……さらに追い詰められる明久でした。ちゃんちゃん。
不憫な上に不幸で……なんかもう泣けてきます。

そして、なんか思った以上に『水 黄門』のセリフがマッチしたの
で、愛紗に助さん角さんを兼任して啖呵切ってもらいました。……
意外と似合ってる？

次回、三羽烏編ラスト（の予定）です。

第8話 真名と火鍋と川下り（前書き）

今回、三羽烏編ラストです。

どうぞ。

第8話 真名と火鍋と川下り

S i d e 明久

あー……もう！ あれからもう！
何、言ってる意味わかんないって？ 察してくれ。

盗賊さん達を、ギャリック砲という名の粉塵爆発で滅殺した後、僕はあえなくヒーローに祭り上げられてしまいましたのでした。
当然……普通の待遇・普通の生活なんかさせてもらえるわけもなく……村で一番上等だっという宿屋にタダで泊めてもらったり、料理も色々と豪華なもの食べさせてもらったり……しかもなんか、礼金まで（ムリヤリ）受け取らされて……はあ。

その流れで、『ずっとこの村にいてください！』とか言われたりしたんだけど……さすがに無理です。

これ以上滞在するとマジでそうなりそうな気がしたので、明日出発することにした。

現在、

場所…… 凧の家。

状況…… 鍋パーティ。

最後の夜は皆仲良く、庶民的にわいわい騒ぎたかったので、こんな感じで凧の家に集まりました。

「いやー、しかしホンマ、なんちゅーか……長いよーで短かったなあ」

と、中央に置かれている鍋から、しらたき（に似た何か）をとって食べる真桜。

その横には、豆腐が熱くてハフハフ言っている沙和と、大量の七味唐辛子を自分の取り皿に投下している凧。……辛い好きなのか？

あ、今のでわかったと思うけど……3人共、真名を許してくれました。楽進が凧、李典が真桜、于禁が沙和だつてさ。

桃香達も、きっちり真名を交換して……僕だけ、なんか疎外感。仕方ないじゃん、真名とかないんだもん。

その代わり……ってわけじゃないけど、凧たちの僕に対しての呼称が変わった。

前は『吉井殿』とか『吉井はん』とか『吉井くん』だったけど、今は……

「んぐ、んぐ……なあ隊長、そのシイタケもろてええ？」

「……いいけど……その呼び方、どうにかなんない？」

「？ 何や、やっぱ嫌なん？」

いやその、嫌っていうか………はあ、ため息。

ええとですね、これはどういふことなのかっていうと……話は数日前。

というか、盗賊ぶっ飛ばした日の夜。

はい、回想入りまーす。

『御使い様！ 村人達から、受け取って欲しいと野菜や果物が届いてます！』

『ねー御使い様ー！ その服、意匠が変わってて興味あるんだけど、見せてなのー！』

『なー御使いはん、さっきのどえらい爆発の原理教えてんかー？』

『風！ 沙和！ 真桜！ だからその呼び方頼むからやめてっば！ 普通に『明久』とかでいいから！』

『しかし、村の大恩人に対して礼を失するわけには……』

『村全体で、御使い様には最大限丁寧に接するように、っていうのが暗黙の了解になってるから……いくら了承もらってても、気安く呼べないの〜』

とまあ、最低限……敬う気持ちが見られる呼称でないとダメらしい。

……話的内容的に、沙和と真桜は……敬ってるのは、呼称だけって気がするんだけど。そこまでフランクにできるなら、今更呼称ごとききにせんでもよかるうに。

と、そこで真桜が……

『あ、せやったら……こんな呼び方どやろ？ 御使いはん、戦いの後の復興とかで、天の世界の知識生かして、うちに色々指示だしてくれはったやん？』

ああ、まあ……マンガ・アニメ・ゲームの聞きかじりだけだね。

で……それが？

『そんなときウチな、まるでウチら、御使いはんの部下見たく思えてん。せやから……』

……で、僕を尻たち三人の上司に見立てて……『隊長』だそーです。安直。

まあ実際……その後も、3人して僕の補佐というか……手伝いみたいなことしてくれてたし、似たようなもんか。『御使い様』よりはいいしね。

小学生のカッコつけみたいで、なんていうか……ちやちいけど。

「あー……明日で隊長ともお別れかあ、なんや寂しーなー」

「それなら……もぐもぐ、真桜達も鈴々達と一緒に来ればいいのだ！」

「いや、残念だがそれは無理だ。我々3人はこの村の防衛が仕事だからな……」

「だから、故郷の村を見捨ててどこかには行けないの……」

「あ、じゃあ仕方ないね」

ちよつとがっかりしつつ、山菜をほおばる桃香。旅の仲間が増えることを期待してた見ただけど……そういう事情があるんじゃない、仕方ないよね。

「しかし、ホンマ寂しゅうなるな……！　なあ隊長、隊長って確か……桃香はん達とは別の部屋借りて泊まっとるんやろ？」

「？　そうだけど……」

せつかくタダなんだし……そんな時まで女の子と同じ部屋で……
っていうのは、さすがに色々まずいしね。主に僕の理性のリミッタ
ーとかが、色々。

それに、部屋はちょうど3人部屋だったから、桃香、愛紗、鈴々
で一部屋使って、僕は他の部屋……っていうのが、一番バランスい
いんだよ。うん。

で、それがどうかしたの？ そんなニヤニヤ笑って……

「えつとなー……隊長、今晚、このあと3人で隊長の部屋行って寝
てええ？」

「「「な！？」」「」」

「わーお！」

「にゃ？」

驚く桃香、愛紗、凧。若干驚き方が違う沙和（悪ノリの気配）と、
きよとんとする鈴々。

「真桜！ お、お前、何をいきなり、ご主人様に何を……」

「？ 別にいいけど？」

「「「ええっ！？」」「」」

何か言おうとしてた愛紗と、横であわあわ言ってた桃香が再び驚
く。あと凧も。

？ 僕の返事がそんなに意外だったんだろうか？

桃香達が慌てるような顔になってるそばで、からかうような顔の
沙和と真桜。

「あはははっ、隊長、意外と積極的なのー」

「にひひっ、ほな、遠慮なく行かせてもらおか。なあ、凧？」

「えええっ！？ いや、そんな……いくらなんでもお前達、そんな

いきなり……」

「まあまあ、3人仲良く来なよ。それじゃ僕は今日は、他の部屋借りなきゃね」

「「「へ?」「」」

瞬間、今までテンション高く話していた3人の目が点になる。
? 何だの?

「え? た、隊長? 他の部屋って……?」

「ウチら、泊まり行ってもええんちゃうの?」

「? うん、三人で泊まりにすれば? 僕は今日は他の部屋で寝るから」

「「何で!?!」」

いや、沙和、真桜、『何で』って……

「年頃の女の子と一緒にの部屋で寝るのはまずいでしょ? 一応僕、男だよ?」

「「「……」」」

「?」

「……もしかして、ご主人様……」

「単に……真桜たちが、『私達の泊まっている宿』に泊まってみた
いのだ、と解釈なさったようですね……」

? 違うの?

いや、まあ……無理ないよね? この村で最高級の宿屋だし……

設備も充実してるところだったし。女の子なら、一度はそいいうちに泊まってみたいと思うのも。

ちようど3人部屋だし……最高級3人部屋は、宿にその2つだけだったから、自然と僕は他の部屋を借りることになる……ってわけだね。

「……アカン、色々と想像の斜め上行かれとる」

「完全に肩透かし食らったの……」

？ どうしてみんな、なんか疲れたような顔になってるんだろ？
風が妙にほつとしてたような表情をしてる理由と一緒に教えてほしいけど……

「と、ともかくほら……みんな、食べよ？ ね？」

なぜかごまかすように、食事を勧める桃香。……？ まあ、いいか、食べよう。

……ってあれ、もうない！？ くっ……会話にあんまり参加してこなかった鈴々か！

「あちゃー、もうないね……」

「鈴々はまだ食べたりないのだー！」

「いや、一番ぎょーさん食ったやん」

つつこみつ、真桜は新しい鍋を用意する。……ん？

今度のは……今までつついてた鍋とは違う感じだな？ 材料とか、出汁とか……

「『火鍋^{ほうこ}』ゆーねん。ちょっと辛目の味付けやけど、美味しいで？」

「うん！ あったまるし、辛いから汗とかいっぱい出て、美容にも

いいのー！」

美容・おしゃれ命の沙和は、そう言っただけでいい。なるほどね、発汗作用か。唐辛子のカプサイシンとかかな？するとおもむろに、凧が前に身を乗り出して……

「じゃあ、私が味付けを……」

「だめなの」「アカン」

「ええっ!？」

両サイドから同時に否定されて凧がショックを受ける。どしたのいきなり？

「？ 凧ちゃんに味付けお願いしないの？ さっきのお鍋も、出汁とかは凧ちゃんにやってもらってたのに……」

と、桃香。

そう、さっきの鍋だけど……入れる食材の指定とか以外の、いろいろ細かい調理は、実は凧にやってもらってた。ここ凧んちだし、ホストってことで。

それがまた上手で……美味しいんだ。凧って、料理上手なんだね？なら、その『火鍋』ってのも凧に頼めば……

「いや、アカンねん隊長。凧は確かに料理は上手いんやけど……」

「辛い料理だけは任せちゃダメなの……」

「え？ そうなの？」

「せや、凧自身がえっらい辛党やさかい、凧の味覚に任せて作ったらウチらが食えるもんでけへんねん」

「なっ……失礼な！」

顔を赤くして反論してくる凧の手には……赤唐辛子と、その粉末と、七味唐辛子と、一味唐辛子と、青唐辛子、それにラー油。山椒っぽい木の実も少し。

……ま、まあ、種類のには若干多い気がするけど……ブレンドで味をよくするなんて、よくあることじゃない？ そんな、食べられないほどのものには……

「ちなみに隊長、凧がもつとる調味料、凧の一回分やで」

「沙和、味付けお願い」

「はいなの」

「隊長まで！？」

がぁん、とショックを受ける凧の手から、沙和が赤唐辛子とラー油だけを失敬して鍋に加えていた。ごめん、凧、僕らは人間なんだ。

「うう……美味しいのに……」

「凧基準やったら、木イチゴ感覚で唐辛子丸かじりしてもおかしいからアカン」

「？……普通に美味いぞ？」

「やっとなのかい！」

常識人だと思ってた凧の味覚に戦慄しつつ、僕らは沙和の味付けで火鍋を囲む。

うん、まあ……確かに辛いけど、これはこれで癖になる美味しさだと思った。けど……後で雑炊とか作るには、向かないかな、この味付けだと。

その火鍋にも……凧は自分の分に、後から大量の香辛料を追加し

てた。いわく、『足りない』。

ちなみにその少し後、食い気が勝つたらしい鈴々が、風流味付けの火鍋スープを味見させてもらい……火を吹いた。

……恐るべし……辛党……。いや、そういうレベルでもない気がするけどね？

翌日。

風たちは、村の出口付近まで、僕らを見送りに来てくれた。

うーん……名残惜しくなるから、見送りは断ろうかと思ってたんだけど……まあ、最後だし、会っておくにこしたことはないよね、そう考えれば。

お土産に色々もらったし。

機械いじるのが趣味だつていう真桜からは、自作のカラクリ玩具オモチャをもらった。しかもいっぱい。しかも、よくできてるんだコレが。

……家においておくと、風に『ゴミだろ』と捨てられるんだとか。それなら、ってことで、僕らにくれたのだ。……スペース圧迫するのが目に見えてるなら、作らなきゃいいのに。

某仮面ラダーのカンドロドを思い出させるデザインだったけど、さすがに缶モードに変形はしてくれなかった。でも、面白いからいいか。

沙和からは化粧品。全員分。

でも、愛紗と鈴々がそういうのに興味なかったので、全部桃香と僕に流れた。いや、一応僕、男なんだけど……どうしろと？

で、風からは、香辛料一式。多い。

毎食使っても3ヶ月は余裕でもちそうな量だけど……風曰く『1週間分』だとか。

……彼女の味覚が割と本気で心配になった。

それと、味付けしてある燻製の川魚をいっぱい。あ、これは普通に嬉しい。味付けも、香草とか使った普通のやつだし。

まあ……ともあれ、そろそろお別れの時が近づいております。

「ふう……そろそろやね」

「これ以上は、なんかお見送りじゃなくなっちゃう気がするの」

村出て結構歩いたしね。ここまで、かな？

「なあ、桃香はん達……これからどないするん？ 平和な世の中作るゆーたら、いつまでも旅人ゆーわけにもいかへんやろ？」

「どこかに仕官されるのですか？」

と、真桜と風。

桃香が少し考えて、まだわからない、と答えた。

「仕官する先は、まあ……愛紗ちゃん達がいるから、正直困らない自身あるけど……私達は、あくまで私達のやり方を通したいからなあ……」

「せやったら……仕官やのーて、自分で勢力立ち上げるしかあらへんのちゃうの？」

「すつごーい！ もしそういうことになったら、沙和達、その陣営に入りたいのー！」

きゃいきゃいとはしゃぐ沙和……ってちよつとまった。君らこの村守るんでしょーが。

すると、その疑問に、風が説明を入れてくれた。

「あ、はい、今はそうですが……いずれは、私達も、どこかの勢力に仕官することになるかと思うんです」

「そうなのかー？ 村はどうするのだ？」

「それもちゃんと考えてるのー。この村ごと傘下に入って、軍や部隊を出して守ってもらえるようにすれば、大丈夫でしょ？」

「せやから、そんなくらいの力がある勢力やったら、ウチらも仕官したる思てんねん。ウチらかて、この乱世なんとかせなあかん思うしな」

そっか……風たちも、この世の中のこと考えて、自分達の将来のことを考えてるんだな……ニートやら ひきこもりやははびこってる現実世界じゃ、考えられないくらい立派だよ、君達。

けど……そうなると、もしかしたら次に会うときは、敵同士になっちゃうかもしれない……の、かな……？

「仕官の先によつては、そうですね……」

「できれば、そないなことになってほしゅうないけどな」

「あ、でもでも……もし桃香さん達が勢力を立ち上げて、沙和達を迎えにきてくれたら、万事解決なの」

そりゃ大変だ、急がなきゃね、なんて雑談をかわしながら……僕は道を歩いていた。

……と、

「……？ 何やる？ 何か忘れとるようーな気が……」

「？ 真桜、どうかしたか？」

「うーん……」

？ さつきから……ちょうど、村を出たあたりから……真桜が、ちょこちょこうんうんうなってるんだけど……どうしたんだろ？

そうこうしているうちに……

「それでは、私達はこのあたりで」

「ホントにありがとうなの！」

「達者でやりイヤ！」

と、真桜達の見送りを受け……僕らは、一行から離脱し、旅立った。

……真桜は、まだ何か引つかかっているようだったけど……まあ、そのうち思い出すだろう。忘れた頃に、ひょっこり、ね。

歩いていき、時折振り向くと……どんどん3人の人影が小さくなっていく。はあ……ちよつと寂しいな。

「いい人たちだったねえ……」

「ええ。願わくば……共にこの乱世、戦い抜いていきたかったです
が……」

「村のことが大事なら、仕方ないのだ」

「そういうこと。けどまあ、何ていうか……またすぐ、会えそうな気がするよ、僕は」

何でか、知らないけどね。そんな気がする。

そうだったらいいな、っていう希望も……入ってるかもしれないけど。

……………それにしても、

何だろう？ さっきから……真桜じゃないけど、僕も何か忘れてるような気が……

「……………あああっ！！ お、思い出したあっ！！」

「つつ！？ な、何だ真桜！？ 脅かすな！」

「び、びつくりしたの……真桜ちゃん、一体何？」

「あ、すまへんすまへん……ってちゃうわ！ アカン、隊長止めんと！ おーい隊長！ それ以上進んだらアカーン！！」

「？」

何だろう、真桜が何か叫びながら、こっちに走って来……

カチッ

……………ん？

なんだ、今、足元から……………嫌な感じの『カチッ』って音が……………

その瞬間、

ここ数分の間……………頭の片隅ですっと気になってたことの正体がわかった。

それは、数日前……………真桜……………じゃなくて、沙和が言っていたセリフ……………

『そ……………そうなの！ 油断してるとここに奇襲かけようとか、もうちょっと進めば事前に作つといた罠にひっかかるなーとか、武器持ってる2人は強そうだから凧ちゃんにまかせちゃおうとか、そんなこと全然これっぽっちも思っていないから警戒しないでなの！』

『……………もうちょっと進めば事前に作つといた罠にひっかかるなーとか……………』

『罠に引っかかる……………』

引っかかる……………か……………あああつ！？

そ、そつえばこの道、僕らが最初に通ってきた道と同じ道……………

直後、僕の足元から、巨大な網が現れ……えええええっ！？
な、何だあああ！？

「わああああああ！？」

「ご、ご主人様！？」

桃香の驚愕の声が耳に糸を引く中……次の瞬間、僕は……な
ぜか、上空高く放り投げられていた。え、ちょ、何コレ！？ 何が
起こったの！？

「しもたー、遅かったっ！」

耳に届く、真桜のそんな声。どういう意味だよ！？

「ごごごご……ご主人様あああっ！？ いいい、いずこにいい
っ！？」

「な、何アレ！？ なんでご主人様が吹っ飛ばされちゃったのお！
？」

「にやにあっ！？ 大っきいパチンコみたいな罠なのだ！？」

「ま、真桜ちゃん！？ ま、まさかこの罠、あの初日の……」

「あう……あの後、片付けるの忘れとった……」

「こ、この大バカ者！！ た、隊長が、隊長が飛んでいくっ！！」

ああっ、やっぱり！

これ……最初に会った日に、真桜が僕達を山賊だと勘違いしては
つといた罠だろ！

あの後片付けもしないでそのままほっとして……で、今になって
僕が引っかかったってわけかいっ！！

しかも何この罨！？ 巨大パチンコで超長距離吹っ飛ばすって…
地味だけど怖すぎる！

っていうかコレ……落下の衝撃がハンパないことになる気が！？

「あああああああ ……………」

「ま、真桜どうするんだ！？ あの高さから落ちたら…………」

「隊長、死んじゃうかもしれないの！」

「あ、そのへんは大丈夫や。だって…………」

次の瞬間、

どっばおおおおん！！

……………「ばばばばば 水中！？」

もしかして…………川に落ちた！？

「川に落ちるように、着地地点計算しとったからな」

「そ、そうなんだ…………よかった、ご主人様…………」

「…………せやけど……………」

ざざざあああ つー！

「流れが速あああああ つー？」

「……………もう二度と攻めて来れへんように、どっか遠く行っても
らお思て、このあたりで一番流れが急な川、着地地点にしとったか

「らなあ……………」

「「ええええええ」

「っ！！？」」

そんなとんでもないセリフが聞こえましたけど！？

……………つて、ああっ！ 木々の向こうに！ 木々の向こうに愛紗たちの姿が見えた！ けど、無慈悲までの流れの速さでどんどん小さくなっていく っ！！

向こうも僕に気付いたみたいで、慌ててUターンして追ってくるけど……………もう、手遅れだった。

「「ご主人様ああ っ！！」」

「お兄ちゃああ ん！！」

「「隊長おお っ！！」」

「うわああーんっ、こんなのないよ っ！！」

せめてもの抵抗にと張り上げた声も……………ざあざあとうるさい激流の音にかき消され……………僕は、まだ見ぬどこかへ流されていった……………。

第8話 真名と火鍋と川下り（後書き）

……とまあ、こんな感じで。

例によってグダグダのまま、明久たちと三羽鳥の別れとなるのでした。ちゃんちゃん。

さて、それと同時に……自分がなぜ彼女たちをこの段階で登場させたのかお分かりいただけたと思います。

そう、ズバリ……明久を『隊長』と呼ばせるためです。

そこ、手段がムリヤリとか言わないで下さい。自分でもわかってますから。

『真』はルートによって死人が出る出ないだけでなく、呼び方まで変わっちゃいますからね。

桃香たちの『ご主人様』しかり、風たちの『隊長』しかり……

そのへん、調整したかったんです。

さて、次はどうなることやら……ってかその前に、明久がどこに流れ着くか、かな。

ではこのへんで。和尚でした。

第9話 山小屋と人魚と三人の少女（前書き）

さて、新章突入……じゃないですけど、場面が変わりますね。
でもって、性懲りもなくまたオリジナル展開です。

今度、明久が会えるのは、果たして誰でしょう……？

第9話 山小屋と人魚と三人の幼女

Side 三人称

ある日、ある小川

膝の下ほどの深さのその川で……2人の少女が、手づかみで魚をとっていた。

……そんな時、どこか声がボーっとした感じで、片方がもう片方に話しかける。

「……ねー、流琉……」

「？ 何、季衣？」

「……あれ……何だろ？」

「？ 『あれ』 って何……えええええっ！？」

とった魚を籠に入れ、首を動かして『あれ』を見た少女は……そのまま絶叫した。

無理もない。なにせ、その視線の先にあつたのは……

「に……人魚……！？」

想像上の生き物でしかないはずの……上半身が人間、下半身が魚、その身に神通力を宿し、その肉を食べたものは不老不死の力を得るという……かの『人魚』……

……ではなく、

「あ、ちがう、よく見たら人間だよ、流琉」

「え……？ ……あ、ほんとだ、腰から下、大っきな魚に食べられてるだけ……」

「なーんだ……」

「びっくりした……」

……

「……って安心してる場合じゃないよ、助けなきゃ季衣！」

「う、うん！ なんかもうびっくりして色々飛んでたけど、コレ結構大変だよね！」

S i d e 明久

「……………知らない天井だ」

起き抜けにいきなり、某アニメを髭髯とさせるネタ発言をかましてしまった。

……いや、狙ったわけじゃなくてね？ 実際そうだったから……

え、何、このネタ前にもやった？ いいのいいの、そんなことは。

……って、そんなことより……「どこど」？

「……………？　どこかの、家の中……………」

どうやら……僕は、どこかの家の床に、掛け布団代わりの薄い毛布をかけられて寝かされているらしい。

それをめくって状態を起こすと……その部屋の様子がよくわかった。

なんというか……かなり質素な、山小屋が何か……って感じた。

ええと、たしか……真桜が後片付け忘れやがったトラップのせいで、ふっ飛んで、川に落ちて……って感じたはず。

それが、建物の中……ってことは、誰かが僕を運んだことになる。一応、自分の身なりを確認して……あれ！？　上着とズボンがない！？　Ｙシャツも！？

も、もしかして僕を助けたのって、追いはぎ……いや、だったら親切にこんな小屋に運んだりしないだろうし……

……と、

「（がらっ）あ、気がついたんですね？」

「！」

小屋の扉が開き、中から　　いや、『外から』か　　女の子が入ってきた。

その手には……僕の服。あ、もしかして……乾かしてくれてたのかな？

「あー、その……おはよう」
「あ、はい……こんばんは」

いきなりズレちゃったのは無視して。
見ると……窓の外が暗い。夜じゃん。

……ともかく、

「あー、ええと……助けくれてありがとう……でいいのかな？」
「あ、いえ、お構いなく。体……大丈夫ですか？」

僕の近くに腰を下ろしながら、少女はそう聞いてきた。

まだ、小学生か中学生くらいに見える……薄い緑色の髪のかわいい女の子だ。カチューシャみたいな感じにリボンをして髪をとめている。

服装は、かなり薄着……っていうか、布地が少ない。下の服にいたっては……スパッツ履いただけ！？スカートとかは！？

ちよ、いくら子供とはいえ、女の子なんだし……ちよっと目に毒

……

「？　どうかしましたか？」
「い、いや、何でも……」

れ、冷静にしろ明久。君はロリコンじゃない、君はロリコンじゃない。
ない。

今心の中にあるこれは、劣情とか色欲とかじゃない……かわいいものを愛でる心だ。

……誰だ、今、それでも結構ギリギリだって言ったのは。否定し

ないけど。

「あ、あのー……顔、赤いですよ？ ひょっとして、熱とかあるんじゃない……」

「い、いや、大丈夫だから！ これはその……詳しくは言えないけど、むしろ健全な……じゃなくて、健康な証と言ってもいいものだから、うん」

「？ は、はあ……」

困惑顔の幼女相手に必死で弁明する高校生の図。さぞ見苦しかろう。

と、

「そうですねー、まあ、健全な分まだマシだともとれますがー」

うお！？ びっくりした！！

い、いきなり後ろから声が……って、もしかして……ずっと後ろに誰かいたのか！？

そういえば、上半身起こしてから、左右と天井しか見てなかったから、気づかなかった……って、それにしたって気配なさすぎだろ。誰？

振り返ると、そこには、また違った、しかし今の娘と同年くらいの女の子。

ふわりとしたロングの金髪、半開きの眠そうな目、顔は……まだ幼さが残るけど、十分に美少女とっていい。法衣みたいな、ふわりとした感じの服に身を包んでいる。

そしてなぜか……頭の上に、どっかの万博のシンボルとして建てられた塔みたいな形の人形をちょこんと乗せている。……なぜ？不思議ちゃん？

何だろうこのいでたち……仮装大賞？

「どちらかといえば、お兄さんの服の方が仮装だ、と風は断言できますがー」

「うお！？」

すんなりそんなことを言い返してくる女の子。え、心読まれた！？そ、そっぴやさつきも、似たような声のかけられ方したような……

「とりあえず流琉ちゃん、お兄さんが何か言いたそうにしていますので、先に服を着せて差し上げましょうー。そのかつこうでこの部屋に私達と3人だけというのは、傍から見ていると少々絵面に問題があるかとー」

「え？……あ、っ！？」

言われて気づく。あ、ぼ……僕シャツとパンツだけじゃん。うわ、ヤバっ！確かにこんなとこ誰かに見られたら通報ものだっ！

「こ……ここに置きますねっ！ふ、風ちゃん、私達は出てよっ！」
「……………zzz」

寝た！？え、このタイミングで！？さっきまで話してたのに！？

「……………おおっ」

そして起きた。何この子!?

「ふ……………風ちゃん、早くう……………」

「はいはい」

と、今更ながら顔を赤くした、流琉と呼ばれていた子に引つ張られ……………もう1人の、風と呼ばれていた子も退席。たぶん……………真名だろうけど。

外に出ると、暗かった。当たり前だけど。

見ると……………焚き火を囲んで、3人の女の子が座っていた。

そのうち2人は、さっきの。……………もう1人は初めて見る子だった。

桃香より明るい桃色の髪を……………なんかこう、フライドチキンみたいな特徴的な形にまとめている。歳は、前の2人と同じくらいで……………服装は、緑髪の子と似て露出が多い。

胡坐あぐらですわり、焚き火にかざして焼いているらしい魚の切り身(?)を、口いっぱいにはおぼっている。なんていうか、雰囲気だけど……………元気で活発そうな感じ。

するとその子、僕に気づいたらしく、

「あ、人魚の兄ちゃん、起きたんだ?」

「は?」

開口一番……………何？

え、人魚？ マーメイド？ 何で？ 僕の下半身は普通に足だよ？
すると、緑髪の子が苦笑いしながらこっちを見て……

「あー、えつとですね……………」

かくかくしかじか。

「……………僕、そんなとを助けてもらってたのか……………」

聞いてびっくり。まさか溺れて気失ってる間に、魚に食われかけたとは……………マジで彼女達に感謝しなくちゃだな、これは……………

川で助けてくれた上に、魚からも助けられて、家まで運んでもらって、服乾かしてもらって、そして今……………彼女達お手製のスープっぽいものをご馳走してもらってます。

いやもうこれ、感謝しても仕切れないよ……………。

そして、緑髪の少女……………典韋ちゃんは、どうやら料理が得意らしい。いやー……………ありものの食材だけで簡単に作ってたって言ってたけど、このご飯すごい。美味しすぎ。

スープもそうだけど、この山菜のあえ物も、この焼き魚（切り身）も……………

「あ、ちなみに、今兄ちゃんが食べてる焼き魚が、兄ちゃんを食べようとしてた魚だよ」

……………あ、そうなんだ？

リアクションに困る事実だな……………。一步間違ったら、僕がこの、いま口の中で肉汁をあふれさせてる魚の、一部として吸収されてたかも知れないとは……………食物連鎖、怖っ。

「もぐもぐ……さすがは『煌魚』……風も初めて食べますが、おいしいですねー」

頭に人形を乗せた不思議っ子……程？ちゃんが、焼き魚をほおばりながら言う。

……『煌魚』？ この魚？ 聞いたことない名前だけど……珍しい食材なのかな？

「はい、というか……珍しい、なんてものじゃないですよ？ 煌魚と言えば、釣り人にとって、一生のうちに釣りあげることが夢だとされるほどの、貴重で高級な食材です！」

「そうですねー。大きさにもよりますが、立派な屋敷が一件建つほどの値段で取引される高級魚だとかー。かの始皇帝も、大好物だったと言われている魚ですよ」

「へー……そうなんだ？」

そりゃびつくり。思いもよらず豪華なもの食べちゃったよ。ちょっとだけ真桜に感謝してもいいかも。ちょっとだけね。

ていうか、お屋敷って……そんなマンガじみた食材が実在するのか。捕獲レベルどのくらいかな？

すると、幸せそうに焼き魚をほおばる彼女……許緒ちゃんが、

「それもこれも、兄ちゃんがこいつに食べられて流れ着いてくれたおかげだよね！」

「そうですねー。お兄さんがおいしそうないエサになってくれたおかげですねー」

「はい！ 本当にありがとうございますー！」

素直に喜べないんですけど。

あれか、僕が黄河あたりに飛び込むといい魚が釣れるのか。僕は釣りエサか。

「黄河に煌魚いないよ？」

「突っ込むとこ違くない？」

せめて僕を人間認定してよ。

「ま、まあ……それはともかく、今は食べましょう？　せつかくの高級食材ですし……明久さんも、食べて休んで、体を治さないといけないでしょう？」

うつ……典韋ちゃんの優しさが身にしみる……。

「お兄さんー、お気持ちはわからなくもなくもないこともなくないですが、何も泣かなくてもいいのでは？」

「？　どしたの兄ちゃん、何で泣いてるの？　どこか痛いのか？」

「……っ……いや、なんでもないよ……。大丈夫……」

いや……痛いとしたら……現代の乾いた社会ですさみきってしまっただ、僕の心が……

「大丈夫ですよ季衣ちゃん、『痛い』のはむしろお兄さんそのものですからー」

……程？　ちゃんの言葉、いちいち胸をえぐるね。

ともかく、僕は典韋ちゃん特製のディナーを堪能しつつ、ゆっくりしたら急にあふれてきた疲れを癒すことにした。

余談だけど……許緒ちゃん、鈴々レベルの大食いだった。
よく考えたら、その『煌魚』……僕を食べるくらいのサイズのだった……ってことじゃん？ それを、僕ら4人で残さず食べきった理由がそこにあるわけだ。

そんな会話の中で、僕は色々なことを教えてもらった。
いや……別に情報収集とかじゃなくて、世間話とか、身の上話の上でのレベルのことばかりなんだけどね。

まず、許緒ちゃんと典韋ちゃん。
2人ともすごく純粋で、歳相応に明るく元気ないい子。

許緒ちゃんはまさに鈴々と同じ感じの、とにかく明るくて元気な子。

典韋ちゃんは、明るさの中にも冷静さを併せ持っていて、話し方も敬語で丁寧だ。

そして2人とも……鈴々レベルの力持ち。さっきなんか、後で薪にする……っていう巨大な丸太、1人1本ずつ運んでたし。あれ、絶対成人男性5〜6人で運ぶ重さだよ。

この2人……同じ村の出身の親友で、とある用事でこの森に入ってたらしい。……その用事が何なのかまでは、教えてくれなかったけど。

続いて程？ちゃん。

どうやら、意外なことに……僕と同じ感じの身の上らしい。旅の途中で、連れとはぐれちゃったところを……この2人に会ったんだとか。

はぐれたのはこの近くの林道で、ここから近い村に向かえば合流できる可能性がある、っていうけど……このあたりは最近盗賊が出るようになって物騒だから、動くに動けないらしい。うわ、また物騒なとこだな。

なので、許緒ちゃん達2人の用事が住むまで待つて、彼女達の帰り道のついでに護衛してもらいながら、村に向かうつもりなんだとか。……あれ？……ってことは、許緒ちゃんと典章ちゃん、強いのか？

ちなみに、頭頂部の人形には『宝？』^{ほうけい}という名前があるらしい。

も1つちなみに、会話の中で僕についても聞かれたけど……上手くはぐらかして、ただの迷子です、ってことにしておいた。こんなときまで『天の御使い』の名前出して、変に祭り上げられたくはないしね。悪いけど、秘密にさせてもらおう。

その説明の際、許緒ちゃんと典章ちゃんは納得した顔してたけど……程？ちゃんのジト目の視線が、妙に気になった。いや、普段から半開きなだけ……。

ともかくまあ、盗賊が出るってことは、非力な僕も同様に動けない、ってことだ。

だったら……許緒ちゃんたちの『用事』が住むのをここで待つて、僕も一緒に村に送ってもらう他ないだろう。幸い、許緒ちゃん達も了承してくれてるし。

桃香達との合流どうしようかとかも……後でまとめて考えればいいか。

Side 三人称

食事の後片付けの最中……

明久と程？に隠れて、許緒と典韋は、2人でこっそりと話していた。

「ねえ季衣、どう思う？ 風ちゃんと明久さん……ホントに普通の旅人かな？」

「え？ それってつまり……2人がやつらの細作スパイか何かかもしれない、ってこと？」

「うん。だって……時期が時期だし……疑いたくもなるよ。もしかしたら……私達の動きがばれてて、送り込まれたのかも……って」「うーん、たしかに……」

典韋の言葉に、許緒はがらでもなく（失礼）、あごに手を当てて思案の構え。

しばらく考えたが……どうやら特に考え付くことがなかったらしい。気まずい沈黙なので、典韋の方からそれを破った。

「ま、まあ……それはおいおい、こっそり調べてみようか？」

「そ、そうだね……あ、でも……明久兄ちゃんは少なくとも違うんじゃない？　だってほら、流れてきた時の状況が状況だったし……」
「あー……ま、まあ……細作とはいえ、あそこまで体張る人はいない、か……」

下半身が『煌魚』の口の中に消えていた明久の衝撃的画像を脳内にフラッシュバックさせ、妙に納得した表情でうなずく2名。

「……なんにしても、これからやることを……あの2人に話すわけにはいかない……わかってる、季衣？」

「わかってるって！　今言った危険はもちろんだし……それに、もし2人ともいい人だった時に……」

「……うん。『あれ』に……巻き込むわけには……いかないし」

そして……2人とも、何か決意を固めるかのように、表情をきちっと引き締める。

……その姿はなぜか、これから戦地に赴く兵士や将を彷彿とさせたとか。

……密談に夢中になるあまり、それを木陰に隠れて聞いていたものがいたことに、気づかない2人であった。

S i d e
程？

『何だ何だ？　なにやらかわいいこちゃんがかわいい顔に似つかわし

くない深刻な雰囲気と話してるじゃねーか？」

「これこれ、あまり大きな声で話しては気づかれますし、邪魔になりますよ、宝？」

『それもそうだな。で、風よ、お前あの話の内容……何のことかわかったのか？』

「……まあ、予想はつきますがー……これが当たつてるとなると、ちょっと色々やっかいなことになってますねー……」

第9話 山小屋と人魚と三人の少女（後書き）

……と、いうわけで、今回出会ったのは……

許緒！ 典章！ 程？！ ……の3人でした。

（某メダル3枚のライダーのノリで）

さて、何でこの3人がこのタイミングで……ってまあ、風たちと同じ理由ですけどね。さすがにわかるか。

ともかく、出会わせたからには……彼女たちとの有意義なストーリーを書きたいと思います。

ではこのへんで。和尚でした。

第10話 料理と絆とそれぞれの思い（前書き）

さて……書き始めてもう一ヶ月の第10話。

なんか急展開（？）します。
浅いですが。

どうぞ。

第10話 料理と絆とそれぞれの思い

S i d e 典章

「ん……？」

明久さんが流れ着いた翌日。そして、風ちゃんと知り合ってから5日目。

窓から差し込む光で、私……典章は、目が覚めた。……ん……もう朝か。

横を見ると、季衣と風ちゃんはまだ寝ていた。まあ……朝早いから、無理ないかな。

……風ちゃんはいつでも、ついでにどこでも寝るけど。

とにかく、朝ごはんの支度しないと。仕込みがあるから、早起きして始めないと間に合わないんだよね……。

ただでさえ季衣はいっぱい食べる上に、今は明久さんと風ちゃんまでいるから、多めに作っておかないと……って、あれ？

その明久さんがいないんだけど……もしかして、もう起きたのかな？

というか……外から、何かいい匂いが……？

不思議に思っ、私が扉を開けてみると、

「あ……明久、さん？」

「あ、典章ちゃん。ごめんね、起こしちゃった？」

「い、いえ……そういうわけじゃ……というか、何してるんですか

「？」

「？ 見ての通り、料理だけ……」

そこには……たき火に鍋をかけて、何かの煮込み料理のようなものを作っている明久さんがいて、

鍋の中で煮込まれている料理からは……おいしそうな、そして、私でも全く何の料理か思い当たるところのない、いい香りが漂ってきていた。

Side 明久

起きて出てくるなり、ハトが豆鉄砲食らった感じできょとんとする典章ちゃん。

あー……偶然早く起きたから、良かれと思ってみんなの朝ごはん作ってたんだけど……余計なお世話だったかな？

一応、賞味期限近そうな食材を選んだんだけど……勝手に使っちゃったわけだし。

「あ、あのー……朝ごはん、って……」

「あ、うん……ごめん、食材、勝手に使っちゃった。余計なお世話……だった？」

「い、いえ、そんなことないですけど……」

すると典章ちゃん、鍋の中を覗き込んできた。

「えっと……これ、何ていう料理なんですか？ 見たことないんで

すけど……」

「ああ、これ？ 『ポトフ』 っていうんだよ」

「……『ぼとふ』、ですか？」

ああ、そっか、知らないよね。ポトフはフランスの家庭料理だもん。

でも、作り方は簡単だし、材料も単純だから、ここで作れたわけだけど。

典章ちゃんが不思議そうな目で鍋の中を覗き込んでいると、小屋の扉が開いて、

「ふあ……おはよう……流琉……兄ちゃん……」

「おはようございますー……」

「あ、許緒ちゃん、程？ ちゃん、おはよう」

寝ぼけ眼をこすりながら、許緒ちゃんと程？ ちゃんが外に出てきた。

それを見て、驚いたようにして典章ちゃんが、

「え、季衣！？ どうしたの！？ いつもはまだ寝てる時間なのに

……」

「あ、うん……流琉の料理のおいしそうな匂いがきて、それで……って、あれ？ 作ってるの……流琉じゃないの？」

と、焚き火の前に立って鍋の中をかき回しているのが僕だとわかると、意外そうな声を上げる許緒ちゃん。

そっか、いつもは炊事は典章ちゃんの仕事なのか。早く起きてきたのも、僕の調理音のせいじゃなく……いつもこの時間に起きるからだったんだ。

とか言ってる間に……お、できたな。

「おいし　　っ!!」

「た、確かに……おいしいです……」

「ふむふむ……そうですね、始めて味わう味付けですねー」
「ホント？　うれしいな、そう言ってもらえると」

とまあ、僕のポトフはすこぶる好評でした。ほっ、よかった。

満面の笑顔の許緒ちゃんに、こちらも笑顔の程？　ちゃん。驚いた表情で匙を止めてる典章ちゃん……とまあ、三者三様の反応。

僕が作ったポトフは……彼女達がつてきた山菜と、鶏肉やキノコなんかを入れて煮込んだ簡単なもの。古代中国の食材でも、十分に再現可能だったよ。

スープの味を整えるのには、風にもらった香辛料を使った。防水のバッグに入ってたから、どうにか無事だったよ。

「すごい……こんな味付けの仕方があるなんて……」

一口一口スープを飲みながら、典章ちゃんはそんな事を言っていた。いや、そんな大げさな反応されても……普通に、何種類かの香辛料をブレンドして、現代の洋食に近い味付けに仕上げただけだよ。何もすごくないって。

「そんなことはありません！　私、一応料理には自信あるんですけど

……こんな味付けがあるなんて、知らなかったし、考えもしませんでした！ 明久さん、すごいです！」

「へー……流琉にそんなこと言われるなんて、すごいね兄ちゃん」

そう言ってくれる季衣ちゃんは、早くも3杯目。いっぱい作ったから大丈夫だけど。

「流琉は料理すつごく上手なんだよ！ 村にいた頃、都の飯店から引き抜きが来たくらいなんだから！ ……断つてたけど」

「らしいですよ？ その流琉ちゃんに褒められるとは、お兄さんなかなかですねー」

「そ、そうなのかな？」

な、何か恐れ多い……

まあ、典韋ちゃんの料理の腕は、昨日の晩御飯で知ってるんだけど……そこまでだったとは。

その典韋ちゃんは、

「あ、あのつ、明久さん！ 差し支えなければ……あとでこの料理の作り方を教えてもらえませんか！？」

「えー？ い、いいけど……」

「本当ですか！？ ありがとうございます！」

……何かのスイッチが入ったらしい。

目をキラキラさせて、その僕の返事に喜んでいた。

……な、なんか、ここまで喜ばれると……逆に照れるな……。

すると、ふと程？ちゃんが、思いついたように言った。

「そっいえばお兄さん、昨夜はどこに行っていたのですか？」

「？ いや、どこにも行つてないよ？」

「しかし、風は夜中に何度か目が覚めたのですが、小屋にいませんでしたよー？」

「あれ、そうなんですか？」

と、今の会話を不思議に思つたらしい典韋ちゃん。

ああ、そういうことか。そりゃあ当たり前だろう、だって……

「いや、僕、外で寝てたから」

「「え！？」」

典韋ちゃんと許緒ちゃんの驚いた声が響く。

「そ……外つて……え！？ 何でわざわざ……外で寝てたんですか！？」

「いや、だって……男が女の子と一緒にの部屋で寝るのは嫌でしょ？」

3人共まだ子供だとは言え、女の子だ。

僕は別にロリコンじゃないし、やましい気持ちなんか別に……ちよつとしかないけど……それでも、道徳的に考えて、女の子と一緒にの部屋に寝るなんてのはまずい。

幸い、この世界に来てからは野宿が普通だったから、慣れてるし………つてことで、雨だけ心配して、軒下で寝かせてもらつてたわけだ。

すると、

「だめだよ兄ちゃん、そんなことしたら風邪引くよ！？」

「そ、そうですよ明久さん！」

「え！？ え！？」

いきなり2人、食って掛かってきた。ちょ……何いきなり！？

「い、いやだつて……」

「氣遣ってくれるのは嬉しいですけど……それで明久さんが体を壊したりしたら、元も子もないじゃないですか！」

「そうだよ兄ちゃん、兄ちゃんが死んだらもう『ぼとふ』食べられないじゃん！」

許緒ちゃん、飛びすぎ。速攻で僕を殺さないように。

「だからせめて今日のうちに流琉にこれの作り方教えておいてよ！」
「ちょつ……季衣、なんてこと言うの！？」

典韋ちゃん、許緒ちゃんの問題発言をあわてて止めに入る。……多分、そんなつもりないんだろうけど……はは、僕死ぬの確定させちゃってるんだもんね。

すると、その2人が静かになった隙を見計らってか、

「まあ、お兄さんのその心がけは立派ですがー、家主の厚意をないがしろにするのはいただけませんよ？ 季衣ちゃんも流琉ちゃんもお兄さんを心配してるんですから」

と、程？ちゃん。

いや、それは嬉しいけどさあ……あの小屋、ワンルームだし……

「それとも？ お兄さんは無防備に眠りこけている風たちを前にして、その煮えたぎる煩惱のままに襲い掛かってしまうおつもりで？」
「い、いやいやいやいやいや、そんなことないって！」

「では、一つ屋根の下で風たちと寝ても、風たちは何も心配する必要はない、自分は紳士的にただひたすらぐっすり眠りますと断言できますか？」

「も……ちろんさ！」

「……不自然な間がありませんでしたか？」

「ないない！ 大丈夫、例えそんなことになっても僕は全然何も手出ししないから！」

「そうですか、では今日から普通に一緒に部屋で寝ても問題ありませんね。」

「もちろんさ！ ……って、あれ？」

いつの間にか論破されてる？

見ると、程？ちゃん、僕の方に視線を向けつつ、にこにこ。

や、やられた………どういふつもりかはわからないけど、確信犯だ………。

しかも、その様子を他の2人にもばっちり見られてしまい、声を聞かれ、言質を取られてしまったので………後戻りはできなかった。な、なんてことだ………。

ともかく、その朝はそのポトフと、近くになっていた木イチゴですませた。山奥プラス古代中国にしちゃ、上出来な朝食だと思うよ。

それから、僕は数日間を、彼女たち3人と過ごした。過ごしたって言うても………自給自足の生活に必要なことをするだ

けなんだけど。

たとえば、山菜取りや魚釣り、木の実やキノコの採集。……とまあ、食糧確保だ。

僕が流琉ちゃんとキノコやら何やらをとってきた間に、季衣ちゃん……熊とか鹿とか狩ってきてたけど。どうやら季衣ちゃん、やっぱり強いらしい。

他の仕事は……炊事・洗濯・掃除……あとは、薪割りとか、食べきれない魚や肉を、干物や燻製にして保存食にしたりとか。うーん、サバイバル。

そんな日常の中で、僕と流琉ちゃんは、相互に料理の教えっことをしてた。

流琉ちゃんは、このあたりで取れる食材を使った、簡単な家庭料理や中華料理の作り方。そして、いい味を出すコツとか色々教えてくれた。すごく博識だった。

一方僕は、この大陸にはまだない……和風・洋風の味付けのコツや、それをもとにした料理の作り方なんかをレクチャー。ここでも、風の香辛料が役に立った。

で、その実践編として……2人で一緒にご飯作ってた。

結果？ もちろん好評だったよ？

ああ、今ので気づいたと思うけど……3人とも、僕に真名を許してくれた。

季衣ちゃんいわく、『こんなおいしい料理を作る人に、悪い人はいないよ！』だとか。

許緒ちゃんの真名が『季衣』、典韋ちゃんが『流琉』、程？ちゃんが『風』だった。

流琉ちゃんとは料理を通して、季衣ちゃんとはその料理での食事を通して、風ちゃんとは……なぜかいつの間にか、仲良くなった。

……あ、それと、一応言っておくと……言われたとおり、一緒に部屋で寝てるけど……別に何もなかったからね？ 何も手出ししてないからね？

そして、そんなある日。

僕が流れ着いてから、6日目。

事件は……唐突に起きた。

朝、僕が起きると……その瞬間、違和感があった。
いや、違和感とかそういうレベルじゃないけど。

僕ら4人はこの小屋で、布団を4つ横に並べて寝てる。

毎朝、僕か流琉ちゃんのどちらか片方が一番に起きる。で、着替えた後でもう片方を起こす。最近は2人で炊事するのが日課だからだ。

この時、100%季衣ちゃんと風ちゃんは寝てるんだけど……

「……誰も、いない……？」

今朝は……僕以外、部屋に誰もいなかった。

寝過ごしたか、と思ったんだけど……違うだろう。流琉ちゃんが起こしてくれないのはおかしい。

それに、朝ごはんの時間になったら……いくらなんでも起こすはず。

というか、窓の外から太陽の高さを見てみる限り……いつも僕が起きる時間帯だ。

つまり、3人共……僕より早く起きて、小屋の外に出て何かやってる……ってことになる。……どういうことだ？

理由もなくだけど、何か不安な思いが頭をよぎる。

僕が外に出ようとすると、扉のところに……あるものを見つけた。さびた釘を画びょう代わりにして貼り付けられている、1枚の木の板だ。

見ると……何か字が書いてある。あ、伝言か何かか？

そうか、この時代……紙はまだ珍しいから高級品なんだ。メモなんかに使えるほど手に入らないから、木や竹を使っ……っていうのはよく聞いた気がする。

それより、伝言の内容だ。えーと、なになに……？

……どうしよう、漢文読めない。

いや、仕方ないじゃん！僕は日本人だから！

外国語なんて英語くらいしかやってないって！ いや、その英語すら怪しいんだけど。

ましてや国語の時間なんて、格好のお昼寝タイムじゃないか！ そんな時に、あんな漢字だけがひしめき合ってる気持ち悪いものに集中しろってそりゃ無理ってもん……

「一言で言つと、『短い間でしたが楽しかったです、お元気で』と書いてありますねー」

「またあつ！？」

背後から当然のように聞こえる声。うん、飛び上がった。

出たよこの子！ 神出鬼没！

なぜかこの時代にあるペロペロキャンデーを口にくわえて、風ちゃん登場。いや、いつからいたの！？ ていうか、いたの！？

いや、それより……今何て！？ 何、その内容は！？

「ふ……風ちゃん！？ えっと……この伝言が何だつて！？」

「おやおや、では字が読めないお兄さんの代わりに呼んでさしあげましようかねー」

「いろいろと抗議したいことはあるけど……うん、ごめん、頼むよ！」

伝言の内容が気になるから、僕は風ちゃんに木の板を渡して、呼んでもらった。

「えーとですねー……『はいけい、明夕兄ちゃん』……」
「は？」

……『明夕』？　僕は『明久』だよ？

「……と、かかれたところに二重線が引いてあって訂正されていますねー。季衣ちゃんを書いたものの、まともに書けなかったので、この先は流琉ちゃんを書いたものと思われそうですー」

「あ、そう……」

いや、それはいいから、早く本文読んで！

「はいはい、わかっていますよー。ええと……」

その内容は……さっきまでのおちゃらけた雰囲気が一瞬で消し飛ぶ内容だった。

風ちゃん、明久さんへ。

突然こんな手紙を残して、いなくなってしまうってごめんなさい。

でも、こうしなければ、明久さんや風ちゃんに迷惑がかかるんです。

私達の村は、最近、盗賊に襲われることが多くなり、悩まされています。

領主様は税を取るばかりで、何もしてくれません。

私や季衣、自警団の皆さんの尽力で、なんとか保っている状態です。

その私達の村に、近々、今までで一番大きな規模の盗賊団の襲撃がくるんです。

私達は村を守るため、盗賊団が村に来る前に、それを撃退することにしました。

私と季衣は、この小屋の近くにある、盗賊達の進軍の中継地の監視のために、ここ数日小屋に寝泊りしていました。戦うのに最適な場所と時期を、探るために。

私達はこれから、自警団の人たちと合流して、盗賊団と戦いに行きます。もしかしたら、私も季衣も死ぬかもしれません。でも、これ以外に村を守る方法がないんです。

場所は教えません。あなた達に来てほしくないから。残りの食料を全部持って、北西に行ってください。一番安全な道のはずです。

偶然の出会いと、短い間の生活だったけど、お2人との毎日はとても楽しかったです。

こんな形でわかれることになってしまって、ごめんなさい。許さなくていいです。

お2人が、これから幸せな人生を歩めますように。

流琉、季衣

「……………何、これ……………」

「遺書、といってもいい内容でしたね……………」

風ちゃんから木の板を受け取り、それを呆然と見つめる僕。

字はどうせ読めないけど、そういう問題じゃない。中身に問題がありすぎる。

……そう言われれば、変だよな……。

こんな山奥に、何だって彼女達みたいな小さな子供が住んでるのか……。

戦闘力（季衣＝流琉＞＞熊）が規格外すぎて、あんまり気にしてる余裕なかったけど……気にするべきだったんだ。

まさか、こんな理由があつたなんて……。

気構えだけを見れば、愛紗たちと同じくらい立派で、同じくらい気高くて、そして同じくらい……重い。

手紙の文面と、彼女達の屈託のない笑顔が交互にフラッシュバック。それだけでも……もう、僕みたいな凡人には……ほぼ拷問だ。

急すぎて……泣くこともできない。

「何やら色々と大変そうですねー。ですが、ぼーっとしていいのですか？」

「……風、ちゃん？」

放心状態だった……ことにすら気づいてなかったんだけど、

その僕に、風ちゃんがいつものほんとした声で声をかけてきた。僕とは対照的に……取り乱した様子はなく、たたずまいから何からナチュラルそのものだ。

「察するに、あまりに突然の出来事が多すぎて、自分が今から何を言ったらいいのかすらわからない、といったところでしょうかー？」

「……よくわかるね」

自分でもわからないことを。

……でもってその上、どうしたらいいのかもわからない。

正直、どうにかしたい……っという気持ちはある。

だってそうでしょ？ あんなに優しくて、かわいくて……褒めたらきりがなくらいのいい子たちだよ？ 煩惱は……そりゃちよつとはあるけど、それ全部抜きにしたって、脊髓反射でも彼女達を助けたいと思える。

けど、僕は……そんな、流琉ちゃんたちでも自信がなくなるような盗賊軍団と戦う手段なんて……あるはずないし……

それでも……もう、何て言ったらいいのかわかんないけど……僕は……

「お兄さん、季衣ちゃんと流琉ちゃん……助けたいですか？」
「……え？」

……今、何て？

見ると、僕の視線の先には……先ほどと同じ笑顔で、しかし、目だけは……全く同じなのに、なぜか真剣だとわかる表情で、

僕に……真剣に、そう問いかける。

「……もしかして……」

「確かに、敵戦力は強大。大して風たちは、どう見てもひ弱そうなのが2人。普通に考えれば、勝ち目など微塵もないでしょうね。それでもなお、というのであれば……」

おそらく……放心のために、魂の抜けたような顔になっているであらう僕に、

そしてそれでいてなお、心の中は風速数十メートル級の大嵐になっている僕に、

風ちゃんは……にっこりと笑ったまま、

「それを何とかするのが、私のような軍師の務めですからね。それに、あの2人を助けたいのは、当然ですが風も同じ気持ちです」

……軍師……？

「時間がないので簡潔にだけ聞きますが……」

風……ちゃんが……？

「風の胸のうちにある、一発逆転の大博打……打ってみる気はありますか？ お兄さん？」

にっ
にっ
にっ。

第10話 料理と絆とそれぞれの思い（後書き）

流琉たちと明久、仲よさそうな描写で書けてたかな……心配。
特に流琉とは、共通の特技があるから、そこで結び付けてみたくて。

さて……後半、なんか突然とんでもないことが明らかに。2人が隠してたのはコレだったわけですね。

そして、それに気付きつつも、確信が無かった風ちゃん。予想外に早い展開で、イベントが起こってしまった……と。

さて、次回……どうなるんでしょうか？

ではこのへんで。和尚でした。

第11話 策とリソットと一家団らん（前書き）

第11話を更新します。

今回……話が話だからか、ギャグがすごく少ない……無念……
いや、そんなに思い話ってわけでもないんですけど……

……ともかく、どうぞ。

第11話 策とリソットと一家団らん

S i d e 流琉

「……ねえ、流琉」

「何、季衣？」

警備隊の人たちと駆け足で進軍しながら……私は、いつもと変わらない調子で、隣にいる季衣と話していた。

……不思議、だな……今から生きるか死ぬかの戦いに行くっていうのに、全然そんな感じしないんだもん。

「……兄ちゃん達、さ……今頃、何してるかな？」

「それ……6回目じゃない、聞くの」

「あはは……そっか」

……まあ、それでも……迷いとかじゃないけど、ゆらぎみたいなものは感じられるかも。

最後の最後で……明久さんと風ちゃんに出会ったから……多分そのせいだ。

いや、そのこと自体を悪いこととは思わない。けど……今から戦いに行くっていうこの状況下では、ちよつと邪魔だったかな……心のどこかに……また一緒に遊んだり、料理したり、釣りしたいな……って気持ちが残ってしまうから……。

と、

「おい、偵察に出た奴らが帰ってきたぞ！」

「っ！ いいよだね、流琉……」

「うん……！」

自警団の中の、偵察に行つてた人たちが帰つてきた。

……私達は、その人の最終報告を待つて、盗賊たちのところに総攻撃に行く計画だから……ついに、戦いが始まる。

私達は基本、奇襲や多対一の戦い方を中心にして戦うことにしてる。まあ、私や季衣は1人で数人相手にも戦えるけど……村の人たちはそうはいかないから。

……つていうか……そもそも村の人たちが盗賊と戦うこと自体無謀だ……つて言われたら、それはもう何も言えないんだけど……。でも……それ以外に、村を救う手立てが何もないんだから……仕方ない、つて割り切つてる。私も、季衣も、村の皆も。

作戦……つていうか、私達の思惑はこう。

戦つて勝てれば、それでよし。けど負けて全滅することになるとしても、私達は最後の1人になるまで戦うのをやめないだろう。無論、私も季衣も。

そうすれば……一応、盗賊たちに痛手は与えることができる。撃退は無理でも……一時撤退くらいはさせられるはず。そうすればその間に、村の皆が逃げられる。

事前に、『5日経つても、戦いに行つた人たちが誰も帰つてこなかったら、村を捨てて逃げてください』つて伝言のこしてあるから……いざというときは、その通りに。

だから……私達がここで頑張らなきゃいけないんだ！ たとえ……死ぬことになつたとしても！

そして私達は、その覚悟を胸に……偵察の人が口を開くのを待つた。

……が、

その口から出てきたのは……予想外の言葉だった。

「そ、それが……その……」

「……？ 何か……あつたんですか？」

「……と、盗賊の連中……全員逃げ帰っちまったらしいんだが……」

……

「……え……！！？」

そ、それ……どういうこと？

私と季衣の偵察だと、そんな気配、全然なかったっていうか……むしろ、略奪する気満々、って感じだったのに！？

でも、聞いた感じだと……嘘や冗談、ってわけでもないみたいだし……でも、何で！？

今更襲撃をやめて、しかも逃げ帰るような理由なんて、何も思い浮かばない……

そして、偵察さんが次に口を開くことには、

「変に思つて、俺達、盗賊の陣地まで近づいてみたんだが……もう全然、もぬけの空だったんだ。さっきまで酒宴が何かやってたんじやないか、つて痕跡はあつただけど……まるで、慌てて逃げ出したみたいに……」

「そ、それで……そこには2人、見たことない男の子と女の子がいるだけで……」

「……………???」

と、その直後、

「どうやら間に合つたみたいですねー」

「ふー……よかった。季衣ちゃんも流琉ちゃんも、無事で」

「……………」

偵察の人の後ろから……ありえない声がして、

そして……よく知った顔が、でもこの場には絶対にいないはずの人が現れた。

そ、そんな……何で……

「兄ちゃんに……風ちゃん……!？」

「何で、ここに……!？」

「何ってそりゃ……盗賊連中追っ払った帰り道だし」
「「え!!!?」」

わ、わけわかんない……どういうこと!?

けどまあ……目の前に立っているこの2人の顔から、一応本当に、盗賊たちとの戦いは回避されたみたい、っていうのは、感じ取れた。まあ、それはよかった。

でも……なんで!?

S i d e 明久

風ちゃんの作戦は、簡単に言えば……盗賊たちをだまくらかして勝手に逃げてもらおうってものだっただ。

まあ、これだけじゃわかんないだろうから……今、目の前できょんとしてる季衣ちゃんと流琉ちゃんに説明する。

あ、ちなみにここは、もぬけの空になった盗賊の陣地。残されてる、まだ使えそうな資材やら食料やらを村の人たちが回収してるところ。

……はは、立場が逆だ。盗賊のもの奪っていつちやってるよ、僕ら。

ともかく、説明始めようか。

- 1、適当なゴロツキ（社会に迷惑かけまくってそんな類の）を雇う。
- 2、それを偽者の『官軍の使者』に仕立て上げ、盗賊に襲わせる。
- 3、そいつに、盗賊たちが退散せざるをえない内容の手紙を持たせておけばOK。

……あ、わかんない？ わかった。丁寧に説明しよっか。

まず、僕達は森の中で、これから盗賊の襲撃に乗じておこぼれをもらおうとしている、社会にとって害悪なゴロツキさんを探した。いわゆるアレだ、火事場泥棒ってやつ。

風ちゃんいわく『いるはずですよー』ってことだったから、探してみたら……意外と早く見つかった。ちょうどおあつらえ向きに、3人組のが。

全く……いつの時代にもいるもんだ、そういう不謹慎なやつが。

次に、僕がそいつらに接触。

そしたらそいつら、『ちょうどいい獲物がいたぜ』とも思ったのか、早速襲ってきたけど……僕の召喚獣でノした。3人くらい、どうってことない。

……10分ばかり風ちゃんに、声かけるの待ってもらって、心の準備してたのは内緒で。

や、だって相手仮にも武器持ってるし……それでも、鉄人1人には見劣りしたけどね。

で、そいつらの命を見逃す交換条件として、僕と風ちゃんは『お使い』を頼んだのだ。

まず、風ちゃんが事前に用意した、見た目一発上物だとわかる着物（だけど実際は安物）を着てもらう。どっから出したのか、何で持ってたのかは教えてくれなかった。

次に、風ちゃんが偽造した『ある手紙』を持たせて、これから季衣ちゃんたちが戦うであろう盗賊団の進軍ルート上で『待ち合わせ』と称して突っ立ってもらう。

上手くやれば、待ち合わせの相手からたんまりお礼をもらえる、
と言い含めて。

……待ち合わせ自体嘘っぱちだから、誰も来ないけど。

そんなところに、よさそうな身なりの人がいたら……盗賊に襲われるよね、そりゃ。

で、まあ……その人は身包みはがれるわけだけど、その際……盗賊たちは、手紙を見つけるはずだ。風ちゃんが偽造したそれを。

そして……そこには、こう書いてある。

『第3実行部隊に指令。予定通り、官軍による盗賊共の殲滅作戦を実行する。進軍経路の途中にて岩を落とす作戦を実行の後、全部隊総勢14000人で総攻撃（略）』

ま、平たく言えば、これから正規の軍隊が盗賊ぶつ殺します、って内容。

で……それと同じタイミングで、僕が近くで召喚獣を使って、崖の上から適当な大きさの岩を10個も落とせば……盗賊たちは勝手に勘違いしてくれる。

今襲った男は、正規の軍隊の連絡用員で……今読んだこの手紙は、

これから自分達盗賊を皆殺しにする作戦の確認の手紙だ……ってね……。
いいタイミングで岩が落ちてきてるし……ちょっと作戦ミスって岩を速く落としちゃった、とでも考えてくれれば上出来。

すでに軍隊が構えてて、このままだと皆殺しにされると思った盗賊たちは……もう着の身着のまま、って感じで、勘違いしたまま逃げ出した……とうわけ。

だから、今、盗賊の陣地はもぬけの空。戦いは回避。
おまけに使える物資や武器も山ほど残ってる。

……説明、終わりっ！

……そして今、僕は何をしているかというと、

「はい、お待ちどうさま！」

「おー、また奇怪な料理が運ばれてきましたねー」

「ははは……せめて珍しい料理、とか言ってよ」

「……………」

場所は、僕達が寝食をとにした、あの山小屋。

そこで僕は、戦うことなく帰ってきた季衣ちゃんと流琉ちゃんに、お手製の『リゾット』を振舞っている。

リゾットって言っても、この世界、この地域で手に入る食材を使った、なんちゃってリゾットだけど。

「さて、では食べましょうか、季衣ちゃん、流琉ちゃん」

「あ、あの一……………」

と、季衣ちゃんと流琉ちゃん、おずおずと挙手。

ま……だろうね。反応としては正常だろう。

何せ……避難してるはずだった僕と風ちゃんが、奇想天外な作戦で盗賊の軍団撃退しちゃったんだから。

……でも、それ言ったら僕らだって言いたいことがあるわけで。

「その前に流琉ちゃん、季衣ちゃん、風達に何か言うことないですかー？」

「「え？」」

「これでもすごく心配したんだよ？」

「「あ……」」

今更だけど、ようやくわかったらしい。何でさっきから……僕と風ちゃんが、笑顔のまま、無言のプレッシャーを2人に投げかけてるのか……が。

いや、そりゃ腹立つよ。僕らに黙って、あんな風に一方的に、遺書じみた手紙残していなくなっちゃうんだから。

「ごめんなさい……でも、私達……」

「デモも体験版もない！」

「へ？　たいけ……？」

「あ、今は世迷言だから気にしないで」

「「????」」

きょんととして首をひねる2人。

うつ……ちよつと厳しめなお兄さんのなやり方で行くつもりだのに……変なところでしまらないんだから僕は……

と、そこで沈黙してしまった僕に代わり、風ちゃんが会話の手綱

を取る。

「ともかくですねー2人とも。お2人の気持ちはわからなくもありませんが、いきなり目の前からいなくなられた風たちの気持ちも察してくださいねー?」

「あう……ごめん……」

「心配したところじゃなかったんだからね?」

「はい……ごめんなさい……」

しょぼんとして謝る2人。

全くもう……そっただけ覚悟決めて、勝手にいなくなつて……こっちは、何も全く聞かされてなかったっていうのに……。いきなりすぎて逆に冷静だったけど、アレ僕パニックになつてもおかしくなかったんだからね。

僕は彼女達に助けられた側だから、本来偉そうなこと言えないけど、今回はそれ以前の問題だつていうのは、全員に共通の見解だろう。

その意味でも、今回はお兄さんとして厳しく言わせてもら……おうとして失敗したんだっけか。

……まあ、いいか。風ちゃんが代わりに言ってくれたし。

そして、

「うんうん。では、お2人ともきつちり謝つていただきました所で

……」

「食べよつか、ホントに」

「えっ!? あの……お説教とかないんですか!?!」

「? 別にないよ?」

だって……許容しがたい行為だったのは確かだけど、2人にも考えや事情があったのはたしかだしね。

だから風ちゃんと話して……きつちり彼女達が謝ったら、それでチャラにしよう……って決めてたわけ。自覚さえしてくれれば、あとは勝手に反省できるだろうし。この子たちは、そのくらいできる子だ。

……それに、

「早く食べないと……季衣がほら、そろそろ限界だし……」
「え？」

僕の言葉に、流琉が季衣のほうを見ると……季衣は、もう辛抱たまらんと言った様子で、ずっこい前かがみになって鍋の中を覗き込んでいた。

顔に『美味しそう』『食べたい』『待てない』と書いてある。……なんてわかりやすさだ。

それを見た流琉は、額に手を当てて、呆れながら失笑するという器用な技を見せていた。

ていうか季衣！？　ちよ、火焚いてるし、鍋まだ熱いんだから、そんなに前のめりになったら危ないって……ってああつ、よだれよだれ！　落ちる落ちる！

「に、兄ちゃん……早く食べようよ……こんな、こんなおしおき、ボク耐えられないよう……」

「？　お仕置きって？」

「その『りぞつと』を目の前にしておあずけをくらっていることが

と思われまーす！」

いや、まだ持ってきて1分経ってないでしょうが。

季衣は、体中の水分全部出すんじゃないかってくらいに、『どばーっ』とよだれを流していた。

一応……鍋に入らないように注意してるっばいけど……その下のたき火部分に注がれて……火が消えそうな勢いだ。……大丈夫か、色々？

とまあ、その様子を見て、

「……ふふっ、そうですね！」

流琉、笑顔でそう一言。

ほっ、よかった。季衣の食い意地が、思わぬアイスブレイカーになってくれた。流琉の緊張も、すっかりほぐれたみたいだ。

……というわけで、

「……いただきます！」「……」

実のところ、朝から何も食べてなかった僕らは……細かい話は後にする……ってことで、鍋に盛られたリゾットをよそい始めた。ちなみに、味は好評だった。ほっ。

食べながら、いろんなことを話した。

実は、風は……季衣や流琉の目的になんとなく気がついてたってこと。

そして、それに備えて……風なりに、今回僕と一緒に実行したよ
うな、盗賊退治用のプランを考えていたらしい。

頭脳もそうだけど……見た目と性格に反して、なんて観察力だ。
さすが軍師。

ちなみに、その策を季衣や流琉に話さなかったのは……彼女達が
こんなにも早く盗賊たちへの攻撃に踏み切るとは思っていなかった
からだとか。

風に言わせると、仮に攻撃するとしても、タイミングはまだ先だ
……とのこと。その辺を見極められない流琉たちの行動を読めな
かった、と風は反省していた。

それと……さっきから僕は、彼女達のことを呼び捨てで呼ぶよう
になった。

会話の中で、風が『子ども扱いされてる気分になりますー』とい
ったためである。

いや、気分も何も、子供のように……いやまあ、頭脳が優秀な
のは認めざるを得ないけど……。

「まあ何はともあれ、またこうしてみんなでご飯を食べられてよ
かったですねー」

「そーだねー……！ これも美味しいっ！ やっぱり兄ちゃん、ご
飯作るの上手いね」

そっという季衣は、もうリラックスモードだ。追加で作った照り焼

きチキン（なんちゃって版）をほおばり、これまた満面の笑顔。

まあ、立ち直りや頭の切り替えが早い……と受け取ればそれも長所か。こっちとしても、いつまでもうじうじしてられるよりは、こっちの方が気が楽、と言えそうだし。

積もる話はまず後にして、

僕達は……またみんなこうして一緒に食事ができてることを喜び、今はただ楽しく談笑することにした。

何度も言うけど、反省なら各自でできるしね。

「兄ちゃん、おかわり！」

「風もお願いしますー」

「あ、あの、私も……」

「はいはい、今あげるよー」

……ってあれ、僕の分がなくなりそうだが、僕も食べよう。

こうして、その日の戦いの……あ、いや、別に戦ってないから、そのー……まあ、精神的疲労やら何やらの疲れを癒しながら、僕らはほぼ一家団らん、と言つていい雰囲気の中で夜を過ごした。

難しいこととか、後始末とか……そういうのは、全部あとにまわしちゃう。

何よりも今は、この時間を楽しんでいたい。

「「「おかわり！」」」

「はいはい」

……やっぱ、みんな一緒がいいね。

第11話 策とリゾートと一家団らん（後書き）

……書いてから気付きました。

説明的な感じで書いたら、入れられるギャグが少なくなってた……！？

なんで……こんなことに……！？

ええそうです、自分の力量不足です。ひとえに。

……次回、がんばります。なるべく早く更新できるように……

ではこのへんで。和尚でした。

第12話 家族と別れと誤解の連鎖（前書き）

どうも、和尚です。

今回で、『ちびっ子編』幕引きとなります。

どうぞ。

第12話 家族と別れと誤解の連鎖

「……………何で？」

吉井明久17歳、朝起きての第一声がコレだったりする。
えっと……………なんだろ、この状況。
僕の寝ている、同じ布団の中に……………

「くかー……………」

「すやすや……………」

「……………くうー……………」

右……………季衣。僕の右腕を抱いて寝てる。
左……………流琉。同じく左腕。
上……………風。胸の上に乗っかって寝てる。僕はベッドか。

……………マジで、何！？

えっと、たしか昨日、戦い（未遂）の反省会もかねて、4人で遅くまで起きてて、

それでその後……………寝て……………そう、その時はまだこうじゃなかった。
いつも通り、きちんと4人別々の布団に入っただけなのに……………。

……………あ、ひょっとして、昨日話題で家族だの何だの話したから、
さびしくなってもぐりこんで来たとか……………なんだ、3人共やっぱり
まだ子供じゃないか。

「お兄さんが言えるセリフですかねー？」

「どわあいー!？」

また心読まれた!?　っていつかいきなり起きるな!

胸の上に寝ている姿勢の風がいきなりそんな事を言うので飛び起きる。その表紙で、左隣で僕の腕を抱いて寝ていた流琉も目が覚めた。

「こんな状況で煩惱の一つも出さずに家庭的な側面ばかりのぞかせているあたり、精神年齢が高いのか低いのかはつきりしないといえますかー……」

「え、何か言った風?」

「いえ、何もー?」

「ふぁ……あ、兄さま、おはようございます……」

「え、ああ、おはよう流琉」

まあ、風が何を言っただのかは気になるけど……とりあえず、流琉も起きたことだし、今は朝ごはんの仕度を始めないと……
……始めないと、いけないんだけど……

「くかー……」

季衣が起きない。

右腕にしがみついたまま、起きない。

言い方悪いけど正直……邪魔。だって、このままだと僕も起きれないもん。

「季衣ー、ねえ、起きてよー?」

「くかー……」

つつん

ほっぺたをつついてみる

「くかー……」

ぐにゅー……

ほっぺたを引っ張ってみる

「くかー……」

ゆさゆさ

体を揺さぶってみる

「くかー……」

……起きないな……。

思い切って、腕を振り切るつもりで僕が立ち上がってみると

ぶらーん……と、そのままくつついてきた。

「……コアラかよ」

「はい？ こあら……って？」

「あ、いや、こっちの話」

流琉にそういいながらも、僕は（もうこの際遠慮なしに）腕をぶんぶん振ってみるけど、しっかりとしがみついている季衣は、話してくれる気配なし。

他にも、その場で回転してみたり、ラジオ体操してみたり、昭和な仮面ライダー的なポーズをとって『変・身！』みたりしたんだけど……効果なし。

「くかー……むにゃ、お前の罪を数えろ……」

「しかもなぜそのセリフを！？」

平成だし。

すると、それを見かねてか……何やら風が、流琉の作った鹿肉の燻製を持ってきた。そしてもう片方の手には……え？ あんなもの、どうするんだろ？

風は燻製を、季衣の鼻の前に近づける。すると……

んがあっ

燻製の匂いに反応した（？）季衣が口を開ける

がぎよっ！！

風がすばやく差し出した丸い石（握りこ

ぶし大）に噛み付く季衣

「ほがつ！？」

あごに伝わったであろう凄まじい感覚に、たまらず季衣は飛び起きた。

「おや、起きましたねー」

「そうだねー……って風！？ 何やってんの君！？」

なんて起こし方！？ 石なんかかじらせて……季衣の歯が折れたらどうすんの！？ いくらギャグだからってやっていいことと悪いことが……

……と思ったら、石の方にひびが入っていたので何もいえなくなつた。季衣、君どんな顎でどんな歯でどんな咬筋力してるの……？

「うっ、いたた……おいしそうなスイカかと思ったのに……」

「いや、そこはせめてリンゴとか言おうよ」

君はスイカを丸かじりするのか。
……ともかく、季衣も起きてくれたことだし……朝ごはんのしたくしますか。

朝食の後、

季衣は山へ芝刈りに、流琉は川へ洗濯に……じゃなくて、

季衣は山へ熊狩りに、流琉は川へ鮭の一本釣りに……ってこつちの方がすごいな。

ちなみに僕は、流琉について鮭釣りに来てます。

や、僕は細腕だから、鮭なんか吊り上げるのは無理だろうけど……そこはほら、川魚とか色々釣ればいいよ。風も、季衣についてって山菜取りだし。

まあ、サバイバル的な食料調達だけど、レジャーだと思えば楽しい。

ちなみに、なんでまだあの山小屋にいるのかっていうと……後片付けと、盗賊たちが戻ってこないかの監視のため。

「ひよつとしたら……僕をエサにしたら、またあの魚が釣れないかな？」

「煌魚ですか？ ふふっ、兄さまならできるかもしれませんね」

「ははは……素直に喜べないな……」

なんてことを話しながら、僕と流琉は釣りをしていた。

あ、ちなみに今朝からの流琉のこの『兄さま』って呼び方は、季衣のそれをなぜかマネしたくなったださうだ。……なんでだろうね？

すると、ふと流琉が、

「なんだか……不思議な気分です」

「？ 何が？」

「いえ、盗賊達に村が襲われてたときは、まさかこんな風に……楽しく過ごせる時が来るなんて、思ってたからですから……」

また1匹……鮭じゃないけど、魚を釣り上げながら、流琉はそんなことを言ってくる。

まだ実感がないみたいだ。はは……まあ無理ないよね、死を覚悟した戦いがあっさり回避されただけでなく、盗賊達のはるか遠くに逃げて行っちゃったんだから。

でもほら、何事も無いならそれが一番いいでしょ。

「僕は逆に、あんな事態になるなんてことの方がびっくりしたけどね。何せ、朝起きたら遺書まがいの置き手紙残して流琉たちがいないんだもん」

「あう……ごめんなさい……」

「え？ あ、いや、別に蒸し返す意味で言ったわけじゃなくて……」

もう気にしてないよ？ 全然。

こういうことは、後々まで引きずっても空気が悪くなるだけで、何でもいいから何かのきっかけにきっぱり吹っ切っちゃった方がいい、と相場は決まってるもんなんだ。

でもまあ、ただ……

「まあ……いきなり家族がいなくなっちゃうみたいで、正直焦ったのは事実か」

「……え？ 家族……ですか？」

「うん。あ、もちろんたとえ話だけだね？」

実のところ、流琉や季衣を、いつの間にか妹みたく思えてた節がある。

何ていうか……鈴々がそんな感じだったし、元々小さい子には好かれる方だった。

まあ、それは置いて……僕自身、小さい子は嫌いじゃない。

だから季衣や流琉も（身体能力が明らかに別次元なのは置いといて）、それに風も、最初こそ色々と戸惑いはしたものの……一緒に過ごして、世話して世話されて……っていううちに、何ていうか、それに近い感情が芽生えてたなあ。

だから、2人が突然いなくなったとき……言いようもなく焦ったし、さびしかった。

「いつも……流琉と一緒に料理して、季衣と一緒に薪割りとかして、風と一緒に山菜取りとかして……たったの数日だけど、それが当たり前っていうか、そんな感じに思えてたんだよね。だから……家族、かな……」

「家族……」

「うん、家族」

そう言って、ぼん、と流琉の頭に手を置く。

ちよつと驚いてたけど、特に嫌ってわけでもなさそうだった。ほつ。

……まあ、機会といえば機会だ。一応……言いたいこと、残さず言つところか。

「流琉との料理……ホントに楽しいからさ、何ていうか……もうすでに他人って気がしないっていうか……昔からもう、こんな風に生活してたみたいで」

「あははっ、ホントに家族みたいですね、それじゃ」

「ははっ、別に……いっそそれでもいいかな、って思うよ」

「……えっ……？」

きよとんとする流琉の顔は、少しだけ赤かった。？ 何で？

ちなみ、僕はさっきから流琉の頭に手乗せたままだけど……熱と加賀で照る風な感じはしない。どうしたのかな？

「えっと……なんて言うかこう、妹みたいだしね？ しっくりくる」

「……あ、妹……ですか……」

「？ うん、3人ともかわいいから、自慢の妹だろうな」

3人そろって呼び方からしてそんな感じだし。季衣が『兄ちゃん』、風が『お兄さん』、そして流琉が『兄さま』だもんね。

ここに鈴々の『お兄ちゃん』が加われば完璧か……いや、何に？

「わ、私はできれば、妹より、むしろ……およ……め、さ……方が

……」

「？」

なんか流琉がさっきから顔赤いんだけど……どうしたんだろ？
小声で何か言ってるけど、聞こえない。まあ……独り言みたいだ

し、取り立てて気にするようなことじゃないか。

「まあ、だから……何か相談したいことがあったら、風や……頼りないけど、僕にでもしてくれていいから。間違っても、いきなりいなくなるなんてことしないでよ？ 今回だって……最初から風に相談してれば、何事もなく収まったんだから」

多分あるとき僕は、世のお父さんが『実家に帰ります』という置き手紙を残して奥さんに逃げられた時の気持ちに近いものを味わったと思う。

いや、ホントにショックがハンパなかったからな……って、何か違うか。

「……はい、そうします。今度からは……遠慮なく！」
「ん、よろしい！」

さて……じゃあまた釣りに戻……ん！？

「……っと思っただけど流石、それよりまず僕を手伝って！」
「はい？ 何か……あ、もしかして何か釣れたんですか？」
「そうみたいんだけど……なんかもう、すごい手ごたえで……重い……っ！」

見ると……川の中央、ちょうど深くなってる部分……大っきな黒い影が……っていうかアレ、尋常な大きさじゃないぞ！？
間違いない、僕の身長よりはるかに大きい……何だあれ！？

「も……もしかして、また……」
「そ、そんな……川の漁師さんでも、一生に一度出会えるかどうかの希少種なのに……こんなにしょっちゅう……」

「と、ともかく釣り上げよう!」
「は、はい!」

すぐさま駆け寄ってきた流琉が、体を寄せてぐつと釣り竿をつかむ。

……ちよつとだけ煩惱が出そうになったのは内緒。
いや違うんです。露出が多いせいで意識しちゃうとか、色々当たてる（小さいけど）……というかもはや密着してるとかそういうのはもう……すいません嘘つきました。
何言ってるんだろ僕、子供相手に。

と、ともかく、糸が切れないように注意しつつ引っ張って……ただ、

今度は……竿の方に限界が……まずい……このままだと折れる!

「こ、こうなったら……また僕をエサにして……」

「何言ってるんですかやめてくださいよ!？」

「じよ、冗談だよ、流琉……」

冗談で言ったのにすごい勢いで言い返された。び、びっくりした

……

心配……してくれたのかな？ それは嬉しいけど……音量と剣幕が予想外だった……。

するとそれを聞いた流琉は、ほつと息をつき……その直後、僕と同じように、このままだと取り逃がすと思ったのか……なんと、彼女はどこからか自分の武器を取り出した。

見た目一発、ヨーヨーのような……というか完全に見た目がヨーヨーな、流琉の専用武器。ただし、大きさが直径数十cmあって、

重さもそれに釣り合うだけあるから……凄まじい重量級の武器である。

流琉はそれを、川の中に投げ込み……

「え いっ！！」

ギュルルン、バシャアッ！！

川の中の大物を直接引つ張りあげた。おお。荒技。
そして……空中を舞って川岸に飛来したそれは……

「「……熊！？」」

なぜか……熊だった。いや……なんで！？

この世界は川で熊が釣れるのか……と納得しそうになったけど、隣で同じように流琉が驚いていたので、僕の感覚は正常だと悟る。

すると……よく見たら、熊に何かがついてきてたのが見えた。
それは……

「あ、兄ちゃん、流琉も」

「……なんで？」

季衣と一緒に連れていた。流琉のヨーヨーの紐に、ぐるぐる巻きになって。

「と、いうわけで、季衣ちゃんが流琉ちゃんとお兄さんに釣り上げられたわけですねー」

「……川で熊の血抜きしてたら流されちゃって、それを逃がすまいとしがみついていたらここまで来た……？」

「あはは……そうなるかな……」

「いや、季衣……なんで君はそう笑ってられるのさ……」

その後で合流した風からも事情を聞くと、そんな感じらしい。

……季衣、食い意地張りすぎ。

ともかく、今は帰宅途中の獣道。

……獣道だけど、この山の食物連鎖の頂点に（戦闘能力的な意味で）君臨してる2人がいるので、熊や野犬の襲撃とかは別に怖くないです。

というか今、季衣が仕留めた熊、実際にひきずってるし。

その道中、ご機嫌そうな季衣。

「ごきげんですねー、季衣ちゃん？」

「そりゃそーだよ、熊っておいしーんだもん！　ねえねえ兄ちゃん、料理作ってよ、今日はこの熊でさー！」

「無理だって……さすがに熊料理は作ったことないよ」

「それに季衣、熊の肉は臭みを抜いたりする下ごしらえに時間がかかるんだから、どの道今日の晩ごはんに出すのは無理」

「え……」

そんな会話を繰り返している。

うんうん……いいね、この空気。昨日までの状況が嘘みたい。やっぱり、こういう平和で笑いあえる空気が一番だよ、人間。

と、そんな雰囲気の中で小屋に帰ると……………ん？

（え、何、この状況！？）

なんか……兵士みたいな武装した人たちが、小屋の前にたくさん来てらっしゃるんですけど……え！？ 何事！？ 盗賊、じゃないみたいけど……

そしてその人たちに指示を出すように……見慣れない人が、小屋の前に立ってた。

焦げ茶色のセミショートの髪に、メガネをかけた女の子だ。ミニスカにノースリーブのコスプレっぽい装束で……なんていうか、知的、っていう言葉が似合いそうな美少女。

……と、僕の後ろからその姿を確認したらしい風が、

「おー！ 稟ちゃんですかー！」

「！ 風！ ここにいたのですか！」

え？ 知り合い？

風は『稟ちゃん』と呼んだ彼女の元へ駆けていき……つとど、これ多分真名だな。

ともかく……なんか親しげに話してるから、知り合いなんだろう。そういえば……風はたしか、旅の仲間とはぐれたから、季衣たちとこの山小屋にいたんだっけ。ってことは……この娘が風の仲間か。すると……次の瞬間、

「ああっ、ご主人様あつ！」

……っ！？

すつつつごく聞き覚えのある声が聞こえてきて……いや、まさか……

まさかと思いつつも振り向くと……

「じん……！（通算三度目）

」「いだあつつ！？」

なんか身に覚えのある痛みが額に！？
衝撃に耐え切れずに尻餅をつきつつも、どうにか確認すると……

そこには……

「桃香!？」

「ご、ご主人様だぁ……っ！ そのおでこの感触はご主人様だぁっ！」

いや、できれば他のとこで断定してほしい。

……ともかく、そう、つい先日、別れ別れになってしまった、僕
のたびの仲間……桃香だった。
そして、その向こうからは……

「あ、お兄ちゃんだ！ おーい！」

「ご主人様!？ ご無事ですかーっ！」

愛紗と鈴々も来た。わー、何コレ、全員集合だー。

そして、僕の背後で……

「えっと……何、これ？」

「さ、さぁ……」

状況を飲み込めていない季衣と流琉が、小首をかしげていた。

説明された限りだと、

あのあと……桃香達は僕を探して川を下っていったところ……近くの盗賊団を警戒していた官軍に出くわしたらしい。

……盗賊だと勘違いした鈴々が突撃しようとしたらしい……っていう余計なエピソードは置いといて（ちゃんと止めたらしいよ？）。

で、そこで客将として雇われてたのが……風の旅の仲間である、稟こと『郭嘉』さんだったらしい。風の搜索もかねて客将になったらしい。

そして、何だかそこで色々と情報の交換をしたところ……どうやらこのあたりで僕らしき人物の目撃情報があつたため、同行させてもらって一緒に探してたそうだ。

稟達としても、強大な戦力は欲しかったところだったらしいから、ちょうどよかったんだとか。

結果的に、僕は桃香達と、稟は風と合流でき……さらに稟とは『風が言うのなら、信頼に足る人物でしょう』という事で、真名ままで許してもらえた。初対面なのに、何か恐縮です。

そして……合流できたということは、それぞれの旅に戻る、という事でもある、

季衣と流琉と、ここで分かれることを意味していた。

「さびしくなるな……兄ちゃん、もう少しここにいてもいいじゃ

ん」

「うーん……でも、随分と旅程が遅れちゃってるし……残念だけど、ごめんね」

「じゃあ、仕方ないですね……」

むくれている季衣と、しゅんとなる流琉。

僕としても、もう少し一緒にいたいけど……僕らの目的を考えると、さすがにこのまま長居しとく……ってわけにもいかないしなあ……。

それに、桃香達の話だと……もうこの先のプランがあるみたいだし。

「まあまあ、きつとまたそのうち会えますよー」

「？ 風、それは一体どういう意味ですか？」

今の風のセリフの意味を図りかねてか、稟が問いかけた。あ、僕も聞きたい。

すると……風は、僕ら全員を見渡してくすつと笑い、

「この面子なら……いずれはまた、会うことになる気がするのですよ……まあ、どういう形で、とは言いませんが……」

「「「………?」「」「」

なんか、よくわからない。

どうやらわずかでもわかった感じだったのは、風と同じ軍師の稟だけだった。

むう……気になるけど……風のこの目は、聞いても教えてくれない目だ。

大方……『いつかわかりますよー』とか言っでごまかされるのが落ちだ。

ま、今はこれでいいか……と、僕がムリヤリ納得し、最後の別れの言葉でも考えようかとしたその時、

「まあ、にしても……風としても、これでもうお兄さん達とお別れというのはさびしいですねー。お兄さんという名の敷き布団は、なかなか寝心地よかったのですがー……」

「あのね……」

それは君が勝手にめぐりこんできてただけでしょうが、と僕が注意しようとした……

……その時、

「ふえっ!?! ふ……ふふふ風!?! ああああああなたは何を

……」
「?」

ん、何だ?

なんか……いきなり、稟が顔をボンツと赤くして狼狽し始めた。

「あ……ああああのよよ吉井殿? あ、あなたその……風と一緒に寝……?」

「？ ああ……いや、勝手に布団にもぐりこんでた、っただけだね？」

「ふ……ふと……潜っ！？ そ、それはもしかして……よ、よば……」

……？ どうしたんだ？

なんかさっきから、稟がわたわた慌てまくってるような気が……

「ふ……風と吉井殿が一緒の布団で……風が上、吉井殿が下で……うら若き男女が一緒に……当然、何も起こらないはずがなく……」
2
人はそのまま……」

……と、次の瞬間

「……ぷふうっ！！（ブシャアアアアアアアアア！！）」
「……ええええええええええええええええっ！！？」

いきなり大量の鼻血を噴出して倒れた！？

ちょ……何、どういうこと！？ ま、まさか今の話から妄想で……
っておい！？

そんな、ムツツリー二じゃあるまいし！？

「だ、大丈夫なの稟！？」

「大丈夫ですよー、このくらい慣れてますからー」

「……いつも！？」

あえて繰り返そう！ そんな、ムツツリー二じゃあるまいし！？
っていつか、なんかもう……致死量超えてそうな勢いの噴出です
けど……

「はいはい、稟ちゃん、首の後ろとんとんしますよー、とんとん」

当然のように民間療法でなんとかしている風がいた。

いや……そのやり方、実は間違ってるって聞いたことあるよ？
正しくは鼻を押さえて血を止めて、姿勢を……

「大丈夫ですよー？ 風も季衣ちゃんも流琉ちゃんもお兄さんと一緒の布団で寝ましたし、それぞれ上と右と左でしたけど、何も問題ありませんでしたからー」

「上と右と左（ダバダバダバ……）」

悪化した！？ うわあ！ 赤い水たまりが僕らの足元にまで拡大を！？

ちよ、風、あおつちゃダメ………うおっ！？

何だ！？ 後ろから強烈な殺気が……血の匂いに誘われて熊でも来たか！？

「……ご主人様………今の話は本当ですか？」

あ、熊の方がマシだった。

見ると……そこにはしつかり青竜偃月刀をかまえてらっしゃる愛紗さん。

いやあの……誤解ですよ？ 風が言ったのはホントだけでも、こんな子供達相手に僕は別に何も……

「ご主人様……よもや、このような幼子達の布団にもぐりこんで破廉恥な真似を……」

違う！ それ違う！ もぐりこんできたの彼女達の方！

「これは……少々お仕置きが必要ですか……？」

「いや、ちよつと待ってって！？ 愛紗が心配してるようなこと何もないからホント！ 流琉、季衣、そくだよね！？」

「……本当ですか、季衣殿、流琉殿？」

証言を！ 僕をこの地獄の淵から救い出す証言を！

「うん、兄ちゃん、すつごく僕らによくしてくれたもんね！（日々の生活で）」

「はい！ 私も、兄さまには色々と教え込まれました！（料理とか）」

「あんなの、初めてだったよねー（リゾートとか洋食）」

「はい。特に……風さんとのあれは、すごかったです……（盗賊退治の戦略）」

無間地獄に叩き落す証言が大量に発せられた。

ちよつ、言い方、言い方

！！！！

「お、教え込んで……調教……！？ は、初めてを奪って……（ダバダバダバ……）」

そしてあつちでは稟がさらに死にそうに！？ 二次災害！！

「……ご主人様……」

「え、あの……あ、愛紗……？」

「……何か、言い残すことは……？」

「いやちよつ、ま、待つて愛紗！ そんな事実はなくて全面的に誤解でホントお願い助けて殺さないでぎゃあああああああ

っ……！」

「……何、これ？」

「さあ……」

状況が理解できていない桃香と鈴々の前で、僕は星になった。

そして、

負傷者2名の存在により……結局、僕らは治療・療養のために、もうしばらくこの山小屋に滞在することとなり……旅立ちの日程は、図らずも延びてしまいましたとさ。

ま……理由が納得できないものだったけど……流琉たちが嬉しそうにしてたし、いいか。

あ、三日後、今度はきちんと旅立っただけだね？

第12話 家族と別れと誤解の連鎖（後書き）

……最後まで騒がしい感じでした……。

まあ、これこそがまあ、バカテスらしさ……でしょうかね……。笑いがあるほうが。

そして、明久が酷い目に（理不尽に）遭うほうが。

さて、次回から新章突入です。

どういう展開になるかは……次話をお楽しみにしていただければ。

ではこのへんで。和尚でした。

第13話 旧友と温度差と思わぬ再開（前書き）

第13話です。

今回、さんざん出番を先延ばしにしてきたあの方とあの方がようやく登場……

そしてさらに……あの人まで……？

ともあれ、どうぞ。

第13話 旧友と温度差と思わぬ再開

「えつと……ここで間違いないの？」

「うん！　ここが、白蓮^{ぱいれん}ちゃんのお城……のはずだよ！」

えっへん、と胸を張る桃香がその背後に背負っているのは……ごく立派なお屋敷。

というか、城。

うん、城だ、これは。今、桃香言ってたし。

さて、あの後……名残惜しくも流琉たちや風たちと別れた僕らは、桃香の提案で、彼女の旧友が治めているっていう城に来た。

どうやら、まずはここにいる桃香の旧友を頼り、徐々にでも力をつけていこうか……っていう作戦のようだ。

まあ、賢いといえば賢いやり方……かな。

「でも……利用するみたいで、ちよつと白蓮ちゃんに悪いなあ……」

と、ただでさえ大きい胸を張ったばかりなのに、心持ちしゅんとしている桃香。

どうしたんだろ……なんて聞くまでもないか。その友達に対して、ちよつと申し訳なさを感じてるんだ、あれは。

でも……

「でも桃香、仕方ないよ。僕ら4人じゃ、できることは限られてる

……どころの話じゃないんだからさ」

「いずれ、どうにかして力を付けなければならない……というのは課題だったのです。方法として少々後ろめたいのは否めませんが……」

……」

「まあ……仕方ないのだ。その代わり、鈴々たちでいっぱい、その『公孫賛』こうそんさん って人のお手伝いしてあげればいいのだ」

まあ……鈴々の言うとおりだ。その分の働きを向こうに対してもしてあげられれば、少しはましってもんだろうね。言い訳だけどさ。

ちなみに、面会に際して、いくつか課題があった。

こういう場で、相手に舐められないためには……自分達はすごいんだぞー、っていうアピール要素が必要なんだけど……通常、権力のある人なら貢物とか、大勢の兵士とかでアピれるようなそれを、僕達は持っていない。

そこで、桃香達は……途中から僕も加わったけど……この数週間、各地で盗賊退治の手伝いなんかで名を上げて、さらにその噂を方々に広めさせた。『4人組の、すごい連中がいる』って、ね。

その評判と……あとは、町でちよろつと買ったお土産で、アピールのかわりにする……っっていうのが、僕らのプランだ。ちょっとシヨボいけど、まあよしとしよう。

ちなみに路銀は、盗賊退治の報酬に加え、僕の持ち物のいくつか……ルーズリーフ（100枚入り）とかボールペンとか……が予想外の値段で売れたため、不自由はしていない。

や、今まで忘れてただけど……紙って、この時代では高級品なんだよね。ボールペンにいたっては、オーバーテクノロジーもいいところだし。

結果、愛紗いわく『向こう数ヶ月楽に暮らせる』くらいに懐が暖まった。そのおかげで、これから会う『公孫賛』って人へのお土産も奮発できたよ。

さてさて……どんな人なのかな……。

古い知り合いとはいえ、他人。しかも平民。
まあ、数時間余裕で待たされるのは覚悟したんだけど……以外に
もすんなり会えた。

公孫賛って人、案外フランクなのかな？

その答えが……今、僕らの目の前にいる。

「おーおー、久しぶりだな、桃香！」

「白蓮ちゃん！ 久しぶりーっ！」

姿を見るなり飛びついてスキンシップに移行する桃香。ああ、困
ってる困ってる。

横にいる衛兵さん達が驚いてたけど、公孫賛さん、であろうその
人は、『いいから』と手をかざしてとめていた。

ピンク色のポニーテールに、整ったきれいな顔。常備なんだろうが、白い軽鎧を身にまとい、腰には一振りの剣をさしている。身長とかは、桃香とさして変わらないけど……ある部分において、あまりにも発育に差があるのがありありとわかる。いや………どことは言わないけどね。

なんていうか……聞いてた通り、人がよさそうな感じの人だ。公孫贇さん。

すると、人懐っこい猫よろしくじゃれつく桃香をどうにかどかして、公孫贇さん、こんどは僕らの方に視線を向けた。

敬意を表し、愛紗、すかさず一礼。慌てて僕と鈴々も。

「ふーん……あれが、お前の連れか？ 頼れる武将2人と、『天の御使い』とやら」

「うん！ 左から、愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、そしてご主人様！」

「桃香、右からじゃなくて？」

僕、君達から見て一番左に立ってますよ？

「あ……」

「それに桃香様、真名と呼称で紹介しては……公孫贇殿が呼べませんよ？」

「あー、うん、ごめん……えっと……」

「ははは、変わってないな、桃香」

その後、無事に自己紹介を済ませました。その中で、公孫贇さんが

「天の御使い、ねえ……」

なんてつぶやきながら僕の方をジト目で見てたのがちょっと気になったんだけど……いや、仕方ないだろう。胡散臭いのは重々承知だ。

そしてそんな中、思い出したように桃香が、

「あ、そうだ白蓮ちゃん、お土産買ってきたんだ！ はい！」

と、何やら紙袋を差し出す。

お、桃香に任せておいた、例の『お土産』か。

さて、何を買ったんだろう？ けっこうな額だったみたいだけど……秘密だとかで、僕も愛紗たちも何を買ったのかは聞かされてないんだよね……。

まあ、受け取って喜ぶような品物だとは思っけど……

それを受け取った公孫賛さんが、紙袋の中から取り出したのは……

「……何だコレ、石？」

手のひら大の……石？

石英か何かかな……キラキラしてキレイだけど。

……何だろう、何か嫌な予感が……

「えっ、と……桃香、これは……？」

「ふっふっふっ……聞いて驚かないでよ、白蓮ちゃん」

何やら自信たっぷりといった雰囲気、桃香だけど、それに比例して僕らの不安度ゲージがうなぎ上りだったりします。

……まさか……

「それはね、露店で売ってた『幸運を呼ぶ石』！それを部屋に置いてくだけで、次から次にいいことが起こるんだって！すごいよね！」

「……」

ああ、そういうこと、ね。

目をキラキラさせて言う桃香のその周りで、その他全員が三白眼になる。うわぁ、この温度差。

「……愛紗、今度から……買い物は桃香に任せちゃダメだね」

「ええ……こうなることは予想してしかるべきだったのかもしれないません」

「……すっかりしてたのだ」

「ははは……桃香、お前は相変わらずだな」

「……」

知らぬは当人ばかりなり、か。

思いつきり騙されてつかまされている買い物をしてなお、誇らしげにしている桃香を前に……公孫贇さんを含めた僕らは、この娘にどう言ったもんかと頭を抱えていた。

それから数分後。

場所を……机と椅子のある、おそらく応接室と思われる部屋に移して。

「しかし、意外だったな……お前ほどの才能と能力がある奴なら、一国の太守にだって慣れただろうに……塾を出てから、ずっと旅して回ってたってのか？」

「あー……うん……いろいろ、そのー……見て回りたくてね……」

事の真相を知った（愛紗が容赦なくバラした）桃香は、目に見えてテンションが落ちていた。『幸せを呼ぶ石』が偽者だった、という事実。

この娘……人を疑う、ってことを知らないからなあ……。

ちなみにこの後、桃香にそれを売りつけた悪徳業者は、公孫贇さんが摘発しました。

……買った桃香も悪いように思える……けど、無視！

それはさておき、

どうやら桃香と公孫贇さんは、同じ『私塾』……現実世界という

学校みたいなものらしいけど、その同期だったらしい。それで知り合いだったのか。

こんな大きなお城持つてる人と知り合いだなんていうから……てつきり桃香って、どこかのお嬢様なのかと。仮にも『劉備』だし。

どうやら同じ『私塾』を卒業した後（桃香は凄まじく成績優秀だったらしい）、普通はそのままいい仕事につくらしいんだけど……そこを桃香は旅に出ちゃったから、出世とは無縁だったわけだ。思い切ったまねするなあ……。

まあ、立派だけどね。

そんな思い出話に花を咲かせつつ、愛紗と鈴々、それに僕が適宜口を挟んで、公孫賛さんに『本題』を切り出していた。

「なるほど、ね……つまり、お前らはこの私を、自分の道の第一歩として利用したいわけだな？」

にやりと意地悪っぽい笑みを浮かべて言う公孫賛さん。お、鋭いな……お見通しか。

一応、そこは上手く隠して話してたつもりだったんだけど……さすがは一国一城の主。そのくらいの観察眼は持ち合わせてる……ってことか。

「あう……ごめん、白蓮ちゃん……」

「はははっ、気にするな、今の時代に生きるものなら当然の考え方さ。私としてはむしろ、お前がようやくそういう野心の類を持つてくれたってことの方が嬉しいし、ほっとした」

「あ、これは愛紗ちゃんたちの案なんだけどね？」

「……あっそ」

公孫賛さん、ちょっとがっかりしたように見えたのは気のせいじゃないと思う。

「まあ……何にせよ。気にしないでいいよ。その申し出、受けさせてもらうよ」

「ホント!？」

「本当だ。そういうわけだから……桃香に……関羽と張飛、あとこの……吉井だっけ？ お前達は、私の所で客将として預かることになるが……いいか？」

「もちろんです、公孫賛殿」

一同、ぺこり。

ほっ、よかった。うまくいった。

まあ、完全に見抜かれてるとか、当初の予定とは幾分異なる部分もあるけど……まあ、さして問題ないだろう。

向こうはきちんと、僕らの『実績』と『中身』を評価した上で受け入れてくれたみたいだし。

「それに……何というか……友として、お前を野放しにしておくのは気が引ける」

「??？」 桃香

……良くも悪くも。

ま、まあ……桃香の、保護欲をそその『実績』と『中身』は置いて、だ。これからがんばらなくちゃね、公孫賛さんに愛想つかされないように！

すると、

「それに……私としても、有意の人材は今1人でも欲しいところなんだよ」

「？ それ、どういう意味？」

何やら難しい表情になった公孫贇さん。

すると、桃香の問いに彼女が答えるより前に……別の声が割り込んだ。

「おや、公孫贇殿に用があつたのですが……来客中でしたかな？
これは失敬」

「「「？」」」

ガチャ、と扉が開く音がして……そつちに全員の視線が行く。

そこには……『失敬』と言いつつも部屋から出て行く様子はない、
一人の女性が立っていた。

青い髪に、白い服。露出は多めで、動きやすさ重視、って感じが
する。

袖の形が特徴的で……振袖みたいな形状のそれに、蝶の羽根みた
いな模様が描かれている。回ったらキレイと言うか、優雅に見えそ
うかも。

顔もスタイルも愛紗に負けず劣らず、って感じで……特に薄く笑
ってるその顔は、妖艶……って表現が似合うかもしれない。歳は…

…こちらも愛紗と同じくらいかな？

客人の前だったのにほぼ遠慮0（いや、別にいいけどね？）でずかずか部屋に入ってきた彼女は、公孫賛さんの座ってる隣に立った。
……？ 公孫賛さんの部下さんかな？

同じように気になったらしい愛紗がたずねた。

「公孫賛殿、その方は？」

「ん？ ああ……こいつは私のところにいる客将で……というかい、趙雲、お前、少しは遠慮しろ。一応、旧友との再会を喜んでい
る所だぞ？」

「おや、これは失敬」

言いつつも、趙雲さんの顔に反省は見られない。……何だろう、
つかみどころがなさそうな人だ。

………ん？

さてよ……『趙雲』？

その名前、どこかで聞いたような……

いや、三国志の超重要人物だってことはわかるんだけど……何か、
他に……最近聞いたような……あつ、そうか！

「あ、趙雲さんって……もしかして、風と稟の仲間の！？」

「む、あの2人をご存知か？」

驚いたように僕の方を見る趙雲さん。ああ、やっぱり！

この人……風と稟が、前に一緒に旅してた、っていう……『趙雲さんだ！』

あーあー、なるほど……風も稟も『最近わかれた』って言うてたから、もしかしたらどこかで会うかも……なんて思ってたんだけど、よもやここまで早く会えるとは……。

とりあえず、2人の近況を知らせておく。元とはいえ仲間だったんだし、気になるよね、多分。

「なるほど……2人は元気か。それは重畳」

うんうん、とうなずく趙雲さんだけど……その直後、一気に話を变えて、

「所で、吉井殿でしたかな？ 聞けば、あなたが最近噂の『天の御使い』である」と

「え？ あー、うん、まあ……一応、そうみたいだね」

「？ そうみたい……とは？」

「うん、『天』っていうか、その……まあ、こことは違う別の世界から来た、っていうのは合ってるんだけど……そんな大層なものかな、って話」

「ほう……随分と謙虚であられるような」

そう言うてにやり。

趙雲さん……何考えてるのかわかんないなあ……。いや、何度も言うけど、胡散臭いのは承知だけだね。

けど……そういう感じでもないんだよね……。まるで、その先にある何かが理由で、こういう態度をとってるみたい……そんな感

じがする。

するとそのタイミングで、

「……あのさ、桃香」

公孫賛さんが口を開いた。

しかも……何やら、雰囲気が真面目だ。……何だろ？

きよとんとして見返す桃香に、公孫賛さんは呼吸を落ち着けると、

「その……だな、率直に言うんだが……この吉井なんだがな？ 何か、『天の御使い』だってことの証明になるようなものとか、あるか？」

「証明？」

疑われてるのか、と一瞬不安になった桃香だったが、すぐに持ち直す。

こういうケースは想定内だ。そして……対応策も考えてある。

桃香のアイコンタクトを受けて、僕は……すっと席を立つ。

そして、

「それじゃ……サモン試獣召喚！！」

ポンッ！

僕の召喚獣登場

「「！」「」」

見慣れてる桃香達以外……公孫贇さんと趙雲さん、それにその周りの兵士の皆さんが驚いてた。
まあ……そりゃそうだよな……いきなりこんな『小っこい僕』が出るんだもん。

すると、

次の瞬間……公孫贇さんの口から、意外な言葉が出た。

「なるほどな……やっぱり『召喚獣』か……」

「「「え!?!」」」

ちょ……今の、どういうこと?

まるで、『召喚獣』を知ってるみたいに聞こえたんだけど……

いや、そんなはずないよね? だって、この世界で『召喚獣』なんて僕が使ったのそんなに回数ないし……というか、僕らの噂は一応広まりつつあるけど、そこまで性格に広がってる様子はなかったはずだし……。

どうして、その正式名称まで知ってるような発言が、公孫贇さんから……?

すると、

「あのさ……桃香、いや吉井」

「はい？」

「えっと、な……お前に、会ってもらいたいやつがいるんだ」

？

僕に……？ 何で？

それを聞こうとした次の瞬間、

「明久君っ！！」

背後から……信じられない声が聞こえた。

「……………え……………？」

それは……もとの世界とは違うこの世界では、決して聞こえるはずのない声。

けど……毎日のように耳にしていた……聞き間違えようもない声。

混乱しながら、僕が振り向くと……そこには、

見慣れた…… 1人の女の子が立っていた。

何でここに、とか…… そういう至極当然の疑問がさっきまであったんだけど…… 彼女を見た瞬間に吹き飛んだ。

代わりに何か、別の気持ちが出てきたわけじゃない。ただ…… 何も考えられなくなったんだ。

なにせ、そこにいたのは……

そこで…… 涙を目にいつぱいためて、まっすぐ僕の方を見てくる、その娘は……

「ひ…… 姫路…… さん…… ！？」

「明久…… くん…… っ…… ！！」

いつも僕のそばで笑ってくれていた…… かわいくて、頭がよくて、そして料理がちょっと洒落にならない、優しい女の子、

クラスメイトの…… 姫路瑞希さんだったのだから。

第13話 旧友と温度差と思わぬ再開（後書き）

はい、今回……公孫贇さん&趙雲さん、
そして……バカテス側より、ついに姫路さん合流です。……長かつ
た……。

これでまた、書き分けが大変になった代わりに……話の幅が広がり
そうです。

さて、一体どういう経緯で彼女がここにいいのか……ってあたりは
次回。

ではこのへんで。和尚でした。

第14話 経緯と仮説と装甲版（前書き）

さて、

昨日の夜眠すぎで書けなかったので、昼間の更新です。

姫路さんと再会した明久。

どんな展開が待っているんでしょう……？

第14話、どうぞ。

第14話 経緯と仮説と装甲版

その後は、何も言う暇が無かった。

僕の顔を見た姫路さんが、僕の胸に飛び込んできて、

僕は彼女に会えた感激と、胸の辺りに押し付けられるその……アレの感触と煩悩の爆発に耐えるのに必死で、

で……当然のごとく、その様子に三白眼で眉間の血管をピキらせた愛紗の襲撃をかわすのにまた必死で、

……いや、せつかくの再会、もうちょっと雰囲気ださせてよ？

ともかく、

「まさか、姫路さんと会えるなんて……」

「ぐすっ……よかったです……また、明久君と……会えて……っ！」

ぼろぼろと流れる涙をそのままに、姫路さんは僕の目を見てそう言ってくる。

普段なら『うわ、何この映画のラストシーンみたいなの？』って

な光景だけど……ホントにそういう雰囲気だから、違和感がないんだよなあ……

しかし、繰り返しになるけど……驚きだ。まさか姫路さんも、この世界に来てたとは。

聞けば、どうやら僕とおなじような経緯をたどったらしい。

あの、ババアの調整ミスで起こった大閃光につつまれて、衝撃に襲われて……気がついたら、荒野。

ただし、姫路さんの場合……ついた地点のすぐ近くで、ちょうど公孫贄さんの部隊が野営張ってて、すぐに保護してもらえたんだとか。なるほど、それで今まで無事でいられたんだ。

そして……さっきから感じてた、公孫贄さんの妙な視線の理由もこれでわかった。

あれは……僕が天の御使いとして本物かどうか疑ってた視線じゃなかった。姫路さんを事前に保護してたがために、あまりに共通点の多い僕たちの関係性をかんぐってたんだ。

ひょっとして……姫路さんもまた、巷で噂の『天の御使い』じゃないか、って。

召喚獣も、おそらく姫路さんに見せてもらってたんだろう。

「なるほど……その姫路殿は、ご主人様と同郷、というわけですね？」

「ああ、まあ……そうだね。クラスメートだよ」

「くらすめえと、って何なのだ？」

あ、横文字か。

まあ、学問所の同級生だ、と説明しておく。

「しかし驚いたなー……『天の御使い』の噂は私も聞いてたんだが、まさか複数人数いたとは……」

公孫賛さんも不思議がってた。

桃香達も同様だけど……そんな中で、趙雲さんだけは、不思議……
……ってうより、面白い、って感じのノリノリ(?)な表情でこつち
を見てる。あからさまにやけ顔だし。

……なんかこの方、厄介な性格持つてそんな予感……。

「まあ、ともかく……よかったな姫路、仲間に会えてさ」

「はい……っ、よかったです……明久君……っ！」

そう言つて、長いすの隣に座つて僕の腕に抱きついてくる姫路さん。おお……多分コレ、マイナスイオン出てるな……癒される……。
……と思つたら、愛紗たちのほうからそれを打ち消して余りある
怒気が飛んできたので、すぐさま現実に取り戻されてしまう。いや、
違つんです。これはその……姫路さんが勝手に……僕としてはほら、
やましい気持ちはちよつとしかなかったんです！

「いや、あつたの？」

「というか、声出てるのだ」

「しまったああっ!？」

すると直後、横からさらに信じがたいセリフで追い討ち(?)が。

「え、えつと……ちよつとなら、いいですよ？ 明久君なら……」

えええっ!？ ちょ……姫路さん、何言つてんの!？

いや、そんな……いくら場の空気を和ませるためだからって、そ

んなこといったら本気にするよ普通！？ 襲われても文句言えない
って言うか、むしろもうすぐにでも襲い掛かりたくなるって言うか
……もう全部かなぐり捨てて欲望に正直になりたく……

ゴロゴロゴロゴロ……

愛紗

……なっただけど、命あつての物種だよねっ

僕としてはこのままでいたいところだけど、ほんとくと愛紗がス
タンド使いになりそうなくらいの怒気を部屋に充満させてるので、
手遅れになる前に姫路さんを引き離す。

……いや、残念そうな顔しないで？ 僕も残念だから。すごく。
でもほら、このままだと愛紗に泣くまで殴られそうだから。

すると、

「さて……まあ、再会を喜ぶのはその辺にして……本題に入ってい
いか？」

と、公孫賛さん。ん？ 『本題』？

「あ、そういえば……さつき白蓮ちゃん、『有意の人材は1人でも
多く欲しい』って言ってたよね？ それに関係あるの？」

「ああ……まあな。順々に説明するか」

そして、説明が始まった。

知つてのとおり、最近は何世の中の治安がすこぶる悪い。盗賊とか、普通にいる。

まあ……それは僕らも知つてるところだ。というか、僕らはそういう連中をハントして路銀稼ぎしてたわけだし。小規模なものなら、愛紗と鈴々だけで楽勝、少し数が多くなると、町の自警団と協力したり、僕も召喚獣で援護したりして。

まあ、僕らの武勇伝はひとまず置いて、その盗賊連中の動きが……ここ最近、特に活発になってきていた。そして……あの有名な『黄巾党』が、最近発足した、というのである。

シンボルマークとして、全員が頭に黄色い布を巻いてるから『黄巾党』。安直だけど……まあ、いいか。

で……三国志でも有名な事件『黄巾の乱』……ってまあ、そいつらの一斉蜂起が起こつたらしいんだけど、コレが結構な規模。

まあ……この大陸の情勢に不満を抱えてる民の数そのまんまわけだから、当然か。

けど、放つとくわけにもいかないので、朝廷……まあ、中央の偉方から『なんとかしろコレ』ってお触れが各地の有力者達に回つてるらしい。

その1つが、公孫賛さんのところにも来たとか。

「つまり……白蓮ちゃんも、兵を率いて黄巾党の討伐に乗り出す、ってこと？」

「ああ。まあ、幸い兵はある程度あるんだが……それを統率できる将がな……趙雲は有能だが、さすがに1人で全軍の指揮を執るのは無理がある」

「あー、それで愛紗ちゃんたちの参入を『助かった』って言ったのか」

納得したように言う桃香。

「ああ、お前達の噂は方々から聞こえてくるからな。人々を導き、いくつもの町を救って回る英雄達……ってよ」

「にははは……照れるのだ」

そんな噂になってたんだ……。ちよつと恥ずかしいけど、まあ、嬉しいかも。

「それに吉井、お前の噂も聞こえてきてるぞ？」

「え、僕の噂も!？」

これは予想外だ。

ああ、天の御使いなんてとんでもないプラカード掲げてるわけだから、ある程度そういう噂が立つことは覚悟してたけど……まさかこんな短期間でここまで早くとは。

「明久君、すごいですね!」

「はは、ありがとう姫路さん。ちよつと複雑だけどね」

姫路さんも褒めてくれたけど……ところで、一体どんな感じの噂になってるんだろう？

三人の美少女とともに村々を救って回る天の御使いとか……召喚獣を操って人々を救う、騎士道精神あふれる美少年とか……いやいやいや、そんなそんなそんな、はっはっは、それほどでもないですよ僕なんか。

「たしか……『己の姿に似せて召喚した外法の魔物を操る、女顔の妖術使い』だったかな」

どこでそんな黒魔術的な解釈が入ったんですかね？

いや、魔物で。確かにちっこいし力強いし、そういう印象抱いても多少仕方ないかなとは思うけど……それにしたって……

しかも、百歩譲って魔物うんぬんはいいとしても……『女顔』て！ もうちょつと他に言い方あるでしょ！？ 結構気にしてるんだよ！？

「だ、大丈夫ですよ、明久君」

「うう……姫路さん……？」

「その……ほら、明久君はちゃんと……かわいいですから！ ね？」

いやそれがむしろ！

ま……まあ、それはもう考えないことにして、話を戻そうよ。

さて……ともあれ要するに、その『黄巾の乱』の制圧……そのうち、公孫贛さんが担当する区画の鎮圧のために、僕らも協力して欲しい、というわけだ。

まあ、元からそのつもりで着たんだし、是非もない。

そのあともうちょつと色々話して、いろんな方向から僕のガラスのハートを傷つけられながらも、皆協力して戦いましょう、って方向でまとまって、その日の会合はおわった。

「はい、明久君」

「お、ありがとう、姫路さん」

で、会議が終わって……今僕は、姫路さんと一緒に、公孫贇さんの城の一室にいる。

客間らしいんだけど、使ってないとかで、2人で話すのにはちょうどいいだろう、ってんで貸してもらった。

そこで僕らは、さっきは話せなかったものの、色々と気になっていたことを相互に言い合う。

具体的には、

「……ってことはやっぱり、姫路さんもアレが原因だと思う？」

「はい……教室全体がすごく光って……気がいたら、何もなかったところにいたんです」

そう、この世界に来るに当たったプロセスだ。

予想通り……姫路さんも、ババアが起こしたあの事故の影響によるものだった。召喚獣のテストに参加してた僕らの巻き添えで……多分、一緒にいただけの姫路さんも巻き込まれたんだ。

まったく……あのババア、ホントにこれ大問題だぞ？

「うーん……でもまあ、無事でよかったよ」

「そう……ですね。公孫贇さんから聞いた感じだと、色々物騒な世の中みたいですし……」

正に、ね。

姫路さんみたいなかawaii女の子が1人で無防備に立ってたら、盗賊連中の格好の標的になっちゃうだろう。そんなシチュエーション、僕でも襲うもん。

あ、嘘嘘、ごめん、だからその……白い目で見ないで？

ところで、その理屈で行くと……

「あのさ……もしかしてだけど……」

「はい……もしかしたら……」

「他の皆も……!!」

そう……あの時、教室にいたのは……僕と姫路さんだけじゃない。僕は当初、僕だけが何らかの事故でこの世界に着たもんだと思ってたんだけど……姫路さんがこうしてここにいて、ってことは……あの教室内で起こった事故は、周囲にいた者達にすべからく影響を及ぼした、と見るべきだ。

……つまり……

「雄二たちも……この世界に来てるかもしれない……ってことが……」

あの場に一緒にいた……雄二やムツツリー二、秀吉や美波も、僕や姫路さんと同じように……この世界に舞い降りているかもしれない、ってことだ。

一緒にいただけの姫路さんがこうしているんだ。可能性は十分にある。

それがわかったのは収穫だけど……まずいな……。

タダでさえ治安が最悪なご時勢だし……どこに落ちたかにもよるけど、みんな、無事だろうな……？

くそっ……美波と秀吉……どうにかして見つけて助けないと……

「もうっ！ 明久君、冗談が酷いですよっ！」

顔を赤くした姫路さんに怒られた。ああ、ごめんごめん、冗談冗談。

さすがにシチュエーションがマジ過ぎたからな……不謹慎だったか、こりゃ失敬。

「わかってるって姫路さん。ちゃんとムツツリー二も助けるさ」

「あの……言いなおしても坂本君の名前は出てこないんですか？」

「……あ」

いっけね、素で忘れてた。

ま、まあ……ちゃんと雄二も助ければいいか。あんまり気が進まないけど。

……何、誰かもう1人忘れてるって？ ははは、いないよそんなの。

でも……今名前を上げた面子なら……なんだかんだでどうにか生き残ってそうだけだな……皆、けっこうたくましいし。

雄二なんかは腕っ節もあるし、秀吉には『演技力』がある。ムツツリー二は隠密行動得意だし……美波は意外と（？）攻撃力も判断力もあるしなあ……。

全員に共通する不安要素と言えば……言語くらいか。この世界、

漢文だし……

けどやっぱり、心配なものは心配だ。後でそのへん……公孫賛さん達にも相談しよう。

「でも……よかったです」

「？ 何が？」

すると、僕の隣で……唐突に姫路さんがそんな事を。？ 何だろ？

「……この世界に来て……明久君に会えて……」

「ああ、そんなことか」

いや、そりや当然だろう。こんな、わけもわからない場所で、誰も知ってる人がいない……ってそりや、つらいとか不安とかいうレベルじゃないもんね。

僕だって、最初のうちはすごく不安だったんだから。

……ただ、あまりに状況が目まぐるしく変わるもんだから、そこまで頭をやる余裕がなかっただけで。

いやホント、色々あった。

この世界に来てまだ1ヶ月も経たないけど……であつた人の数は……特に、軍師とか武人とか、そういう特殊な種類のカテゴリーの人が結構多い。

しかも、全員女の子ときたもんだ。

愛紗、鈴々、桃香に始まり……風、沙和に真桜、季衣に流琉、風に真……あと、ついさっきだけど、公孫賛さんに趙雲さんか。いや、

ホント色々あった。

まあそんな中で、知り合いである姫路さんに会えたっていうのは、僕としても、いや僕の方こそ心強いと言っか、ほっとすると言っか

……

……と、返したら、

「あ、いやその……そうじゃなくて……」

「え？」

「その……いや、ほっとした、っていうのは正しいんですけど……私はその、むしろ……」

そのまま、顔を赤くしたかと思うと、

「……あ、明久君だからこそ、ほっとしたというか……」

うええええっ！？　ちょ……何言ってるの！？

そ、そんな思わせぶりなセリフ……そんな赤い顔で……え！？
ホントに何！？

いやその……激しく誤解しちゃいそうなんですけど……いや、これはむしろ誤解じゃないのか！？　そんな、姫路さんが僕に……そういう意味！？

姫路さんはほほを染めてうつむき、時折ちらちらと僕の方を見ては……目があうと慌てて下を向く、を繰り返す。こ、この仕草……まさかホントに！？

だ、だとしたら、ここでおとなしくしていいのか吉井明久！
その……なんだ？ こう……男として、いやむしる漢としてやるべきことがあるんじゃないのか！？

『何言ってんだよ明久、そんな勘違いに決まってるだろ？』

うおっ！？ 今の声は！

ひ……久々に出たな、僕の中の悪魔！ くっ……やはりお前は、どこまでも僕の邪魔になるような考えを植えつけようとして……！

『いいか明久、お前はもてないんだから、そんな甲斐甲斐しい思いを抱いてくれるはずないだろうが！ 社交辞令だ、社交辞令！』

うるさい悪魔！ ネガティブな考えを吹き込むな！

あと社交辞令って……その……本体の僕がよく理解してない単語を、心の中の存在の分際で使うな！

『その文句は俺に言つなよ、お前の学力が原因だろうが』

あーあー聞こえない……はっ！ まてよ！？

この流れは……あの天使も出てくるんじゃない……

『希望を捨てちゃいけないよ明久！ 彼女は本気で言ってくれてくれる！』

おお、久々に出てきたと思ったら天使！ 嬉しいことを言ってくれる！

『ああ？ 何を世迷言言ってんだよ天使、そんなはずねえだろうが』

『わかっていないな悪魔、彼女の気持ちはまだわからないのか！』
『じゃあ何か？ お前本気で姫路が『明久でよかった』とでも思っているっていうのかよ？ 腕っ節が強い坂本でも、同じ女子の島田でも、土屋や木下でもねえ、明久をよお！』

『当然だ！ 明久には、今挙げた者達の誰にもない長所というものがある！』

言ってやれ言ってやれ！ 天使、今こそ僕と僕の悪魔が気づかなかった、彼女の僕への思いのたけを……

『明久なら、何かあった時、何の迷いもなく盾にできるだろう！』

……ああ、そう……

……そうだね……言われてみれば、それが一番可能性高いよね……。

『いや……ちょ、天使……いくらなんでもそれは……』

『よかったな明久、お前は姫路に必要とされているぞ！』

『おい、あの……おい！ さすがにその……天使、それでいいのかお前は！？』

『よっ、使い捨て装甲板！ にくいねこのこの！』

『もうやめてやれ！ 明久のライフは0だ！』

『あの……明久君？ なんかすごく落ち込んでますけど……どうか

したんですか？」

「いや、いいんだ姫路さん……今、自分のシールド機構としての役割を再認識したところだからさ……」

「えっと……また何か勘違いされているような気が……」

くそう、めげないぞっ！

僕は諦めない！　いつか……いつか使い捨て装甲板じゃなくて、再利用可能な装甲板になってやるんだい！

『『そこかよ』』

まあ、そんな感じで……ちょっとグダグダのまま、僕と姫路さんの秘密の（秘密ってわけでもないか）会合は終わった。
色々問題はあったけども……大方針は定まったわけだし、よしとしよう。

残りのFクラスメンバーの搜索と救助……っていう方針で、ね。

「……ところで明久君」

「ん、何、姫路さん？」

ふと見ると、何故か姫路さん……ジト目になってこっちを見返してくる。

……何だろ、さっきまでのベリーハッピーな空気とは違う……何か、僕の中の危機管理本能が警鐘を鳴らすかのような感覚が……？

「……さつき……関羽さん達に、『ご主人様』って呼ばれてましたよね？」

「えっ！？」

ああ、それが！

くっ……最近まるでなれちゃって気付かなかったけど……常識的に考えたら、自分のことを『ご主人様』なんて呼ばせてるなんて、イタイ奴以外の何者でもないじゃないか！！ しかも、桃香や愛紗みたいなかわいい娘に！

おまけに、鈴々にいたっては『お兄ちゃん』だし……

ホントの兄弟じゃない『お兄ちゃん』……解釈にもよるけど、下手したら通報されるレベルだ。

やばい、姫路さんが僕を見る目に変化が……

いや、下手したら……このままお仕置き直行コースだろうか。うっ、今、こんな状況じゃ逃げ場ないし……腕一本くらいですめばいいなあ……

そんな感じで、僕が姫路さんの次の句を待っていると……

姫路さんは、なぜかもしもじと体をくねらせながら……恥ずかしそうにして、

……予想外のセリフを口にした。

「えっと、その……私も、その……明久君のこと、『ご主人様』とか呼んだ方がいいんですか……？」

「うえええっ!？」

ちょ、何言つてんの！？

「だ、だって、確かにその……その行為自体、問題はあるかもですけど……それ以上に、その……何だか……劉備さん達、すごく明久君たちと距離が近いみたいな感じで、うらやましくて……その……」

何かぼそぼそ言つてたけど、聞き取る余裕がナッシング。ちょ、何言い出すのいきなり！？

鉄拳制裁が飛んでくるならまだわかるけど（いや、『拳』はむしろ美波か）、何でよりによって姫路さんがそっちにあわせようとするの！？

いやまで、これはきつと孔明の罠だ。まだ出てきてないけど。というか出てくるんだろうか？

いやいやいや余計なことを考えるな、きつと何か裏の意図があるはずだ。そもそも姫路さんが僕をご主人様をかく呼ぶなんて色々な観点から見えてありえないことであつて（言つてて悲しいけど）、これはつまり別の何かを最終目的に見据えた何らかの婉曲表現で、僕には今ここでその意図を汲み取って適切な返答を迅速に返す義務がどーたらこーたら。

すると、

姫路さん……何やら意を決したような表情で、

「じゃあ、た、ためしに……え、えつと……」
「え？」

「あ、明ひ……じゃなかった……その……」、『ご主人様』……？」

……わお。

「」フツ」 吐血とともに倒れる僕

「はう……や、やっぱり恥ずかしすぎます……って、あ、明久君！
？ どうしたんですか！？」

「……い、今僕は……真理を見た……」
「何言ってるんですか明久君！？ 明久君！？」

……お仕置きされなかったのはよかったけど……下手したらそれより威力のある一撃。
ううっ……なんてパワーだろう……。いつも愛紗や桃香に言われなれてるセリフなのに……姫路さんが言うところまでクリティカルになるのか……っ！？

長らく会ってなかったっていうこともあるだろうけど……真に恐るべきは、その『恥ずかしい』だろう……。

純粹に呼称として呼んでる桃香や愛紗とは違い、普段気軽に接してる相手だからこそ見られるそのもじもじした仕草で、彼女の『ご主人様』はバイキルトなみのパワーブーストを起こしている。

当然、僕はそのとてつもない破壊力に耐え切れるはずもなく……
脳内回路のオーバーヒートで意識を手放した。

「明久君！？　すっかりしてください明久君！」

「ああ……　ときが見える……」

「いや何ですかそれ！？　真理の次は時って……　言ってる意味わからないです！」

「長いくちばし……　赤い目の淵……　白い翼……　皮の向こう岸の花畑に……　僕も、川を渡って今そっちに……」

「『時』^{とき}じゃなくて『朱鷺』^{とぎ}ですかっ！？　いや、その前にその川渡っちゃダメです！　明久君！？　明久君　っ！？」

……　今日の教訓。

姫路さん×上目遣い×恥じらい×『ご主人様』は、死ぬる。

ちなみにこの後、どうにか自力で戻ってきました。

まだ……　僕は死ぬわけにはいかないっ！　秀吉と美波を助けるま
では！！

第14話 経緯と仮説と装甲版（後書き）

……お仕置きは無かったけど……再会して暴走気味の姫路さんの『ご主人様』はだいぶ効いたようで……明久君、臨死体験。

……これで、後々お仕置きパートが復活したらどうなるんでしょう
……ちよつとペース配分間違ったかな……。

さて、これで、他のFクラスメンバーがいるかも……っていうフラグが立ちました。

この先どうするかな……

ではこの辺で。和尚でした。

第15話 スケベと噂とロリっ子コンビ（前書き）

えー……タイトルで誰が出てくるのか完璧にわかってしまいそうな第15話です。

それと、あとがきで連絡事項があります。
できれば読んでください。

では、どうぞ。

第15話 スケベと噂とロリっ子コンピ

僕らが公孫贇さんのところに転がり込んでから2週間弱。

現在、数日置きのペースで、盗賊退治なんかをこなしつつ暮らしてる状態です。

なんか、狙ったようなタイミングで盗賊被害とか、襲撃とか増えてさ……町を襲ってくる奴らとか撃退したり、拠点潰したりするのがほとんどだけど。

で、今僕らは……結構な規模の襲撃を蹴散らすため、公孫贇さん総指揮の元、軍隊を率いて連中をぶっ潰す戦の最中です。

当然、僕らだけ家でごろごろしてるわけにもいけないので、姫路さんと一緒に、こっちの軍の本陣に一応いるわけだけど……

やっぱり、姫路さんも少しつらそうだった。まあ……実際に目の前で人死にの戦いが繰り広げられてるんだもんね……。

それでも、芯が強い彼女は……がんばって踏みとどまっていた。僕の隣で。

「……つらくなったら、遠慮しないで言ってね？ 無理しても……何もいいことないからさ」

「あ、ありがとうございます……でも、皆さんがんばってらっしゃるのに……私だけ、甘えるわけにはいかないですから……」

まあ……『がんばってる』の意味、違うけど。

愛紗や鈴々、趙雲さんは……前線で部隊を指揮しつつ、直接暴れてもらってる。まあ、何ていうか……皆さん生き生きしてた。特に

……鈴々と趙雲さん。

片や暴れん坊、もう片方は基本的にバトル好き（比較的、だけど）、平常心で戦ってるのは……愛紗くらいか。

で、それが片付くのを……総大将の公孫贄さんに、桃香、僕や姫路さんがここで待ってるわけなんだけど……

「で……伝令っ！ 敵兵の何人かが、防衛線を突破して捨て身で本陣に向かってきます！」

「「「えええっ！？」「」」

たまに……こういう事態が起こる。

「うおおおお　っ！」

「総大将の首をとつちまえば俺達の勝ちだあっ！」

「死ねえーっ！」

おわっ、もう来た！

ここは、本陣付きの近衛兵の皆さんと……僕の出番だ！

「桃香、公孫贄さん、下がってて！」

「え？ あ、お、おう……」

「ご、ご主人様……気をつけてね！」

一応剣を抜いて、戦闘態勢をとろうとしてたお2人だけでも……正直言って戦力にならないからパス。

桃香は普通に戦闘ダメだし……公孫贄さんはそこそこ戦えるらしいけど、明らかに実践慣れしてないというか……剣持ってる手がカタカタ震え気味。なのでパス。

そして姫路さんも……同じ理由でダメ。ここは僕が出ます。

「よし……『試験召喚』……！」

「あ……明久君……」

「ああ、うん……大丈夫。姫路さんは下がってて」

僕と姫路さんが共通して使える戦闘手段……『召喚獣』は、学力テストの点数がそのままその強さとして反映される。

当然、学年最下位の僕なんかよりも、実質の学年次席の姫路さんの召喚獣の方が圧倒的に戦闘力は上だ。たぶん、クリンとベータくらい違う。

それでも姫路さんを戦闘に参加させないのは……単純に、彼女には無理だからだ。

僕は今まで、愛紗たちの援護とかで盗賊たち相手に召喚獣で戦ってたから、ある程度慣れてるけど……公孫賛さんのところにいた姫路さんに、この世界の『戦い』……すなわち本当の殺し合いに、召喚獣で参戦するだけの度胸は、悪いけどない。

徐々に慣れていく必要があるだろう。……『慣れる』って表現も、正直微妙だけど。

「せりゃああああっ……！」

ばきばきどか！

「……ぐあああああ……！」

召喚獣に比べれば、動作も遅くてモーションも大きいから……対人戦は楽だ。

……鉄人みたいに規格外のスピードとパワーをもっていない限りは、

だけど。

前に一度、愛紗や鈴々と召喚獣で模擬戦してみたけど……ろくに戦えなかったからな……。技は早いわ力は強いわで、召喚獣のパワーでも対抗できなかったし。言っちゃ悪いけど、ホントに彼女達は何者なんだろう？　むしろ人間？

よけ続けるのが精一杯だった。まあ、元からそれは得意だったんだだけど。

そうこうしてる間に、

「伝令！　敵軍全面降伏！　我々の勝利です！」

「そうか、よくやった！」

「やったね、白蓮ちゃん！」

と、本陣に知らせが入った。ちょうど、僕も盗賊の皆さんを片付けたところだ。

陣の外からは、公孫贇軍の勝どきが聞こえる。めっちゃ聞こえる。

まあ……後始末は公孫贇さん達に任せて、僕らは……下がると思いますか。

役目を終えた召喚獣を消して（この世界では自分の意思で召喚解除ができるみたいだ）、僕は姫路さんのところへ向かう。一緒に下らないと。

「えっと……姫路さん？」

「あ、明久君……お疲れ様です」

「ああ、うん、別に……じゃあ、僕達も下がってようか」

「そう、ですね……」

……なんか、やっぱりというか……元氣ないなあ……。

無理もないだろう。つい最近まで、平和な日本で暮らしてた女の子が……こんな物騒な世界に来てる、つてのがそもそも無理あるんだもんな……。

けど……こればかりは、僕が何か言っただうにかなるもんでもないし……

「き……気にしないでください……その、えっと……私なら、大丈夫ですから……」

「え、ああ、うん……」

……ちよつと悔しいな。こんな時……彼女に何もしてあげられない、何も言葉をかけられない自分が、さ。

まあ……こんな状況下で、そんな人がいるかどうかかも正直わからないし……悩んでも不毛なことなのかも知れないけどね。

とりあえず僕らは、前途多難なこれからを思い、こらえ切れなかったため息を吐き出しつつ……愛紗達と合流して公孫贄さんの城へ戻った。

……そこで……予想外の出会いが待ち受けているとも知らないで

……

「は？ 客が来てる？」

城に戻った公孫賛さんの下に駆け寄ってきた番兵がもたらした報告に……公孫賛さんはそんな返事を返していた。

どうやら……僕らが戦に出てた間に（僕らほとんど何もしなかったけど）、

客……ああ、そりゃ客の1人や2人くるか。公孫賛さん、太守だもんね。

ちなみに太守っていうのは……なんかこう……その地方を治めるボスみたいな感じのアレだったはず。

おそらく、そのお客さんも公孫賛の公務関係なんだろうな……と思っただけけど、

「はっ、それがその……そちらの、吉井殿と劉備殿に会いたい、と……申しております……」
「「「え！？」」「」」

僕と桃香に！？ え、何で！？

詳しく聞けば……どうやらこの城に『天の御使い』が滞在してるらしい、っていう噂を聞きつけて、ここまできたらしい。ああ……

そりゃ僕達あてで来るわけだ。

合計3人来てるらしいんだけど……今は、客まで待たせてあるんだとか。

「しかし……よく通したな、そこな兵士」

と、これは趙雲さん。

このセリフには理由がある。

こういう大きな城や屋敷……特に、権力者が住んでるところには、色々と陳述なんかを目的にして色々な人が訪れる。そういう人達の対処をするのも太守の役目であり……はつきり言って面倒くさい+大変である。

が……その人達全員が面会できるわけではない。ちゃんと身元がはつきりしてて、

面会に乗じて暴行や暗殺やらかそう、っていう不届きな連中や、単に会ってみたい、ってだけのミーハー連中もいるわけで……。

そういう疑いがかけられた人は、門前払いを食らうのだ。もしくは、面会はするけど代理人ですよ、みたいな対処をされる。

客間に通したってことは、そういう心配がないと受け取られた、ってことだけど……何か、確かな身分証明の手段が何か持ってたのかな？

愛紗も気になったようで、

「確かに……衛兵殿、よければ理由を聞かせてもらえるか？」

「はっ！ 訪問してきた3人のうち、2人は女、1人は男だったのですが……女2人の方は、『水鏡塾』の紹介状を持っておりました！」

「『『水鏡塾』！！？』」

え、何！？ 何で皆さんそんな驚いてらっしゃるの？

知識不足で取り残され気味の僕と鈴々の目が点になる（姫路さんも知ってたらしい）。

すると桃香が、

「えつとご主人様、『水鏡塾』っていうのはね？ この大陸でも最高峰、って呼ばれてる、すごい私塾のことなの！ 卒業した人は皆、中央府で高官になれる、って言われてるくらいに！」

「へ、へえ……桃香や公孫賛さんが通ってたところよりすごいのかなかそこも、結構優秀な塾だ、みたいなこと言ってたけど……」
「ずっとずっと上だよ！」

ふーん……そうなんだ？ 現代日本で言ったら……東大とかそのへんかな？

まあ、そんなところからの紹介状なら……それは、確かに立派な判断材料か。

それにしても、『水鏡塾』……か……
何だろうこの感じ？ 今の説明以外にも、前にどこかで聞いたような……？

まあ、それはともかく……残る1人の方は？ 確か、男だったんだよね？

「はっ、それが……」

と、その時、

「きゃあああああ

っ！！」

「「！？」」

城の奥から、唐突に……叫び声が響き渡った。何事！？

「な、ななな……なんだあ！？」

「こつちか！ 行くぞ鈴々、趙雲殿！」

「応なのだ！」

「うむ！」

反射的に走り出す愛紗たちを、とりあえず僕らも追いかける。気になるし……。

えっと、確かこつちの方向には……あれ、客間があるぞ！？ 例のお客さん達を待たせてるっていう話の……

そこから悲鳴が聞こえてくるってことは……どういうことだ！？

困惑しつつも、僕らは全速力で走って、すぐさまその部屋の前に来る。

やはり……音源はここ、『客間』だったようだ。一体、中で何が……

あたりに嫌な緊張感が漂う中、愛紗たちは僕ら非戦闘要員に『下がっててください』と合図すると、一瞬間をおいて……

ボタンッー！

突入し……

……そして、硬直した。

え、何？ 何があつたの？ 部屋の中で一体何が！？

「……なんだ、この状況は？」

「……危険は、なさそうだが……？」

聞こえてくる、愛紗と趙雲さんのそんな会話。……ホントに何？
恐る恐る、桃香や姫路さんと一緒に、愛紗たちの間から部屋を覗
いてみると……

……予想外にもほどがある光景が広がっていた。

「何、だと……」

そこには、なんと……

「は、はわわ……この人だが、い、いきなり……その……」
「あ、あわわ……わ、私達、何もしてないんですけど……」

小さな2人の女の子が、手を取り合って涙目でぶるぶると震えていて、

そして……その2人の視線の先で、何と……

「……ここまで、か……（ドクドクドクドク）」

「……何してんの、ムツッリニ……？」

「っ……土屋君っ!？」

「「「え!？ 知り合い!？」」「」」

どこか満足げな表情で床に倒れ付している、僕の悪友の姿があった。

その鼻から、既に大量の鼻血を床に噴出し、大きな水溜りを形作って……だ。

……いや、何で？

えー……待つこと十数分、

「……復活」

「ほっ、よかった。いつも通りだ」

「……い、いつも通り、なんだ……？」

桃香、顔引きつつてる。

まあ……何はともあれ、回復したようで何よりだ、ムッツリーニ。
……って、何でコイツここにいるんだろ？

「……………明久がここにいると聞いてきた」

「え、僕？」

「（こくつ）……………このあたりで、だんだん広まってきた。大陸に『天の御使い』が舞い降りた、っていう噂」

聞けばムッツリーニ、その噂を聞いて……………もしかしたら自分と同じ境遇「クラスメート達かも知れない、と考えて、はるばるここへきたらしい。」

さらに、身体的特長なんかから、いるのが僕と姫路さんだ……………つていうのも、どうやらわかってたみたいだ。

で、さらに聞くと……………この城に入れたのは、門番の皆さんに、僕と同じ『召喚獣』を使えるところを見せてやったためで、

その後、この部屋に通されたところ、先客の2人の女の子がいて、

……………で、脊髄反射で這いつくばってそのスカートの中を覗いたら
……………鼻血出しちゃった、と。

「……………まあ、そんなところ」

「いや、自爆じゃん、完全に」

同情の余地ゼロだし。

「……………名誉の負傷と言ってもらおう」

や、その……その変換は無理がある。
まあ……いいか、いつものことだし。

「え、いいの!？」

と、桃香。いいのいいの、気にしてたらキリないから。
今はまず、こうしてまた一人のクラスメートと再会できたことを
喜ぶとしよう。

……そして、だ。問題はこっちか。

「は、はわわ……」
「あ、あわわ……」

『鼻血 昏倒 復活』

……この一連の出来事にすっかりビビっちゃってる……この2人
の女の子。

人数と『女の子』ってとこから察するに……この2人が、さつき
門番さんが言ってた『水鏡塾の紹介状を持ってきた女の子2人』……
……ってことになるか。

……なんか、その割にはまだ随分小っちゃい子だけど……まだ小
学生か中学生くらいじゃないかな？ 2人とも。

1人は……レモン色の髪をセミショートにしている娘。平素な造
りだけど、布地が上物らしい高級そうな服に身を包み……大きな目の

帽子をかぶっている。

身長はその……僕のみぞおちくらいまでだ。小っちゃい。

震えてて、さっきからぼほはわわ……』しか言わないんだけど……大丈夫？

もう1人は……おそらく同じ年くらいで、淡い青色の長髪をツインテールにしている女の子。身長も同じくらいだ、小っちゃい。

服も似たような感じだけど……こっちは特徴として、さらに大きな……なんかこう、魔女とかがかぶってそうな帽子をかぶってる。あれ……三角帽っていうんだっけ？

そして……同じくパニクってるのか、『あわわ……』しか言わない。大丈夫？

この2人……一体、何者なんだろ……？

水鏡塾、つてとこの紹介状持ってきてくるくらいだから、その生徒か何かなんだろうけど……幼な……あ、いや、その……若すぎない？

「えつと……それでその……君達も、僕と桃香に会いに来たんだっただけ？」

「は、はひっ！」

あ、噛んだ。

真っ赤になる女の子を『あ、かわいい』と思いつつも……まあ、まず話を聞かないとね。

まだこんなに幼な……いや、小っちゃ……いや……若いのに、随分と長い道のりを旅してきたみたいだし……ちゃんと相手してあげないとかわいそうだ。まじめに。

「……いい（パシャパシャパシャ）」

既に煩悩に忠実になってるやつがいるけど、コイツは一旦置いてこう。

というか、どこからカメラなんか取り出したんだお前は？

フラッシュがまぶしいらしく、困惑気味の美少女2人に向き直ると、僕より先に桃香が口を開いた。

その後ろには……一歩下がって、いつでも飛び出せる位置で愛紗もついてきてる。不測の事態の可能性も考慮して……ってわけか。大げさに思えるけど。

「えっと……それで、私達に何の用？」

「は、はい……あの、えと……りゅ、劉備元徳様でしゅかつ!？」

噛み噛みだ。ちょっと落ち着こう君たち。

「あはは……まあ、そうだけど……そんなに緊張しなくていいよ。で、どうしたの」

「あわわ……その……私達、実は……」

一瞬言いよんだ後で……思い切って、といった感じで、ツインテールの子が言った。

「りゅ、劉備様と、天の御使い様のもとで、この大陸を平和にするお手伝いがしたくて……来たんです……」

「「「え!？」」」

それって……士官しに来た……ってこと？

しかも、公孫贄さんじゃなく、僕と桃香のところに！？ え、僕らそんなに有名になってたの！？ いつの間に！？

「……………大陸では、もう結構な具合に『天の御使い』の噂が広まってるから、大都市の一部にまで届いていても不思議じゃないかも知れない」

と、ムツツリーニ。マジ！？

うわ……………なんか複雑な心境……………っていやいや待て待て。

隣では愛紗と桃香も、どこか嬉しそうにしてらっしゃるけども……………今はそれよりも……………この2人のことでしょうが。

聞く限り……………僕らのお手伝いがしたくて来た……………って感じだけど

……………

と、愛紗もそれに思い当たったらしく、微妙に繭をよせる。

いや、その……………気持ちは嬉しいんだけど……………正直、早すぎる気が。主に、年齢的に。

思いつきりまだ子供だし……………常識的に考えて、そんな君達2人を僕らの目的につき合わせるのは、その……………無理があると言っか……………危険と言っか……………

……………あれ、何かこの世界で言うと言説力が希薄だ。

いや、だってほら、前例がいくつも。鈴々とか季衣とか流琉とか。

けどまあ、彼女達は純粹パワーファイターだったし……………この目の前にいる2人は、どう見てもそんな感じじゃないし……………

そもそも、さっきから……………

「お……お願いしましゅー！」
「が……がんばりましゅー！」

……戦場でもないのに緊張しすぎ&ビビリすぎだし……。っていうか、よく噛むな、君ら。

や、その……さすがにこれは、その……事情を聞くまでもないと言つか……ここでびしつと言つとかないと人としていろいろとアレというか……

と、とにかく、かわいそうだけど……大人の世界、つてものをわかってもらわないと。高校2年生、17歳の僕だって、こういう場に立ってるのはつらいんだし……こんなちっちゃな子をどうにかするわけにはいかない。

横を見ると、愛紗も同意見らしい。目で『どうぞ』と言ってくる。

うーん……上手く説得できるといいけど……

や、その……さすがに、小学生相手に論破されるようなことは僕でも……ない……とは言切れないけど！

吉井明久17歳、やるだけやります！　がんばります！

……と、僕が説得のために口を開こうとしたその瞬間、

いろんなものを根本からひっくり返す、超ド級の自己申告が……彼女達2人の口から飛び出した。

「あつ、ももも申し遅れました！　わ、私……その……水鏡塾からまいりました、しょ、しょ……諸葛亮孔明といいましゅー！」

「あ、あわわ……お、同じく……ほ……鳳統でしー！」

.....

「「「.....え!!?」」」

主に、文月メンバー3人の目が、一瞬で点になった。

いや、あの、ちょ.....この子ら.....今、何言った!!??

しよ.....『諸葛亮』に、ほ.....『鳳統』!?

このロリ.....ちびっ子2人が!?

三国志のあの、劉備軍最強軍師コンビ!?

「はわわ.....」

「あわわ.....」

.....いや、もう.....驚き方わかんない。

第15話 スケベと噂とロリっ子コンビ（後書き）

ムツツリーニ、諸葛亮、鳳統参戦です。

……この登場はもはやパターンか……

まあ、無事で何よりということ……無事じゃないですけど。

さて、前書きで述べた『連絡』をここで。

まあ、前にもチラッと言ったんですが、ここで本格的に。

実は自分、週末から……大学の實習で、しばらく山奥にこもるということになっているのです……。

しかも、その場所にはパソコンが無いもので……更新が無理なんですよね……。

執筆はまあ、ケータイとかで書くなりなんなり可能なんです……それでも、ちよつと更新はしばらく止まりそうです……。

区切りがいい（？）ところまで来れたのが、せめてもの救いでしょ
うか……

中休みみたいなものが予定上いくつかあるので、もしかしたらその時にまた更新はできるかもですが、本格的な再開は、九月上旬になる見通しです……。

なので……しばらく更新は止まるというか、間が空きますが……気長にお待ちいただければと。

どうぞご了承くださいます。

ではこのへんで、和尚でした。

第16話 同盟と邂逅とキーワード（前書き）

大変長らくお待たせいたしました。

中休みで帰ってきています和尚です。

……実習……35度の中で昼日中の作業……死ねる……。ホント、脱水症状寸前で一回ぶっ倒れそうになりましたからね……夏ってホント怖いです。

みなさんもお気をつけ下さい。水分補給は喉が渴いてからじゃ遅いです。

さて、今回……新たな合流者が登場します……。

……最近ラッシュですね……。

それはそうと……今回出てくるのは……なんとあの人！

そしてあの人とあの人とあの人！

そしてあの人とあの人とあの人とあの人と……ってもう多過ぎるんで本編で。

では、どうぞ。

第16話 同盟と邂逅とキーワード

Side 明久

まー、びつくりした。

ずんげーびつくりした。

いや、するなっの方が無理だよな？

だって……あの諸葛亮孔明さんと鳳統さんが……まあ、女の子になってるかも、ってのはある程度考えてたけど……まさかこんな口リ……もとい、美少女……もとい、美少女だったんだから。

しかも、三顧の礼とかそんなの全然なしに仲間になったし。ていうか自分達で尋ねてきてくれたし。

ちなみに、諸葛亮ちゃんと鳳統ちゃんの真名は『朱里』と『雛里』だった。呼んでいいってさ。

姫路さん&ムツツリー二と話し合った結果、愛紗と鈴々（関羽と張飛）がこうなんだから、まあこの2人も多少なり、本来の『三国志』での役割……『軍師』としての能力はあるんじゃないか、ってことで、一応手元に置くことでまとまった。

愛紗は『まだこんな小さな子供を……』って納得せずに渋ってたけど……そこは、水鏡塾とのコネクションの存在を強調して説得。上手くいったよ……。

……で、今、僕らはというと……新たに舞い込んだ遠征のため、軍を率いて城を出発したところだったりする。無論、皆で。

ちなみに、2人が加入してから数日経ってます。

「えっと……愛紗、これからその……」

「はい、黄巾党との……本格的な戦いになりますね」

僕の隣で馬に乗って進んでる愛紗のそんな一言。

切迫した……ってほどじゃないけど、やっぱり今までよりも大きな規模での戦いだからだろう、緊張感が辺りを包んでいる。

……戦の場ではコレがデフォルトなんだろうけど……僕はやっぱりまだ慣れないなあ……なにせ、僕らの世界じゃ、戦なんて試召戦争か、購買部の焼きそばパン争奪戦くらいのもんだっだし……

その点、この世界在住の皆は立派だ。きっちり緊張感を持って……

「（ぐ……）にゃ、お腹空いたのだ……愛紗、お弁当食べよ……」

「こんな時に情けないことを言うな！ 戦の前だぞ！」

……訂正。

この世界在住の皆、の、ほとんど、は立派だ。きっちり緊張感を

……

「（ぐ……）あう……たしかにお腹空いたね……ははは……」

……ま、まあ……桃香は非戦闘要員だし？ 仕方ないと言うか？ と、ともかくまあ……大多数のメンバーは、きちんと緊張感を……

「あー、そうだなー……腹が減ってはなんとやら、と言うし……一旦休憩して飯にするか」

「そうですね。では私も、趙子龍特製メンマ弁当の封を開けるといたそう。ふふふ……」

「……おかずの用意は万全。たくさん作ってある」

「あ、じゃあ私……伝令兵さんに『全軍で休憩取ります』って伝え

てきますね？」

……それでいいのか、君達。

公孫賛さんに趙雲さん、ムツツリー二に姫路さんまで……全くもう、僕がこんなこと言うのもアレかもしれないけど……何このピクニツク的なノリ？

ていうか、メンマ弁当って……好きなの、メンマ？

そしてムツツリー二、君が作ったのか、弁当。マメだな。

まあ、姫路さんにだけは手を出させないように、僕とムツツリー二で事前に全力にて根回しをさせてもらったわけだけど……まさか自分で作ってたとは。

全くもう……まあ、お弁当タイム自体を非難するわけじゃないけど……みんなもうちょっとこう、朱里や雛里を見習ってさあ……

「は、はわわわわわ……っ、つつつつついにわわ、私達のうつつ初陣で……が、ががぎゃががんばらなくちゃ……」

「あ、あわわわあわわ……う、うつつうつつ上手く指揮できるかな……

…お、おおおお落ちていて、れ、れりえ冷静に戦況をよく見て……」

……あー……ここまで緊張するのも違うか。

ていうか、噛みすぎでしょ。逆に狙ってやってもそこまでののはなかなかできないんじゃない？……どんだけ緊張してんの？

なんかこう……両極端な軍勢だな……個性的と言うか、扱いづらいと言うか……。

一応僕らは、食事の最中に……これからのプランを話し合っていた。

……そうでもしないと、完全にピクニックになる。

鈴々はすごくいい笑顔でがつついてるし、桃香と公孫釐さんは昔話に花咲かせてるし、ムツツリーニは家族写真よろしくカメラ持って奔走してるし、趙雲さんは……ちょ、ダメだってさすがに酒は！開けるな！飲むな！何やってんの戦の前にっ！

「心配無用だ吉井殿。私の槍は酔拳といって、飲めば飲むほど、酔えば酔うほど、そして酒とメンマが美味ければ美味しいほど強く……」
「んなわけないでしょ！飲みたいだけでしょ君！？ていうかそもそも酔『拳』で、拳法違うし！さりげにメンマとか混ぜてるし！」

くっ……特にこの人は規格外だ……まさか僕がツツコミに回るとは……。

さすがはあの超個性的幼女、風の前の仲間……ってところか。……関係あるのかわかんないけど。

……と、そんな僕らの元に、

「伝令です！今しがた、官軍の使者であると名乗るものが陣に到着いたしました！」

「……え？」

一家団欒の空気の中に……そんな報告が飛び込んできた。

え、官軍の使者って……どこから？

ちゃんとした朝廷からの特使なら、公孫賛さんの城に来るはずだし……ってことは、この近くにいる、官軍所属の別の陣営の軍隊、ってことだよな。

このタイミングってことは……黄巾党とのバトルの共同戦線の申し出かな？ 似たようなこと、前にも何度かあったし。

それで……どこの誰なんだろ？

それを伝令兵さんに聞いてみると……返ってきた返事は、なんと、

「はっ！ その使者に聞いたところ、どうやら……曹猛徳殿の使者だとのことですよ！」

……

「「「えっ！？」」「」」

そ、曹猛徳って……そ、曹操！？

え、ちょ……あの超有名キャラ！？ ああ、レドクリフのラスボス！？ マジで！？

Side ???

同時刻

曹操軍・陣営

さて……そろそろ、高孫贇とかいう奴の軍勢のところに、我らの軍の使者がついたところだろうか。

「『公』孫贇だ、姉者」

「？ 何か違ったか？」

妹……秋蘭から何やら指摘が飛んできたが……まあいい、大したことではあるまい。

何かあったら、その都度我が剣で真つ二つにしていけばいいだけの話だ。うむ、単純明快。

「まったく……コレだからうちの獣將軍は……ホント嫌になるわね」

まずこいつから真つ二つにするか。

私の横でため息をついてそんなことをほざく猫耳軍師。まったく

……いつものことながら、何なんだその奇怪な頭巾は？ 猫にでもなりたいのか？

「猫じゃないわ、私は華琳様の犬だもの」

「何おうっ！？ 私だって華琳様の忠実な犬だという自覚くらいあるぞ！」

「あなたは獵犬の類でしょ？ 私は愛玩犬だもの、品位が違うのよ品位が」

「だまれこの役立たずが！」

「なんですってこの駄犬！」

こいつ……武はからつきしのくせに、口先だけは斬れるやつだ！
あ、私今上手いこと言ったな。

と、私が自分の秀逸な文才に少しだけ酔いしれていたその時、

「落ち着きなさい春蘭、剣を振るうべきは今ではないわ、余計な体力を使わないの」

「えっ！？ あ、か、華琳様！？」

「い、いつのまにいらっしやっていたのですか！？」

と、唐突に背後から、愛らしい……じゃなくて、愛すべき……でもなくて。いや、そうだけでも。

……敬愛すべき主の声が響き、私と桂花の意識の9割9分が持っていかれた。ああ、今日も美しい！

「はあ……破顔してくれるのは嬉しいけど、戦場では慎みなさいね。あなた達は私のものであると同時に、部下。この曹猛徳の軍勢の、大將軍と筆頭軍師なのだから」

「無理で……がんばります！」

「無理で……善処いたします！」

「……聞かなかったことにしてあげるから、精進なさい」

おお、心が広い！ さすがは我が主だ！

いや、私としては別にその、あそこで怒っていただいてお仕置きでもなんでもしていただいても、それはそれでよかったのだが……
いやいや、自重自重。

あ、そういえば、

「ところで華琳様」

「何かしら、今夜の閨の相手は桂花に決めてるからダメよ？」

「いやそこを何とか私に……いや、違いました、そうではありませ
ん」

「あら、そうなの？」

「……その話はまた後で」

聞き逃せん。というか諦め切れん。

「いえその……これから、件の公孫賛軍との会談に赴かれるとのこ
となのですが……その会談、『あの男』も連れて行くのですか？」

「……ええ、連れて行くわ。向こうの反応の確認と、牽制にもなる
かも知れないしね」

むう……あんな男がいなくとも、私1人で華琳様の剣にでも盾に
でも頭脳にでもなってみせるものを……

「頭脳は無理よ、猪」

「貴様……」

くっ……耐えろ夏侯惇、今、華琳様に自重しろと言われたばかり
ではないか。

『春蘭は大人なのだから、桂花のようなお子ちゃまのいうことに
いちいち腹を立てていてはだめよ、うふっ』と言われたばかりで
はないか！ そうだ、耐えろ春蘭！ 曹操軍のお姉さん役！

「……なんだか、あの単細胞の脳内で著しい真実の婉曲がなされて
いる気がします、華琳様」

「奇遇ね桂花、私もよ」

？　　どういう意味だ？

「まあ……姉者のコレはいつものことです、華琳様」

と、秋蘭。なんだ、いつものことなのか、なら問題あるまい。

「あんたが言う？」

「ほじくり返すな桂花、話がややこしくなる。して華琳様、例の情報ですが」

桂花の戯言は聞き流すとして、

今秋蘭が言っていたのは、たしか……そうだ、ここ最近……公孫賛の領地の中で特に話題になっているという……あの噂のことか。

「ああ、あれか。なんでも……『天の御使い』が現れた、とかいう……」

「その噂よ。そしてその『御使い』が、最近売り出し中の……劉備、とかいう奴に肩入れしている……という噂も、ここ最近流れてきているわね」

「ほお……聞かん名だな」

気にはなるが……まあ、気にしても仕方あるまい。

いざというときは……うん、私が斬る。文句あるか。

そんな私の決意を知ってか知らずか、華琳様はにっこりと妖艶な意味を浮かべ、

「ふふっ……楽しみね……。その『天の御使い』とやら……私達の

陣営の、同じ『天の御使い』と顔を合わせたら、どういうことになるのかしら……?」

そう言つて……天幕に戻つていった。

……後を追おうとしたら、秋蘭にとめられた。

「姉者はこれから出陣の準備だろうが」

「うう……秋蘭のいぢわる……」

「ふつ、いいざまね猪。華琳様のお相手は、私が代わりに立派に務めて……」

「お前も準備だ、桂花」

「あう……」

同じく引きずられていく桂花。やーいやーい、ざまーみるー

「いくつよ、あんた」

「全く……喧嘩するのは別に構わんが、やることはきっちりやつてくれ2人とも。あとで華琳様のみならず、他の者も困ることになる」

呆れ顔の秋蘭に引きずられ……私と桂花は前線の兵達の元へ向かった。

Side 明久

〵劉備軍（公孫賛軍）・陣営〵

「何て書いてあるの、桃香？」

「んーっとね……まあ簡単に言っちゃうと、これから相手にする黄巾党の人達、数がすごく多いから、協力して戦わないか、っていうお誘いかな？」

「おお、そりゃありがたいな！」

公孫賛さんが嬉しそうに言う。

当然だろう。何せ共闘を申し出てくれたのは……天下に名高いあの曹操だ。

まだ向こうも始動直後の宮仕えらしく、勢力としてはまだそうは大きくないんだとか。いずれは……三国にその名を轟かせるすごい人になる……っていうのを、僕は知ってるんだけど。まあ……僕らの歴史で、ね。

とはいえ、そんな人が力を貸してくれると言うのであれば……それはまあ、嬉しいことこの上ない。公孫賛さんの喜びも当然だろう。

「なら、早いとこ進んだ方がよさそうじゃない？　せっかく言ってきてくれてるんだし……待たせたら失礼でしょ？」

「そうですね。それに……事前に挨拶とかもしなきゃだめじゃないでしょうか？」

「……………勢力としては、こっちの方が格下。礼儀は通すべき」

と、文月メンバーの総意。桃香達や公孫賛さん達も、それに賛成してくれた。

そういうわけで……僕は一路、曹操さんの待つてる陣営のところまで行くことになった。挨拶と……詳細な打ち合わせのために。しかも手紙には……曹操さんが今どこにいるか……ってことを伝

える地図とかも一緒に付属されていた。……なるほど、僕らが誘いに応じること前提……か。

……ちよつと達観した感じの見方をされてるようだけど……まあいいか。元から僕ら、応じる……というか、ご厚意に甘えるつもりだったんだ、気にしても仕方ない。

……で、僕らがその地図に従ってその場所に行つて、曹操さんに会いたいから……つてその旨を向こうの陣営の人に伝えようとする……ここでもすごいことが。

……なんと、ついた瞬間に、向こうの方からこっちの陣に挨拶が来たのだ。

誰がつて？ 曹操さんが。

……なんと、こっちが面会の申し込みをすることまで予想済みだったらしい。……なんと……どこまで自信満々なんだ。応じなかったら無駄足なのに、何も迷いない感じ。

そして、せつかくいらつしやった方を待たせるわけにもいかないので……僕らもさつさと支度をして、会合の場に顔を出す。

で、一応場を整えて……待ち構える形で向こうが来るのを待っている、

「申し上げます！ 曹操軍総大将・曹猛徳殿、ご到着なさいました」

お、いきなりきたか……ホントに早い。

「ああ、わかった。通してくれ。失礼のないようにな」
「はっ！」

公孫賛さんの言葉に、びしつと敬礼して去っていく伝令さん。
ちなみに……あの、おまわりさんなんかがよくする『敬礼』は、
僕がノリで教えた。なんか……それっぽくなりそうだったから。
おかげで、一応上官と賓客として軍に認識されている僕らは、兵
隊の皆さんに出会った際に『敬礼（びしっ！）』されるので、ちょ
っとした警視総監気分を味わっている。

そんな事を考えていると、
ざつ、と兵士達の人垣が割れて……その向こうから、3人の人影
が現れた。

自然、緊張感が僕らを包む。アウエーである以上、向こうにもそ
ういうのはるはずなわけだけど……そんな事を気にもかけず、って
感じで……その3人はこっちに堂々と歩いてくる。広場の真ん中を
突っ切って。

先頭にいるのは……明るい金髪に、ロールがかったツインテール
の髪が特徴の……小さな、ハンパない美少女。身長で言ったら……
僕の胸に頭がとどくくらいだ。

……が、それはあくまで『身長が』小さいのであって……それ以
外がハンパない。

現代日本の平和な社会で育った僕にさえ、この子が放ってる凄ま
じい『威圧感』と呼べるものの存在がわかる。殺気……じゃない
な、コレは多分、『覇気』だ。

そのせいだろつか、その子が身にまとってる、ドクロをあしらっ
たデザインの鎧が……小さな女の子にはまず似合わないはずのその
鎧が、何の違和感もない。

……この子が曹操（うへうそう）、ってことか……。

……やっぱり女だったか。

いやまあ、別にいいけどね？ そんなこと全然気にならないくらいのインパクトだし。

で、その曹操ちゃんに一步下がる形で、両サイドを固めてついてきてる……護衛らしき女性が2人。

1人は黒い長髪で、凜々しい顔に……赤いチャイナ風の装束を着ている。右肩にドクロデザインの鎧をつけ、背中に……おそらく剣と思われる武器を背負ってる。

この人も、威圧感すごいな……というかこの人は、威圧感とか警戒心を隠そうとしてもない感じた。……愛紗と似たような雰囲気、かもしれない。

よく言えば、雄雄しくて剛健、悪く言えば……単に怖い。

もう1人は……さっきのとは違ってかわって（？）、落ち着いて物静かな雰囲気、とでもいうのだろうか。水色の、短めの髪で……右目が隠れてる。……見えるのかな？

赤い方の人のと同じようなデザインの服と鎧だけど……こちらは服は青色、ドクロの鎧は左肩についてる。鎧も……左右逆のデザインだ。武器は……弓か。

2人とも、武官だろう。雰囲気からただけだけど……多分、相当強い。

突如現れた美少女×3。それに……おそらく反射的にカメラを構えてしまったのであるうムツリーニを、それとなく制する。……

いくらなんでも空気を読め。

全くもつ……いきなり写真なんかとって、気分を害されたら困るじゃないか。いいかいムツツリーニ、もっとそのあたり、常識を考えて……

(こういつときは隠しカメラとか使うべきでしょ?)

(……………了解した)

そう、それでいい。

「あの……いいんですか?」

いいんです、姫路さん。あんなかわいい子のコスプレ写真、写真に収めて焼き増して手元に残さないことの方が失礼つてもんです。あ、この世界じゃ別に、普通の装束なのか……まあ、どうでもいいけど。僕らから見たら立派にコスプレなわけだし。

「……? そこ、一体何を話してるの?」

「……いえ、何でも」

おっとっと、曹操ちゃんに注意された。失敗失敗。

「……? まあいいわ。始めまして……になるわね、公孫贄・劉備連合軍」

あら、連合軍ですって。

なんか僕ら、随分と有名になつてると言うか……いつのまにか、対等の関係みたいな感じに受け取られてる? いや、僕らまだ客将なのに。

……まあいいか、悪い気はしないし。

見ると、桃香と公孫贇さんも……強調しても別にアレだし、って
感じの顔で、何も言わずに彼女達の話聞いていた。

「私の名は曹操、字は猛徳。この先の区画の太守を任されている者
よ、よろしくね?」

おお、太守だって、すごい。

堂々とした態度に、相変わらずの威圧感……なるほど、正にその
器、って感じがする。

そして、それに続き……護衛らしき2人も続く。まずは赤い方が、

「夏侯惇だ!」
かこうとん

.....

.....

.....え?

あの……終わり?

赤い方の方……夏侯惇さん? 名前だけ言って……後はまた堂々
とその場に立っているのみ。いやあの……ホントに、今の一言で自
己紹介終わりですか?

僕らが啞然としている中、呆れ顔(?)の曹操ちゃんと青い方。

「……春蘭、もう少し何か言うことは?」

「はい? ええと……もう少し言うこと、ですか?」

「……全くもう……秋蘭、先に自己紹介して」

「はっ」

返事はムダに元気な夏侯惇さんに、ため息混じりに曹操ちゃんは、

「……知らなかったのだけれど……あなた、いつから名前が秋蘭と同じになったのかしら？」

「はい？ ははは……何を言っているのですか華琳様？ 私は夏侯惇、字は元嬢、秋蘭は夏侯淵で妙才ではないですか。いくら双子の姉と妹とはいえ、名前まで同じはずがないでしょう？」

今のセリフの方が見事に自己紹介になつとる。なんか複雑。
で……まだ意味がわかってないらしい夏侯惇さんだけ……

「……まあ、そういうことだ。その……色々とすまん、了承してくれ」

「？ どうした、なぜ謝っている、秋蘭？ 名乗りに何か失敗でもしたのか？」

あんだだよ、原因。

ともかく……どうやら自身の口からまともな自己紹介をさせることを諦めたらしい夏侯淵さんがそうしめくくった。ははは……手のかかる妹を持つと大変ですね。

「ちなみに、私が妹、こつちが姉だ」

「……何いっ！！？」「」

「おい！？ なぜお前らそんなに驚く！？」

いやそりゃ驚くわ！ 何でお姉さんの方がそんなこう……残念な感じなのっ！？

「……今のは春蘭が悪いわ」

「な、なぜですか華琳様!?」

ダメだこの人、素でわかってない。

……夏侯惇さんのキャラが、全員の心の中で『バカキャラ』に固定されてしまった瞬間だった。ははは……ご愁傷様。

「……お前が言うか」

「? ムツリー二何か言った?」

「……いや、何も」

……? まあいいけど。

ともかく……いきなり何か疲れた感じだけど……とりあえず、向こうの自己紹介に答えて、僕らも自己紹介をした。

すると、最後に僕と姫路さん、ムツリー二の自己紹介が済んだ所で、

「……! そう……あなた達が、ね……」

そんなことを曹操ちゃんがつぶやいた。? どういうこと? すると曹操ちゃん、僕ら3人(文月メンバー)を見渡して、

「さて……協議の前に確認しておきたいのだけど……あなた達3人が『天の御使い』で……あっているかしら?」

「え? あ……はい」

あらら……なんか、予想以上に有名になっちゃってるみたい……? まあ、その方向性で今まで戦ってきた、っていうのはそうだけど……なんか複雑。

すると、

「……あなた達に、ひとつ尋ねてみたいことがあるのだけど？」
「「「「？」」」」」

次の瞬間、曹操ちゃんの口から……予想外にもほどがある一言が発せられた。

「『文月学園』『Fクラス』『召喚獣』……これらのキーワードに心当たりは？」
「「「え……！！？」」」」

ちょ……今なんて！？

「……聞き覚えがあるみたいね、これらの単語に」
「いや、あるも何も……全部僕らの世界の単語なんだけど……なんで知ってるの！？」
「「「えええっ！？」」」

後ろから桃香達が驚く声が聞こえてきた。けど……多分、僕ら3人が一番驚いてる。

いや、だって……3つとも文月学園の固有名詞だし、僕らの『正体』にかかわるワードだし……しかも、『キーワード』って！英語じゃん！横文字じゃん！

この世界じゃまず聞くはずない単語なのに……なんで知ってるんだ！？

「ふふっ、それはね……………」

すると、曹操ちゃんの答えは……

「…………私達の陣営にいる『天の御使い』から聞いたのよ」

「「えええええっ！！？」」

今度は、僕ら全員の驚きの声。

曹操ちゃんのことにも、『天の御使い』……………っていうか、現実世界の人間が！？

っていうか、それって誰…………と、僕が聞こうとしたその時、

「ああ、あと…………吉井明久？」

「はい？」

名指し！？ 何！？

「あなたに関して…………その人物から、他にも情報を聞いているのだけど」

「え？」

「たしか…………『メイドのアキちゃん』『全てを知らない男』『見た

目は高校生、中身は小学生』『奇跡の偏差値一桁』……とかだったかしら」

……それが一体誰だか聞こうと思ったけど、やめた。聞くまでもない。

……んなことを吹き込みやがるのは……僕の知る限り1人だ。

と、その時、

「あー、悪い、遅くなった!」

そんな声が陣営の入り口のところから聞こえた。
それに反応し、僕らがそっちを見ると……

「全く……遅いわよ、もう少し礼節というものを考えなさい!」

そんな曹操ちゃんのセリフをBGMに、

……1人の男が僕らのところに走ってくるのが見えた。

たてがみのようにツンツンした赤い髪。

背の高い、がっしりと筋肉のついた体つき、

存在感のある、野太い声、

そして……忘れるはずもない、あのブサイクな顔。

姫路さんとムツツリー二が驚いている中……僕は、はあ、とため

息をついていた。

.....あア、

「やっぱりお前か、雄二」

のんきに走ってくる悪友.....坂本雄二を前に、僕は、そんなセリフをつぶやいた。

第16話 同盟と邂逅とキーワード（後書き）

曹操・夏侯惇・夏侯淵のボス級3人が登場です。相変わらずすごい方々……

……そしてついに、ついにあの男……『神童』坂本雄二、合流です。

……まあとりあえず、この先、色々とあることでしょうね……

ええ、そりゃあ……すぐにでも……

しかし、立ちはだかる『実習』の壁……この休み終わったらまた地獄だもんなあ……

……生きて帰れたらまた更新します。待っていただければ。

ではこれで。和尚でした。

第17話 ケンカと再会と首脳会談（前書き）

な、なんとか、中休み中に……もう1話……仕上げました……

どうぞ。

第17話 ケンカと再会と首脳会談

そいつを見つけたまま……僕は一步も動けずにいた。

視線の先にいるのは……野生的な風貌が印象的な、僕の戦友。

間に曹操たちを挟んで……僕は、現実世界で苦楽を共にした悪友と向かい合っている。

もう……二度と会えないんじゃないか、なんて覚悟すらした……あいつと。

どうやら向こうも僕を見つけたようで……そのままの姿勢でただ立っていた。

「雄二……………」

「明久……………」

そして、

ダッ！！

x 2

どちらからともなく……互いに走り出す。互いに……向かって。互いの足が動き、広場を突っ切っていく。一步一步、距離は縮まっていく。

「……よかったね、ご主人様……………」

「……ふふつ、嬉しそうじゃない、坂本雄二……………」

その様子を、桃香達も、曹操たちも……何も言わずに見ていた。
傍から見れば……長らく離れ離れたった親友の再会に見えるのだ
ろっ。いきなり走り出した僕達を……止めようともせず、ただそ
の顛末を見守っている。

そして、そんな視線の中……僕らは互いに駆け寄り……

「雄二いい　　っ!!」

「明久ああ　　っ!!」

そして……

「くたばれえええええっ!!!!」

バキィイツ!!!!　ズシャアアアアッ!!!!　　×2

……思いっきり、互いの顔に渾身のストレートパンチを叩き込み
……そして、互いにふっ飛んだ。

「ええええええええ　　っ!!!?」

てっきりそのまま抱き合うなり手を取り合うなりするだろうと思
っていた三国志ガールズは……その、常識的に考えてあまりに予想

外すぎる展開に……驚きの声を上げた。

動揺してないのは……姫路さんとムツツリーニくらいだ。

姫路さんは乾いた笑いを浮かべ、ムツツリーニは『やっぱり』って感じの呆れ顔。

まあ……当然か。久しぶりの再会に……クロスパンチだもんね。少しばかり一般常識とはかけ離れてる僕達のコミュニケーション（肉体言語）は、ちよつと刺激が強すぎたかもしれない。

……が、だからって僕らにここで終わる道理はないわけで。

「雄ニキサマ！ 何曹操にあることないこと吹き込んでくれてるんだよコラ！！ おかげで大恥かいちゃったじゃないかつ！！」

「うるせえ明久！ 恥なんざ向こうで散々かいてんだからそんなにかいとけバカ！！」

すぐさま起き上がって……取っ組み合いのケンカに発展する僕らのコミュニケーション。

「大体なんでお前の方からも殴りかかって来るんだよ！？ ここは明らかにけなされた側の僕がお前をフルボッコにするパターンだろ！！」

「黙れ明久、理由は二つある！ 1つは……あのエロ本だ！！」

エロ本？ それって一体……ああ、あれか。

そう、あれは確か、僕がこの世界に飛ばされた日の朝だ。

あ、ここから回想。

その日の朝、鉄人が抜き打ちの持ち物検査を始めたんだけど……僕はその日、ある1冊の工口ほ……もとい、保健体育の参考書を、運悪く持ってきてしまっていた。

そこで、鉄人の気が他の生徒に向いた一瞬の隙を見計らい、既に検査が終わった雄二にその本をパスし……隠し持っていてもらったのだ。

そのおかげで、あの聖典は見つからず、没収を免れたわけ。うーん、僕って天才。

……ああ、そういえば、アレ雄二に預けっぱなしで返してもらってないまま、この世界に飛んできちゃったっけな……。

はい、回想終わり。

ちなみに、今の間に……割り込んできた愛紗と夏侯惇によって僕らのケンカは止められ、僕と雄二は話し合いの場に引きずり出されました。

「……で、その本がどうして僕を恨む理由になるのさ？」

「……俺はこの世界に飛んできた時、盗賊討伐でこの世界に来てた華琳たちに拾われたんだがな？」

「で？」

「その時に、その本が華琳達に見つかって大恥かいた」

うわぁ……ご愁傷様。

まあ……文字（日本語）が読めなくても、写真とか絵とかでどう
いう本なのかはわかるもんね……

……ってアレ？ その本、その後どうなったの？

「切り刻まれた拳句燃やされた」

「雄二貴様ぁ！ 僕の大事な聖典を！！」

守れよ！ あれネットで探してようやく見つけた極上品なものにつ
！！

「そしてもう1つ」

ん？ もう1つ？

ああ……殴る理由は2つあるって言ってたっけな、あれか。

すると……雄二はとたんにまじめな顔になった。

……コイツがこの顔をするときは、本当に心の底からの本音を言
うときだ。

もしかして……僕は気づかないうちに、何か重要なミスをしてし
まっていたんだろうか？ だとしたら、場合によっては僕の方から
謝るってのも選択肢に入れないと……

「俺は単にお前の幸せがム力つくんだよ」

「やはり貴様は僕の敵か雄二！！」

ああ、雄二の本音ってこれなんだ。

「何だお前、上手いこと関羽だの劉備だのって主人公格キャラと遭遇して、姫路たちとも上手いこと合流して、しかもご主人様とか呼ばれてるだ！？ このギャルゲだこら！！俺が華琳の所でどれだけ苦労してたと思ってやがる！？」

「んなこと知るか！！ そっちこそ普通に保護してもらって守ってもらってここまで来て……って普通に得じゃないか！ 僕なんか空飛んだり川に流されたり人魚になったりギャリック砲撃ったりでマジで大変だったんだぞ！！」

「何だその状況！？ この世界サイ 人でもいんのか！？」

「いるわけないだろそんなの！？ バカじゃないの！？」

「バカが人をバカ呼ばわりすんじゃねえバカ！！」

「何だとコラ！ やんのか雄二！」

「あんだとコラ！ そっちこそやんのか明久！」

「上等だ！ 表出る！！」

「もうここ表だぞ！！」

「『いい加減にしなさいっ！！！！』」

と、曹操と愛紗の怒号が響き……僕らのケンカは再び中断となった。

くっ……命拾いしたな、雄二。

僕と雄二が納まったのを確認すると、呆れた様子で……今まで傍観していた曹操が口を開いた。

ああ、ちなみに『ちゃん』付けはしないことにした。聞いた感じだと、どうやら僕らと歳そんなに変わんないらしいし。

「さて、話が中断したわね……ともかく、会えて嬉しいわよ、劉備」

「あ、こ、こちらこそ……会えて嬉しいです、曹操さん！」

堂々とした風格の曹操に……対照的、と言ってもいいくらいに緊張してる桃香。うわぁ……セリフ、噛まないといいけど……。

まあ……そのへんは、愛紗とか朱里とかが何とかフォローするだろう。愛紗は普通に堂々としてられるし、朱里も……緊張すると桃香よりヒドいけど、一旦おちつけければ、さすがは諸葛孔明、って感じの冴えと落ち着きを見せてくれるから。

話の内容としては、予想通り……共闘の申し出だった。
要約すると……こんな感じ。

・黄巾党も数が増えてきて、しかも組織立って動くようになってきたから、僕らも曹操たちも、普通に戦っても苦戦する。

・だったら手を組んで、兵数も行動力も上げた上で戦えばいいんじゃない？

・そういうわけだし、一緒にやろうよ？

・手柄とかそういうのも、平等に入ってくるし

……うん、わかるよ？ 著しく緊張感に欠けるよね？

でも……僕的にはこれが一番というか……精一杯というか……

「ったく、いつまで経ってもお前は成長しねえな、頭が」

「あははー、そうだね、雄二のセコくてウザくてずるがしこい頭に比べたら、僕の頭脳はまだ未熟かもねー」

……

「「やんのかコラあああ　　っ！ー！？」」

「「だからもうやめなさいっ！！」」

その後、ケンカの再発が著しいので、僕と雄二は縄で縛り上げられて天幕の柱にくくりつけられ、さらに召喚獣によるケンカも防止するため、召喚獣を召喚した姫路さんの監視下……という状態で会議が進みました。うう、何でこんな扱い……

「自業自得ですご主人様。まったく……このような重要な会談の場で……」

「そうだぞ坂本。やるなら終わってからやれ」

「いや、それもどうかと思うのだが……」

「？　そうか？　ぶつかり合うこと自体は別に問題なكارう？」

このあたり、愛紗と夏侯惇さんの考え方の違いが出てる気がする。夏侯惇さん、直情的というカ……戦闘民族？

「まあ、ケンカは放っておいて……詳細な作戦を話し合いたいわね……。劉備、そちらの将はそこにいる者達で全員かしら？」

「え？　あ、はい……まあ」

「そう……じゃあ、これから作戦を共にするわけだし、主要戦力全員が顔を合わせていたほうがいいわ。これから来る私達のところの將軍達と……顔合わせをしてくれる？」

「あ、はい、もちろんです！　じゃあ、伝令を出して呼んで」

「ああ、大丈夫よ、もう呼んであるから」

「ああ……そ、そうですか……」

まさかの対応に、桃香も啞然。

うん、わかる。やるカが早い……ってレベルじゃないもんね……

この子、何もかもお見通しだ。自分の考えたとおりに相手が動くことを前提にして行動してる。『いいよね？ 答えは聞いてない！』ってやつだろうか？

……まあ、ともかく……それで全部上手くいつてるんだからすごいよね……。

と、僕がそんなことを考えた……次の瞬間。

「「あ つ！……！」」

そんな声が……陣営の入り口付近から聞こえた。

あ、このタイミングで来るってことは……曹操が今言ってた、顔合わせに呼んだ、曹操軍の主要メンバーかな？

それにしても、今の声……どこかで聞いたような……って、あれ！？

「兄ちゃん……！」

「兄さま……！」

「え！？ 季衣！？ 流琉！？」

小つちやな体に……特徴的な髪型と髪色。甲高く、かわいらしい声。

誤解を招きそうな表現だけど……そこその期間を一つ屋根の下で寝泊りしてた2人を、今更見間違うはずもない。季衣と……流琉だ。

何でここに……って聞く前に、2人とも笑顔で走って突っ込んできて僕の胸に飛び込んできてげふうっ!!

ずどどっ!!
クリーンヒット
流琉と季衣のタックルが僕のみぞおちに

「兄ちゃんだ! ホントに兄ちゃんだあっ!」

「こんな所でまた会えるなんて……嬉しいですっ、兄さま!」

僕に抱きつき、奇跡の再会をすごく嬉しそうにしながら、2人は僕のみぞおちに頭を食い込ませる。ぐりぐりと、ねじりこむように。僕はというと、天幕の柱に縛り付けられているため、動けません。手も出せません。

「き……季衣、流琉……う、嬉しいのはわかったから、ちょっとまって……」

こうやって、甘えてきてくれるのは……純粹に嬉しいと思える。僕自身、子供は嫌いじゃないし……流琉も季衣も、純粹で、素直で、かわいいし。

……嬉しい、けどその……い、息が……肺が圧迫されて、息がでない……

「「「あああああ

っ！！！！」」」

え、今度は何……ってうそおっ！！？

「「「隊長おお

っ！！！！」」」

季衣＆流琉に続いて、今度は……

「凧！？ 沙和！？ 真桜！？」

あの山間の村で出会った……3人娘だった。

え、ちよっ……何なの！？ この再会ラッシュ！？ 何、どうしてこんなことになってんの！？ 季衣も流琉も凧も沙和も真桜も、自分達の村を守ってたんじゃない？……！！？

っっていうか三人娘！ 走ってくるな！ そのままそのペースで走ってきたら季衣と流琉の二の舞になるくふおおっ！！？

ずどどっ！！
沙和・真桜が何の遠慮もなく僕に突っ込んできた音

ちなみに、あの中で一番の常識人である風は、直前で思いとどまって急ブレーキかけてくれたんだけど……はつきり言って残り2人だけで致命的なダメージだったので、助かった、とはいえない状況だ。

そして……深刻なダメージを受けたのは、何も僕だけではなかったりする。

みしみしみし……

「「「え?」「」」

どこかから聞こえてくる、何というかこう……壊滅的な音。その音源は……僕を縛り付けてる、天幕の柱だったりするわけで

……

まあ当然だろう。立て続けに4人分の女の子のタックル（しかも一人ひとりが強い）を食らって……急ごしらえの天幕が耐え切れるか、と問われれば……

……NO、と答えるしかないわけで。
当然……

みしみしみしみし……

「あ、アカン！ 倒れる！」

「なっ……何がですか!？」

「柱や! うわちゃー、耐え切れへんかったっばいわー……まー、
うちら5人分の体当たり食ろてんやから、無理ないわな」

「ちよつと待て! 私はちゃんと止まったぞ!? 突っ込んでいっ
たのはお前達だろうが!」

「「連帯責任や(なの)」」

「何だそれは!?! ムチャクチャを言うな!」

「ちよつ……風ちゃんたち、言ってる場合じゃないって! このま
まだと兄ちゃんが倒れちゃうよ!」

「違つよ季衣! 兄さまじゃなくて柱が倒れるの!」

「え!? だつて兄ちゃんが傾いてるし……」

「兄さま『も』傾いてるの! 兄さま縛られてるんだから……つて、
あれ? そういえば兄さま、どうして縛られてるんですか?」

「いや気にしてる場合!? このままだと普通にどつちも倒れるか
ら! ていうか助けて! ホントに! 下敷きに、生き埋めになる
!」

「お、おい、こつちも助けろ! 縄解け!」

あたふたしてる彼女達に向かつて、僕も雄二も必死に叫ぶ。
が、時間とは残酷なもので……待つてはくれない。
そんな感じでパニックってるうちに……

みしみしみしみし……ずずうん……

「「ぎゃあああああああ
「「「あああああああ
つ!?!?」」
つ!?! しまったあ
つ!?!」」

「……………何なの？」

ぼつり、と、

曹操がその力オスな光景を見てつぶやいた言葉を耳に残し……僕と雄二は一蓮托生、天幕の大きな布と木材の柱の下敷きになった。

まあ……その後すぐに季衣たちが助けてくれたから、大事無かったけど。

その後、

あらためて全員で自己紹介を済ませた上で……その場にいた人たちは、曹操軍の主要メンバーのほとんどが僕の関係者、というこの事態を驚いていた。

いや、一番驚いたの、僕だけだね？

聞けば、季衣も流琉も、凧も沙和も真桜も、規模の大きい官軍にどうにか村を守ってもらえることになって……その恩返し、みたいな形で。曹操のところにと士官したんだとか。

なるほど……よかったね、村を守れるようになって、しかも就職先まで見つかった。

そのあと、縛り付けるものがなくなったので、僕も雄二も会議に

普通に復帰し、

しかし季衣たちが空気を和ませてくれた……というかケンカとか気にならなくぐらいの力オスな空気に上書きしてくれたおかげで、ケンカの再発などといった事態は起こらず、スムーズに会議を終えることができた。

そして、大まかな作戦と方針まで決めた所で……

「ふふつ……この戦い、実りあるものになるといいわね、劉備」

「はい！ お互い……がんばりましょう、曹操さん！」

がしつ、と、

両方の陣営の代表がしつかりと手を取り合った所で……第一回、劉備・曹操陣営の首脳会談兼軍議は……終わった。

無限の可能性を……その先に残して。

果たして……この邂逅が、この先、両陣営を……

果てはこの大陸を、という方向に導いていくのか……

それは……髪のみぞ知る。

「字違います、隊長」

……うん、ごめん。

余談だが、

「……………あのさあ、趙雲……………」

「何ですか、公孫贄殿？」

「……………一応、こっちの陣営の代表者って……………私だよな？　桃香達だって、立場的には私の客将なわけだし……………」

「ああ、まあ……………そこは、その場の流れというか……………宿命というか……………ですか」

「……………宿命、なのか……………？」

存在と役割を完全に忘れられていた哀れな誰かが、人知れず涙をこらえていたとか、そうでないとか。

第17話 ケンカと再会と首脳会談（後書き）

……いつも通りとしか言いようがない二人でした……

そして、まさかまさかのあの子たちが合流……

凧、沙和、真桜、流琉、季衣……とまあ、今までフラグ立ててきた皆さん、一気に登場（一部除く）。い、いきなり大所帯に……

……早すぎ、とかいうのは無しで。

そして、始まりますのは……いよいよというか、『黄巾の乱』で……その先、さらに何が待っているかというのは……まあ、今後。

実習の合間をぬって書いていたもう1話、ここで投稿しました……ということ、また、間が開くことになりましたが……お待ちください。

ではこれで。和尚でした。

第18話 軍師と遊軍とコンビ争奪戦（前書き）

えー、大変長らくお待たせいたしました。

先日帰ってきて、ようやく片づけが終わったので……更新したいと思います。

……でも、ペースが元に戻るにはまだちょっとかかるかと……。
どうぞご容赦のほどを。

ともあれ、第18話です。

クオリティが落ちてないか自分でも心配なんですけど……どうぞ。

第18話 軍師と遊軍とコンビ争奪戦

えー、まずは結果だけ。

というか、ここまでのあらずじ的な？ 何かを。

再会した雄二との、全く心温まらないふれあいと、さらに再会した流琉たちとの心温まるけど肉体的に非常に厳しいふれあいの後、僕らと曹操軍の連合軍は、共同作業で黄巾の連中を片っ端から駆逐していきました。

「敵前線崩壊！ 指揮系統ももはや機能していないと思われます！」

「再編成の兆しは？」

「ありません！ 撤退する模様です！」

「ふっ、かかったわね……劉備軍に横撃実行の伝令を！ 衝撃で敵の足が止まったところを、劉備軍との連携で包囲する！ 息の根を止めなさい！」

「承知しました！ 者共、かかれえええ

つつー！！」

「「「オオオオオオオオオオオオ

ッ！……！！」」」

えっと……こんな感じ。

主に曹操が指揮で、それにしたがって僕ら劉備軍が動いて、敵を蹴散らしていく……って感じのスタイルが確立してる。

使われてるみたいない感じがしないこともないけど……2つの理由で気にならない。

1つ、実際に曹操の方が、地位やら軍の規模やらが上であること。

そしてもう1つは……

「逃がすな！ 弱きを虐げ、己が欲望にその刃を染める悪しき者共を逃してはならん！ われらがその身に背負い、その剣に掲げるはこの大陸の明日と心得よ！ 民の明日のため、そして己が信じる正義のため、剣を振るい、雄雄しく戦うのだ――！」

このセリフからもなんとなく感じ取れる……曹操のリーダーシップ。

なんかこう……安心して任せられるっていうか、現時点では……完全に負けてるなあ、っていうのが実感できちゃうから、なんというか……

へこへこ仕えたいわけじゃないけど……信頼はできる、かな。

現に、共同戦線張るようになってから、相互に被害が凄まじく減ってるしね。仮に僕らが、この連合軍と同じだけの兵力を持っていたとしても、こんなに鮮やかな戦運びを見せるのは無理だろうな……。

なるほど、雄二が信頼してその身を寄せてるだけのことはあるみたいだ。

並みの、そうじゃなくても頭の悪い愚か者に拾われてたら……アイツのことだ、姦計めぐらして、地盤ごと乗っ取っててもおかしくない。

けどまあ、僕達だったただ従ってるわけじゃなく、独自のやり方で戦果を上げている。

そこで役立つてくれたのが……趙雲さんと、新たに加入した朱里と雛里だ。

趙雲さんは武術でも愛紗と並ぶ腕前……というだけでなく、とっさの冷静な判断が下せる切れ者でもあった。

そのおかげで、少し独断行動が目立つところもあるんだけど……戦場では八面六臂の大活躍。状況を読んで、やれ西へ、やれ東へと目まぐるしく動いて、戦場を駆け抜ける。

朱里と雛里は、やはりというか……軍師としての優秀さがハンパじゃなかった。

逐一状況を把握して、戦場において臨機応変かつ適切な判断を下し、どんなピンチも逆にチャンスに変えてくれるというすんばらしい働き。

おまけに、戦の前の戦略会議だけでなく、戦後処理や政治的問題なんかも一手に引き受けて解決してくれるときたまんだ。優秀すぎホント助かります。

もちろん、戦の策略を考える上でも、彼女達は重要。

曹操軍にもいるらしい……『荀？』って言ったかな、会ったことないけど……もう1人の軍師との協力で、最高の策を考えて僕らを助けてくれてるのだ。

ともかくまあ、そんな感じで……僕らは連戦連勝、着実にこの『黄巾の乱』を収束に向かわせていっているのです。説明終わり。

……そんな、ある日のこと。

「ご主人様、こちらが先の戦における、収支報告のまとめになります」

「お目通しをお願いします」

ぺこりと一礼しつつ、僕に書面を渡してくれる朱里&雛里。うん、かわいい。

この2人と姫路さんの笑顔を見ると、今日も一日がんばろう、って気持ちになれるよ。

……って言ったら

「あわわ……そ、そんな……もったいないでしゅ……」

言ったそばから顔を赤くするとことも特にGOOD。

うーん……このままお持ち帰りしたい衝動に駆られるけど、そんなことをしたら僕がこの世からお持ち帰りされそうになるので、頼りない理性を総動員して防ぐ。

そして、恭しい動作で僕に渡されたその書見を……

「はい、公孫贇さん」

「ん、ああ」

そのまま公孫贇さんにスループス。

なぜって、字、読めないもん。まだ。僕も姫路さんもムツツリー二も、この世界の文字は勉強中です。

漢文形式だから、姫路さんはほとんど読めるようになったっぽいけど。

そういうわけで、こういう書類は公孫贇さんに丸パスして、見て

もらうわけ。

……っていうか、どっちみち公孫贇さんは僕らの『雇い主』扱いなんだから、どのみち彼女には回すんだけどね。遅かれ早かれ。

で、僕らは後から……朱里と雛里に直接説明してもらう。文句あるか。

ちなみに今、愛紗、鈴々、趙雲さんは戦後処理で前線にいるので、陣には不在です。

「……あのさ、吉井……」

「？ 何、公孫贇さん？」

「あの……どっち道渡すんだしさ、最初から諸葛亮たちが私にくれればいいんじゃない？」

ああ、それはもつともなんだけど……朱里&雛里いわく、

「で、でもその……一応私達は『ご主人様に』仕えてる身ですので……」

「こ、こういうのは、ええと、形式というか……雰囲気というか、を大切にしたいというか……」

「……と、いうわけらしいです」

「あ、そう……ははは、なんか私、形無しだな……」

ちょっとだけしゅんとしつつも、崩れ落ちることなく踏みとどまり、書類に目を通す公孫贇さん。……健気だ。

その……まあ、悪いけど……立ち直りは自力でやってもらおうとして……

……ん？

「あれ、誰だろ？」
「「「え？」」」

ふと目がいった陣営入り口の方から……誰かが入ってくるのが見えた。

人数は3人……って、ああ、曹操からの使いか何かみたいだな。
何でわかるのかって？ 雄二と流琉が一緒にいるもん。

けど……3人組の、残りの1人……知らない顔だな……？

セミロングの茶髪に、かわいらしいけど、どこか冷めた感じの表情の顔。

猫耳っぽい形のフードのついた、ゆったりめの服を着てる。身長は……低め、歳は……僕より少し年下、ってとこかな。

その彼女は、特に礼も、にこりともせず……どこかよそよそしい態度のまま、早足で僕の方に近づいてくると、

ぽいつ、ぱさつ、すたすたすた

何かの書類と思しきものをこちらにぽいと投げてよこして、僕の足元に着弾したのと同時にすたこら立ち去つ……ってちょっと待つんだ。

「え？ や、ちょ、えっと……その君？」
「……………（すたすたすた）」

え、シカト！？

いや、この距離だし、明らかに聞こえてたと思うんだけど……その横にいる流琉が気まずそうにしてて、何か話しかけてるし。

見る限り、流琉はちょっとあわてて、僕とその娘を交互に見ながら、どうにか僕の方に向かせようとしてくれてるみたいなんだけど……効果なし。
すると、

「あ、ああああの……ま、待ってくだしい、荀？しゃん！」

と、朱里がかみながら言って……ん、荀？？

あの子が……つまり、曹操軍の軍師？

するとその『荀？』ちゃん、ぴたりと止まって、

「……………はあ……………何よ？」

あからさまに嫌そうな顔で振り向いた。うわあ、超ジト目。
いや、その……あの、僕ら何かした？ 嫌がられるようなこととか……

「け、桂花さん、兄さまが困ってますから、そんな、あんまり邪険な態度は……」

「いいのよ流琉、男なんてみんなケダモノなんだから」

……あ、そういう考え方の人なんですか？

どうやらこの荀？ちゃん（桂花、って多分真名だ）、いわゆる『男嫌い』ってやつらしい。

女性には普通に接するけど、男性を露骨に嫌ってて、近づくのも話すのも嫌っていう……純粹培養の女子高のお嬢様みたいな感じの生きた。

それでいて、この娘の場合……性格もきつそうだな。今の口調か

らして。

「いい流琉、この際だから教えておくわ。男なんてみんなふしだらなケダモノなのよ！ 半径3歩以内に近づいたら妊娠させられちゃうんだからね！」

「いや、その……それはさすがに……」

何ちゅう暴論だそれ。

流琉の目を真正面から見て、『雷様におへソ云々』レベルの迷信（とも最早言えない気がする）を説く苟？ちゃんの目は、どこまでも真剣だった。……こりゃ筋金入りだ。

「そ、それに私は、兄さまになら別に……」

流琉が何か言ってたみたいだけど、小声で聞こえなかった。苟？ちゃんも、聞いてなかったみたいだ。

すると、

「おい、その軍師、苟？……つつつたか？」

「？ 何かしら？」

と、今まで空気だった………もとい、何も発言のなかった公孫賛さんが、ここに来て久しぶりに口を開いて存在をアピールした。

「……何か今、ものすごく失礼な説明の類が入ったような気配がしたんだが……」

「ははは、気のせいですよ」

「……まあいいや」

そして、公孫贇さん、再び荀？ちゃんに視線を戻し、

「荀？さんよ、あんたの趣味思考は知ったこっちゃないが……一応ここにいる明久は、私と同じようにこの同盟軍の代表格だぞ？ 仮にもそれを相手に、何の説明もなく、書類ほっぽってはいサヨナラたあ、ちつとばかりし礼節に欠けるんじゃないか？」

とのこと。ああ……そういわれてみればそうかも。

確かに……いくら客将とはいえ、同盟相手……っていうのは、一応それなりに敬意をもつて接するべき対象だ。

そのへんは、曹操もそうしていた。偉そうな口ぶりだったけど……それを背景に僕らを見下してくるような言語表現は一切使っていないかったのだ。

やれやれ、バカにされたり邪険な態度とられるのなんで、向こうの世界じゃ日常茶飯事だったから、思わず気にするのわすれちゃったよ、ははは。

「悲しくなるからやめてくれ吉井……ともかく、どうなんだ、荀？さん？」

すると荀？ちゃん、

「こいつが言ったのよ、『明久にはこれでいい』って」

と、雄二を指さしながらつつけんどんに言い放つ。……って、お前かよ犯人。

雄二だって、荀？ちゃんからすれば『男〃ケダモノ』の理論の対称なんだろうけど……その男のいうことでも、自分に都合がいいこ

とであれば聞き入れるらしい。

……もつとも、きつちり半径3歩以上の距離はとってるけど。
いや、まあ……別にいいんだけどね？

「け、桂花さん……す、すいません兄さま、桂花さんもその……悪
気があつてこんなこと言ってるわけじゃなくてですね……その、何
というか……」

「流琉、男に気を使う必要なんかないって言ってるでしょ？ とい
うか、隙を見せちゃダメ、絡めとられて手籠めにされるわよ！」

「け、桂花さんっ！ あ、あの……兄さま、その……」

「ああ、いいよ流琉、気にしてないから」

気にしてないし……懸命にフォローに回ってる流琉が健気だ。

それにどっちかっていうと……苟？ ちゃんの中の『男』ってもん
がどういふ存在なのかの方が気になる。人間にカテゴライズされて
るんだろうか？ 絡めとられるって、何に？

「ふんっ！ 男なんかが生意気にも、華琳様の配下である流琉の真
名を呼ぶなんて……一生呼べなくしてやろうかしら……？」

「……………（うるうる）」

あーもう、フォローに回ってる流琉のほう泣きそうになってる。
同席してる者として、この論争（というか、一方的な悪口）の責
任を感じちゃってるんだろうか？ 責任感強くて健気な子だからな
あ……。

大丈夫大丈夫、僕怒ってないから、泣かなくていいから。ね？

……というか、僕はむしろ、もう1人……隣にいて、しかも苟？
ちゃんにあらぬことを吹き込んだ張本人で、その癖に何のフォロー
もしようとしなないコイツに対して、少々腹が立つというか……

にらみつけると、『何だ文句あるか』って感じのにやけ顔を返してくる雄二。

……別にこのくらいいつものことだから流してもいいんだし、雄二も『このくらいでいちいちコイツは怒らんだろ』と思ってるんだろ。

まあ、実際そうだけど……似たような体験、現実世界でもあるし。が、

僕のかわいい妹分である流琉が泣きそうになってる点だけはちょっと看過できない。……軽く肅清しとくか。

「はぁ……雄二、あんまり調子に乗ってる……」

「あ、何だ？」

「……姫路さん特製ゴマ団子を名指しで差し入れするよ？」

シュバツ、ずざざざざっ！！

スライディング土下座

orz

「すまん俺が悪かった許してくれ」

わかればよろしい。

「でもあれだ、僕じゃなく流琉に謝つといてね、気苦労かけてるよ？」

「あ、そうだったのか？ あー……すまなかった流琉、関節の一つくらいなら差し出すから殺さないでくれ」

「え！？ こ、殺つ……あ、いやその、私は別に……」

謝られたら謝られたで慌ててる流琉。忙しい子だ。

……まあ、涙目でなくなっただけからよしとしよう。彼女には笑顔とエプロンが似合う。

……それはそうと、

「雄二、本件の用件は何？」

「んあ、気づいてたのか？」

土下座から起き上がりながら、意外そうに雄二が聞き返してくる。当たり前だ。たかが書類届けるごときに、曹操軍の重鎮3人も差し向けるか。僕だってそのくらいはわかる。本件の用件は他にあるはずだ。

……そうなると、荀？ちゃんはその用件を雄二と流琉に丸投げするつもりだった……って仮説が立つちゃうのが困りものだけ。

そして雄二によると、今回の訪問は、荀？ちゃんの顔見せと、もう1つ……

「華琳から伝言で……統率する将をこっちから派遣するから、劉備軍を分割して遊軍を作ってくれとさ」

「……え？」「」

と、僕のみならず……朱里や雛里、公孫賛さん……

……そして、たった今帰ってきた愛紗たちの声も混ざっての聞き返し。

……どういふこと？

つまりアレだ。

戦も佳境に入ってきたから……戦略のバリエーションを増やしたいと。

それで、今現在は1つにまとまって動いてる僕ら劉備軍を分割して、遊軍を作って戦って欲しい……と、そういうわけか。

「『劉備軍』？ 『公孫賛軍』じゃねーのか？」

「ん、ああ……そういえばそうだったような……まあ、どっちでもいいでしょ？」

「確かにな」

双方納得につき今の会話は流します。

隅の方でさめざめと泣いてる公孫賛さんがちらつと目に入ったけど、フォローは部下の人達にまかせて僕らはこっちの会議に集中。

確かにまあ、この先は戦いも厳しくなるだろうし……軍の分隊の数は多い方がいい。

それに、分隊の1つや2つを作れるくらいの数なら……公孫賛さんの兵力はある。

それを僕らがしないのは……それを率いるまとめ役……『将』がないからだ。

兵士達の『隊』は、強さと経験、そしてカリスマを持つてるリーダーによって統率されるわけだけど……僕らの軍は、少々それが不足気味なのだ。

率いるリーダーになれそうなのは……現時点で、愛紗、趙雲さん、あと……たった今隅っこから無事帰還した公孫賛さんの3人くらい。

鈴々は、その……判断局面で『突撃』以外の選択肢がないので、ちよつと……。

無理すれば分隊を作れないこともないけど、義勇兵を多分に含み、複数のまとめ役による確実な統率が必要となる僕らの軍でそれは……正直厳しい。

それを見越して、曹操たちは僕らに将を貸してくれる、というのだ。

……で、誰が来るかというと……。

「い、いやその……ここは能力配分的に考えて、私がだな……！」

「風ちゃんずるいの！ 隊長のところには沙和が行きたいの！」

「ウチかて同じや！ 隊長と一緒に戦える機会……簡単には譲らへんで！」

……今、決めてます。

夏侯惇、夏侯淵姉妹は……曹操の直属かつ、軍の中核だからだめ。同じ理由で、荀？ちゃんもアウト。

季衣と流琉は……なんと、曹操の親衛隊長なんだって！ すごいね、大出世だよ！

「さすが季衣と流琉だね、びっくりしたよ、すごいじゃない！」

「そ、そんな……あ、ありがとうございます……兄さま……」
／
／

「えへへ……すごいでしょ、兄ちゃん」

ちよつと恥ずかしそうに、顔を赤らめて言う流琉と、自慢気かつ

得意そうに胸（推定A）を張る季衣。うんうん、相変わらずかわいいよ、2人とも。

……その向こうで、曹操が僕と季衣&流琉を、交互に何やら見たような気がしたんだけど……何だったんだろ？

……まあいいか、何も言われなかったし。

……とりあえず、そういうわけで……残りの武将クラスである、風、沙和、真桜の中から1人選ぶことになったんだけど……決まらないんだコレが。

遊軍、っていう新鮮さを求めてなのか、はたまた久しぶりに会う僕と話でもしたいのか……そこんこはよくわかんないけど、その座を取り合って3人共譲らない。

結果、もう話し合って決めてよ、ってことで、今放置中。

「わ、私が隊長と行くっ！ 譲らんぞ！」

「沙和が行くのー！」

「ウ・チ・や！」

「はあ……あなた、季衣と流琉といい、彼女たちといい……私の軍の子達に随分と人気があるのね？」

と、唐突に曹操が僕に話しかけてきた。

「え？ ああ、まあ……みたいだね。一応、前に会ってるから」

「ただ会ったくらいじゃああはならないと思うけれど……。少し困ってたところなのよ？ どうも風たち、雄二のことを『隊長』と呼ぼうとしないから……」

「え？ 雄二が隊長って……？」

「ん、言ってなかったか明久？ 俺、一応華琳から、城下町の警備

隊長任されてんだよ。それで、あいつらが部下、って立ち居地」

そうだったのか、なるほど。

あ、そうなる………そういうことか。

凧達は、僕に対しての愛称が『隊長』だから………ホントの上司である雄二を『隊長』と呼べない、と。それが曹操、気になってたわけだ。

ちなみにその関係で、雄二は凧たちから『坂本はん』とか『雄さん』とか呼ばれてるらしい。凧だけはなるべく『隊長』を付けて呼ぶように努力してるらしいけど………それでもやはり『坂本隊長』のような、他人行儀の呼称になるんだそうだ。

いやまあ、呼び方まで僕がどうこう言えることじゃないけどね………。

そうこうしているうちに、

「やった っ！ たいちよー、今回は沙和と一緒になのー！」

お、決まったみたいだ。

僕と一緒に動くのは………沙和か。

「うっ………こ、こんなことが………」

「あ、あー………ウチのグーが、グーがあ………負けるなんてえー………」

グーで負けたらしい凧と真桜が、暗い闇を背負ってうなだれていた。露骨だ。

しかもジャンケンかよ、決め方。いや、いいけどさ。

「じゃあ隊長！　これから『黄巾の乱』の決着まで、沙和が隊長の護衛で片腕なの！　ふつつかものだけどよろしくなの！」

「ちょ、待てい！　それはアカンやろ！　一戦終わったら交代や交代！」

「そうだ沙和！　わ、私達だつてその……隊長と……あの……」

微妙な言い回しで軽く挨拶する沙和に、聞き捨てならない、といった雰囲気の間＆真桜が抗議する。

が……そこに一石を投じたのは……予想外の人物だったりした。

「ダメよ真桜、風。我慢しなさい」

「「ええっ!?!」」

止めたのは、なんと曹操その人でした。あれ、何で？

「はあ……あのね、戦いが一回終わるたびに指揮官が変わったりなんかしたら、兵士達が混乱するでしょう？　今回の戦は、終わるまで吉井明久と沙和にコンビを組ませます、それが一番効率的だからいいわね？」

「は、はい……」

「うう……殺生やわ、大将お……ちゅーか、『コンビ』で何……?」

と、しぶしぶ納得する間と、嘆く真桜。

ていうか『大将』で……何ちゅー呼び方しとるんだ君は。

そして僕も気になる。『コンビ』ってそんな横文字、何で曹操が使ってるんだ？　っていうか、そういえばこの前も、『キーワード』

とか使ってたし……

すると横から雄二が、

「ああ……あいつ学習能力ハンパなくてな？ 日常生活で俺が思わず使っちゃった横文字とか、ちっと意味教えただけで普通に使えるようになるんだよ」

「へー……」

順応早いつていうか、なんていうか……まあ、いいけどね。

ちなみに、沙和だけじゃなく趙雲さんも僕と一緒に行動するから、厳密にはコンビ、ってわけでもないんだけど。

ともかくそういうわけで、次回から戦いでは、沙和が僕の片腕として活躍してくれることになっ……

「お、お待ちくださいご主人様！」

……ったと思ったら、もう1人納得させなきゃならない人がいた。

「ご、ご主人様！ 片腕でしたら私がやりますから、そんな、沙和殿となど……」

「いや、愛紗は自分の部隊の指揮があるでしょーが」

愛紗が僕の部隊の床に来て、沙和に関羽隊に任せるとか言わないでよ？ それこそ指揮系統が混乱しちゃうって。

「で、でしたらその、ご主人様がこちらにいらっしゃれば……」

「桃香と公孫賛がもういるでしょ。ていうか、せっかく桃香と僕とで分業してんだから、そっち行っちゃったら沙和が来た意味なくな

るじゃない」

「うう……」

そういうこと。遊軍として劉備軍を二つに分けるにあたり、僕と桃香は一応軍の看板であるということで、二手に分かれての配置となった。

だから、その2つにバランスよく戦力を分散させるってことで……分担としては、桃香の部隊に愛紗と鈴々、僕の部隊に趙雲さんと、曹操軍から派遣される1人……すなわち沙和、っていうことになってる。愛紗たちは僕よりも桃香との付き合いが長いから、その方が円滑に進むだろうと思ってね。

「まあまあ、愛紗さん。隊長は沙和と趙雲さんがしっかり守るから、安心してなの！」

「そういうことだ。お主は自分の役目に集中してくれ」

「が……がんばろうね、愛紗ちゃん！」

「うう……あいわかった、ご両人、ご主人様を頼む……」

まだ何か言いたそうだったけど……ひとまず納得してくれたらしい愛紗にほっとしたところで、今日の会議は終了。

次からは、曹操軍の本隊、夏侯惇隊、夏侯淵隊、楽進隊、李典隊、そして僕らの吉井隊、劉備隊……という、合計7部隊の競演となるわけだ。こりゃ派手なことになるな……。

さてさて、この先どうなるやら。

第18話 軍師と遊軍とコンビ争奪戦（後書き）

いろんな思惑が入り混じった様子が……いや、ギャグ要素も多目ですけどね。

ともかく、今後どういった展開に転んでいくのか……細かいところ考えるのが大変です。

特に、三羽鳥のはしゃぎっぷりとか……桂花の男嫌いな感じとか……

次回の更新は……まだ忙しいので、少し空くかもです。

無論、時間ができて早く書けたらすぐにでも更新しますが。

ではこのへんで。和尚でした。

第19話 カラシと手紙とハイキック（前書き）

第19話を更新します。

どうぞ。

第19話 カラシと手紙とハイキック

S i d e ???

大陸某所・黄巾党本拠地
中心部……総大将天幕

「……まずい、かしらね……そろそろ……」

天幕で、兵士が持つてきてくれた書類に目を通しながら……私はため息をついていた。

弱ったわね……こんな大事になるなんて、思ってたのに……まさかこんな、漢王朝や諸侯まで巻き込んだ大事に……。

「どーしたのよ人和^{れんほう}? 眉間にしわなんか寄せちゃって（もぐもぐ）

」
「地和^{ちほう}ちゃんの言うとおりだよ人和ちゃん、かわいい顔が台無しだよー?（もぐもぐ）」

「……はあ、よくそんなにのん気でいられるわね……」

と、横から聞こえてくる気の抜けた声に、私は再度のため息をついた。

ちらりと目をやると……そこには、美味しそうにシューマイをほおばる我が2人の姉。

全くもう……そののん気さと楽天さがうらやましいわね……今の状況わかってるのかしら? ……や、多分わかってないわね……。

「あ、もしかして人和ちゃん、カラシないとシューマイ食べられない派? ごめーん、今もらってくるね!」

「いや、天和姉さん、別に私そんなシューマイにこだわりもってないけど……って、もういないし」
「もー……さつきから何だか知らないけど、やめてよ人和ー。こつちまで気が滅入っちゃうじゃない！ そんなにお腹減ってるんならさつさと食べる食べる！」
「空腹で機嫌が悪いわけじゃないわよ……っていつか何でさつきから食事に関する話題しか出てこないの？」

そんなに食事に集中したいのかしら、この人達は……
まあ……姉さん達が興味あることなんて、歌とオシャレと食事くらいだから、当然かしらね……こんな乱世、っていうのもあるかもだけど。

やれやれ……仕方がない、食べながら話そうかな。この大陸で……そして、私達の周りで、一体何が起きているのか……。

「人和ちゃん！ カラシもってきたよー！」

……だから違っつて……っていつか、ムダに仕事早い……。

天幕の入り口で、ねりカラシの入っているらしい小瓶を手に、満面の笑顔を浮かべている……私たち三姉妹の長女……張角こと、天和姉さん。

呆れ気味の視線を送りつつ（呆れたいのは私だっというのに……）、マイペースに食卓でシューマイに舌鼓を打ってる、三姉妹の次女……張宝こと、地和姉さん。

そして……三姉妹の三女であり、会計とか事務とかを一手に引き受けてる……今日もため息が止まらない、三女……張梁こと、人和。

それが私。

……つくづく信じられないわね……この3人が、この『黄巾の乱』の原因である、『黄巾党』の頂点に立つてる3人だなんて……。

……なんで、こんなことになってるんだろっ、ほんとに……はあ……。

「あーもうまたため息っ！ いい加減にしなさい人和！ ちい怒るよ！」

「ほらほら、カラシもちゃんと持ってきたから……あぁっ、これわさびだあ！ ごめんね人和ちゃん、今代えてくるね！」

「いや、別にいいから……って、またいないし……」

……ホント……どこで間違っつて、こんなことになっちゃったのかしら……？

S i d e 明久

曹操・劉備連合軍、陣地

……の周辺の草むら

「……隊長、何してるのー？」

「しーっ……静かにしたまえ沙和くん、奴に気づかれてしまうではないか」

「なんか色々変だけど……まあいいの。それで隊長、何でそんなこそこそ歩いてるの？」

それはね、あのブサイクの顔に一発ドギツイのをお見舞いしてやるためだよ？

えー、状況がわからない、という方……ご安心を、説明します。

例の『遊軍作戦』を実行に移した僕らは、やはり、というべきなのか……今までよりもさらに速いスピードで黄巾党の連中を蹴散らしてます。

さすが、朱里・雛里・荀？ちゃんの3軍師の合同立案……すさまじい効果だ。

無論、僕と沙和、それに趙雲さんで編成された遊撃部隊も大活躍……ってまあ、逃亡兵とか、列からあぶれてる連中を叩くだけなんだけどね。

まあそれでも、機動力が上がるっていうのはもう申し分ない成果だし。

それに、沙和も……本人曰く『隊長と一緒にいつもより力が出てがんばれるのー！』……だそうだ。

……よくわかんないけど、まあ言われて悪い気はしない、かな。

ちなみにそのことを雄二に話したら、

「はあ、お前はまた……いや、なんでもない。ああ、その話姫路にはしない方がいいぞ？」

だそうです。……？　ますますわかんないんだけど……？

ともあれまあ、そんな感じで……僕らの戦いの日々はすこぶる順調です。

……戦いを順調、なんて言うのもおかしい気がするけどね。

しかし、そんな中でも……僕と雄二の戦いは終わらない。

この前も雄二が、風たち三羽鳥に、僕の恥ずかしい話を、しかもあることないこと吹き込んで……おかげでそのあと、沙和と真桜にからかわれて大変だったんだから！

……何を言われたかって？ 僕がバカだとか、スケベだとか、成績が悪いとか、学問に不真面目だとか……全く、言いがかりもいいところだよ。

……反論は受け付けませんよ、念のため。

ともかくそんなだから雄二の奴、その翌日に僕から風達に、霧島さんの存在や雄二と霧島さんの関係、運命の出会いから今に至るまでのエピソードを事細かに配布プリントつきで説明される羽目になるんだ。

別の日には、雄二は僕のラーメンに大量の砂糖を混入させて、コラーカよコレはってくらいに甘いスープのラーメン食べさせやがったし、

また別の日には、僕が雄二の使う顔吹き用タオルにたっぷり粉唐辛子を振りかけておいて、朝から雄二の絶叫が陣営に響き渡ったりしたし、

そのまた別の日には、雄二が僕の天幕に、早朝4時に大量のニワトリを放してたたき起こしやがったし……っていうかそのためだけに早起したのかアイツは。

さらに別の日には、天幕じゃなくて安っぽい宿に宿まった時だけど、僕が雄二の部屋のあらゆる扉と窓のたてつけ最悪にして開かなくしてやったし。

……まあ、そのたびに僕も雄二も、愛紗と曹操にお説教食らってたんだけどね。

しかし、そんなことでくじける僕らではないのでした！ フハハ、参ったか！

「とまあそういうわけで、僕は今、今朝雄二から受けた仕打ちの仕返しに、『曲がり角で出会いがしらのハイキック作戦』を食らわせてやるべく待ち伏せしてるわけだよ」

「ふーん……よくわかんないけど……まあ、隊長が全然懲りてない、ってことはわかったから、よしとしようかな」

あつそ。一言多いよ？

まあ別にいいけどね、邪魔さえしないでくれれば。というわけで沙和、静かにしててね。

「ちなみに隊長、仕打ちって何されたの？」

「あのバカに椅子に細工されて、座った瞬間椅子が壊れて腰打った」「うわ、地味に痛い……」

そうそう、アレ地味に痛いんだよ。しかも笑われるし。

だから僕は、地味に痛いイタズラのお返しを、普通に痛いハイキックでしてやろうというナイスなアイデアの元、準備運動をしながらここで待っているのです。

「陰湿なあいであ、の間違いだと思っの……」

「何か言った沙和？」

「うっん、何でも」

陰湿だなんて失礼な、直接的で男らしい報復、といってもらおう。

「いや、報復つて時点で既にもう色々……」

沙和うるさい。

ちなみに沙和、僕と行動を共にするようになってから、曹操ほどじゃないけど横文字を学びとり始めてます。今の『アイデア』なんかもいい例かな。

さーて………ん？

「……着たな……あ、間違った、来たな……」

「え？ ホント？」

ああ、ホント。曲がり角の向こうから……何やら気配がする。

しかもあれは……こっちに誰かが潜んでいることを警戒している気配だ。ふふふ……さすがは我が戦友、警戒を怠らず、か……。敵ながら天晴れだ。

だが、こちらにも気配を殺している……ふふつ、何も起こらないことに油断して警戒を解いたその時が……貴様の最後だっ！

「た、隊長がムダに気合入ってるの……仕事じゃこんな顔絶対見せないのに……」

沙和うるさい。

そのまま、1分弱が経過し、そして……

「……っかしいな……誰かいた気がしたんだが……気のせいかな」

そんなつぶやきとともに、こちらに向かって無防備にも歩いてくる足音が聞こえた。

よし……殺^とった！

「うなれ僕の黄金の右足っ！！」

曲がり角の向こうから、その顔が見えた瞬間に僕は動く。

振り上げた僕の足は美しい円弧を描き、吸い込まれるように雄二の顔面に……

ばきいっ！！

「ぐぼはああっ！！」

「……あれ？」

「あれ？ 雄二さんじゃ、ない、の……？」

……と、思ったら、雄二じゃない、全然知らないおっさんの顔面を变形させた。

……ああ、人違いでしたか。

どさっ、と音を立てて倒れこむ、謎のおじさんA。や、やばっ、

全然関係ない人に渾身のハイキックがクリーンヒットしちゃった……。
と、とっさに助け起こそうとその人のそばに近寄ったその時……
あることに気づき、助け起こそうとした僕の手が……ぴたっとま
った。

「「!?!」」

止まらざるを……えなかった。僕も、沙和も。
いや、だってこの人……頭に……

「黄色い布巻いてる……ってことは……」
「黄巾党の人……なの？」

みたい……だね。
顔を僅かに陥没させてノックダウンしている、推定30代後半
のおっさんは、黄色い頭布に黄色い鎧と、いかにもな感じの『黄巾
党』の人だった。

あー……ならいいか、謝らなくても。

さて……そうなれば話は変わってくる。黄巾党を捕まえたんだか
ら、連行しないと。

……その前に、

「さて、お財布はどこかなー、っと……」
「あ、隊長さりげなくお財布盗る気なの。いけないんだー！」
「4割でどう？」

「あははは 沙和は何も見えないの」

買収完了。

うん、僕は話のわかるいい仲間を持った。真面目な風や愛紗じゃこうはいかないからなあ……………って……………ん？

と、おっさんの懷をまさぐっている……………僕の手が、妙なものを探り当てた。財布じゃないな、これは……………手紙？

「えっと……………あ、ダメだ、読めない。沙和、読んでくれない？」

「はいはい。えっとね、これには……………あ、あれ？ え、こ、これってもしかして……………」
「……………」

黄巾兵が持っていた手紙に目を通した瞬間、沙和が焦りだす。
「？ どうしたのかな……………何か重要な情報でも書いてあったんだろ
うか？」

「重要も何も、隊長、これ……………」

S i d e 雄二

少し後、曹操軍陣地

「『太平要術の書』……………？」

「そう……………私が探している書物の名前よ。噂では……………黄巾党の頭目
が、それを持っているとか……………」

天幕の中で、優雅に茶を飲みながらそう話す華琳。そしてこの俺・
坂本雄二はその眼前で、遠慮なく胡坐あぐらをかいて茶菓子あぐらをばくつきな

がら、その話に耳を傾けていた。

天幕の中には、俺の他にも……この軍の主要メンバーがずらりとそろっている。

ただし、沙和だけはいない。あいつは明久のところにいるはずだ。

そんな会話の中で『そろそろ話してもいいかもね』という切り出しで、俺達が華琳に聞かされたのが……今の話だ。

三国志にも出てた気がするんだが……聞けば、その『太平要術の書』とやら、平たく言えば……人身掌握の方法が記されている書物らしい。その中には、いかにして集団の頂点に立ち、それをまとめ、その力を最大限に引き出すか……という方法が、さらにはそれに役立つ『妖術』なんかも色々と記されてんだとか。

妖術はさすがに胡散臭いが……そりゃおつかねえ代物だな。

「ああ……華琳様、それは私も聞いたことがございます。なんでもそのなんとかという書物、どこぞの仙人がどこかのだれかに、これであれをどうこうしろ、といったもたらしたものだそうですね？」

「提示情報が皆無に等しいんだが」

「う、うるさい！ 間違っではないはずだ！」

いや、だから間違ってるも何も、その中身がねーんだっつもの。

まあ……いい、こいつは放つところ。

「まあ、春蘭のこれは今に始まったことじゃないから、置いておきましょう」

「さすが華琳様！ この夏侯惇、身に余る光栄です！」

いや、今1ミリも褒められてねーんだが？

まったくこのバカは、昼間っから疲れる……明久がもう1人いるみ

てーな感覚だ。

季衣（同類）以外の全員がため息をついているこの状況下で、話は続けられる。

「ともかく、そういうわけだから……それらしい書物があつたら、のこらず確保しておいてちょうだい。私の覇道に……この大陸に覇を唱えるために、必要よ」

「「御意っ！」「」

「あいよー、ま、見つけたら、な」

「何だ坂本、返事に気合がこもっていないぞ！」

「いや、俺は前線に出ねーんだから、そういうの見つける確率低い
だろ。その分お前ががんばれ、期待してるぞ、よっ、曹操軍最強、
華琳の右腕」

「お……おおう、わかっているではないか、ははは……」

「「「……………」」」

……はあ、相変わらず、単純さと扱いやすさは明久以上だな……。

さしずめ華琳の狙いは、そいつを使って自分の勢力を拡大させる
……ってところだろう。

こいつは今でこそ、漢王朝の配下としての位に甘んじちゃいるが
……そこでいつまでも収まってるようなやつじゃねえ。今言つてた
通り、いつか……自分の国『魏』を立ち上げて、天下に名乗りを上
げるであろう器だ……。

それだけの力も、そして誇り高さも、こいつは持ってる。……ま
あ、当然っちゃ当然か、あの曹操なんだし……。

……そこで、今まで何度も頭をよぎった疑問点が再び浮上する。

さて……劉備やら関羽が、しかも女でいた床から見ても、どうや

らこの世界、やっぱりパラレルワールドの三国志世界で間違いなさそうだが……

……となると、だ。

本来の『三国志』のストーリー通り……こいつは呉と蜀を相手取って、ラスボス的な立ち位置につくことになるのか……？

そしてその場合……俺は明久たちと『敵』として戦うことになるのか……？

いや、それは後で考えよう……今はともかく、その『太平要術の書』についてだ。

はたして、目の前にいるこの少女の手に、そんなんでもねえモンを渡らせちまっいいもんかどうか……。

こいつの人脈や手腕、そしてカリスマ性は、今でさえ異常だ。今のまま覇道を歩んだとしても、十分に天下に通用するだけの力を手に入れられるはず。

そこにそんな、史実的にお墨付きのバイブルが渡っちまったら……こいつ、強くなりすぎるんじゃないか？

某ハリウッド映画で見たような悪役になるとは思えねーが……勢力的に手の付けられない強さになることは確かだろうな……。ないと思うが、そこで道を踏み外されたりなんかしたらかなわねーし……どうしたもんか……。

理想的なのは、状況を見つつ、必要ならそれを参考に……願わくば、大陸全体でそのノウハウを共有……っていうのがいいんだろう。力の集中は争いの元だ。

が、勝つためには時として非情になるべき、っていうのをわかってる華琳のことだ、そういう手段はとっちゃくれねー。

となると……どうにかこいつに気づかれないようにそれを確保して、どこかに隠しておく……最悪、焼き捨ててでも処分する、ってのが理想的だが……

華琳のところに置いてもらってる身の俺が、そんなこと、できるのか……？

と、その時、

「申し上げます皆様！ 劉備軍、吉井明久様、ならびに当軍派遣・于禁様より、緊急の伝令であります！ 至急お目通りを願いたいとのこと！」

「「「！？」」「」」

と、天幕の入り口に現れた伝令兵が……そんなことを口にした。
……なんだと？ 明久と沙和から伝令？ しかも……緊急？
救援要請とか、賊の襲来とかじゃねーみてーだが……何かあったのか？

S i d e 明久

十数分後、

曹操・劉備連合軍、会談の席

今、曹操や雄二、他、この陣営の主要メンバーの皆さんが、僕と沙和が持ち帰った『手紙』に目を通して……露骨に驚いてる。うん

うん、いい光景だ。

まあ、無理もないかな……何せ、その手紙……。

「これって……黄巾党の作戦指令書？」

「つーことは、明久が仕留めたその兵士は……伝令だったのか！」

そういうこと。沙和と僕が見つけたその手紙には……僕らみたいなものにとっては井戸から手が出るほど欲しいであろう……数々の情報が事細かに記されていたのである。

「『喉から』、な。井戸じゃなくて」

「……それだと、軽くホラー」

「こ、怖い格言になっちゃいますね……」

「……………」

総出で突っ込んでくれる文月メンバー！。

……まあ、今は流して。

兵士の規模や、武器・糧食の在庫状況、食料の運搬ルートに、次に行う襲撃作戦の時期と場所、官軍に対しての対処指令……

そして……張角・張宝・張梁がいるであろう……本拠地の場所なんかも。

事の次第（財布を抜き取ったことを除く）を詳しく報告したところ、僕らへの評価は当然……

「これは……吉井明久、沙和、とてつもない大手柄ね」

「ご主人様、すっごーい！！」

「「イエーイ!!」」

ばしいん!!

僕と沙和、ハイタッチ

あ、ちよつと手首痛い。さすが沙和、武将。けど、ここは男の意地で我慢だ。

向こう側で、凧と真桜が『いいなあ……』って感じの視線をぶつけてきた。へへーん、いいだろ、大手柄だぞ!

「いや、『いいなあ……』の意味が違うんですが……」

「へ、凧何か言った?」

「い、いえその、何でも……沙和だけ、隊長とあんな、仲よさそうに……(ぼそっ)」

? まあ、いいか。

あと、姫路さんと愛紗とかも……似た感じの視線。

しかも、姫路さんの視線に、微妙に怖い成分が……なんで!?

さて、そうなると……だ

「よし……桂花!」

「はっ、ここに!」

「うむ、これから緊急の軍議よ。吉井明久と沙和が持ち帰った、この手紙から読み取れる情報を考慮のうえ、この戦いを終わらせるためのプラン……もとい、戦略を組み立てるわ。最早この『黄巾の乱』……我々は勝ったも同然よ!」

「御意!」

そういうこと……この情報が手に入ったことは、向こうへの連絡を潰したことも含めて、絶対的なアドバンテージだ。これでこの戦

い……すさまじく有利になった。

あとは……戦術と戦略で、敵を倒すのみ！ よおし……いけるぞ！

……その前に、

「はい沙和、取り分」

「わーい」

天幕の裏で、こっそり利益譲渡（4割）。約束は守らなくちゃね。
さて……何かしらの指令があるまで、僕は休んでますか。

S i d e 人和

その数日後、

黄巾党本陣・総大将天幕

天幕の中では……私の姉の、呆れなくなるようなあたふた声が響いていた。

「ちょ……ちよつとお！？ どういうことなの！？ か、官軍が攻めてきてるって！？」

「どうもこうも、言葉通りの意味よ。官軍の人達が、私達を討ち取るために」

「えええ！？ 何で何でえ！？ 私達何も悪いことしてないじゃない！ ただ3人で楽しく歌ってただけでしょ！？」

「あのね……」

今の会話からわかるように……姉さん達は知らない、というか

……理解していない。

私達3姉妹が、この『黄巾党』という組織の頭目として認識され……そして、朝廷から討伐命令が下っていることを。

すなわち……つかまれば命はないほどの重罪人だ、ということ。

……ちなみに姉さん達は、黄巾党を私達の『後援会』だと勘違いしていたりする。……こんな物騒な後援会、あるはずないでしょうが……

ともかく、どこから情報が漏れたのかわからないけど、官軍は私達の本陣……つまりここ……の場所を正確につかんでいて、戦力を結集させて攻めてきている。報告された進軍速度から考えると……おそらくけど、もう2刻もしないうちに、私達の軍の戦前とぶつかると思う。

……変なの。『私達の軍』だなんて……そんなもの、作った覚えもないのにね。

ただ楽しく歌を歌っていて……求心のために、ちよつとだけ工夫をして……そしたら、いつの間にかこんなことになっていた。……どこで間違っちゃったのかな……？

……考えてても、仕方ないか……このままここにいても、できることはない……

……だったら……

「……姉さんたち、落ち着いて聞いて欲しいの」

「ふえ？ どうしたの、人和ちゃん？」

「……このままここにいても、正直できることはないわ。どのみち、そろそろ潮時かな、と思ってたところだし……」

「……どういう……こと……？」

不安そうに見返してくる姉2人に……私は、きつぱりと告げた。

ちよつと残酷なようだけど……ここで決断しないと、私達に明日はないから……。

「隙を見て、逃げよう」

第19話 カラシと手紙とハイキック（後書き）

……なんか、すっごい大手柄の中に、すっごい俗物的な何かが見え隠れ……

そして、今回は沙和のターンでした。おおはしゃぎというか、憧れの隊長と一緒に楽しそうにしているとところが書いてたらいいな、思ってる所存です。

そして……ついに、黄巾党の3人娘……あの3人が登場しました。

……登場して早々に、追い詰められてますけど……。

さて、次回もなるべく早く更新したいです。

ではこれで。和尚でした。

第20話 本と説教とポケ合戦（前書き）

第20話です。

今回もバカ全回。そして3姉妹のターン！？

どうぞ。

第20話 本と説教とボケ合戦

劉備・曹操連合軍VS黄巾党 戦場

「敵前線崩壊！ 防衛線突破しました！」

「よしっ！ 皆の者、最後の一押しだ！ この大陸の和を乱した『黄巾の乱』、今こそ終焉の時！ 我らの手でこの騒乱に終止符を打つのだ！ 夏侯惇隊、突撃 っ！！」

「「「おおお っ！！」」」

「夏侯惇隊に遅れをとるな！ 関羽隊もたたみかけろお っ！！」

「「「おおお っ！！」」」

前線にいるつてのに、春蘭と関羽の声がここまで聞こえてきた。……どんな大声だ。

今の状況からもわかる通り、俺達は今……明久と沙和がゲットした手紙の情報を頼りに発見した黄巾党の本陣に、総攻撃をかけてる。実質の最終決戦だな。

それも、思いのほか相手方の混乱が大きかったらしく、抵抗らしい傾向もなく、全部撥ね退け、蹴散らせてる。ほぼワンサイドゲームだ。……まあ、戦を『ゲーム』なんて呼称するのは若干不謹慎な気がしないでもないが……

それより……この戦の本質、そこじゃねーんだよね……

華琳の望みは2つだ。

1つは、天下にその名を轟かせるための圧倒的な勝利。俺ら強い

んだぞー、すごいんだぞー、ってな感じで。これは、もう達成されたも同然だ。明久たちの手紙の情報を元に、桂花やら諸葛亮やら鳳統やらが、いくつも良策を考えてくれたからな。

……で、もう1つ……こっちがめんどくせえ。

「華琳様、第一陣、敵本陣に突入を開始しました」

「ご苦労様、秋蘭。して……例の本は？」

「は……今のところ、見つかっていない模様です」

「そう……引き続き、平行して搜索を続けて頂戴」

「御意のままに」

……と、華琳と秋蘭の会話。……まだ見つかってねーらしいな、
『太平要術の書』。

一番いいのは、燃えちまったとかで、誰の手にもわたらねーこと
なんだろうな。一市民が手にしただけでこんだけの騒乱を引き起
す書物なんざ……百害あって一利無しだ。

手にしたのが華琳だとしても……いい結果は招かねえだろう。

しかし、ほんとに燃やされでもしてねー限り……望み薄だな……。
陣営に残ってれば、華琳が見つつけちまうだろうし……無闇やたらと
人の手に渡るつても……好ましくねえ。ったく、どうしたもんか
……。

たとえば、誰かが偶然拾って、そしてそれを誰にも気づかれるこ
となく……できればその本の正体にすら気づくことなく、隠すか処
分するか……つてのが理想的なルートではあるが……そんなこと、
起こるわけねーしな……。

同時刻、戦場から遠く離れた、ある森林地帯

「はあ……はあ……ここまでくれば……」

「だ、大丈夫……よね……」

「……だと、いいけど……」

……どうにか、逃げ切ったみたい……。

私達3人とも、近くに会った木にもたれかかる。……無理もないわよね……むしろ、私たちがみたい華奢な女の子が、これだけの距離を駆け足でよく走ってこれた、って感心してもいいくらいかも……。

官軍の一斉攻撃を受けた黄巾軍は、もうもたない。私達は……ほとんど着の身着のまま、逃げ出した。持ってきたものといえば、少しの食料とお金、そして……

「あれ、地和ちゃん、それ持ってきたんだ？」

「え、ああ、まあ……この本には、色々とお世話になったし」

「……その本のおかげで、色々とおかしくなっちゃったんだけどね」

そんな複雑な思いとともに、私はため息をつき、ちい姉さんの手にある本を見つめた。

それは、私達3人の運命を、よくも悪くも変えた……禁断の書物

……

『男の心をつかめ！ 色物衣装大全集！』

……いやいやいやいや、違う。コレじゃない。

まあ、確かに舞台衣装とかでお世話になったけども、そこまでじゃ……っていうか、ちい姉さんがお世話になったと思ってる書物ってコレなの？

と、思ったら……私が考えてたその本は、天和姉さんが持ってた。

「ああ、そういえば……この本にもけっこうお世話になってたっけ」「そうそう！ 何でかわかんないけど、この本拾ってから急に人気が出るようになったのよねー……」

いや、けっこうどころじゃないから。今まで色々あったの、全部そのせいだから。

「「ええっ!?!」」

驚かないでよそこで……

まあ、確かにコレを読んで実行してたのは、ほとんど私だけ……

……この『太平要術の書』を……ね。

きっかけは、本当に偶然だった。

歌が好きで、それを聞いてもらって、喜んでくれるのが嬉しい……それだけの、ただのしがない旅芸人だった私達。まあ、別にそれ

でもよかったんだけど。楽しかったし。

だけど……あの本を拾ってから、全てが変わった。

その中には、私達が思いもしなかった、人身掌握の方法が事細かに記されていて……しかも、輪をかけて恐ろしかったのは……私達にも実行可能な方法であったこと。

試してみたい……そんな風に思い、本に書かれていることを、1つ1つ試していったからというもの……私達の生活は一変した。

「そうそう！ あれから毎日おいしいシューマイ食べれるようになったんだよね！」

「オシャレな服も買い放題だったしね！」

いや、そうじゃなくて……ていうか、姉さん達、人の回想に平然と入ってこないで。

……とにかく、その本を手にしてから、色々と変わった。

私達の歌は、各地で膨大な数の信者を集め……私達を神格視して崇めたてまつるような団体までできた。瞬く間に勢力を伸ばし、大陸全体に広まった。

……言わずもがな、今の『黄巾党』。

慕ってくれるのは嬉しかったし、労働力にもなるから、悪いと思いつつ利用させてもらってたけど……まさか……ここまでするなんて思ってたなかった。

気づけば、暴徒化した彼らは、大陸全土にその名を轟かせる賊集団……そして、便乗して盗賊行為を働く者まで出てくる始末……。

そして、そこにちい姉さんの『天下取るぞー！』という発言が、トドメをさした。

「いや、あ、あれはその……『歌で天下一になる！』って意味で……」

「思いつきり曲解されてたねえ……。『天下人になる！』って意味に……」

「まあ、あんな殺気立つてる集団にそんなこと言えば……ね……」

その結果が、今のコレ。ふう……笑えないわね……。

天下を揺るがす『黄巾の乱』が起こって……私達はその首謀者として、お尋ね者扱い……捕まれば、朝廷からの命令で死刑だし……はあ……。

「でもさ、こうして生き残れたんだし……また、3人で1からやり直せばいいよ！」

と、そんな時でも、天和姉さんは笑顔で、前向き、か……。ある意味うらやましい。

……けどまあ、そうかもね……。

いいかもしれない。こんな本に頼ったばかりに、好奇心で功を急いだばかりにこんなことになったんだから……また、1から出直してみても。

もともと旅芸人の私達だもん。元に戻っただけ、って考えればいいわけだし。

横を見れば……ちい姉さんも、そう思ってた納得してるみたい。

……いいかな、もう一回、がんばってみるのも、さ。

「じゃ、また3人でがんばろ！」

「そうそう！ ちい達3人が力を合わせれば、できないことなんて

ないんだってば！　また楽しい生活に戻るわよ！」

「……お金、ないけどね」
「「あ」「

あ、しまった、出鼻くじいちゃったみたい。でも、ホントのことだし……。

見ると、目に見えてしょぼくれている姉2人。……さっきの決意どこいったの？

「あうう……毎日のシューマイが……」
「オシャレが……飾り物が……」

しかも理由が俗物。

まあ、仕方ないでしょ。旅芸人なんて、もともとそんなもの。昔の私達だって、旅のさなかは質素節約してたんだし、ね。

すると、しぶしぶ納得しつつも、どうにも何か抑えきれないものがあるらしいちい姉さんが……唐突に天和姉さんの手から、『本』を奪いとった。

そして、

「ううう……！　服が……おしゃれが……こんな、こんな本のせいで　っ……！」

ぶん！　びゅおん……！

「「あ」「

涙目のまま、木々の向こうに……思いっきり投げた。

全くもう……気持ちはいらないでもないけど、物に当たっても

不毛……

「ぐすっ

「痛ああっ!？」

「「「……え?」「」

林の向こうから、人の声が……え?　もしかして……誰かに当たっ
ちゃった!？」

「た、大変!　謝りに行かなくちゃ!」

「え!？」　ちよ、て、天和姉さん!？」

と、慌てて木立の向こうに駆け出す天和姉さん……　ってちよっと
待って!

いや、道徳的には正しい行いだけど……　うかつに出て行かないで
!　私達お尋ね者なんだから!　顔が割れてるかどうかはわかんない
けど、捕まったら殺されるから!

と、どうしようもなく天然名姉さんを、ちい姉さんと止めようとし
た……　その時、

がささっ!!

茂みの向こうから兵士がいっぱい出てきた

じゃきん!!

全員で槍を構える。標的は私達。

「「「動くなっ!」「」

「え？」

……
何で？

え、何コレ、官軍！？ 何でいきなり！？ 何でこんなに！？
と、さらに次の瞬間…… 茂みの向こうから、今度は両手に剣を持
った1人の女の人が出てきて…… 言った。

「こらあーっ！　あなた達なのー！？　隊長に本投げてぶつけたのはーっ！？」

[illegible]

あ、当たった相手……官軍の偉い人！？
『隊長』 って誰！？
何その運の悪さ！？

どうやらこの兵士達をまとめる、患部格らしき女の人も……どうやら怒っているらしく、腰に手を当てて仁王立ち。逃げられる隙、全くなし。

あ、ダメだ……詰んだ……。

えーつとですね……現在……

戦後処理とかで、割り振られた作業やってたら……茂みの向こうから本が飛んできて、僕にぶつかって、痛くて悶絶して、そしたら、怒った沙和が兵隊引き連れて突っ込んでいって、犯人

捕まえてきた。

……で、今、僕の目の前で土下座させてる状況。

あ、ちなみに、させたのは沙和です。僕じゃないです。

「……ごめんなさいっ！」「」

「ごめんで済んだら死刑執行人はいらないの！！ もうっ、その残念な頭で何考えてるの！？ 隊長に本投げてぶつけるなんて！ しかも角の部分っ！」

「い、いや、その……ひ、人がいるとは思わなくて……」

「そ、それに、角がぶつかったのは偶然で、私達のせいじゃ……」

「何か言った！？」

「ひいっ！？」

「言い訳する暇があったら人間に生まれてきたことを後悔しやがれなの　　！！」

沙和、容赦なし。というか、こんな性格だったの？

雄二から聞いた話だと……沙和は新兵訓練で新兵になめられないため、ということでこういう『鬼軍曹』的な一面を使うようになったとか。

……いや、何それ。普通に怖い。

うーん……さすがに怒りすぎ（というかいじめすぎ）じゃなからうか。

僕のことを大切に思ってくれてるから、つてのは嬉しいけど……さすがに……。3人共、かわいい女の子だし……

1人は、ピンク色の長い髪に、大きなバスト、かわいらしい顔に……どこか保護欲をそそる雰囲気をした女の娘。なんていうか、どこことなく……姫路さんや桃香に近い。や、髪色とかスタイルとかも

そうだけど、雰囲気的にね？

2人目は、ロールのかかった水色の髪をサイドテールにまとめた子。ただし、髪はそんなに長くはなく、肩まで程度。小柄で華奢、活発な雰囲気がある。……言っちゃ悪いけど、バストは……控えめかな？

そして3人目は……薄い藤色のセミショートの髪に、メガネをかけている女の子。落着いたような雰囲気で……3人のうちで一番冷静と言うか、知的かも。沙和のお説教（おいう名の罵倒）にも結構平然と耐えてるし。……意外と、スタイルは出るところ出てる。

そして何より印象的なのは……その3人の服装だ。露出度が高くて、なんていうか……舞台衣装みたいなのを着てるところだ。もしかして、旅芸人が何かかな？

まあともかく、いつまでも土下座させてるのも気分が悪いので、僕は沙和をなだめてから、彼女達に楽にしてくれるように言った。

「えっと、聞いた話だと……君達は、イライラして本を投げたら、僕に当たったと？」

「はい……わざとじゃないんです……」

しゅんとしてる、実行犯らしい水色の髪の娘。うん、ちゃんと反省はしてくれてると見た。それなら……いいかな。

「うん、じゃあお咎めなし。帰っていいよ？」

「……え！？」

3人が3人共びつくりしたような表情になる中、僕の隣に立って

いる沙和は、

「えー！？　たいちよー、この娘達許しちゃうのー？」

「ん？　ああ……だってさあ、別段、怪我とか僕してないし……反省もしてくれてるみたいだから。今僕ら忙しいし、そんなに気にかけるなくてもいいんじゃない？」

「あう……まあ、隊長がそう言うなら、沙和はそれでいいの」

「そっか、ありがと。じゃあ、沙和は先に行つて。僕はこの片片付けてから行くよ」

「はいなの！」

と、どうにか納得してくれた沙和が天幕から出て行くと、入れ代わりで、

「あ、雄二さん、土屋さん、お疲れなの！」

「ん？　ああ、沙和、お疲れさん」

「……………お疲れ」

雄二とムツツリー二が入ってきた。

えっと、こ、これはもしかして……私達、助かりそう……？

ちい姉さんが投げた本が、偶然とはいえ官軍の人に当たった時は、もうダメかと思ったけど……どうやら、当たった人が結構いい人だったみたい。

優しそうだし……しかも、正体、ばれてないみたいだし……。

ひょっとしたら、始末書とか書けば、このまま逃がしてもらえるかも……なんて思ってたら、新しく男の人が2人入ってきた。

……なんていうか、少し怖そうな人と、暗そうな人……かも……？

ちなみに青い髪の方の人は、私達を見た瞬間、鼻の頭が赤くなつたような気がしたんだけど……気のせい？

「……………明久、この3人は？」

「ああ、この娘達は、かくかくしかじかで……………」

「ああ、そういうことか。そりゃGJ、表彰モンだな」

「どういう意味だコラ」

「しかし、災難だったな？ 見たところ旅芸人か何かみてーだが……」

……………」

「……………こんな戦場に迷い込むなんて、運が悪い」

「は、はあ……………どうもです……………」

「無視！？ ねえ無視！？」

その戦場から逃げてきたんです、とは言えないので、適当に相槌。無視されてる茶髪の人（『隊長』さん？）には悪いけど、私達も無視で。

「まあ、反省もしてくれてるみたいだし、お咎めなしで釈放かな、と」

「そうか、まあ、妥当かもな。正直、俺らも忙しいし」

「……………かわいいし」

「やだなあ、何言ってるんだいムツツリーニ、それじゃまるで僕が彼女達がかわいい女の子だからという理由でお咎めなしにしようとしてるみたいじゃないか」

「ちなみにお前、むさ苦しい野郎が犯人だったらどうしてたんだ？」

「ジャーマンスープレックス」

「思いつきりじゃねーかよ」

……よくわからないけど、九死に一生を得たような？

と、その時……赤い髪の人目が、ふと……『本』に行った。

「……！？……明久……その本は？」

「ああ、これがぶつかってきたんだよ」

そう言つて、明久、と呼ばれたその人は、ぱらぱらと本をめくる。

「何書いてあるのかさっぱりわかんないけどね、達筆すぎ」

「明久、逆だ。上下逆」

「え、あ、ホント！？　うわ、どうりで読めないはずだよ……」

「……逆にしたら、読める？」

「無理」

何、今のやり取り。

……が、赤い髪の方は……その本の表紙を凝視してて……っ！？
もしかして……

「ところで明久、こいつらの名前は？　聞いといた方がいいんじゃないか？」

「ああ、そういえばそうだね。ねえ君たち、一応、名前聞いてもいい？」

と、茶髪の『明久』さんが……って、コレ真名かも、呼ばないほうがいいわね。

あー……さすがに本名はまずい。何せお尋ね者だし……即興になるけど、偽名を……

と、思ったら、

「あ、はい、私、張角つていいいます」

我らが長女がとんでもないことを言つてのけた。

（姉さあああ　　ん!!?）

ちよつ……何バカ正直に本名言っちゃってるのよ!?　状況立場
罪状相手何もかも忘れちゃったのこの人は!?

驚愕と絶望の入り混じった視線を送るも、天和姉さん、気づかず。
殴りたい。

お、終わったわ……これではれないわけがない、完全に気づかれ

……

「へー、張角ちゃんていうんだ?　いい名前だね」

……てない?

え?　これだけそのまんま言つたのに?

「あれ、でもその名前どこかで聞いたような……あ!　黄巾の頭目

……」

……っ!　や、やっぱり……こ、今度こそばれた……!　もう、
ダメ……

「……と同名同名なんだね、うわあ、すごい偶然」

（まだ気づかない!!?）

逆にびっくりした。ちょ……人ってこんなにも鈍感になれるものなの！？

すると、天和姉さんがきよとした顔で……って、余計なこと言わないでよ！？

「？　どうかしたんですか？」

「え、ああ……君達の名前が、このあたりに逃げてるらしい悪い人と一緒だったもんだから、ちょっとびっくりしてさ」

「ごめんなさい、本人です。あなたの目の前でポケッとしてるその人が張角です。」

はあ……でも、これは不幸中の幸いかも……天和姉さんも、上手くとぼけてくれてるみたいだし、このまま……

「え、そうなんですかあ！？　うわあ、びっくり、怖あい……」

……あれ？　この声の調子は、もしかして……

「ちょ、姉さんも気づいてない！？　素で！？　話題の人、自分とは別人だと思ってる！？」

ああ、そういえば姉さん、自分達の立場（大組織の頭目）、未だに理解してなかったつけなあ……なんて、今更思い出したり。

……それにしたって、

「あ、それと、この2人は私の妹で……張宝ちゃんと張梁ちゃんっていいいます」

「ちょっ！？　姉さん……それは……」

「え！？　そうなんだ！？　連れ2人の名前まで同じなんだね！？　すごい偶然！」

（この人バカ！！？）

「え、そうなんですか！？　うわ、不思議ー、すごい偶然！」

（こつちもバカ！！？）

「でもホントに偶然だよな」

「そうだねー、なんかちょっと親近感あるなあ、会ってみたいかも」

（本人！　本人！）

「そういう慣習のある地域で生まれたのかな？　君達も、そいつらも」

「どうかなー……私達の生まれ故郷に、そんな風習なかったけど……」

「まあ、案外あるのかもよ？　『いちひめにたろう一姫二太郎』とか『いちふじにたかさん一富士二鷹三茄子』とか言うくらいだしさ」

（（使い方違う！））

「へー、そうなんだー？　意味わかんないけど」

「そっかー、あはははは、僕もわかんないけど」

「あはははは」

な、何、このポケ合戦……！？　聞いてる方が疲れる……。この人、一体何……！？

ていうか、天和姉さん、いつの間にかタメ口……相手、官軍の人なのに。

その後しばらくポケ合戦が続き……結局、私達の招待は（信じられないことに）全くばれることがなかった。しかも、私達は釈放どころか、『戦いに巻き込まれた旅人』として保護され、衣食住まで保障され、近くの安全な村まで送ってもらえることになった。

……これ、奇跡……？　人生、何が起こるかわからないわね……。まあ、一応は安心できる……と思う。

……ただ、

隣にいた、赤い髪の男の人が……すごく鋭くて、何もかも見通し、とても言いたそうな視線を向けてきてたのが……ちよつと気になって、怖かったけど……。

もしかして……気づかれてたり……しないわよね……？

気づかねーわけねーだろ、あれで。普通は。

明久から『コレもらっていいか？』『いいよ？』という簡潔な会話で譲り受けた、明久の後頭部を直撃したというこの『本』を見ながら、俺はため息をついた。

やれやれ、明久のバカは……またんでもねえことしてくれたな。まあ、いつものバカっぷりや、あのピンク髪の娘のバカっぷりは、この際置いといて……

まさか、マジで華琳に気づかれずに手に入るとは……『太平要術の書』。

んでもって、あの3人が……張角、張宝、張梁、か……。

まあ、あの様子だと、再起なんかは考えてねえみてーだから、放つとしても害はなさそうだし……もとの旅芸人にでも戻って、それなりに楽しい暮らしをしてもらえばいいだろう。明久の奴にも、後

でそれとなく打診しとくか。

華琳の奴には隠しとこう……『利用する』なんて言い出したら面倒だ。

こっそり自陣に持ち帰り……一応、本を全ページ、ムツツリー二から借りたデジカメで画像データに残し、SDカードにそれを保存する。内容の保管はこれで十分だ。これで……俺達『現代人』にしか、しかもムツツリー二の許可なしでは、閲覧は不可能。

これなら……必要に応じて、民政への応用目的でのみ知識を生かせる。武人だの軍師だののよくわからん考えに流用されるような、面倒なこともない。

そして……俺は『本』を、焚き火の中に投げ込んだ。

証拠隠滅には、火は便利だ。紙製品の、それも相当に古いその本は……たちまち燃えて、その姿を灰に変えていく。さらに火箸でぐしゃぐしゃにして……よし、処分完了。

原型をとどめず『本』が燃え尽きたのを見届けた後、俺は天幕に戻った。

第20話 本と説教とボケ合戦（後書き）

さて……今回、張三姉妹の出番が……多かったけど、しばらくお別れと言う結果に……

すいません、またなるべく早く再登場させたいです。

そして、この物語では……曹操に捕まらないのでした。
果たして今後、どこへ行くのか……よく考えて物語を組み立てたい
と思います。

次回、『黄巾の乱』編、最終回となります。

ではこのへんで。和尚でした。

第21話 バカと宴としばしの別れ（前書き）

今で『黄巾の乱』編は終幕となります。

第21話、どうぞ。

第21話 バカと宴としばしの別れ

「ねえご主人様、最近私、出番少くない？」

「え？ いきなり何言い出すの、桃香？」

「んー……なんか言わなきゃいけない気がして」

何だそれ？

さて、ともかく……黄巾の乱は、僕ら曹操・劉備連合軍の大勝利で幕を閉じたわけです。

その後、戦利品として色々と物資をかつぱったり、戦後処理をしたりで数日が過ぎて……そんなある日のこと。

僕らは、曹操達が主催してくれた戦勝祝いの宴にやってきた。

戦後処理も大体ひと段落ついたから、ってことで、区切りの意味でお祝いやるらしい。しかも曹操のおごりだ、こりゃありがたい。僕らも二つ返事で参加をOKした。

そこで、星が浴びるほど酒を飲んだり（しかも全然酔わない）、白蓮が『目立てなかった……』とかつてさめざめと泣いてたり、色々あったけど……割愛。

あ、ちなみに今の『星』と『白蓮』っていうの、趙雲と公孫賛の真名。呼んでいいって言われた。なんか、心を許してくれたようで嬉しいな。

まあ、それよりも……宴の席で、曹操によって告げられた重大発表の方が、僕は、いや多分全員がびっくりしたんだけど……

それは、宴もたけなわ…… ってほどじゃないけど、ギリギリ全員が酔わずに正気を保ってたあたりの時の出来事。

「わ……私が……県令!？」

「そう。先日来た朝廷からの使者にね、伝えてくれるように言われたのよ。劉備、今回の戦でのあなた達の功績をたたえて、よかつたら新しい県令にならないか、ってね」

曹操の話聞いた桃香は、口をパクパクさせていたが、すぐに

「や、やります！ やらせてくだしゃい！」

朱里でもないのに「ヒドいでしゅ!？」カミカミで返事をしていた。何ていうか、興奮してて…… すごく嬉しそうに見えるんだけど……？

ていうか、それ以前に……

「ねえ朱里、雛里、『県令』って何？」

「あ、ええとですね…… 地方ごとにいくつかある『県』を統治する役職で…… 平たく言えば、比較的大きな町や村の長、とでも言うべき存在でしょうか」

「住民の指示を受け、なおかつ朝廷の認可のもとに任命される役職ですね」

と、朱里&雛里。へー…… なんかすごそうだね。

それが、曹操が言う『朝廷』から、桃香に直々にお誘いが来たってことは……

「そうですね、桃香様の、そしてご主人様の働きが、ようやくもって正當に評価された…… と見ていいでしょう」

と、後ろから、満足げな愛紗の声。その目は、嬉々として曹操から話を聞いている桃香に向けられている。……嬉しいんだろうな、今までの頑張りが認められたんだから。

ちなみに鈴々は、まだ食べてるらしい。……まあ、そつとしくか。

愛紗や鈴々を含め、桃香達の目的は……この戦乱の世を終わらせ、平和な世界を作ること。そのためには、当然色々な『力』が必要になる。今までの戦いは……人々を助ける目的以外にも、その力を得るためのものでもあったわけだし。

財力、兵力はもちろん……名声や評判、そして、今回みたいに……手柄を立てることで得られる、ちよつと聞こえは悪いけど『権力』。力を強めて、いろんなものを思い通りにするためには……必要だ。

そして、今日が……その第一歩になったわけだ。

真正正銘、朝廷からの許可をもらって、桃香が『偉い人』の位置につく。『県令』っての、朱里の話だと……白蓮よりはまだ下の地位らしいんだけど、そんなことはいいだろう。これから何とでもなる。

うんうん、これでこの先、色々ただいぶやりやすくなるだろう。

すると、話が終わったらしい桃香がとてと駆けてきて、

「ご主人様あー！ 愛紗ちゃん、朱里ちゃん、雛里ちゃん！ 聞いた聞いた？ 私県令だってー！ やったやったー！」

……要人、っていう雰囲気欠片もない喜び方を披露してくれた。あー……まあ……親近感あっていいんじゃないかな、こういう県令様も。

それに、これは桃香の元々のスタンスだし……いいよね。僕らも、桃香のこういう、飾らないところが好きで集まってるんだし……

「鈴々ちゃーん！ 聞いた聞いたー？ 私今度から県令さんでーす！」

「にゃ？ 『けんれー』って？ おいしーのかー？」

「白蓮ちゃーん、星ちゃーん……ってあれ、いないや」

でもそろそろテンション元に戻そうか？

後ろの方で曹操がさりげなく呆れてるから。

っていつか桃香、放つといたら踊り出しそうだ。今にも。

とまあ、桃香を落ち着けつつ（10分くらいかった）、新しく運ばれてきた料理を口に運ぶ。こんな上質のカロリー、そうそう取れるもんじゃない。食べられる時に思いっきり食べとかないと！

「栄養素で食事を判断すんな。悲しい奴だな」

「……………もとの世界から変わってない」

「あ、明久君、お食事ならいっぱいありますから……………」

うるさいな、どうせ僕の気持ちは君達にはわからないよ。

ゲームという名の人生の必需品を手に入れるために削られていく食費を嘆き、塩と砂糖と水で月末を耐えしのいでいた僕の気持ちな
んか……………

「100%自業自得だろうが」

「……………むしろ見上げた根性（？）」

うるさい。

まあ最近、姉さんがいる影響で、比較的まともな食事を食べて

るけど……。

そんな僕の隣で、雄二は雑談しながら、鈴々よりは少なくとも、結構な量の食事を胃袋におさめていく。毎回思っただけど、こいつの胃はどうなってるんだろ？

と、その時……

「もぐもぐ……あれ？ これって……」

「どうかしましたか、明久君？」

「ああ、えっと……曹操さん？ これってもしかして……流琉が作ったんじゃない？」

「！ あら……よくわかったわね、あなた」

あ、やっぱりか。

どういうことか、と視線が集まるけど……そのまんまの意味だ。

僕は以前、流琉や季衣、あと、ここにはいないけど風と一緒に、同じ小屋で暮らしてた時期がある。その時、僕と流琉が協力してご飯作ったり、僕が流琉に洋風料理の味付けなんかを教えてたりした。そして、今僕が食べた料理は……その味付けだ。そりゃわかるよ。だって、僕が流琉に教えた味で……この時代にはないはずのものだもん。

そのことを話すと、曹操達はびっくりしてたけど。

「そう……まさか、あなたが流琉に料理を指南していたなんてね……」

「いやいや、そんなたいそうなもんじゃなくて。流琉はもともとすごく料理上手かったし、そこにちよつと変わった視点からの知識を教えてあげただけだよ」

だから、その応用でここまでいい味を出しているのは、紛れもなく流琉の腕だ。

「謙遜はいいわよ。私も気になっていたの、流琉のあの、一部の料理に見られる、独創的な味付けの方法にはね……。まさかあなたがもたらした、天の国の調理法だったなんて思わなかったけど。おかげで美味しい料理が食べられるんだもの、礼を言っわ」

なんか感謝されちゃったよ。流琉、曹操のところでも料理作ってるんだ。

まあ、流琉は基本、料理するの好きだし、大人数相手の調理もできてたしね。ある意味、適材適所……。ってやつなのかな？

というか、ここで流琉の料理が出てきてるってことは……

「曹操さん、今、流琉は厨房に？」

「ええ、うちの季衣と雄二、春蘭、それに、あなたのところのおちびちゃんがよく食べるものだから、料理が足りなくなる前に……。って、行ってくれたのよ。邪魔しなければ、のぞいてきてもいいけれど？」

「邪魔っていうか……。手伝おうかな、せっかくだし」

僕もう結構食べたし……。向こうでも、まかないとかあるかもだし。

「あれ、ご主人様が料理するの？ やったやったー！」

「ん？ 桃香、吉井って料理できるのか？」

「うん！ すっごく美味しいんだよ、ご主人様の料理！」

「ほう……。それは興味深い、ぜひとも酒の肴も作っていただきたいものだな……」

と、何か桃香と白蓮と星のいるほうからプレッシャー。うーん……そんなに期待してもらってもなあ……僕にできる範囲の料理しか作れないし……。

「そのでできる範囲を期待してもらえてんだからいいだろ。さっさといつてこい。そして俺に何か洋食なり和食なり食わせる（がつがつ）」

「えー、雄二も手伝ってよー。できればムツツリー二も」
「……………今忙しい」

ほほう、杏仁豆腐を食べるのが忙しいとぬかすか貴様。
というか雄二、両手に肉まん持って何だその態度。命令するな。

「ふあんへもいひはらふふるあらはあくふふつへおい！」
「『何でもいいから作るなら速く作って来い』と、言っている」

夏侯惇の異世界言語を夏侯淵が翻訳してくれた。よくわかったな。
てか夏侯惇、ほおばりすぎ。ほっぺたの膨れ具合がマンガみたい
になってる。

そしてその横で『姉者はかわいいなあ…………』となぜか酔っている
夏侯淵。…………そういう人なのかな？

っていうか、雄二もムツツリー二も、ホント手伝ってよ。季衣と
鈴々、それに夏侯惇がいるから、消費スピードが結構なもんだし……
…それに洋食の下ごしらえは現代人組しかできないんだから。僕1
人じゃ大変だつて。

しかし、依然として雄二もムツツリー二も、面倒くさがって動い
てくれる気配はなく…………

「あの、明久くん、なら、よかつたら私が手伝いま……」

「行くぞ雄二ッ！！ ムツツリーニッ！！」

「Yes sir！！」

バリバリの気合ではきはきと動いてくれた。うん、それでいい、それが正しい。

でなければ……この楽しい宴が阿鼻叫喚の地獄絵図に変わる。ダメだそんなこと！ 必殺料理人の姫路さんだけは動かしてはならない！！

それを知っているからこそその雄二たちの一瞬の変わり身。現金だとは思うけれど、攻める気は毛頭ない。だってそれが正しいから！！

「え……？ で、でも、皆さん料理を食べるのに忙しいみたいです、私が……」

「いいや姫路さん、ここは任せてもらおう！」

「そうだ姫路！ 女性陣はここで友好を深めながら楽しみに待っていてくれ！」

「……ここからは男の料理……！」

「は、はあ……」

姫路さんが小さくでも頷いたことを確認した後、僕と雄二、そしてムツツリー二は、一迅の風となって宴会場を後にした。急げ急げ！ 姫路さんに……彼女に台所に立ち入らせる隙を作るな！

「「「うおおおおお つ！！」「」」

「……何だったの、今は……？」

「はあ……何やら、戦場にも行くかのような勢いで飛び出してきましたが……まあ、行き先は厨房のようですし、やることは料理で間違いないのではないかと」

「しかし秋蘭……今の気迫は単なる料理に向けられるものか？」

「……やっぱり男などというものはわけがわからないし、野蛮ですね、華琳様」

この後、鬼気迫る勢いで厨房に乱入した僕達は、そこで酢豚を作っていた流琉を盛大にビビらせつつも、それぞれの職務を全うし、みんなの胃袋を空腹と劇物から守りきったのでした。

が、がんばったぞ……僕ら……。

ちなみに、その段階で流琉にも色々手伝わってもらったのと、そのついでに色々教えたので、流琉の調理師スキルがまた上がりました。また今度会う時には、流琉の応用メニュー……洋風中華を食べられるかもしれない。今から楽しみだ。

そして、まだ飲み足りない連中を残して宴会がお開きになった後、僕ら厨房組も、料理の残りに一手間加えて作ったまかないを食べ、

さらにその残りは保存食用に加工して4人（流琉含む）で分配した後、解散した。

そして翌日、

「それじゃあ劉備、ここでお別れね」

「はい、曹操さんもお元気で」

黄巾党の討伐、という役目を終えた『劉備・曹操連合軍』は、必然的に解散の時を向かえた。劉備軍と曹操軍にその名を戻し、各自の帰るべき場所へ……桃香の場合は、新たに拝領された『自分の』領地へともどることになる。

ちなみに、最後まで『公孫贇』の公の字もその名前に入れられることはなかった。……一応僕ら、白蓮の客将だったんだけど……完全に影薄れてたな……。

そして、自分達の領地をもらった僕らは……必然的に、白蓮のところから独立することになった。

これからは、僕らは自分達の城で、自分達の領地で、その民を守って暮らしていく……っていう感じになるからなあ。今までお世話になりました、とでも言うべきか。

そして、

雄二だけど……残念ながら、曹操のところに残るらしい。

こっちに合流してくれると思ってたんだけど、うーん……雄二も、この乱世で助けてもらった恩はある、ってことか……身をおくのは、まだそのつもりらしい。

僕がそのことについて聞いて、雄二が『離れない』、って言った時……曹操と夏侯惇は『当然』とでも言いたげな顔で……逆に、荀？ちゃんは露骨に『ちっ！』って顔してたけど。

……まあでも、こいつなら……何だかんだで上手くやっていくだ

ろう。

できれば、またなるべく早いうちに和えたらいいな。

すると、別れの挨拶も済んだかと思つたその時、

「……時に劉備、あなたがこの乱世に目指すものは……人々が話し合いで物事を解決できる、易しい世界だったわね？」

「え？ あ、はい！ それが私達の目標なんです！」
「そう……」

すると、曹操はうつすらと笑つて……

「……私はね、違ふの。この天下を、己が力を持つて統一し、全てを統べる者となる……それが、私の掲げる霸道よ」

「えっ……？」

「あなたの掲げるそれとは……相容れないものに聞こえるかもしれないわね」

……えっ、と……？ 何コレ？

なんか、やんわりとだけど……もしかして……ケンカ売ってる？
真っ向から、『あんたの目指すものは私とは違ふ』&『私が天下とるから』ってなこと言ってるし……。

見ると、姫路さんも、愛紗たちも困惑してる。

ちよつと対応に困るので、雄二にアイコンタクト。おい雄二ー？
おたくの大将さん何言ってるのー？

（ああ、まあ……華琳の決意表明みたいなもんだ、気にすんな）

（ええー……なんか、聞き捨てならないことばつか言われてるんですけど……）

（今気にしても仕方ねえ、ってことだ）

「同じように天下を目指すなら……いつか、あなたとは戦うことになるかもしれないわね……その時は……」

「は、はい！ その時はよろしくその……お手柔らかに！」

いうこと間違ってるよ、桃香。

まあ……こんな場面での応対、桃香は慣れてないんだから、無理ないか。無難な返答だっただけいいでしょう。

ここで愛紗が出てきたら、100%ケンカ腰になるからなあ……。

（はあ……なんか、この先面倒なことになりそうだな……）

（ま、なるようになるだろ……それより明久、お前の方こそ……注意しとけよ？）

（は？）

と、アイコンタクトで語りかけてくる雄二。……？ どういうこと？

注意って……曹操がいつか攻めてくるかも知れないから？

（それもまあ、ないとは言えねーが……それよりも、劉備の今後だ。劉備の掲げる、平和だの話し合いだのっていう『夢』……危ういぞ、結構）

（？ 危うい……って、何？）

（すぐにわかる。まあ……俺も曹操軍で、面倒なことにならねーように色々がんばってみっから……また会うことがあったら、よろしく頼むわ）

（ん……よくわかんないけど、了解。僕も、最善を尽くしてみるよ）

どうやら雄二は、『三国志』的に見たこの世界の今後を懸念して

いるらしい。

すなわち……近い将来、桃香と曹操が、それに他の権力者達が戦ったりする……っていう未来の展開が心配、ってことか……それは確かに。

それに備えて、僕ら『現代組』はできる限りのことをやろう……
ってわけだ。うんうん、なるほど。

……あるのかな、そんなこと？

それに、雄二が言ってた、『桃香の『夢』は危ういものだ』って、
一体……？

「あう……もう隊長とお別れなの……短い間だったの……」

「沙和はまだええやろ、行軍中ずっと一緒やったんやから。ウチらなんて最後の戦後処理と宴会だけで」

「そ、そうだつ！ む、むしろ沙和は恵まれてて……その……」

ああ、今はそれより……一応、曹操陣営の知り合いたちに別れを
告げようかな。

まあ、またいつか会えると思うし、そんな深刻になることもない
よね。

すると真桜が、

「なー隊長ー、この際やからうちの大將のところに来えへん？ う
ちらから口利いたつてもええで？」

「沙和もそうして欲しいの！ それならみんな一緒なの！ もちろん
桃香様とかも一緒に！」

「あー……気持ちはいがたいけど……」

一応僕、桃香と一緒にいく、って決めてるからさ。
そう説得したら、しぶしぶながら納得してくれた。……まあ、本
気で僕のことと思ってくれてるってのはわかるから……嬉しいかな。

さて、三羽鳥は挨拶済んだとして……次は季衣と流琉……ん？

「あれ、流琉、季衣は？」

「あ、実は、その……」

「……？」

「………寝坊で……」

またかい。あの子は仕官しても寝坊癖は変わってないのか。それ
に昨日は、けっこう遅くまで騒いでたし、星に酒とか（ムリヤリ）
飲まされたりしてたからなあ……。

ちなみに流琉の話だと、出発時刻までに目覚めない場合、荷物と
一緒に馬の背にくくりつけられていくんだとか。あわれ。

「ま……まあ……よろしく言っというて」

「は、はい……あ、兄さま！ 今度会ったら、その……私が考えた、
おいしいお料理ご馳走しますね！ その時は、また新しい料理も教
えてほしいです！」

「ははは、そうだね、楽しみに待ってるよ」

無邪気に嬉しそうにする流琉の頭をなでると、照れくさそうに笑
って、ちよつとだけ気持ちよさそうにする。うん、かわいいなあ。
いい妹分をもったよ、僕は。

そして、

「それじゃあ、お元気で！」

「ええ、縁があつたらまた会いましょうね」

そんな挨拶を交わしたのを最後に、両軍はわかれ……それぞれの帰るべき場所へ向けて歩みを進めていく。世の中の情勢を見れば、歴史どおりに考えれば、これからさらに激しくなるであろう、戦乱の世に備えるために……

こうして……僕らの『黄巾の乱』は終わりを告げた。

さーて……これからまた忙しくなるな……がんばらなきゃ。

「じゃあ皆！ 桃香も晴れて『偉い人』の仲間入りしたことだし……これから力を合わせて、はりきって行こ っ！！」
「「「おお っ！！」」」

……行く先々、これからいろんな困難が待ち構えてるんだろうけど……

ま、何とかなるでしょ。

第21話 バカと宴としばしの別れ（後書き）

というわけで、桃香昇格。

んでもって、雄二はそのまま曹操軍に残留……という結果に相成りました。

この後どう転んでいくのやら……がんばって考えます。

しかし、前作に比べて展開遅いなあ……。

さて、次回から日常編かもです。多分。

まだあの実習のまとめ作業やら何やらが尾を引いて、更新ペースが安定しないんですが……なるべく早く元に戻したいなあ、とは思ってます。

ではこのへんで。和尚でした。

第22話 勉強とラーメンと政治の重み（前書き）

な、難産でした……日常変がこんなに難しいなんて……。

やっぱりブランクはごまかせませんね……すごく間開いてしまっ
てごめんなさい。

では、どうぞ。今日の主役はこの人。

第22話 勉強とラーメンと政治の重み

雄二たち、曹操軍とわかれてから……数週間が経った。

今現在、僕ら『劉備軍』は、以前までの流浪の旅人的な感じがほとんど感じられないくらいのものになっている。あらゆる意味で、前までとは違う。

まず、拠点ができた。朝廷から、なんとかつていう役職に任命されたおかげで、その役職で使う用のお屋敷を丸々1つもらったのだ。気前いいなあ。

そしてちなみに、僕と沙和は……例の『連絡員』を逮捕して黄巾党壊滅に大きく貢献した褒美として、領地とかとは別に色々褒美をもらったりした。曹操からも、朝廷からも。

おかげで、結構懐が潤ってる状態です。沙和もそのはずだ……服や化粧品にすぐ消えそうだけど。

次に、兵力とか文官とか、その辺の規模もすごく大きくなった。今の時点で……全部で2万人くらいいるかも。最初4人だけだったのが、今じゃ立派に権力者の仲間入り。すごいねホント。

まあ、そのせいで……今では、桃香も愛紗も、そして僕や姫路さん、ムツツリー二も……役人としての仕事を手伝う羽目になっちゃって、忙しいんだけど……。

しかも、僕とムツツリー二は漢文がろくに読めないから、足引っ張ってばっか。現在、朱里や雛里、姫路さんに教えてもらいつつ、やってる状態です。

うう……学校で古文ちゃんと勉強しとけばよかった……。

そしてそんな中でもきっちり運営ができてるのは……ひとえに朱里と雛里のおかげだろう。あの小ささで、仕事能力は桃香の倍以上ってんだから、すごすぎだよね……。

そして、それにもなって、僕らは公孫贇さんのところから独立。短い間だったけど、お世話になりました……と、丁寧に挨拶を済ませて、

ついでに志願者つのもって兵士ちよろまかして引っ張ってきて、ついでについでに町でも募集かけていい人材引っ張って行って、僕らは公孫贇さんの下を後にした。

……何、所々せこい部分が混じってるって？ 世の中ってね、常に戦争なんだよ。

とまあ、そんな感じで……僕らが『自分の領地』になった町で暮らし始めてしばらくした、ある日のこと。

時刻は、12時をちょっと回ったくらいの時間帯。

「はあ……疲れた疲れた……」
「たたく、仕事多いよなー、どう考えても……」

そんなセリフをつぶやきながら、僕は庭を歩いていた。
今現在、自分に割り当てられた分の政務のうち、午前にノルマが

ある分を終わらせて、今は昼休みの休憩時間。

……でも、特にやることも無いので、屋敷の中を散策してるところだ。

この、朝廷から拝領された『県令』の屋敷……やっぱり広い。気を抜くと、今でも迷いそうだもん。総面積にして、元の世界の文月学園くらい広いんだもん……。

こりゃ慣れるまでは、地図の携帯は必須だな……。

と、そんなただっ広い庭の一角に、見覚えのある後姿を見つけた。あれは……

「はにゃ〜……こんなのわかんないよお……」

とまあ、我らが県令様でした。

おー、だらけてるだらけてる。

庭先に設けられている茶席（屋根付き）に座って、

しかし、何してるんだろ、あれ……？

手元に何か、本みたいなのを広げて……筆を持って何か書いてるから、仕事かな？ でもそれなら、政務室でやるだろうし……

……ちよつと気になったのと、ちよつどいい暇つぶしの気配がしたので、僕は声を駆けてみることにした。

すると、ちょうど桃香の真後ろに來た所で……太陽との位置関係で、桃香がのぞき込んでいる本の上に、僕の影が差した。

必然、桃香はそれに、誰かが後ろから近づいてきたことに気付き

……

「え？ 誰、って……あ、ご主人さ……まっ！？」

「あがぁっ！？」

ごっんっ！！

……振り向き、勢いよく立ち上がった結果として、僕と桃香の額がぶつかった。

何度か聞いたことのある鈍い音を立てて、桃香は机に、僕はそのまま地面に倒れこむ。しかも僕は、その際に後頭部を地面に打ちつけるおまけ付き。

うう……前後から頭が痛い……。っていつか、またこうなった……。

「い、痛たた……び、びつくりさせないでよ、ご主人様……」

「ご、ごめん……けど、何もいきなり立ち上がることはないでしょ……？」

これで通産4回目。なんかもう、僕と桃香の恒例行事みたくなってるし……。

なんてことを考えてる僕の目の前で、桃香は散らかった机の上を整理。

桃香は随分と派手に机に突っ込んでたけど、そのせいで墨がこぼれたりしなかったとは、不幸中の幸いと言えるだろう。

それにしても、これ、何してたんだろ？

「ああ、これ？ 勉強してたの」

「勉強？」

「うん！ 『君主たるもの、学は必要です』 って愛紗ちゃんが言ってたし…… 実際、私も一応は統治者なんだから、相応の学力は身につけたいの。いつまでも、朱里ちゃんと雛里ちゃんに頼ってばかりじゃだめだし」

と、桃香。なるほど、それは言ってる。

実際、今のこの屋敷で、政務を担当してるのは…… 主に、朱里と雛里。お手伝いレベルで、桃香と愛紗、姫路さん。おまけで僕とムツリーニ、ってとこだ。

朱里と雛里は、有名な塾に通っていただけあって、そういう仕事の処理能力が別次元だった。なんかもう、年齢とかそういうの考えると、情けなくなるくらいに。

当然ながら、僕ら『色々足りない組』の分の負担が、彼女達に多少なりいっちゃってるわけで…… はあ、心苦しい。

それを考えると、桃香の言い分はもつともだろう。僕でも、どうにかして朱里達に頼りっぱなし名現状は何とかしたいと思える。だからこそ、文句言いつつも、漢字の勉強は続けてるわけだ。

すると、桃香は何かに気づいたように、

「あ、そうだご主人様。ご主人様って…… 勉強できる？ 教えてくれない？」

「え、えっ！！？」

「うえ！？ な、何そんなに驚いてるのっ！？」

吉井明久17歳、生まれて初めて『勉強できる？』なんて期待こめて言われた！ 今までは無条件で『バカ』の烙印押されてたのに！ 未曾有の事態に、反応が変になってしまったらしい僕を、桃香はびつくりして見返してきていた。うう……ありがとう桃香……僕、生まれて初めて学業面で誰かに頼られた……

……けど、残念ながら返事は、

「……………ごめん、あんまりできない」

「あ、そうなんだ……………」

……純粹な桃香に、嘘はつけない。うん。

期待してくれたのは泣くほど嬉しいけど、僕、学年最低成績だし…… 国政だの何だのなんて、そんな別次元の分野に関する知識、無いよ……………」

「弱ったなあ……………私、ほかに始動頼める人、いないのに……………」

「朱里と雛里に頼めば？」

あの2人なら……………まあ、ちょっと悪い気がするけど、スケジュールの合間縫っておしえてくれそうだけど。それも丁寧に。

「……実はこの参考書、朱里ちゃんと雛里ちゃんにもらったやつで……………」『これがあれば、桃香様お1人で自習なさる分にも事足りると思います！』……………って言われて……………」

「……………あ、そうなんだ……………」

……………忙しい自分達が桃香に教えられない分の穴埋めとして、彼女

達が直々に用意した参考書だったらしい。結果的に『できませんでした』じゃ、かつこ悪すぎるか……。

そうになると、2人に聞くわけにはいかないよね……

でも、桃香って確か、それなりに有名な塾に行つてて、そしてけっこう優秀な成績だったんだよね？ 白蓮もそう言つてたし。

そんな桃香に、しかも政治なんていう専門分野で教えられる人なんて、そうそういないんじゃないか……

「あ、大丈夫だよ！ 今勉強してるの、もともと塾で習つたのに、全然勉強してなくて忘れちゃった部分の復習だから！」

別の意味で大丈夫じゃない事実が判明。 いや、そうだったの？

何か今ので、桃香の『勤勉さ尊敬ゲージ』がガクツと落ちた気が……
ていうかむしろ、その勉強が必然性を帯びて見える。

でもまあ、だからって僕に教えられるような内容じゃないだろうし……

「えーっと……ラーメンの材料は……」

それ政治！？ ねえそれ政治！？ 家庭科じゃない！？

何だろう、この時代の勉強とかそういうものって、僕らの世界とは概念からことなるのか！？ 桃香って塾で何勉強してたの（本来の意味で）！？

「んーと、ラーメンが……小麦？ 畑！？ うええ、でも、ラーメン屋さんがお客さんと……お客さんで？ え！？ でも、ラーメン屋さんの……」

「あ、あのさ桃香……それ、何を勉強してるの？」

と、恐る恐る聞きつつ、桃香の手元の本を覗き込むと……ん？
『経済』？

……あ、もしかして今の話って……

「えつとね……『しじょーけーざい』とかなんとか。よくわかんないけど……」

『しじょーけーざい』……『市場経済』……ああ、なるほど。
ってことは今は……その勉強の過程で、例としてラーメンが出てきただけか！　なんだ、びつくりした……

「あ、そっか！　ラーメンって小麦粉とメンマからできてるんだ！」

いや、君何を納得できたの今？

すると桃香、また思い出したように僕の方を見て、

「あ、ねえそういうことだからご主人様、ご主人様がわかる範囲でいいから……勉強見てくれない？　ほかに頼める人いないんだよね……」

「あー……まあ、それでいいなら……でも、自信ないよ？」

「やった！　ありがとうご主人様！」

ひまわりみたいな笑顔で、無邪気に喜ぶ桃香。……なんか、コレ見ていると、色々どうでもよくなるなあ……。

まあ、桃香も一生懸命なんだ、僕もがんばってみよう。経済とかでも、一般教養が入ってくるようなところなら……僕でも教えられるかもだし。

「じゃあ、はい、ご主人様！　ここ座って！」

と、少し横にずれて、同じ椅子に座るよう僕に促す桃香。いや……それちよつと無理あるって。

大きな目とはいえ、椅子は1つ、しかも一人用なわけで……そんなところに一緒に座ったら、その……色々当たるし。

「えー、いいじゃん。私気にしないよ？」

「いや、でもさあ……」

主に僕の理性とか、そういう面で心配です。

「むー……でも、横側とか向かい側からじゃ、本も読みにくいでしょう？ 一緒に読むんだから、同じ側から……」

「あ、それは大丈夫。もともと読めないから」

「……あ、そう……」

ちよつとリアクションに困る桃香。言語能力出されたら何も言えないよね。

でもまあ、その流れで、誘うのも諦めてくれたからよしとしよう。若干残念そうにしてるけど……それは君のためでもあるんだよ、桃香。

それに残念なのはむしろ僕の方で、我欲に溺れなかった僕の強靱な精神力ををむしろ褒めてほしい……げふんげふん。

ま、とりあえず……始めようか。

「そうだね！ じゃあまず手始めに……ラーメンってどうやって作るの？」

「政治経済の勉強でしょ？」

とりあえず、前途多難なようだ。

と、思ったんだけど……

実際に始めてみると、脱線さえしなければ、勉強の中身はまともだった。

消費者・生産者の関係とか、利潤の仕組みとか、そういったものだったからだ。勉強は勉強でも、こういう日常生活と結びついてる分野なら、そこそこ僕もわかる。

その調子で、ちょっと応用した内容なんかも学習していった。

しかし、これ……教えるだけじゃなく、一緒に勉強すると、僕のためにもなるなあ。これは思わぬ収穫だったかもしれない。

「あ、そっか。だから、利益が出るように値段を設定するんだね！」
「そうそう。仕入れのときと同じ値段じゃ、かえって損だからね。その儲けの中から、役所に収める税金とか、自分の生活費も出さなきゃいけないわけだから」

結構当たり前のことだけど……これも立派な学問、ってわけか。
うんうん、桃香もスムーズに理解できてるみたいでよかった。

しかし……こうして誰かに物を教えるなんて経験、本気で初めてだな……。しかも僕、今あの三国志で有名な劉備さんに、政治経済のなんたるかを教えちゃってるよ……。

17年生きてきて色々あったけど、これって貴重どころじゃない経験だなあ……

すると、ふと桃香が、

「……なんか、こうして勉強してみるとさ……私たち、すごいことしてるなあ、って思えてきたよ……」

「？ 何、いきなり」

「だってさ、この内容って、この町でも起こってることでしょ？ 私……一応、その頂点に立ってるわけで……そう考えると、私、すごく大きなものを抱えてるんだな、って」

あー、確かにそうかも。

桃香は『県令』。この都市のボス。今勉強したような経済やらなにやらの流れを、一手にまとめ上げる立場にあるんだもんなあ……。

……今実際にやってるのは主に朱里&雛里だけど、ってのは言いっこなし。

でも確かに、僕らはとっても大きなものを背負ってるんだ、っていうのはわかる。

「……こんなに大きなもの……私、引っ張っていけるかな……」

「……あー……そりゃ不安になるよね」

なんか桃香、経済の勉強から、予想外に大きな物事に気づいて惚けてる。いやあ……これは当然だろうな。むしろ、把握した以上、そう思わないほうがおかしい。

けど、

「大丈夫だよ。愛紗や鈴々……朱里や雛里もいるもん」

「にやはは……まあ、ちょっと頼りっぱなし、って感じもするけどね……」

「ま、たしかに頼りっぱなしだけどね……今は」

「『今は』？」

「そ。これから成長していけばいいじゃない、ってこと」

そんな偉そうなと言えた身分じゃ……ないけどね。

でも実際……そういう風に考えることなんじゃないかな。

桃香が、今日の勉強を通して気づいた……自分が背負っているものの重さや、大きさ。それらは、桃香1人や僕1人じゃあ、絶対にどうにかできたりしないものだろう。

でも……そのために、朱里とか雛里、愛紗や鈴々……っていう風な、仲間がいるんだと思うし。

今はほとんど依存してる感じだけど……それをばねに、一生懸命がんばって……これから先、肩を並べて活躍できるようになれば、それでいいんじゃないかな？

「そうだね……。それまでは頼りっぱなし、か……ちょっと恥ずかしいかな」

「そんなこと言っちゃダメだよ、桃香。朱里たちも、桃香にそんなこと思っただけで、手伝ってくれてるわけじゃないんだからさ」

朱里たちは朱里たちで、自分の意思で、僕らに味方してくれてるんだ。そのために、一生懸命政務・軍務を片付けて、さらに僕らの

バックアップをしてくれる。

きつとこの世界をよくしてくれるから……って、僕らに期待して僕らができる限り不自由なく、前に進めるように……って。

「だから、僕らが朱里達に恩返ししたいんなら……いちいち立ち止まって弱音こぼすより、前向かなきゃ。ま……全く悩むな、なんてことといえないけど……あんまりうじうじしてたって、それこそ、全力で応援してくれてる朱里たちに申し訳ないでしょ」

「そっか……そうだね。私達は、前を向かなきゃね」

「そういうこと。で、もしその途中で、朱里たちが困ってたりしたら……」

「今度は私達が助けて、支えてあげるんでしょ？ 私達がしてもらったように……朱里ちゃんたちが、前に進めるように」

「ん、そゆこと」

桃香、満面の笑顔。うん、迷いが無くなったみたいでよし。

だから……それまでに、僕らも成長しなきゃね。朱里たちを支えられるように。

しかし……僕も今、なんだか随分と、似合わないこと言ったなあ……。まあ、こんな大変な世の中で、皆に助けられながら生きてきたら、こういう見方もできるようになるんだろうか。

今まで、無条件に安全な社会で生きてきただけに、そういうありがたさは人一倍わかったからなあ……。愛紗や鈴々に、何度助けられたか。

そして……桃香にも、ね。

すると、

「ふふっ……それなら、もうご主人様は、始めの一步を踏み出しちゃったね？ 先こされちゃった、悔しいなあ」

「へ？」

と桃香。どういうこと？ 僕が『始めの一步』って……何が？

「だって今、ご主人様は……私を支えてくれたもん。迷ってる私を支えて……前に進ませてくれた、でしょ？」

「あ……」

そういうことか。だから、『先越された』って……

いや、もう僕既に桃香に何回も助けられてる……って、言おうと思っただけ、やめた。

今、桃香、迷いを吹っ切った、すごくすがすがしい顔してるし。……余計なこと言って、また迷わせるのは……ちょっとアレだ。まあ、僕からお礼をいうのは……また今度の機会にしよう。

「ありがとう、ご主人様。私を……私達を支えてくれて。そして……これからもよろしくね！」
「ん！」

と、ちょうどそんなあたりで……きりよく、僕のケータイのアラームがなった。

あ、コレがなったって事は……そろそろ昼休み終了だ。早く戻らないと、愛紗に怒られるな。

「そっかー……じゃあご主人様、また一緒にお勉強しようね！」
「そうだね。あ、でも……次からは姫路さんとかも呼ばうかな」
「え？ 何で？」

「いや、だって……僕じゃ、教えられることには限界があるし……それに、僕だって勉強しなきゃいけない身だもん」

姫路さんなら、頭いいし、漢文も読めるし……それに、教え方も丁寧でわかりやすい。僕も桃香も、効率よく学べるはずだ。すると、桃香はちよつと迷った風だったけど……

「うん、じゃあ……また今度ね！」

「そうだね、じゃ！」

勉強をやりきった後の、すがすがしい笑顔で見送ってくれる桃香の視線を受けながら、僕は政務室で待っている仕事のところへ、あんまり乗り気じゃないながらも向かうことにした。

やれやれ……桃香にあんだけ偉そうに言っただ……僕だって、ちよつとはやる気出さないと、示しつかないよね。

……その時、後ろの方で……

「……もう、私はご主人様と『2人で』がんばりたかったのに……」

何か、桃香がつぶやいたらしいのが聞こえてきたんだけど……よく聞こえなかった。

ま、いいか。独り言みたいだし……僕には関係ないですよ。

……多分ね。

「……いつか、私も……ご主人様の隣で、ご主人様を支えてみせるんだからね。そして、その時は……きやつ」

第23話 義姉妹と出会いと裏話（前書き）

第23話を更新します。

時間かかったわりに、出来は……うーん……
やっぱ日常編って考えるの難しいです。

ではどうぞ。

今日の主役は……誰？

第23話 義姉妹と出会いと裏話

Side 明久

「派手に行くぜえっ！」

「いえ、行かなくていいです」

「……ですよねー……」

「すみません、一部テンションが乱れました。」

「いや、多分作者が、某海賊戦隊大好きなのが原因かと。映画面白かったです。」

さて、あらためて……これはどういう状況かというと、

今日は僕は警邏当番。護衛に愛紗と、数人の兵士を従えて、さらにおまけ(?)で姫路さんも一緒に、町に繰り出そうとしてるところだ。

もともと……僕や姫路さんの目的は、どっちかっていうと、まだ慣れないこの町を見て回ることなんだけどね。

じゃ、まあ……前置きはこのへんにして、行こうか。

町は……まあ、特筆するところも無く、平和です。

当然かな、だって……治安面は愛紗達が、政治面は朱里たちが

んばつてくれてるもん。以前の状態が決してよくはなかった町だから……改善するよね、そりゃ。

けど、それ以上に驚いたのは……町を歩いてると、

「おおつ、天の御使い様！」

「御使い様だー！」

「ありがたや……ありがたや……」

なんか僕、崇拜されてる？ 特に3番目、大仏様が僕は？
とまあ、こんな感じの反応が返ってくる場所だった。

最近、町に出るようになってわかってきたんだけど……どうやら、町の人たちにとっての僕の立ち位置は、劉備軍において、桃香と対を成す指導者。

そして、同じく『天の御使い』の姫路さんとムツツリー二は、その側近……っていう位置づけらしい。……随分都合がいい位置に収まったもんだな。

っていうか、僕、劉備と同格なの！？ 三国志の主人公格と！？
すごすぎない！？

それはそうと……その『天の御使い』っていう呼称、どうにかしたいな……。近いうちに、新しくユニット名でも考えようか……。あ、でも雄二に黙って、ってことになるけど、いいのかな……？

まあともかく、そんな感じで……別段何も滞りなく、警邏は進みました。

「それにしても……最初に来てから、まだ2週間くらいなのに……結構町が活気付いてきたように思いますね……」

「? そうかな?」

と、ふいに姫路さんがつぶやいたセリフに反応。……僕にはわかんないけど……。

まあ、最初来た時は確かに、この町、全然活気無いなあ……とか思った。街路が整備されてないのは仕方ないとしても、店とか少ないし……

すると、横から愛紗が補足(?)を入れてくれた。

「簡単な話です。この城に桃香様が来て、さらに我々が万全の警備体制を敷いていることで、盗賊が寄り付きにくくなっているのですよ」

「ああ、それはまあ……そうかもね」

何せ僕ら、盗賊ハンターみたいなことやってたし。そりや怖がって来れないよね。

「安全であるということは、それだけで魅力的な土地に見え、人を呼び寄せます。そうなれば住人は活気付き、農業・商業が芽吹き、行商人も集まり、町は豊かになります」

「そうすれば、さらに町が活気付いて、魅力的に見える……上手い具合に連鎖状にかみ合ってるんですね」

「そういうことです。それに……姫路殿が発案してくださった、天の国の警備体制も……功を奏しています」

と、愛紗。

今言っていた『天の国の警備体制』っていうのは……まあ、警察

機構とか、そういうののそれを参考にしたものだ。

町を区画ごとに区分して、交番みたいなのを設けたりとか……見回りのルートに工夫をしたりとか。それに、もう少し人員が充実してきたら、24時間体勢みたいなのも、実験的にやってみるとか言ってた。

僕らの世界じゃ当たり前のことだけど……この時代にしてみれば、革新的なやり方だろう。町の人たちが珍しかったり、期待の目で見えるのも……無理はない。

そして、愛紗や朱里が色々上手くやってその期待に込めてるから、僕らに対しての満足感もうなぎのぼり……ってわけだ。

志願兵も続々集まってきてる……って、朱里が言ってたし。

「けどさ、それにしたって……そのために動いてくれたのは愛紗や鈴々だもん」

「そうですね、私達なんか非力で……感謝しても感謝しきれないです」

まあ、そんなところが……僕と姫路さんの本音である。

実際、戦場で勇猛果敢に戦う、関羽將軍や超飛將軍の噂を聞いて、それにあこがれて志願してきた、って人だって……多いわけだし。

……ちなみに、ムツツリー二いわく……単にかわいくてお近づきになりたい、っていう邪な理由で入隊してきた奴もいたらしいけど……そういう人物は全員調査済み、リストアップ済みであるらしい。……後日、ちょっとした肅清が行われるとかそうでないとか……

何、止めないのかって？ 「冗談言つない、それ僕も参加すんのに。

それに、愛紗の耳に入る前に処理できるんだから、むしろ都合はいいはず。堅物と言ってもいい愛紗がそんな不謹慎な噂聞きつけたら、死人が出かねない。

と、その愛紗は……何をおっしゃいます、と、僕と姫路さんのセリフに返してきた。

「ご主人様も桃香さまも、それに姫路殿も……いつもながらご謙遜が過ぎます。皆様、私や鈴々などにはない、立派なものを持っています」

「でも、守られて助けられてばかりだし……頭もよくないよ、僕？」

「それでも、あなた方にはあなた方にしかできないことがあるのですよ。そもそも、戦場での働きは我々武人の領分、ご主人様が気にすべきところではありません」

一片の揺らぎもなく、そう言ってくれる愛紗の目は……澄んでいた。本気でそう思ってくれているみたいだ。

嬉しいっっちゃ嬉しいんだけど……うーん……それでも、僕、まだ罪悪感というか……無力感というかさ……

けどまあ、愛紗の言うことも正しいわけだし……その辺の心構えは、おいおい築いていけばいいのかな。

すると愛紗、まだ僕が迷ってるらしいな、ってことを感じ取ったのか……ふと、こんな話をしてくれた。

「私も……かつて、ご主人様と同じようなことを考えていた時期がありました」

「え？　どゆこと？」

「戦場で戦える力を持つてこそ、この大陸で覇業を成しえる……という考えです」

なんか、若かった頃のやんちゃ振りをしのぶお父さんみたいな雰囲気、少し恥ずかしげに言う愛紗。

……んー……僕らは、あくまで、皆に世話になりっぱなしだつてところの無力感を嘆いてるものであって、そういうのとはちょっと違う気がするんだけど……ま、いいか。

でも、それがどうしたのかな……と、思っていると、愛紗は続きを話してくれた。

「かつて私は、鈴々と共に……諸国を旅して回っていました。その途中、山賊などの出没を聞きつけると、2人で殴りこみ……壊滅させて、狙われていた村を助けたりなどと」

「へー、その頃から立派だったんですね、愛紗さん」

感心する姫路さん。いや全く。

生粋の武人というか、狭義あふれるというか……頭が下がるよ。

と、そこでなぜか……愛紗は、少し自嘲するように笑い、

「ええ、自分でもそう思っていました……ですが、ある時……その私達の考えを根本から覆す出会いがあったのです」

「……それって、もしかして……」

「……ええ、桃香様との出会いです」

S i d e 三人称

同時刻……城。

そこでは、ムツツリー二こと土屋康太と、小さくても將軍の一角である張飛こと鈴々が、軍関係の情報や方針などについての重要な会話を……

「そついつの鈴々わかんないから全部康太お兄ちゃんにおまかせなのだ！」

「……………まあ、いいけど」

……………できていなかった。

そして、鈴々が空腹を訴えたため……………そのまま城の食堂に行くと、たまたまそこにいた星も巻き込んで、そこから鈴々の昔話にシフト。

鈴々への報告を最後に仕事が終わリ、やることも特になく、暇だったこともあり……………ムツツリー二と星はその話（こっちはサボリだが）に付き合うことにした。

彼女ら『桃園の3姉妹』の過去は興味をそそるものでもある、ということで。

内容としてはまあ、今現在明久達が城下で愛紗から聞いているのと同じ内容だと考えればいい……………

……………はずだったのだが、

「んーとねー……鈴々と愛紗が桃香お姉ちゃんに出会ったのは……」

S i d e 明久

愛紗いわく、

その日……愛紗と鈴々は、いつも通り（？）、山賊退治をしたらしい。

人数も少なかったから、2人で楽々討伐できて、お釣りが来るくらいだったんだとか。

で、いつも通り、村人の人達からは感謝感激雨あられ。ひたすら褒められ、お礼を言われる。

当時は、それが半ば当たり前前みたいに思えていた、と、愛紗は恥ずかしそうに言っていた。

そんな中、少し遅れて進み出た1人の少女。

その少女の口からも、てっきり感謝の言葉が出てくるもんだと思ってた愛紗と鈴々。

しかし、次の瞬間聞こえたのは……予想外の言葉だったという。

『その力があれば、あなた達はもっと多くの人を笑顔にできると思います！』

そう、言ってきたのは……言わずもがな、今の義姉……桃香だったのだという。

どういう意味か、と、きょんとして聞き返した愛紗と鈴々は、そこで桃香に……彼女自身の、この大陸の行く末を案じているという考えを聞かされて、感銘を受けたらしい。

愛紗の目は、持論を説く桃香に釘づけになったという。

自分達は、こんな山賊退治ごときの達成感で満足しているというのに、この人はなんと大きな視野で物事を見ているのだろう……と。

そして思ったという。この人についていきたいと。

そうすれば……今まで見られなかったものを見られる、もっと多くの人を救う道を見つけられるのではないか……と考えて。

鈴々は、愛紗と同じように、その時 桃香と出会った時

のことを話そうとしていたのであるが……。

なぜか、と言うべきか……少々、その内容がずれていたりする。

いや、内容的には違わないのだが……色々と『詳し』かったり、脱線していたりするのである。

どういふことかという……

ふむふむ……桃香様と愛紗達の過去話か……思いがけず面白いものが、鈴々の口から聞けそうだ。

鈴々いわく、

その日……愛紗と鈴々は、いつも通り（？）、山賊退治をしたらしい。

人数も少なかったから、2人で楽に討伐できて、釣りが来るくらいだったとのこと。

で、いつも通り、村人の人達からは感謝感激雨あられ。ひたすら褒められ、お礼を言われる。そして 鈴々、好意に甘えて、ラーメン食べ放題の権利をもらう。

当時は、それが半ば当たり前みたいに思っていた、と、鈴々は別に恥ずかしくもなさそうに言っていた。

そのような中、少し遅れて進み出た1人の少女。

ちなみに鈴々は、今正にラーメンを食べに行こうとしてた所で、呼び止められて邪魔されてちよつとご機嫌斜めだったらしい。

わかる、わかるぞ鈴々。私も酒とメンマのお預けを食らえば不機嫌にもなる。

その少女の口からも、てっきり感謝の言葉が出てくるものと思ってた愛紗と鈴々。

しかし、次の瞬間聞こえたのは……予想外の言葉だったという。

『そそ、その力があれば、あなた達はもっと多くの人を笑顔にできると思いましゅ！』

そう、朱里ばりに噛みながら言ってきたのは……言わずもがな、今の義姉……桃香様だったのだという。

「……………噛んでたの？」

「噛んでたのだ、緊張して」

「ほう、まあ、桃香様なら……ふふつ、想像できてしまうな」

どういう意味か、と、きょとんとして聞き返した愛紗と鈴々は、そこで桃香に……彼女自身の、この大陸の行く末を案じているという考えを聞かされて、感銘を受けたらしい。

その間、鈴々の目は、持論を説く桃香……の胸に釘づけになったという。

自分は、まだこんなまな板程度の平たい胸だというのに、この人も愛紗も、なんと大きな胸を持っているのだろう……と。

そして思ったという。この人についていきたいと。

そうすれば、自分の胸ももう少し大きくなるのではないか……普段何を食べていれば大きくなるのかわかるのではないかと考えて。

Side 明久

「そして私と鈴々は、悟りました……このお方こそ、我々がついていくべき人物だ、と。世の中を見渡す目を持ち、優しい心と深い懷をお持ちであるこの方こそが、この乱世を沈めるべきお人だ……と」

「そっか……それでその後、義姉妹になったの？」
「はい。姉として……これほど誇らしい方は、天下に2人とおりません。この不とに全てを捧げよう、この人のために刃を振るおう……そう、決めた日でした」

Side 星

「そこまではよかったんだけど、ちょっとその後に色々大変だったのだ」

「……………大変？」

「うん、愛紗が桃香お姉ちゃんの考え方に感激しすぎちゃって、話聞いている後半で号泣したり、『師匠と呼ばせてください！』とか言い出したり」

「おや、それはまた意外な。あの愛紗がなあ……ふふっ」

「髪型同じにしてみたり……あとは、桃香お姉ちゃんのその頃の服がちよっと粗末だったから、自分の予備のをあげて……で、それを着てもらえて嬉しいのと、同じ服を着ていられて嬉しいって言ったり……」

「……………意外」

「同じ空気を吸えて、同じ大地に立って、同じ時を生きていることが嬉しい、とか言い出したときは、さすがに鈴々もちよっと引いたのだ……」

「ふむ……若干危ないところまで暴走していたのだな」

「……………何かの信者みたい」

ふむ……愛紗、お前の知られたくない……お前がこの当時の話を

するとしたらまず間違いなく省略するであろう事実が次々流出しているぞ。

主達の言葉を借りれば……『黒歴史』とやらか？ ふふっ、まあ、私はいいい酒の肴ができて文句はないがな。

S i d e 明久

「……何か今、酷く不穏な話がどこかで繰り広げられている予感が……」

「？ どしたの愛紗？」

「い、いえ、何でも……では、続きを」

おほん、と、愛紗は咳払いをしてから、当時のことを思い出して続ける。

「その後、私達と桃香様は、さっそく諸国行脚の旅路に出かけました。見聞を広め、世を知り、これからの道筋を見極めるために……」

「有限実行なんだ、すごいね」

「思い立ったが吉日、っていうやつですか？」

「然り。桃香様は、ああ見えて……という失礼ではあるが、いざと言うときの決断力はあるお方ですからね。山賊退治などと言う過去の栄光にすぎることなく、すぐさま私達とともに、礼も受け取ることなく、簡単な挨拶を済ませて村を出て、次の村へ……」

S i d e 星

「……行こうと思ったんだけど、桃香お姉ちゃんと鈴々のお腹がなつたから、出発は明日にして村に泊まってから旅に出ることにしたのだ」

「おやおや、それは難儀な。しかしまあ、よかったのか？」

「うん！ 英雄だ、ってみんな歓迎してくれたし、山賊退治のお礼……って、宿も食堂も無料にもらえたし！」

「……………お礼はちゃっかりもらってたと」

S i d e 明久

「それから我々は……自分で言うのもなんですが、八面六臂の大活躍、とでも申しましょうか。民に仇なす山賊・盗賊を出会う端から狩って進み……我ら3人、劉備・関羽・張飛とその名を聞けば、その名を知らぬものなどないほどに」

「そのころから、3人共立派だったんですね」

S i d e 星

「うーんとね……戦ってはいたんだけど……愛紗と鈴々は有名になったけど、桃香おねえちゃんの名前だけ、有名になるのにちょっと時間かかったのだ……」

「戦っていないがゆえ……ですか？」

「そう、かもなのだ……鈴々が守るから、別にそんなのいいんだけど……」

「まあ、武人でもないのに戦場での働きを、というのもおかしいですからな」

「酷い時は……桃香おねえちゃんが、愛紗と鈴々の召し使いだと思われたこともあったのだ」

「……なんでまた？」

「だって桃香おねえちゃん、暇になると草鞋とか籠わらじとか編あんでるし

……お掃除とか洗濯とかも自分から進んでやるし……しかも、鈴々達や、村の困ってる人達の分まで」

「……庶民的だけど」

Side 明久

「まあ、噂の広がり……もともと、私が1人で、そして鈴々と2人で旅をしていたころの『黒髪の山賊狩り』という噂が先行していたこともあり、広まるのは割かし早かったですね」

「へー……愛紗って昔から有名だったんだね」

「あ、それ……白蓮さんの所で私も聞いたことがあります！ 少し前に、たなびく美しい黒髪をなびかせた絶世の美女が、長刀を手に山賊達に正義の鉄槌を下している……って」

「おはずかしい……ですが、正にその通りですね」

S i d e 星

「ちなみにその『黒髪 of 山賊狩り』だってわかってても……愛紗、ちよこちよこがっかりされてたのだ」

「なんで？」

「質問を何個かして……で、愛紗がその『山賊狩り』だってわかると、まあ……怖がりもするんだけど……」

「………だけど？」

「思ったほど美人じゃないな、とか言つて」

「おや、それは世の中も手厳しい」

「………十分美人だと思うけど」

S i d e 明久

「……やはり、どこかでなにかしら不名誉な話を……？」

「？ どしたの愛紗、さつきから？」

「………いえ………」

何でだろう、さつきから愛紗がちよくちよく挙動不審だ。まるで、ここじゃないどこかで自分の恥ずかしい話を暴露されて

ることを悟ってるみたいな落ち着きのなさ……ってやけに具体的な例え言つといてなんだけど、そんなことあるわけないよね。

ともかく、その後しばらく……僕と姫路さんは、愛紗から、彼女達の昔の話を聞きながら警邏を回っていた。

基本的なところは変わってないみたいだったけど……僕らの知らない彼女達の姿を垣間見れた感じで、楽しかったと言えば楽しかった。

桃香はその頃から優しくて、おっとりしてて、でもいつも真剣で。

愛紗はその頃から生粋の武人で、強くて。

鈴々もその頃からやんちゃで、にぎやかで、勉強嫌いだっただんな、って。

……でも、それでも……それを聞いて一番最初に頭に浮かぶというか……いや、むしろ、考えるまでもなく明白で、それでいて喜ばしいことは……

……3人とも、その頃からお互いを信頼してて、すごく仲がいいんだな……ってことに、つきるんだろうな。

まあ、それはそれでほえましいですかハイそうですね、と置いて、

「それで鈴々よ、似たようなその面白い話はあといかほどある？」

「にゃ？ まだまだいっぱいあるよ、聞きたい？」

「もちろん、このような極上のつまみ、そうそうありませんからな。そこな女官、酒を持って来てくれ」

「…………… 昼間から、他人の陰口を肴に酒盛り？」

「それも一興と言つものだろう。土屋殿はどうする？ 遠慮しておくか？」

「…………… 愚問を」

にやり、と笑う土屋殿の手には、天の世界から持ち込まれたといからくりう機械の数々が、しゅばつ、と一瞬で出現した。

たしか…………… 『れこーだー』とかいう名前だったか。

「ふむ…………… と、いうことだ、鈴々、話の続きを詳しく頼む」

「…………… できれば、愛紗だったら割愛しそうなところとか、特に詳しく」

「にゃ？ いいけど…………… 何で？」

「何、仕える主や仲間のことは、なるたけ詳しく知っておきたい、ということさ」

「それならいいよ！ えっとね……………」

「…………… お主も悪よのう」

「いえいえ、天の御使い様ほどでは」

「「ふっふっふ……………」」

S i d e 桃香

えっ、と……

何だろう、この状況……？

警邏から戻ってきたご主人様と瑞希ちゃんと愛紗ちゃんからは……
…なんかその、ほほえましいものを見るような目で、ちよっと嬉し
そうに見られて……

反対に、食堂から戻ってきたところらしい、星ちゃんと鈴々ちや
んと康太さんからは……なんというかこう、生ぬるい感じの視線が
送られてきてます。

。愛紗ちゃん達のは……例えるなら、『頑張ってるね、応援してるよ』

星ちゃん達のは……例えるなら、『頑張ってるね、応援してるよ
(笑)』。

……って感じ。

………何で？

第23話 義姉妹と出会いと裏話（後書き）

さて、次回、

日常編なんですが……ちょっと、わき道にそれたいと思います。
どのような展開になるかは……次回。

なるべく早く更新したいです。

ではこのへんで。和尚でした。

第24話 遭難と襲撃と褐色の美少女（前書き）

今回、あの子が登場します。

第24話、どうぞ。

第24話 遭難と襲撃と褐色の美少女

Side 明久

……まずい。

いや、これは本当にまずい。

え、何がまずいかって？

……迷った。しかも……山の中で。

僕の目の前には……うつそうと茂った森。木々が太陽光をさえぎり、薄暗い。

こんな森林、現代なら、地方の山奥にでもいかないとなかなか無いと思う。

「……これは、本気でやばいかも……」

どういう経緯でこうなったのかっていうと……僕は今日、領地の南の端っこのあたりの村まで、愛紗たちと軍を率いて遠征に来ていたのだ。調査して……もし見過ごせないようなら、そのまま壊滅させる算段で。

で、調査の結果……看過できない規模だったので、全軍でドカーンと一撃。

幸い、その場の戦いは何事も無く完全勝利したんだけど……その後が問題だった。

最後の悪あがきで突撃してきた敵の一団の攻撃を横っ腹に食らって……混乱したところでなんやかんやあって、

……はぐれた。

……はあ、なんて間抜けな展開……いや、洒落になってないけどね。

何がまずいかって言うと……具体的に2点。

1つは……単に帰り道がわからないこと。

まあでもこれは、何とかなるレベルだろう。愛紗達が探してくれてるかもしれないし……歩いてれば、少し開けた場所に出るかもしれない。食料も……まあ、木の実とかならありそうだ。

ホントに怖いのは、もう1つの方……盗賊の残党と出くわして襲われること……だ。

本陣から見てた感じだと、相当散り散りになってたし……生き残りもそんなにいない風だったから……部隊規模の連中がいるとは考えづらいけど……合流して集団になったようなのに出くわしたらまずい。

そういう不安があるから、大声で愛紗たちを呼ぶ、っていう手段が取れないんだ。

幸い、腰につつてある竹製のポーチバック（のようなもの）の中に、保存の利く食料がいくらかと、いざというときの武器……刃物が入ってる。あと、身分証明になるものも。

これらを上手く使えば、大抵の局面は何とかなるはずだ。

何より僕には『召喚獣』がある。こいつがいれば、そうだな……
4、5人程度なら……最悪、どうにかなる。逃げながらだから、少し大変かもだけど。

まあ……凶器を持った盗賊と言えど、狂気をたぎらせたFFF団の連中に比べれば、その……なぜか見劣りして感じるから不思議だ。

ちなみに、腰のポーチバックは桃香のお手製。……こんなの作れるなんて、相変わらずホントに器用だな……。この前も、僕たちに草履作ってくれたし。

素直に感心するんだけど……やっぱり何か君主的なイメージと違っていく気がする。仮にも領主様の特技が、草履作りだの竹箆作りだのって……。

……と、その時、

「きゃあああああ つ!」

……お約束?

暗い森、もうすぐ夜、女の子の悲鳴。

……これってその……助けに行かなきゃダメかな?

S i d e ????

私としたことが……柄にも無く、甲高い悲鳴をあげてしまった。
……そんなことしたって、情況が好転するわけでもないのに……。
むしろ……後ろから追いかけてくるやつらを、刺激してしまうだけ。

くっ……何で、こんなことに……！？

「……はぁ……はぁ……はぁ……っ！！」

私は今、息を切らしながら……足場の悪い森の中を走っている。
後ろは振り向かない。振り向けばわずかだけど……足が遅くなる。
そうすれば、奴らにつかまってしまふ危険がある。
捕まったりなんかしたら、何をされるか……

派遣されている先の豪族 袁家の遠縁らしい の護衛の
任務を受けて、部隊を率いて彼らの遠征に同行したはいいいけど……

その豪族の、穴だらけな警備体制のせいで……たかが盗賊に奇襲
をかけられた程度で、本陣が大混乱になってしまった。

おまけに、混乱の中で、私は本隊とはぐれて……森の中に迷い込
んでしまった。

護衛も……最初は何人かいたけど、襲ってくる盗賊たちの兵から
私を守ってとどまり、減っていった……ついには、私1人に。

その状況下で……とうとう、盗賊の残党に見つかって、追い回さ
れている。

戦おうにも、私の手元には剣一本……私自身、お世辞にも強いと
はいえない腕だ。

それに対して、賊の数は10人以上。全員が武器を持っている……
…屈強な男達。

こんなことで……姉さまやお母様に申し訳ないわ……。2人なら、
この程度、笑って乗り越えられただろうに……

……いや、襲撃されて笑ってる、っていうのもちよつとどうかと
思うけど、あの2人、こういう場面で笑う以外の行動選択が思い浮
かばないのよね……。

実際、2人とも嬉々として全員斬り捨てるでしょうし……

そうこうしている間に……だんだんと、私の体力も底をついてき
た。

くっ……今のままの調子で、あとどのくらい走れるか……と、そ
の直後、

茂みを突っ切った所で……幸か不幸か、私はいきなり開けた場所
に出て……

そして……そこに……

「……………えっと、どちらさま？」

そこに……1人の男がいた。

行こうかどうか迷ってたら、向こうから来たよ。

しかも、なんかこう……盗賊っぽい方々、大勢引き連れて。

僕の目の前にいる少女は……走っていたのか……、肩で息をしている。

「はあ……はあ……はあ……お、お前こそ……何者だ!？」

あ、なんかしかも警戒されちゃってる……まあ、無理もないけど。

女の子の容姿は、やや薄めの桃色の長髪に、褐色の肌……気の強そうな顔で……背丈や歳は、僕とそんなに変わらないように思える。顔は……うん、汗とか浮かんでるけど……すごくかわいい部類に入る女の子だ。

……それらを差し置いて目を引くのが……あんたそこまでしますか、って具合の露出度を見せる、その少女の服。お腹のところとか……肩口とか……いや、開きすぎでしょ!？」

しかも、ボンキュッボンの出るとこ出てしまるとこしまった、理想的な体型と言いますか……その、理性を抑えるのが大変と言いますか……っていうか、それ普段着!？」

何だろう、そのカッコじゃ、盗賊に追っかけられても仕方ない気がするんだけど……。

「しっ……質問に答えろ! お前は誰だ!？ 盗賊の仲間か!？」
「え!？ い、いやいやいや! 違いますって!」

煩惱と格闘しつつ、状況把握に集中していると、焦りを隠せない様子の彼女が聞いてくる。ああ、やっぱりこれ、後ろから来た人達

盗賊なんだ。で、追われてるんだ。

すると、どうやら盗賊の皆さん、僕を見つけたらしく、

「おい、どうしますアニキ、何か増えましたぜ？」

「あ？ 知るかよ、獲物が増えただけ得じゃねえか」

あ、ロックオンされた。なんてとばっちり。

すると、その美少女ははっとして振り向く。その眼前には、追いついてきた盗賊たちがわらわらと……って多っ！ 何人いるのこれ！？

やばい……これは、召喚獣……いや、『白金の腕輪』使っても……ちよっと裁ききれそうに無い数だ……

「くっ……追いつかれたか……！」

「えっと、あの……」

「何だ！？」

ちよ、君まで威嚇しないで！ 怖い！ 僕怪しい者じゃないから！

ていうか……何だろう、この娘から感じる……この……威圧感？
みたいなのは？

……もしかしてこの娘、ただの女の子じゃない……のかな……？

いや、今はとにかくそれより……

「あ、あの……こういう場合、僕はどうすれば……」

「知らん！ 自分のことくらい自分で考える！」

いや、この状況思いつきり僕『巻き込まれた側』なんですけど。

「くっ……しかし、どうすれば……このままでは2人とも殺されるぞ……！」

「あ、既に僕も頭数に入れられてるんですね」

勝手に一蓮托生……っていうか、戦力にカウントされたらしい。

あー、まあ……敵として認識はされてないみたいだから、いいかな。

……と、それよりも今は……

「ふう……やれやれ……」

ため息をつきつつ……一歩前に出る。

その様子を見て、女の子と、盗賊さん達が目を見張った。

「お、おい、お前……何のつもりだ!？」

「いや、何って……いくらなんでもこの状況、女の子見捨てて逃げるわけにも、女の子に戦わせるわけにもいかないし……」

「なっ……!？」

目を見開いて驚く美少女。……？ 僕何かへんなこと言ったかな？

「はあ!？ そのガキ、お前1人で俺達とやりあうつもりかよ？」

「なめてんのかコラ？」

あっはっは……そんな余裕ないですって。

けどまあ……どうにかしないと、っていうのは事実だな……5、

6人くらいなら、『白金の腕輪』も使えば何とかなるかもだけど、この数は……

それに、この娘……一応武器は持つてるみたいだけど……立ち姿からして、武将とか、そういう感じじゃないし……戦って強いわけじゃなさそうだ。

すると、一拍遅れて……

「お……お前っ、バカにしているのか！？ 私の代わりに戦うだとい……」

「え？ いや、それは……」

や、『代わりに』とは一度も言っていないんだけど……まあ、実質そうだけど。

でもまあ、女の子に戦わせるわけにも行かないしさあ……最悪、援護とかはしてもらうかもだけど……

「ば、バカにするな！ 何者かは知らないが、一般人に庇われるほど、私は弱くない！」

ん？ ……今の言い方……やっぱり君『一般人』じゃないの？
でも、じゃあ……強いのか？

「うっ……っ、強いかどうかと聞かれれば、その……」

「……そうは言えない、と？」

「ち、違っ……こ、こう見えても私は、『江東の虎』と……」

おおっ！？ ……なんか、こう……すごい感じの呼び名！ 実はすごい人！？

「……呼ばれていた……母上の娘で……」

だめじゃん！

引っ張つといて何！？ そんなお約束な見栄の張り方はっ！？
何でこの場面で『うちのお母さんすごいんだぞ！』ってなノリで家族自慢するの！？

「で、でもその、私は私で、『江東の麒麟児』と呼ばれて……」

「……おおっ！？」

「……呼ばれている姉上の妹で……」

やっぱだめじゃん！

何さつきから！？ いや、別にそんな必死になって自己主張してくれなくても……

「そ、そんな私でも、『江東の聖剣』と呼ばれ……」

「母？ 姉？」

今度は誰だろう？

「……呼ばれたいなあ、と……思っている」

ついにはただの願望になってしまった。

……どうすんの、この状況？ ていうか、どうしろっての？
夢だけは大きなこのお嬢さん（胸も大きいけど）、もう半泣き。
完全に自爆なのに。

「……おい、そろそろいいか？」

と、結構本気で忘れかけていた盗賊さん達から一言。

ていうか、今の漫才の間、律儀に待っていてくれたんだろうか。意外といい人？

「どうすんだよ？ 抵抗して殺されるのか？ それともおとなしく身包み脱いでその女置いていくか？」

「いや……できればどっちも遠慮したいなあ、なんて……」

とはいったものの……どうしよう……！ そうだ！

僕はとつさに、腰のポーチ（桃香手作り）に手を伸ばす。この中には……護身用の小刀が入ってる！ これなら、相手も少しはひるむか！？

無理でも……やれることは全部やっておきたい。最悪、戦いになっても……襲って区他連中を迎撃しつつ、召喚獣で数を減らす、っていう戦法がとれるはずだ。

「っ！ 何か武器持ってるのか！？」

「落ちて着けチビ！ 何を持ってた所で、この人数に勝てるはずがねえ！」

まあ、確かに、焼け石に水かもだけど……何もないよりはましだっ！

武器にもよるけど……FFF団との逃走劇で鍛えられた僕のスペックなら、この場を逆転することだって不可能じゃなくもなくもなかないといいな（願望）！

盗賊たちと女の子の視線が集まる中、僕は覚悟を決めて……ポーチの中から素早く爪切りを出して構え……

「……って爪切りで戦えるはずないじゃないかあっ！」
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

Oh、なんか既視感。
デジャヴ

がつくりと崩れ落ちる僕に向けられる視線の数々。……やばい、逃げたい。

盗賊とか、命の危機とか、そういう理由じゃなくて、この場から単にいなくなりたい。

「くっ……でも、何もないよりはましなはず……」

「いや、無い方がましだと思っただが……」

「あなたはそんなこと言っちゃだめな側ですっ！」

「はいっ!？」

ほぼやけっぱち状態の僕のシャウトにびっくりする女の子。

まあ、頼りない武器(？)だったのは認めるけど……夢を武器に戦おうとする君にだけは言われたくないから。

「……最近はこの辺、頭がちよっと残念な奴が多いのか……?」

? 今の、盗賊さんのセリフ……どういことだろ。

僕はそれに入っていない、って自己暗示をかけつつ聞いてみると、

「アニキ、『この辺に多い』ってどういう意味ですかい？」

「ん？ ああ……この前、盗賊仲間に聞いたんだけどよ……何でも少し前に、だいぶ残念な感じの頭の女に出くわしたらしい」

「へー、そうなんすか？」

「ああ。桃色の長髪に、胸が大きくて、色白の、ぼけーっとした感じのやつだったらいいんだが……思わず同情したくなるほどだったそうだ」

……その特徴、どっかで聞いたような……？

というか、限りなくそんな感じのが身近に1人いるんだけど……まさかね。

ちなみに僕の隣では、謎の女の子Aが『……色白……ほっ、違う……』と安心してた。ああ……そっぴやこの娘も、桃色の髪に巨乳だな。肌は褐色だけど。

と、ともかくその……この状況どうにかして……

……と、その時、

「あいや、待たれいっ！！」

「「「！！？」「」」

突然、どこからとも無くそんな声が響き渡り……僕らの動きが止まった。

……っというか……あれ？ 今の声……どっかで聞いたことある声のような……

と、次の瞬間、

ひゅおっ、しゅたっ！！

「うわっ！？」

「なっ……！？」

「「何だあっ！？」」「」

いきなり、頭上から何か、白い『誰か』（もしくは『何か』）が、僕と女の子と、盗賊さん達の間には颯爽と飛び降りてきた。び、びっくりした……

その『誰か』は……すらりとした体型に、青色の髪を持ち、その手には赤い槍を持っていて………って、

「せ……星！」

「「ご無事でしたか、主」

そう……こういうノリが一番似合っであろう、我が軍の將軍・星だった。

そっか……僕のこと探して回って、見つけてくれたんだ！
しかもなんていいタイミング！ この状況……もしかしくなくても助かったかも！

「な、何だ、こいつは……！？ お、お前！ 何者だ！？」

あ……つとと、無理ないけど……びっくりしてるよ、この娘。

「あ、大丈夫。この人、僕らの味方だから」

「え？ そ……そうなのか？」

「う、うん」

ちらりと視線を向けると、星はふう、とため息をついて、

「ご心配なさいますな、主。先ほどから見えておりましたゆえ、状況は把握しております。すぐに片付けましょう」

「『主』……？ おいお前達、それは一体どういう意味だ！？ 主従の関係なのか！？」

「あー、ごめん、ちよつとそのー……詳しいこと後で話すから、今は黙ってて！」

謎の女の子A、軽くパニック。けどごめん、今は事態の収束を優先させてください。

……って……ん？

星、今『さつきから見てた』って言った？

ねえちよつと、それもしかして、かつこよく出るタイミングがかつてて今まで出てこなかったとか……いや、まさかそんなはずないよね？

「何だア女！ 俺達と戦ろうってのか！？」

「ふん、威勢だけはいいようだが……戦いになればいいかな？ かかってくるがいい、生まれてこの方恋人もいなさそうな盗賊共め」

「なっ、何いっつー！！」

「何で知ってんだ！？」

別に必要無さそうな漫才を交えつつ、さらに僕のことは無視しつつ、星と盗賊たちとの戦いが始まった

ばきばきどかー！

「「ぎゃあああああ

っ！！？」「」

そして終わった。

まあ、当然か……たかが盗賊が、星に勝てるはずないし。

「っ……強い……。い、一体何者なのだ……？」

隣の女の子がそんなことをつぶやくのを耳にしながら、僕はため息をついた。

……すごく疲れたけど、まあ、危機を脱したのは確かみたいだから、よしとしようかな……。

第24話 遭難と襲撃と褐色の美少女（後書き）

と、いうわけで新キャラ登場！ なんですけれども……

……描き終わってから気付いた。

……名前、出せてねえ……

ま、まあ……次回、ということで。

第25話 孫家と火傷と暗殺者（前書き）

さて、やっと名前出せます。

そして、さらにキャラ追加です。

どうぞ。

第25話 孫家と火傷と暗殺者

盗賊の皆さんを（星が）一掃してから数分、

とりあえず安全を確保した僕と星、それに……まだ名前を聞いていない、褐色の肌の女の子（迷子風）。

まずは暖を取ろうということで、たき火を起こして……さらに、星が分けてくれた食料（総量の5割がメンマ）を使って、僕が簡単な料理を作った。

「ほお……やはり主、料理も一級品のようですね。ありものを使っただ急ごしらえで、これほどとは……」

「た、確かに……美味だ……」

「ははは、普通だよ」

2人とも褒めてくれた。いやあ、それほどでもないって。

「ところで……先ほどから気になっていたのだが、お主、何者だ？」

と、星は、おそろおそろ……といった感じで、でもさつきよりは警戒心も薄めて、僕特性の料理に口をつける、褐色肌の彼女に尋ねる。

そうそう、いろいろ会ったから今まで流してたけど、名前も聞いてないんだっけ。

その彼女も、名乗って思いなかったことに気付いたのか、『あつと声を上げた。

「そ、そうか……自己紹介がまだだったな……失礼した」

この娘、かしこまると、なんかこう……堅苦しい口調になるっばいな……。

こういう状況から立ち直ることに慣れているのか（なんで？）、びしっと姿勢を正し、

「名乗るのが遅れてすまない。私は孫権^{そんけん}、先ほどは……助けていただいて感謝する」

と、普通に聞いていた僕は……彼女のその自己紹介に度肝を抜かれた。

ちよっ……え！？ 孫権！？ 孫権って……あの『呉』の王の！？

三国志には詳しくない僕だけど……映画とかでもそれなりに聞くくらいに有名な名前だから、すぐ思い出せた。ぼ、僕もしかして……すごい人に会っちゃったんじゃない？

すると、星も同じように……ではないけど、驚いたようにして、

「？ その名前……よもや江東の『孫家』の？」

「星、知ってるの？」

「ええ、有名ですからな。かつて初代当主・孫堅殿の名の下、江東に名をはせた名家……強大な武家の一族ですよ」

へえ、そうなんだ。

でも『国』じゃなく『家』ってことは……今は時間軸上、まだ『呉』ができる前段階なのかな？

「でも、そんなところのお姫様が……なんでこんなところに？」

すると、僕が『お姫様』と言ったあたりで……孫権さんの表情が曇った気がした。

……あれ？　もしかして……地雷踏んだ？

「……どれも、昔の話だ。母上の代のな……。今は、当主である姉様とともに……袁家につかえる客将の身だ」

「今の当主と言つと……孫策殿か？」

「ああ。今は……建業にいる」

そして孫権さんは、ちよつとだけ沈んだ声で、話してくれた。

孫権さんの実家である『孫家』は、江東で名をはせた一大武装勢力だったこと。

けど……彼女のお母さん、『孫堅』さんがなくなつて以来、色々あつて……今は、『袁家』っていう他の名家の客将の地位に落ち着いてる……つてこと。

現在の当主は、孫策さんつていつて……孫権さんのお姉さん。2人は離れ離れになってくらしている……つてこと。

そして、彼女は……とある用事で出かけていたところを盗賊の襲撃にあい、仲間とはぐれてさまよっていたところを、僕らに出会つた……ということまで。

「先ほどは本当に助かった。重ねて例を言わせてくれ」

そう言つて孫権さん、ペコリ。うん、やっぱり礼儀正しい人だ。

「……と、いうことは……孫権さんも、僕と似たような状況なのか」「？　どういうことだ？」

かくかくしかじか

と、説明すると……何か気になることでもあったのか、孫権さんが考え込んでる。

「……私も……先ほどから気になっていたのだが」

「？ 何か？」

「吉井……といったな。吉井殿は、一体何者なのだ？ 今の話を聞く限り、かなりの地位のようだし……趙雲殿のように、比類なき武を有する者を従えるなど……」

「ああ、孫権殿はやはりご存じないのだな。ここにいる我が主は……」

と、星が説明しようとしたその瞬間、

バチン！！

「うわっ、熱っ！？」

「きゃっ！？」

「！ 主！？」

たき火にくべた薪の中に、質の悪いものが混じっていたのか……はせて、火の粉が僕の顔に降りかかった。うわ、熱っ！？

すぐさま星がかけよってきて、見てくれる。いや、そこまで大したこと無いと思うけど。

「……ああ、この程度ならば大丈夫でしょう。つばでも付けておけば治ります」

「そっか、よかった。ありがとう」

「うむ。では失礼して……」

って、おい！？

なぜか星が、舌を出して僕の頬に顔を近づけて……！？ ちよっ
……何すんの！？

「？ ですから、つばでも付けておけば治ると思ひまして……」
「君のわざわざつけんでいいわ！」

なんちゆうことをナチュラルにしようとしてるんだこの人はっ！？
あ、危なかった……今だけは迷子で助かったかもしれない。愛紗
や姫路さんに見られてたら、どうなってたか……。

「ふむ……それは残念。では、この近くに小川があつたはずですよ
で……水でも汲んできましょう」

「ん、ああ……なら、お願いしようかな。タオル濡らせば、冷やせるし」

「うむ、承知」

そう言つて、星は駆け足で去つていった。

うーん……やっぱり扱いにくいところあるけど、頼りにはなるなあ

……

Side ????

「……好機、だな……」
「はい……」

どうやら何か用でもあるのか、先ほどまで2人のそばにいた、槍使いらしき武人は……その場から離れていった。……見回りにでも行くのだろうか。

……何にせよ、今が最大の好機だ。今、たき火の周りにいるのは……我が主と、正体不明の男1人……素性はわからんが、気にすることでもない。蓮華様の救出が急務だ。

盗賊たちとの混戦以来、行方がわからなかった蓮華様。この山にいる可能性が高い、というのは亞莎から聞いていたゆえ、私達二人で探しに入り……ようやく見つけられた。

ただし、お1人ではなく……謎の男と女と一緒にいたが。

どういう経緯でこうなったのかは不明だが、今はそれよりも……

何せ、ここはよその領地……不可抗力の蓮華様はともかく、我ら2人は見つければ厄介なことになるのは必至……見つからんうちに帰らねば。

と、

「……！」
「し、思春様！ あの男、刃物を……」

私の隣で、同じように身を潜めて様子を伺っているもう1人の少女……明命の言葉通り、蓮華様の隣の男が、刃物を抜いていた。何のつもりかはわからんが……しかたない！

「……明命、あの男を。私は蓮華様を助ける」
「はい！」

……すまん、名も知らぬ少年よ……。

S i d e 明久

「な、何だいきなり！？ 刃物を抜いて！」

「え？ あ、ごめん…… 刃を鏡の代わりにして、火傷の具合見ようかなと……」

「そ、そうか…… 全く、驚かすな」

あ、驚かせちゃったみたいだ。失敬失敬。

まあ、暗い夜、隣に座ってる男がいきなり刃物抜いたら、そりゃびつくりするか……。

露骨にびつくりしてる（っていうか剣抜きかけてるし）孫権さんに心の中でわびつつ、僕は刃の部分に顔を映し、火傷の具合を確かめようとして……

……そして、絶句した。

火傷が酷かったからではなく……

鏡にした刀身にうつつて……僕の真後ろの木の枝の上で、今にも僕に襲い掛かるうとしている……『誰か』が見えたからだ。

しかもなんか、抜き身の刃物持つてるっばい……え！？　ちょ、何っっ！？

「うおわああああっ！？」
「……っ！？（気付かれた！？）」

反射的に横に跳んだ次の瞬間、その影が跳躍してきて……その刃が、さっきまで僕のくびが会ったところをなく。

あ、あつぶなあああああ　　っ！！？　あと0.1秒よけるの遅かったら僕、首と胴体がさよならして死んでたかも！？

慌てて体勢を立て直しつつ、僕は、僕が今までいた所に着地する……暗殺者か何かと思しき影を見据えた。

孫権さんと同じような褐色の肌に、小柄な体躯。鈴々と変わらないくらいだ。

特徴的なのは、その手に持つてる、日本刀みたいな長い刀と……膝下まで届きそうな長い黒髪。一瞬マントかと思ったほどに長くて……つややか。ア　エンス。

そんなルックスの美少女暗殺者は、幼さの残るかわいい顔をおどろきにゆがめていた。『気配は完全に消してたはずなのに！？』と

か思ってるんだろうか？

「……っ！？ 気配は、完全に消してたはずなのに……かわされた！？」

……答え合わせ、どうも。

すると……向かって左、あぜんとしている孫権さんの口から、

「……っ！？ み、明命^{みんめい}！？ あなた、何でこんなところに……と
いつか、何を！？」

「え、知り合い！？」

孫権さんの！？ ちょ、どういうこと……

ちりーん……

と、何か鈴のような音が聞こえた次の瞬間……

僕の左側の茂みから、凄まじい速さで何かが飛び出してきて……

僕に向けて、きらめく何か おそらくは刃物 を振りかぶ

る。え、第2陣！？

そのあまりの素早さに、よけよう、と思うよりも先に……僕は思
ってしまった。

あ、死んだ……

「させるかあああああ
っ！！！」

ガギン！！

と、またもや凄まじい速さで……僕と暗殺者（2号）との間に誰かが割り込んできて……暗殺者（2号）の刃を防ぎ弾き飛ばす。
……あれ、っていうか、今の声は……

「愛紗！？」

「ご主人様、ご無事でしたか！」

黒髪サイドテールをゆらし、相棒の青竜偃月刀を構えて僕を守ってくれている……頼もしい仲間の姿だった。
しかも、

「ご主人様あーっ！ 大丈夫ー！？」

「お兄ちゃあーん、助けに来たのだーっ！」

「主！ ご無事ですか！」

「桃香！ 鈴々！ 星も！」

いきなり集まってきた！？ すごっ！

そして、全員（桃香除く）で僕の前に立ち、暗殺者（両方）をけん制。あれよあれよという間に、防御陣形が完成。すごい……まるでどこかで見てたかのようなタイミングだ！

それを悔しそうににらむ、暗殺者2号。

こちらも褐色の肌で……紫色の短い髪に、すごく鋭い目。なんか、異様に丈の短い、赤色のチャイナ服みたいなのを着てて……手には、曲刀。背丈は……僕と同じくらい

服の丈が短すぎて、隠せてないっていうか……下からパンツが丸見えなんだけど……そんな眼福にいちいち気を向けられないくらい、僕の心はパニックなう。

っていうかこの人、まottoる空氣が普通に鋭すぎて怖い。

すると、奇襲攻撃が失敗した暗殺者の2人は……

……なぜか、孫権さんの両隣に飛び退り、まるで孫権さんを守るような構えを取った。

……え、何で!?

あれじゃまるで、2人が孫権さんの仲間みたいなの……っていうか、さつき孫権さん、そんな感じを匂わせること言ってたっけ……。本気で何者!?

「蓮華様、ご無事ですか!?’」

「し、思春^{ししゅん}まで……一体コレは……」

「おい、そこな賊」

と、会話をさえぎって星が言う。気のせいか……声に苛立ちが混じっていた。

「孫権殿とどういつつながりかは知らんが……我が主にいきなり斬りかかるとはどういいう見だ？ 聞かせてもらおうか」

「逃げて、今頃朱里たちが部隊を展開してここら一帯を囲んじゃつてるから無理なのだ！」

「そんなっ!？」

「く……っ!？」

鈴々のセリフと、思いがけない状況にショックを受けた様子の、暗殺者1号2号。

いや、僕も驚いてるけど。いつのまにこんな準備したんだか……

ああ、さては……星、水汲みに行った途中で、愛紗達に会って……
…そしたら、さっき僕が上げた悲鳴が聞こえて、ってとこかな。部隊展開は、朱里の判断だろう。

いやはや、ホントに頼れる仲間がいるよ僕は……

すると、暗殺者（2号）、落ち着きを取り戻し、孫権さんに話しかける。

「……蓮華様！こうなれば、私と明命で道を開きますゆえ、蓮華様はなんとか……」

と、

「思春、明命、剣を引きなさい」

「「「!?!?!」」」

今まであたふたしてた様子の孫権さんが……ふいに落ち着きを取り戻した様子で、意やむしろ威厳すら漂わせるような声で、一言。その言葉に……そしてその雰囲気、2人のみならず僕らも驚くえ、何、本気モード？

あわてて暗殺者その1、明命って呼ばれてた方が話しかけるけど

……

「れ、蓮華様！ 諦めちゃダメです！ 私達が……」

「そうではない……!」

「「……っ!?!?!」」

お、孫権さん、女の子口調から、王様っぽいいつもの口調に。

「そこにいる彼は、盗賊から私を助けてくれ、さらに食べ物まで分けてくれた恩人だ。事情を知らなかったとはいえ、恩人に手を出すことは許さん。上意である、剣を引け」

「し、しかし……」

「何度も言わせるな！ このような誇り無きまねをして……孫家の名を折る気か!?!」

「「……っ!」」

うおお……孫権さん、一喝。

これが彼女の……後の呉の王の本気かってほどのド迫力、そこにいる全員があっけに取られ、

どうやら家来か何からしい2人は……

「し……っ……」

「失礼……いたしました……」

言つと同時にひざまずいて、それぞれ剣を鞘に収める。おお、お見事……。

えつと……とりあえず、事態沈静？

それにしても……この状況、ホントに一体……？

「と、とりあえず……お話、聞こうか？　ね、ご主人様？」

そんな桃香のセリフによって、この場は（たぶん）収束した。

第25話 孫家と火傷と暗殺者（後書き）

一気に色黒キャラが3人になりました……書いてて楽しかったですけど。

それでも、原作にない展開って、考えるの大変ですね……。

その分楽しいですけど、更新が遅いのがネックですね……精進したいです。

さて、この後どうなるのやら……

あ、それと連絡が一つ。

感想のほうでもちろつと書いたんですが、前話のタイトルなんです……まちがえました。

何にかつていうと、仮題として考えてたやつをそのまま乗せちゃったんです。

なので、別に『再会』とかなかったのにタイトルに入っていました。すいません。

今はもう直しておきましたけども。

今後このようなことがないようにしたいです。

ではこれで。和尚でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4487t/>

バカとキセキと真・恋姫†無双

2011年10月8日18時29分発行